

茨城県稲敷郡江戸崎町

秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚

ザ・インペリアル・ゴルフクラブ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会

茨城県稲敷郡江戸崎町

秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚

ザ・インペリアル・ゴルフクラブ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会

発刊によせて

古い歴史と伝統をもつ私たちの江戸崎町では、これまでに、数多くの遺跡や古墳の存在が確認されています。

それらの発掘調査から、古代の江戸崎町の様子が、次々に明らかになっているのですが、これ等の調査から得たものは、さらに、今後追究が予想される歴史や文化研究の資料や根拠として極めて貴重な価値を持つこととなります。

その価値ある江戸崎町の遺跡の一つに佐倉地区遺跡が加えられることになりました。

この遺跡は、ゴルフ場造成工事の過程で、エステティ開発株式会社の委託をうけ、教育委員会として佐倉地区遺跡発掘調査会を組織し、山武考古学研究所の作業によって、その発掘が行われたものです。本書はその報告書であり、これまでの江戸崎町の古代史解明に新たな一頁を加えるものです。

調査発掘の期間は、上記各関係組織の協定書に定めたように、平成4年の2月から平成5年1月まで行われましたが、その結果後述のように、「秋平遺跡」「池平遺跡」「中佐倉貝塚」の三遺跡が明らかになったのです。

いずれも、今から1500年前の古墳時代後期から奈良・平安時代までの遺跡で、本文で報告されているように、総面積27,050㎡、住居跡の検出が合計223軒、多くの土師器や須恵器、石製品、その他の遺物が出土しています。

この発掘にあわせて、秋平遺跡に隣接する「思川遺跡」「思川久保遺跡」の確認も行い、佐倉地区遺跡として本報告書が制作されたわけです。

出土物の保存・展示等の環境が整っていない当町としては本書の様な報告書にまとめることは極めて重要な仕事となります。

これを機会に、文化財に対する認識が益々深まり、これらを通じ郷土を愛する心が培われるよう希望するものです。

最後になりましたが、この間、実に多くの方の御協力御支援をいただきました、それらの方々に衷心から御礼を申し上げて、発刊の言葉といたします。

平成11年7月

江戸崎町教育委員会
教育長 朝比奈克己

例 言

1. 本書は茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する佐倉地区遺跡（秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査はゴルフクラブ建設に伴い事前に行われたものである。
3. 発掘調査は、江戸崎町教育委員会を事務局とする佐倉地区遺跡発掘調査会を設け、同調査会が実施した。
4. 実際の発掘調査は、同調査会より委託を受けた山武考古学研究所が実施した。
5. 遺跡の所在地・面積は以下のとおりである。

秋平遺跡	茨城県稲敷郡江戸崎町大字佐倉字秋平2,122番地他	15,950㎡
池平遺跡	茨城県稲敷郡江戸崎町大字佐倉字池平1,407-1番地他	9,500㎡
中佐倉貝塚	茨城県稲敷郡江戸崎町大字佐倉字中佐倉1,779番地他	1,600㎡

6. 調査期間は以下のとおりである。

秋平遺跡	平成4年1月27日～平成4年11月14日
池平遺跡	平成4年2月7日～平成4年9月22日
中佐倉貝塚	平成4年9月24日～平成5年4月23日

7. 佐倉地区遺跡発掘調査会の組織は以下のとおりである。

会 長	清原貴近	江戸崎町教育委員会教育長
副会長	広沢 登	江戸崎町文化財保護審議会委員長
理 事	木村謙	江戸崎町文化財保護審議会委員
理 事	滝川善晃	江戸崎町文化財保護審議会委員
理 事	小林三郎	江戸崎町文化財保護審議会委員
理 事	川崎 茂	江戸崎町文化財保護審議会委員
理 事	貝塚郁夫	地元代表 江戸崎町教育委員・佐倉北部区長
理 事	塚本永二	地元代表 佐倉南部区長
理 事	平岡和夫	山武考古学研究所所長
理 事	飯田康彦	エステイティ開発（株）企画開発本部副部長
理 事	寺島喜久雄	江戸崎町都市計画課長
監 事	田村勇夫	江戸崎町教育委員会事務局局長補佐
幹 事	中川 剛	江戸崎町教育委員会事務局局長
幹 事	平田満男	江戸崎町教育委員会社会教育係長
幹 事	小森和夫	江戸崎町教育委員会社会教育主事

8. 発掘調査は以下が担当した。

秋平遺跡	桐谷 優	山武考古学研究所	事業部	部長
	折原洋一	同	調査研究室	係長
	湯原静美	同	〃	係長
	近江屋成陽	同	〃	班長
	荒井英樹	同	〃	調査研究員
	大越直樹	同	〃	調査研究員
池平遺跡	近江屋成陽	山武考古学研究所	調査研究室	班長
	荒井英樹	同	〃	調査研究員
中佐倉貝塚	大賀 健	山武考古学研究所	調査研究室	室長
	荒井英樹	同	〃	調査研究員

9. 本書の編集は山武考古学研究所において発掘担当者との協議の上大賀が行った。

10. 本書の執筆は以下のとおりである。

I-第1・2章	平田満男
IV-第2章	小林園子
その他	大賀 健

11. 中佐倉貝塚出土の貝・池平遺跡火葬竈出土人骨については国立歴史民俗博物館教授 西本豊弘先生・同助手 小林園子氏に依頼した。貝の分析結果については、IV-第2章に掲載している。

12. 作成に当たっては下記の方々にご指導を賜った。記して感謝の意を表すものである。

国立歴史民俗博物館 茨城県教育委員会 地域文化財コンサルタント 新成田総合社 東日本重機
開成測量 西本豊弘 小林園子 田沼清 寺門義範 篠原正

13. 本遺跡の発掘から整理作業に至るまで、下記の方々にご協力頂いた。

発掘調査

浅野静 熱田不二夫 秋山ハナ子 荒井英樹 伊藤章 伊藤恵美 伊藤節男 伊藤よし 伊藤菊代 伊藤幹司 伊東就子
石井四郎 市村きみえ 今泉あき 岩沢章吾 岩橋勇生 内田市造 梅沢房子 枝川広吉 江波戸元子 大木火鋸太郎
大貫昭二 岡田ふみ 丘野利江 大津春夫 甲斐八千代 金杉芳鶴 鹿野はる 香取祐一 上代謙 川島ヨシ 川崎よね
川崎力男 川村紀美子 喜久村ウメ子 栗山修一 黒田ハル 黒津又右エ門 後藤幸作 小林すみ子 小宮清 小山広
越川新 斉藤啓助 斉藤茂嘉 斉藤馨 坂本一良 鈴木清 佐伯たま子 酒井博子 篠田健二 白岩英男 高橋信人
高桑勇 高野辰次郎 武田いく代 滝口すみ子 塚本さた 戸井一子 富田しめ 中沢きくい 中沢孝夫 中村良
中村篤夫 内藤初枝 沼沢トキ 根本幸枝 橋本サタ 林かね 平井富子 平山繁松 平野あき 平山とよ子 平山功
平山菊枝 藤枝まつ 藤枝君代 畑田整 松浦トク 三浦亨 宮崎タカ 宮本よし子 宮内一彰 村木隆三 森田トヨ
諸岡三四郎 矢部巳之助 矢部義光 米山元広 横田利雄 吉田隆 陸崎紅 渡辺清子 渡辺四郎 和田キリ

整理作業

秋山京子 池田とし子 五十嵐信子 石井百々子 伊藤順子 大野知子 黒田富子 佐藤洋子 末広弘子 山口トモ子
朝生タカ 藤崎徳江 平岡綾子

凡 例

1. 本書中の第1～3図に用いた地図は、国土地理院2万5千分の1〔江戸崎〕、及び江戸崎町内図2万5千分の1、1万分の1の図を用いた。
2. 本書中の遺構番号は、秋平遺跡・池平遺跡の双方は調査時に現地に於て付した名称をそのまま用い、遺構ではなかったものについては欠番とした。

ただし、中佐倉貝塚については遺構番号を以下のように変更している。

旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号
SI-1	SI-1	SI-37	SI-15	SI-66	SK-29	SK-48	SK-14
SI-3	SI-2	SI-40	SI-16	SK-4	SK-1	SK-49	SK-15
SI-4	SI-3	SI-42	SI-17	SK-12	SK-2	SK-50	SK-16
SI-6	SI-4	SI-43	SI-18	SK-19	SK-3	SK-51	SK-17
SI-9	SI-5	SI-44	SI-19	SK-28	SK-4	SK-52	SK-18
SI-10	SI-6	SI-46	SI-20	SK-29	SK-5	P-1	SK-19
SI-11	SI-7	SI-49	SI-21	SK-30	SK-6	unit-1	SI-16
SI-12	SI-8	SI-51	SI-22	SK-31	SK-7	unit-2	SI-15
SI-13	SI-9	SI-54	SI-23	SK-34	SK-8	unit-3	SI-21
SI-21	SI-10	SI-59	SI-24	SK-35	SK-9	unit-4	SK-20
SI-28	SI-11	SI-60	SI-25	SK-38	SK-10	unit-5	SK-21
SI-29	SI-12	SI-63	SI-26	SK-41	SK-11	unit-6	SK-22
SI-30	SI-13	SI-64	SI-27	SK-46	SK-12		
SI-33	SI-14	SI-65	SI-28	SK-47	SK-13		

3. 遺構実測図は以下の縮尺で掲載した
尚、遺構図中の北方向は、第Ⅳ系国家座標の北を表す

全体測量図……………任意	住居跡……………120分の1
上坑……………40分の1	火葬土坑……………40分の1
遺構セクション……………120分の1	遺構エレベーション……………120分の1

4. 遺物実測図の縮尺は4分の1を原則に行ったもので、特殊遺物は以下の縮尺で行っている。

尚、模式図中の遺物は8分の1で掲載している。	
旧石器時代遺物……………原寸	縄文時代 石器……………2分の1
青銅製品（和鏡）……………2分の1	

5. 出土遺物はすべてについて水洗い・注記・接合を実施した。
尚、遺物の注記に用いた略号は以下の基準に従っている。

秋平遺跡……アキダイラ	池平………イケダイラ	中佐倉遺跡……ナカザクラ
住居跡………S I	土坑………S K	溝………S D
グリッド……A-1	火葬墓（蔵骨器）・性格不明遺構……SX	
カマド………カ	炭窯………S	屋外炉………F P

6. 本遺跡の主体をなす古墳時代より平安時代の遺物は、紙面の都合上掲載量に制約があった。この為、本報告に於ては、できるかぎり遺跡の情報を伝達する方法として、以下の方法を採用している。

まず、良好な資料を出土している代表的な遺構出土遺物に限定して遺物を実測した。これらの資料については通常の報告書と同様に掲載している。

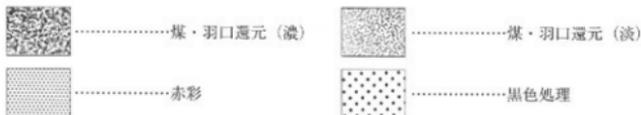
次に、掲載から漏れたその他の遺構出土遺物については、前述の掲載遺物実測図を表147～表170に掲げる分類基準に従って分類し、同様の特徴を備えた遺物の実測図をもって代表させ、出土遺物模式図を表171～表195に掲載した。

7. 挿入中に貼付したスクリーンパターンは以下の内容を示す。

遺構



遺物



本文目次

発刊によせて

例言

凡例

目次

I 序章

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の地歴環境	
第1節 遺跡の地理的環境	1
第2節 遺跡の歴史的環境	3
第3節 遺跡の立地	9
第3章 調査の方法と経過	
第1節 秋平遺跡(発掘調査)	10
第2節 池平遺跡(発掘調査)	12
第3節 中佐倉貝塚(発掘調査)	13
第4節 整理調査の方法と経過	15
第4章 土層	16

II 秋平遺跡

第1章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要	19
第2節 住居跡	19
第3節 土坑	69
第4節 溝	73
第5節 性格不明遺構	75
第6節 遺構外出土遺物	75
第2章 小結	80

III 池平遺跡

第1章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要	81
第2節 住居跡	81
第3節 土坑	128
第4節 炭窯	128
第5節 溝	134
第6節 墓跡	135
第7節 遺構外出土遺物	135
第2章 小結	138

IV 中佐倉貝塚

第1章 検出された遺構と遺物	
第1節 遺跡の概要	139
第2節 住居跡	139
第3節 土坑	168
第4節 竈穴	174
第5節 溝	175
第6節 遺構外出土遺物	175
第2章 科学分析 - 中佐倉貝塚出土の貝類について -	182
第3章 小結	183

V まとめ

遺跡内出土古墳時代～平安時代の上器	191
-------------------	-----

抄録

挿 図 目 次

序 章		
第 1 図	遺跡の位置図 (1)	2
第 2 図	周辺の遺跡	6
秋平遺跡		
第 5 図	秋平遺跡全体図	(付図 1)
第 6 図	S I - 1 ~ 9	21
第 7 図	S I - 10 ~ 17	22
第 8 図	S I - 18 ~ 25	23
第 9 図	S I - 26 ~ 32 · 34 · 35	25
第 10 図	S I - 33 · 37 ~ 40 · 52 · 53	25
第 11 図	S I - 41 · 43 ~ 47 · 49 · 50 · 61	26
第 12 図	S I - 51 · 54 ~ 57 · 59 · 65	27
第 13 図	S I - 60 · 62 ~ 64 · 67 ~ 71	28
第 14 図	S I - 72 ~ 78 · 81	29
第 13 図	S I - 79 · 81 · 82 · 85 ~ 87 · 91 · S D - 16	30
第 16 図	S I - 92 · 93 · 95 ~ 99 · 103	31
第 17 図	S I - 101 · 102 · 104 · 106 ~ 109	32
第 18 図	S I - 110 ~ 113 · 116 ~ 118	33
第 19 図	S I - 114 · 115 · 119 · 124 ~ 129	34
第 20 図	S I - 120 A · B 121 ~ 123 · 131 ~ 134	35
第 21 図	S I - 14 · 16 · 19 · 21 出土遺物	40
第 22 図	S I - 21 · 27 · 30 · 32 · 33 出土遺物	42
池平遺跡		
第 43 図	池平遺跡全体図	(付図 2)
第 44 図	S I - 1 ~ 6 · 8 · 32	83
第 45 図	S I - 7 · 9 · 10 · 15	84
第 46 図	S I - 12 ~ 14 · 55 · 62 · 63	85
第 47 図	S I - 16 ~ 21 · 75 · 79	86
第 48 図	S I - 22 ~ 24 · 26 · 27 · 36	87
第 49 図	S I - 25 · 29 · 30 · 39 · 47 · 59	88
第 50 図	S I - 28 · 31 · 33 ~ 35 · 64	89
第 51 図	S I - 37 · 38 · 44 · 40 · 45 · 66	90
第 52 図	S I - 11 · 41 ~ 43 · 46 · 48 ~ 54 · 56 ~ 58 · 60 · 61 · 65 · S D - 2	91
第 53 図	S I - 67 · 74 · 76 ~ 78 · S D - 1	92
第 54 図	S I - 1 · 3 · 4 · 7 出土遺物	97
第 55 図	S I - 7 · 8 · 12 · 13 出土遺物	98
第 56 図	S I - 13 · 14 出土遺物	99
第 57 図	S I - 15 · 16 出土遺物	100
第 58 図	S I - 17 · 18 · 22 出土遺物	101
中佐倉貝塚		
第 75 図	中佐倉遺跡全体図	140
第 76 図	S I - 1 ~ 8	142
第 77 図	S I - 9 ~ 13 · 17 ~ 19 · 24 · 27	143
第 78 図	S I - 14 ~ 16 · 20 · 23 · 28	144
第 79 図	S I - 21 · 22 · 25 · 26 · 29	145
第 80 図	S I - 1 · 2 · 3 · 6 · 7 出土遺物	148
第 81 図	S I - 7 · 8 · 9 出土遺物	149
第 82 図	S I - 9 · 11 · 12 · 13 · 14 出土遺物	150
第 83 図	S I - 14 · 15 出土遺物	151
第 84 図	S I - 15 · 16 出土遺物	152
第 85 図	S I - 16 · 17 出土遺物	153
第 86 図	S I - 18 · 19 · 20 · 21 出土遺物	154
第 87 図	S I - 21 · 22 出土遺物	155
第 3 図	遺跡の位置 (2)	8
第 4 図	標準堆積土層	17
第 23 図	S I - 33 · 34 · 39 · 40 出土遺物	43
第 24 図	S I - 40 · 49 · 51 出土遺物	44
第 25 図	S I - 51 · 52 · 54 出土遺物	45
第 26 図	S I - 54 · 65 出土遺物	46
第 27 図	S I - 70 · 73 出土遺物	47
第 28 図	S I - 73 · 75 · 85 · 86 出土遺物	48
第 29 図	S I - 86 出土遺物	49
第 30 図	S I - 86 · 92 · 95 · 102 出土遺物	50
第 31 図	S I - 102 · 107 · 108 110 · 112 · 119 出土遺物	51
第 32 図	S I - 119 · 120 · 123 125 · 126 · 132 出土遺物	52
第 33 図	S K - 1 ~ 10	68
第 34 図	S K - 11 · 13 · 14 · 16 · 23 · 24	70
第 35 図	S K - 28 · 30 ~ 38	71
第 36 図	S D - 1 ~ 15 · 17 ~ 19	74
第 37 図	遺構外周土層石室時代遺物	77
第 38 図	遺構外周土層縄文時代遺物	78
第 39 図	遺構外周土層縄文時代遺物	77
第 40 図	遺構外周土層弥生時代遺物	78
第 41 図	遺構外周土層古代・歴史時代遺物	78
第 42 図	遺構外周土層近世遺物	78
第 59 図	S I - 22 · 23 出土遺物	102
第 60 図	S I - 23 · 24 · 26 出土遺物	103
第 61 図	S I - 26 · 29 出土遺物	104
第 62 図	S I - 29 出土遺物	105
第 63 図	S I - 30 出土遺物	106
第 64 図	S I - 35 出土遺物	107
第 65 図	S I - 35 出土遺物	108
第 66 図	S I - 35 · 36 · 37 · 38 出土遺物	109
第 67 図	S I - 38 · 42 · 45 出土遺物	110
第 68 図	S I - 45 · 47 · 53 · 59 出土遺物	111
第 69 図	S K - 1 ~ 13	129
第 70 図	S K - 14 ~ 22 · S I - 1	130
第 71 図	S X - 1 · 2	132
第 72 図	S K - 15 · S X - 1 · 2 出土遺物	131
第 73 図	遺構外周土層縄文時代遺物	134
第 74 図	遺構外周土層弥生時代遺物	134
第 88 図	S I - 22 · 25 · 26 出土遺物	156
第 89 図	S I - 27 出土遺物	157
第 90 図	S K - 1 ~ 9 · 15	169
第 91 図	S K - 10 · 14 · 16 ~ 19	170
第 92 図	S K - 20 ~ 22	171
第 93 図	S K - 1 · 7 · 10 · 11 · 13 出土遺物	172
第 94 図	F P - 1 ~ 6 (172)	
第 95 図	S D - 1 · 2	176
第 96 図	遺構外周土層縄文時代遺物 (1)	178
第 97 図	遺構外周土層縄文時代遺物 (2)	180
第 98 図	遺構外周土層古代・歴史時代遺物	180
第 99 図	遺構外周土層近世遺物	180
第 100 図	助骨文から見た浮島式と 路碗式の対比	189

図 版 目 次

秋平遺跡

- 図版1 1. 調査区全景
 図版2 1. 遺構輪郭状況 (S I - 1 付近)
 2. 同 (S I - 26 付近)
 3. 同 (南東部)
 4. 同 (北部)
 5. 終了全景 (S I - 9 ~ 16 付近)
 6. 同 (北東部)
 7. テストピット
 8. 同
 図版3 1. S I - 1
 2. S I - 2 ~ 4 付近
 3. S I - 6
 4. S I - 7
 5. S I - 8 カマド
 6. S I - 9
 7. S I - 10
 8. S I - 11
 図版4 1. S I - 12
 2. S I - 13
 3. S I - 14・15
 4. S I - 16
 5. S I - 16 遺物出土状況
 6. S I - 17
 7. S I - 18 カマド遺物出土状況
 8. S I - 19
 図版5 1. S I - 19 カマド
 2. S I - 20
 3. S I - 21
 4. S I - 22
 5. S I - 23
 6. S I - 24
 7. S I - 26
 8. S I - 29
 1. S I - 30
 2. S I - 33
 図版6 3. S I - 35 遺物出土状況
 4. S I - 39
 5. S I - 40
 6. S I - 41
 7. S I - 46
 8. S I - 47
 図版7 1. S I - 49
 2. S I - 49・50
 3. S I - 50
 4. S I - 51
 5. S I - 55
 6. S I - 63
 7. S I - 65 遺物出土状況
 8. S I - 68
 図版8 1. S I - 69
 2. S I - 70
 3. S I - 71
 4. S I - 72

池平遺跡

- 図版20 1. 調査区全景
 図版21 1. 遺構輪郭状況 (中央部)
 2. 同 (S I - 3 付近)
 3. 同 (中央部)
 4. 同 (S I - 1 付近)
 5. 同 (掘強区)
 6. 標準非横土層観察坑
 7. S I - 1

- 図版8 5. S I - 73
 6. S I - 75
 7. S I - 76
 8. S I - 77
 図版9 1. S I - 79
 2. S I - 84
 3. S I - 86
 4. 同 遺物出土状況
 5. S I - 91
 6. S I - 92
 7. S I - 92・103
 8. S I - 93
 図版10 1. S I - 95
 2. S I - 96
 3. S I - 92・103
 4. S I - 98
 5. S I - 101
 6. S I - 102
 7. 同 カマド
 8. S I - 107
 図版11 1. S I - 108
 2. S I - 109
 3. S I - 112 遺物出土状況
 4. 同
 5. 同 カマド遺物出土状況
 6. 同 遺物出土状況
 7. S I - 114
 8. S I - 115
 図版12 1. S I - 116・117
 2. S I - 119
 3. S I - 120 A・B
 4. S I - 124 カマド
 5. S I - 125
 6. S I - 127 カマド
 7. S I - 119・128
 8. S I - 131 ~ 133
 図版13 1. S K - 11
 2. S K - 13
 3. S K - 17
 4. S D - 7
 5. S D - 8 ~ 11
 6. S D - 11
 7. S D - 12
 8. S X - 3
 図版14 S I - 14・16・19・21・27・30・
 32・33・34 出土遺物
 図版15 S I - 39・40・49・51・52・54 出土遺物
 図版16 S I - 54・65・70 出土遺物
 図版17 S I - 70・73・75・85・86 出土遺物
 図版18 S I - 86・92・95・102・107・
 108・110・112 出土遺物
 図版19 S I - 112・119・120・123・
 125・126・132・遺構外出土遺物
 図版21 8. S I - 2
 図版22 1. S I - 3
 2. S I - 5・6
 3. S I - 7 付近
 4. S I - 8
 5. S I - 9・10
 6. S I - 12
 7. 同 カマド

- 図版22 8. S I - 13
 図版23 1. S I - 14
 2. S I - 15
 3. S I - 16
 4. 同 カマド
 5. S I - 17
 6. S I - 17・18
 7. S I - 18カマド
 8. S I - 19
 図版24 1. S I - 19カマド
 2. S I - 21
 3. 同 炉
 4. S I - 22
 5. S I - 23
 6. 同 遺物出土状況
 7. S I - 24
 8. S I - 25
 図版25 1. S I - 26
 2. S I - 27
 3. S I - 30
 4. 同 遺物出土状況
 5. S I - 33
 6. S I - 34
 7. S I - 35
 8. 同 カマド
 図版26 1. S I - 35貯蔵穴
 2. S I - 35遺物出土状況
 3. S I - 36
 4. S I - 37
 5. S I - 38
 6. S I - 41・42
 7. S I - 47
 8. S I - 49・50・54・58
 図版27 1. S I - 55
 2. S I - 62

中佐倉貝塚

- 図版40 1. 調査区全景 (東側に霞ヶ浦を望む)
 2. 調査区全景
 図版41 1. S I - 15・16貝塚
 2. S I - 21貝塚
 図版42 1. 標準堆積土層
 2. 同
 3. 遺構確認状況 (S D - 2 付近)
 4. 同 (S K - 10 付近)
 5. 同 (S D - 2 付近)
 6. 同 (S D - 1 付近)
 7. S D - 1 付近
 8. 3 P - 13 グリッド遺物出土状況
 図版43 1. S I - 1
 2. 同 遺物出土状況
 3. S I - 2
 4. S I - 3
 5. S I - 4・5
 6. S I - 7
 7. 同 カマド遺物出土状況
 8. 同 遺物出土状況
 図版44 1. S I - 8
 2. 同 カマド遺物出土状況
 3. 同 貯蔵穴
 4. S I - 9 遺物出土状況
 5. S I - 12 遺物出土状況
 6. 同 カマド遺物出土状況
 7. S I - 14
 8. 同 遺物出土状況
 図版45 1. S I - 14 炉
 2. 同 遺物出土状況

- 図版27 3. S I - 66
 4. S I - 67・68
 5. S I - 69・72
 6. S I - 70
 7. S I - 74・78, S D - 1
 8. S I - 76
 図版28 1. S K - 3
 2. S K - 9
 3. S K - 10
 4. S K - 11
 5. S K - 12
 6. S K - 14
 7. S K - 15
 8. S K - 17
 図版29 1. S K - 18
 2. S K - 19
 3. S K - 20
 4. S K - 21
 5. S K - 22
 6. S - 1
 7. S X - 1
 8. S X - 3
 図版30 S I - 1・3・4・7・8・12 出土遺物
 図版31 S I - 12・15 出土遺物
 図版32 S I - 15・18・22 出土遺物
 図版33 S I - 23 出土遺物
 図版34 S I - 24・26・29 出土遺物
 図版35 S I - 29・30・35 出土遺物
 図版36 S I - 35 出土遺物
 図版37 S I - 36・38・42・45 出土遺物
 図版38 S I - 47・53・59・S K - 15・
 S X - 1・2 出土遺物
 図版39 1. 遺構外出土縄文時代遺物
 2. 遺構外出土弥生時代遺物

- 図版45 3. S I - 15
 4. 同 貝塚調査前
 5. 同 調査状況
 6. 同 セクション
 7. S I - 16
 8. 同 貝塚調査前
 図版46 1. S I - 16 貝塚
 2. 同
 3. S I - 17
 4. 同 カマド遺物出土状況
 5. 同 貯蔵穴
 6. S I - 18・19・27
 7. S I - 21
 8. 同 貝塚調査前
 図版47 1. S I - 21 貝塚
 2. 同 セクション
 3. 同
 4. 同 遺物出土状況
 5. 同
 6. 同
 7. S I - 22・29
 8. S I - 24
 図版48 1. S I - 25
 2. 同 遺物出土状況
 3. S I - 26 赤カマド
 4. 同 和鏡出土状況
 5. S K - 1 遺物出土状況
 6. S K - 4・5・15
 7. S K - 5
 8. S K - 6

図版49	1. SK-7 遺物出土状況
	2. SK-8
	3. SK-9
	4. SK-10 遺物出土状況
	5. SK-11 遺物出土状況
	6. P-1
	7. SD-1
	8. SD-2
図版50	SI-1・3・6・7・8 出土遺物
図版51	SI-9・11-14 出土遺物

図版52	SI-14・15 出土遺物
図版53	SI-15・16 出土遺物
図版54	SI-16-21 出土遺物
図版55	SI-21 出土遺物
図版56	SI-22・25 出土遺物
図版57	SI-26・27, SK-1・7・10・11・13 出土遺物
図版58	遺構外出土遺物 (1)
図版59	遺構外出土遺物 (2)

目 次

序 章

表 1	周辺の遺跡一覧	7
-----	---------	---

秋平遺跡

表 2	住居跡一覧表 (1)	36
表 3	住居跡一覧表 (2)	37
表 4	住居跡一覧表 (3)	38
表 5	住居跡一覧表 (4)	39
表 6	SI-14 遺物観察表	53
表 7	SI-16 遺物観察表	53
表 8	SI-19 遺物観察表	53
表 9	SI-21 遺物観察表	53
表 10	SI-27 遺物観察表	54
表 11	SI-30 遺物観察表	54
表 12	SI-32 遺物観察表	55
表 13	SI-33 遺物観察表	55
表 14	SI-34 遺物観察表 (1)	55
表 15	SI-34 遺物観察表 (2)	56
表 16	SI-39 遺物観察表	56
表 17	SI-40 遺物観察表 (1)	56
表 18	SI-40 遺物観察表 (2)	57
表 19	SI-49 遺物観察表	57
表 20	SI-51 遺物観察表	57
表 21	SI-52 遺物観察表	58
表 22	SI-54 遺物観察表	58
表 23	SI-65 遺物観察表	59
表 24	SI-70 遺物観察表	60
表 25	SI-73 遺物観察表 (1)	60
表 26	SI-73 遺物観察表 (2)	61
表 27	SI-75 遺物観察表	61
表 28	SI-85 遺物観察表	61

池平遺跡

表 54	住居跡一覧表 (1)	93
表 55	住居跡一覧表 (2)	91
表 56	住居跡一覧表 (3)	94
表 57	SI-1 遺物観察表	112
表 58	SI-3 遺物観察表	112
表 59	SI-4 遺物観察表	112
表 60	SI-7 遺物観察表	113
表 61	SI-8 遺物観察表	113
表 62	SI-12 遺物観察表 (1)	113
表 63	SI-12 遺物観察表 (2)	114
表 64	SI-13 遺物観察表 (1)	114
表 65	SI-13 遺物観察表 (2)	115
表 66	SI-14 遺物観察表	115
表 67	SI-15 遺物観察表	115
表 68	SI-15 遺物観察表 (2)	116
表 69	SI-16 遺物観察表 (1)	116
表 70	SI-16 遺物観察表 (2)	117
表 71	SI-17 遺物観察表	117
表 72	SI-18 遺物観察表	117
表 73	SI-22 遺物観察表 (1)	117

表 29	SI-86 遺物観察表 (1)	62
表 30	SI-86 遺物観察表 (2)	63
表 31	SI-92 遺物観察表	63
表 32	SI-95 遺物観察表	63
表 33	SI-102 遺物観察表 (1)	63
表 34	SI-102 遺物観察表 (2)	64
表 35	SI-107 遺物観察表	64
表 36	SI-108 遺物観察表	64
表 37	SI-110 遺物観察表	64
表 38	SI-112 遺物観察表	65
表 39	SI-119 遺物観察表 (1)	66
表 40	SI-119 遺物観察表 (2)	66
表 41	SI-120 遺物観察表	66
表 42	SI-123 遺物観察表	66
表 43	SI-125 遺物観察表	66
表 44	SI-126 遺物観察表	66
表 45	SI-132 遺物観察表 (1)	64
表 46	SI-132 遺物観察表 (2)	67
表 47	土坑一覧表	72
表 48	溝一覧表	75
表 49	遺構外出土旧石器時代遺物観察表	79
表 50	遺構外出土縄文時代遺物観察表	79
表 51	遺構外出土弥生時代遺物観察表	79
表 52	遺構外出土古代・歴史時代遺物観察表	79
表 53	遺構外出土中・近世遺物観察表	79

表 74	SI-22 遺物観察表 (2)	118
表 75	SI-23 遺物観察表 (1)	118
表 76	SI-23 遺物観察表 (2)	119
表 77	SI-24 遺物観察表	119
表 78	SI-26 遺物観察表	120
表 79	SI-29 遺物観察表 (1)	120
表 80	SI-29 遺物観察表 (2)	121
表 81	SI-30 遺物観察表 (1)	121
表 82	SI-30 遺物観察表 (2)	122
表 83	SI-35 遺物観察表 (1)	122
表 84	SI-35 遺物観察表 (2)	123
表 85	SI-35 遺物観察表 (3)	124
表 86	SI-35 遺物観察表 (4)	125
表 87	SI-36 遺物観察表	125
表 88	SI-37 遺物観察表	125
表 89	SI-38 遺物観察表 (1)	125
表 90	SI-38 遺物観察表 (2)	126
表 91	SI-42 遺物観察表	126
表 92	SI-45 遺物観察表	126
表 93	SI-47 遺物観察表 (1)	126

表 94	S I - 47 遺物觀察表 (2)	127
表 95	S I - 53 遺物觀察表	127
表 96	S I - 59 遺物觀察表	127
表 97	土坑一覽表	131
表 98	溝一覽表	131

中佐倉貝塚

表 104	住居跡一覽表	146
表 105	S I - 1 遺物觀察表	159
表 106	S I - 2 遺物觀察表	159
表 107	S I - 3 遺物觀察表	159
表 108	S I - 6 遺物觀察表	159
表 109	S I - 7 遺物觀察表 (1)	159
表 110	S I - 7 遺物觀察表 (2)	160
表 111	S I - 8 遺物觀察表	160
表 112	S I - 9 遺物觀察表 (1)	160
表 113	S I - 9 遺物觀察表 (2)	161
表 114	S I - 11 遺物觀察表	161
表 115	S I - 12 遺物觀察表	161
表 116	S I - 13 遺物觀察表	161
表 117	S I - 14 遺物觀察表 (1)	161
表 118	S I - 14 遺物觀察表 (2)	162
表 119	S I - 15 遺物觀察表	162
表 120	S I - 16 遺物觀察表 (1)	162
表 121	S I - 16 遺物觀察表 (2)	163
表 122	S I - 17 遺物觀察表 (1)	163
表 123	S I - 17 遺物觀察表 (2)	164
表 124	S I - 18 遺物觀察表	164
表 125	S I - 19 遺物觀察表	164

まとめ

表 147	遺物分類表 土師器 甕 (1)	193
表 148	遺物分類表 土師器 甕 (2)	194
表 149	遺物分類表 土師器 甕 (3)	195
表 150	遺物分類表 土師器 甕 (4)	196
表 151	遺物分類表 土師器 甕 (5)	197
表 152	遺物分類表 土師器 甕	198
表 153	遺物分類表 土師器 壺	198
表 154	遺物分類表 土師器 用	199
表 155	遺物分類表 土師器 甕	199
表 156	遺物分類表 土師器 高坏 (1)	199
表 157	遺物分類表 土師器 高坏 (2)	200
表 158	遺物分類表 土師器 坏 (1)	200
表 159	遺物分類表 土師器 坏 (2)	201
表 160	遺物分類表 土師器 坏 (3)	202
表 161	遺物分類表 土製品 手捏土器	202
表 162	遺物分類表 須恵器 甕 (1)	202
表 163	遺物分類表 須恵器 甕 (2)	203
表 164	遺物分類表 須恵器 甕	203
表 165	遺物分類表 須恵器 壺・瓶	203
表 166	遺物分類表 須恵器 蓋	204
表 167	遺物分類表 須恵器 坏	204
表 168	遺物分類表 須恵器 高坏	205
表 169	遺物分類表 須恵器 器台	205
表 170	遺物分類表 須恵器 甕	205
表 171	遺物模式一覽 秋平遺跡 (1)	208
表 172	遺物模式一覽 秋平遺跡 (2)	209

表 99	S K - 15 遺物觀察表	134
表 100	S X - 1 遺物觀察表	134
表 101	S X - 2 遺物觀察表	134
表 102	遺構外出土縄文時代遺物觀察表	137
表 103	遺構外出土弥生時代遺物觀察表	137
表 126	S I - 20 遺物觀察表	164
表 127	S I - 21 遺物觀察表	165
表 128	S I - 22 遺物觀察表	166
表 129	S I - 25 遺物觀察表 (1)	166
表 130	S I - 25 遺物觀察表 (2)	167
表 131	S I - 26 遺物觀察表	167
表 132	S I - 27 遺物觀察表 (1)	167
表 133	S I - 27 遺物觀察表 (2)	168
表 134	土坑一覽表	171
表 135	S K - 1 遺物觀察表	173
表 136	S K - 7 遺物觀察表	173
表 137	S K - 10 遺物觀察表	173
表 138	S K - 11 遺物觀察表	173
表 139	S K - 13 遺物觀察表	173
表 140	穴欠一覽表	174
表 141	溝一覽表	175
表 142	遺構外出土縄文土器觀察表	179
表 143	遺構外出土石器觀察表	181
表 144	遺構外出土古代・歴史時代遺物觀察表	181
表 145	遺構外出土近世遺物觀察表	181
表 146	序形式・浴盆式片比率 (松岡編年1992)	188

表 173	遺物模式一覽 秋平遺跡 (3)	210
表 174	遺物模式一覽 秋平遺跡 (4)	211
表 175	遺物模式一覽 秋平遺跡 (5)	212
表 176	遺物模式一覽 秋平遺跡 (6)	213
表 177	遺物模式一覽 秋平遺跡 (7)	214
表 178	遺物模式一覽 秋平遺跡 (8)	215
表 179	遺物模式一覽 秋平遺跡 (9)	216
表 180	遺物模式一覽 秋平遺跡 (10)	217
表 181	遺物模式一覽 秋平遺跡 (11)	218
表 182	遺物模式一覽 秋平遺跡 (12)	219
表 183	遺物模式一覽 秋平遺跡 (13)	220
表 184	遺物模式一覽 秋平遺跡 (14)	221
表 185	遺物模式一覽 池平遺跡 (1)	222
表 186	遺物模式一覽 池平遺跡 (2)	223
表 187	遺物模式一覽 池平遺跡 (3)	224
表 188	遺物模式一覽 池平遺跡 (4)	225
表 189	遺物模式一覽 池平遺跡 (5)	226
表 190	遺物模式一覽 池平遺跡 (6)	227
表 191	遺物模式一覽 池平遺跡 (7)	228
表 192	遺物模式一覽 池平遺跡 (8)	229
表 193	遺物模式一覽 池平遺跡 (9)	230
表 194	遺物模式一覽 中佐倉貝塚 (1)	231
表 195	遺物模式一覽 中佐倉貝塚 (2)	232
表 196	時期別遺物組成表 (1) 土師器 1	236
表 197	時期別遺物組成表 (2) 土師器 2	237
表 198	時期別遺物組成表 (1) 須恵器 1	238

I 序 章

第1章 調査に至る経緯

かつて日本の社会全体がバブルの全盛期と言われた一時代があったことも歴史の一コマになろうとしてい
る今日、社会の変貌は一層めまぐるしさを増している。そのような時期に調査が行われたのが佐倉地区の3
遺跡である。

昭和62年10月30日にエステティ開発(株)からゴルフ場造成計画に伴う埋蔵文化財の所在の有無の照会
があり、12月に町文化財保護審議会を開き、開発計画地内の踏査及び隣接する周知の遺跡との関連性につ
いて検討され、翌年にかけて2回の現地踏査及び検討会が持たれ、新たな集落跡等の存在する可能性の高さが
指摘された。平成1年4月25日に山林部分における伐開後の試掘調査を条件とする埋蔵文化財の取り扱いに
ついての回答をし、その後、エステティ開発(株)との協議が行われ、平成2年5月7日に取り扱いにつ
いての覚え書きが結ばれ、7月19日には大規模開発事業に係る茨城県の現地調査が行われ、県文化課の指導
助言を受ける。

平成3年7月から10月にかけて、伐開後の試掘調査が行われ、新たな遺跡の発見も加わり、記録保存のた
めの発掘調査に向けて準備が進められ、県南教育事務所、県教育庁の各文化財担当者からの指導助言を受け、
山武考古研究所の調査委託承認を得て、12月、遺跡発見、発掘調査の文化庁への届け出を経て、平成4年
2月4日、佐倉地区遺跡発掘調査会も結成されて、本調査が開始されたのである。

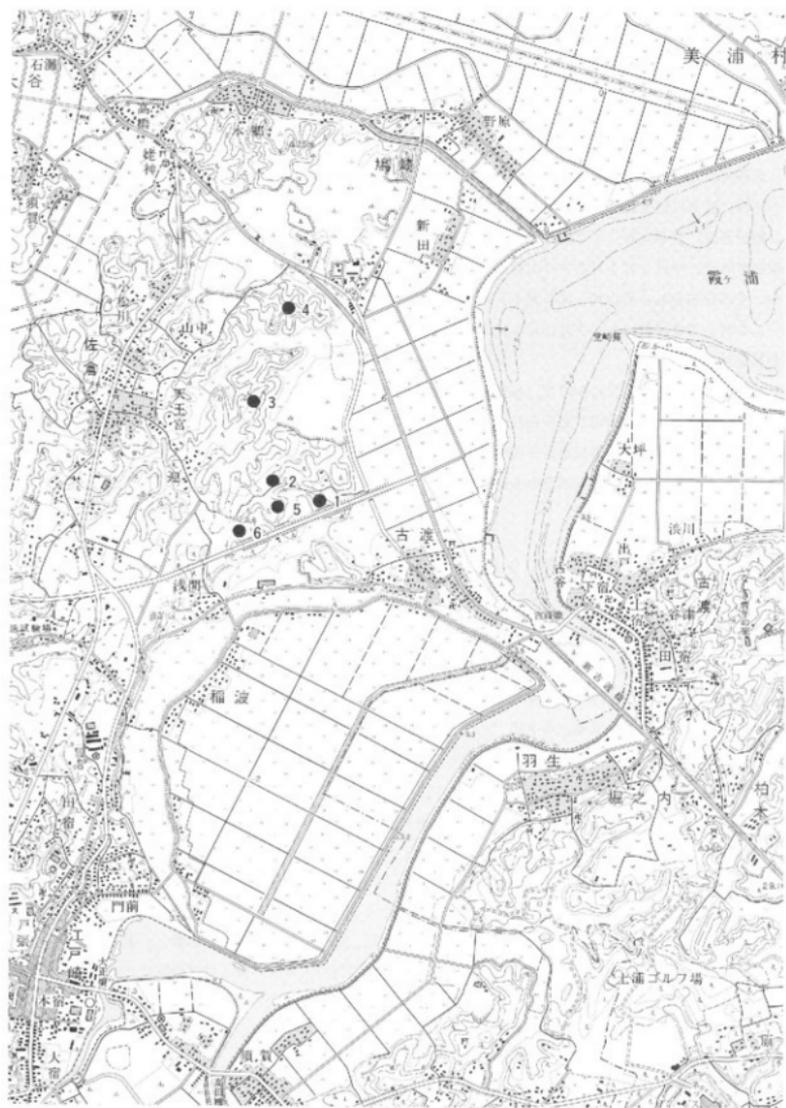
第2章 遺跡の地歴環境

第1節 遺跡の地理的環境

江戸崎町は、茨城県の南部にあり、霞ヶ浦と利根川に挟まれた田園地帯の中にあつて、町の北辺を国道
125号線が、南辺を国道408号線が東西方向に貫通し、筑波研究学園都市と成田国際空港のほぼ中間に位置し
ている。町の周囲は、北東端が霞ヶ浦(古渡入)湖岸、東端と南端が小野川を桜川村及び新利根町との町村
境とし、北端が高橋川を美沼村との町村境とし、西端が台地上で阿見町と牛久市に接し、南東端が台地上で
東町と接している。

町域の大半は、標高20m前後の台地と霞ヶ浦湖岸及び小野川流域に干拓等によって造成された低地(水田)
及びそれに続く谷戸地(水田等)により形成されている。台地は常総台地の北東部に相当し、俗に稲敷台地
と呼ばれている。

遺跡は、この台地の端に点在し、町内の遺跡は別表のように、古墳33、貝塚18、集落跡5、城跡・寺院跡
各1等が周知の遺跡である。本遺跡の所在する佐倉地区は、稲敷台地の北東端に位置し、霞ヶ浦の南岸で小
野川が流入する河口部を一望できる標高約25mの台地の尾根及び入り組んだ支谷津地形によって形成されて
いる。



- 1・2 秋平遺跡
- 3 中位倉貝塚
- 4 池平遺跡
- 5 思川久保遺跡
- 6 思川遺跡

1:25,000 江戸崎



第1図 遺跡の位置図(1)

第2節 遺跡の歴史的環境

縄文時代の遺跡としては、椎塚貝塚(21)、小松川貝塚(20)、センゲン貝塚(33)、村田貝塚(6)等が、明治時代以来、調査報告も出され早くから知られている。

椎塚貝塚は、小野川に面した細長い高田丘陵の斜面に存在する縄文後期の貝塚であるが、八木契三郎・下村三四吉が「常陸国椎塚発掘報告」¹⁷⁾を発表して以来、霞ヶ浦南岸に形成された多くの貝塚の中でも、美浦村の陸平貝塚・桜川村の広畑貝塚・東町の福田貝塚等とともに、考古学史上に重要な位置を占める代表的な貝塚として知られている¹⁸⁾。

なお、多くの出土品の中でも、獣骨製ヤスが突き利さった状態の鯛の頭骨や山形土偶・ハート形土偶等は、当地の人々の生活を垣間見ることのできる貴重な遺物として名高く、多くの土器の中でもいわゆる土瓶形をした鉦をもつ注口土器は、施された直線と曲線の組み合わせによる沈線文様の優美さから国指定の重要文化財に、鮎形をした鉢形土器は異形土器の中でも優品として重要美術品に指定されている等の特色がある¹⁹⁾。また、戦後も発掘調査が行われ、昭和24年に慶応義塾大学中等部考古会、昭和43年に明治大学考古学研究室が現地調査を行っている。

センゲン貝塚・小松川貝塚は、佐倉台地の縁辺部に存在する縄文中期の貝塚であるが、昭和15年に竹下次作が「鳩崎村センゲン・小松川貝塚行」として調査報告をしている²⁰⁾。それによれば、大山史前学研究所が、宮平貝塚(阿見町)の発掘調査をした時に周辺遺跡の調査が行われ、両貝塚ともその折の調査(表面採集)対象となり、共にハマグリを中心とし、シオフキ、サルボウ、オキシジミ等10種類の貝と、阿玉台式と勝坂式の上器片を出土したことが報告されている。また、両貝塚については、既に明治27年1月に川角寅吉が「茨城県下の石世遺跡」の中で、佐倉台地の縁辺部に台畑貝塚(35)、センゲン貝塚、二ノ宮貝塚(32)、小松川貝塚が各数町の距離をおいて存在しており、小松川貝塚からは、石斧、凹石、石棒等10点余の石器を採集したことを報告している²¹⁾。

村田貝塚は、昭和43年11月(1～6日、第一次調査)に、その当時、白畑野畑貝塚と称する遺跡名で登録されていた当貝塚を早稲田大学の西村正衛氏が考古学専攻の学生と共に発掘調査を実施している。その成果は、「茨城県江戸町村田貝塚(第一次調査)」として発掘調査の詳報が発表されている²²⁾。それによれば、ハマグリを最多として、マガキ、オキシジミ、シオフキ等16種の貝、スズキ、クロダイ等5種の魚骨、そして若干の獣骨や人骨等の自然遺物と、阿玉台式から加曾利E式にわたる縄文中期の土器を最大とし、縄文早期からの土器片、石斧や凹石等の石器、鹿角製の鉤や釣り針等の骨角器、貝輪や貝舟等の貝器、土器片鉦や床状耳飾り等の土製品など多くの人工遺物も出土し、それらの比較研究によって霞ヶ浦南岸における縄文中期の内湾的鹹水貝塚と同一の性格を有している事が指摘されている。

弥生時代の遺跡は、昭和59年5～9月に行われた橋の台古墳群(22)の発掘調査(第一次、4号～7号墳)の折、7号墳の墳丘下から約5m四方の隅丸方形の住居跡が2軒検出された²³⁾。これが江戸崎町における弥生時代住居跡の最初の発見であるが、それのみならず、霞ヶ浦南岸地域における数少ない弥生期の集落跡調査の貴重な1ページを飾る結果ともなっている。併せて、紡錘車、広口壺、土器片等が出土し、弥生土器片に施された縄目や櫛描の波状、格子状、平行線などの模様を組み合わせ方や底部の木葉痕などの特徴から弥生時代後期の住居跡と推定されている。

次に昭和63年6月～翌年3月にかけて行われた茨城県教育財団による大日山古墳群(51)と思川遺跡(53)の発掘調査の折、大日山から18軒の住居跡中、弥生時代中期の住居跡1軒と同後期の住居跡7軒、そして思

川から53軒の住居跡中、同後期の住居跡3軒が検出されているが、いずれも約5m四方の隅丸方形の住居跡であった⁵。

以上のように、昭和60年頃から開発に伴う記録保存を目的とした発掘調査が江戸崎町でも行われるようになり、土中に長い間埋もれていた集落跡の検証も数を増し、結果として弥生遺跡の存在確認へとつながったのである。今後、調査が進むに従い、従来空白であった江戸崎町の弥生時代の様相が次第にあきらかになるものと思われる。

古墳時代の遺跡は、江戸崎町遺跡「覧表からもわかるように、荒地古墳群（8）などの古墳群が9ヵ所、見晴塚古墳（2）などの古墳が24ヵ所に存在している⁶。

江戸崎町における古墳発見の初源は、偶然によるものであった。まず、殿屋敷古墳（21）は、明治44年7月に屋敷庭の上手を削り、宅地整理の作業をしていた時に、石棺（6尺×6尺×3尺）が出土し、中から3体分の人骨、勾玉などが発見されたと伝えられている。人骨は墓地に再埋葬し、石棺の石の一枚を墓標にして置置したが、当時の出土品は、昭和20年代には所在不明になっていたそうである。なお、削平した部分は、後円部に相当し、長さ11m、高さ3m位であり、前方部は長さ9m、高さ3m位なので、全長20m程の前方後円墳（ひょうたん形の塚と伝えられる）であったろうと推定されている。

次に、水神峰古墳は、昭和48年に上採取事業中に鳩崎小学校の向かいの山（水神峰と呼ばれていた）の頂上から発見され、内部が朱で塗られていた石棺が出土し、人骨、鉄製の太刀、鉄鍔、馬具などの副葬品を伴っていたと伝えられている⁷。しかし墳型等は不明である。

また、古老の伝えでは、佐倉には比翼塚の伝承があり、殿屋敷古墳と水神峰古墳がそれに相当するのだろうか。現在となってはその所在地点の断定もままならないが、参考まで付記しておきたい。さらに、空堀・土塁が残存する殿屋敷の主（あるじ）は、信太小太郎という平将門の子孫であり、池平の尾根上には信太小太郎旗立のビラ松と言われる大きな松の木があり、かつて霞ヶ浦を航行する船や漁撈に従事した人々の日印ともなっていたが、数十年前に枯死してしまったと伝えられている⁸。

一方、土地開発に伴う記録保存を目的とした発掘調査は、昭和59年の桶の台古墳群（4～7号墳）、平成3年の土戸古墳（46）の例がある。なお、昭和63年の大日山古墳群は、近世の大日塚と判明したが、弥生から古墳時代の住居跡18軒の内古墳時代中期が4軒、後期が2軒発見されている。また、同時に行われた二ノ宮貝塚からも古墳時代後期（6世紀後半頃）の住居跡5軒が、思川遺跡からも同時代の遺跡14軒が発見されている⁹。さらに、平成4年には、確認調査ではあるが、昭和63年の調査地に隣接する思川遺跡から古墳～平安時代と思われる住居跡が23軒、思川久保遺跡（57）から弥生～平安時代と思われる住居跡が20軒存在したことが確認されている。

さて、桶の台古墳群の4～7号墳は、石棺ではなく、雲母片岩をとまなう粘土上郭による主体部であり、4・5号墳は各2つの主体部を持つ円墳、6号墳は一辺13mの方墳、7号墳は21m×高さ2.5mの円墳だったが、攪乱の跡のみで副葬品は検出されなかった。なお、古墳時代の住居跡が5軒発見され、6号墳のそばで見つかった4号住居跡は中央に畑のある和泉期、4号墳そばの1号住居跡と5号墳そばの2号住居跡は西壁に竈を有する鬼高期のものと推定されている¹⁰。

このように佐倉地区の台地上には、古墳時代においてもいくつかの集落が営まれていたことが判明し、多くの古墳の存在と併せて、霞ヶ浦南岸における要地の1つであっただろうことが推測される。

奈良・平安時代の遺跡としては、まず、下君山院寺跡（12）がある。稲敷台地の南端縁辺部に小野川を望む丘陵上に位置し、周りは江戸崎カボチャを栽培する畑地が一面にひろがっている。この遺跡は、富士台と

いう字に所在し、塚状の地形の上に大きな平石が露出していたので、かつては富士塚古墳と呼ばれていた時期もあるが、平石は雲母片岩で中央の穴の存在から塔の心礎と想定される。そばに花崗岩製の石造露盤があり、周辺の畑には布目瓦がたくさん散布しており¹⁾、さらに出土状況は不明であるが、当所出土と伝えられる8世紀頃の金銅仏が茨城県立歴史館に所蔵されている²⁾などの理由から、廃寺跡と名称変更された。さらに、この遺跡の周辺に残る小字地名や長者伝説などを加味して、古代における信太郡の郡衙がこの地に存在していたとの説も明治以来多くの研究者によって唱えられてきたことも併せて付記しておきたい。また、近年、木下良氏の研究によって古代の官道跡が現在の地図上にもこの貴重な地域であることが指摘され³⁾、再び君山地方が注目されようとしている。

次に発掘調査によって、当時代の住居跡を伴い遺物が出土した遺跡としては、昭和63年に実施された二ノ宮貝塚から住居跡9軒、フラスコ状土坑5基、思川遺跡から住居跡36軒、土坑5基と土師器、須恵器の坏、高台付坏、それに12点の黒土器や灰釉陶器の平瓶と把手付瓶や緑釉陶器の輪花等が須恵器の大甕や唐鏡(瑞花双鳳鏡)の破片とともに発見されている⁴⁾。

一方、当時代の創建と伝えられる寺社には、田宿の不動院、古渡の円密院、高田園の高田神社(熊野権現)などがあり、何度かの再建を経て現在にいたっている。

註 ①八木英二郎・下村三四吉 「常陸国稚原介塚発掘報告」『東京人類学雑誌』87号 明治26年

②高島多米治 「権塚介塚遺蹟」『人類学雑誌』31-5 大正5年

清野謙次 「日本貝塚の研究」岩波書店 昭和44年

③『茨城県史料・考古資料編・先土器縄文時代』茨城県 昭和54年
『茨城の名宝』茨城県立歴史館 昭和60年

④竹下次作 「鳩崎村センゲン・小松川貝塚行」『史前学雑誌』12-3 昭和15年

⑤川角寅吉 「茨城県下の石器遺跡」『東京人類学雑誌』94号 明治27年

⑥西村正衛 「茨城県江戸崎町村田貝塚(第一次調査)」『学術研究』30号 早稲田大学 昭和56年

⑦『稲の台古墳群発掘調査報告書』稲の台古墳群調査会 昭和61年

⑧鈴木美治 「二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡—一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書—」
茨城県教育財団文化財調査報告第66集 平成3年

⑨『江戸崎町史』江戸崎町 平成5年

⑩崎泉嶺 「稲敷郡郷土史」賢美閣 昭和55年

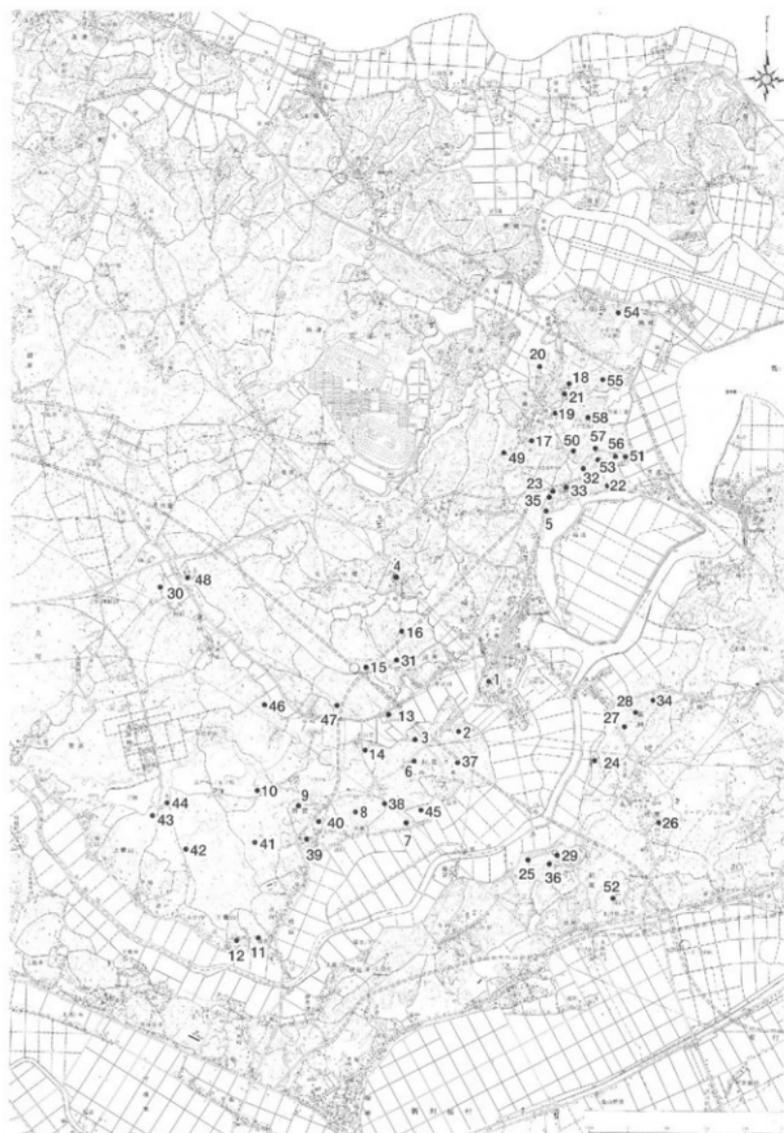
『江戸崎町資料調査報告』1. 明治44年町村郷土誌 町教委 平成9年

⑪『学術調査報告書』4. 茨城における古代瓦の研究 茨城県立歴史館 平成6年

⑫『茨城県史料・考古資料編・奈良平安時代』茨城県 平成7年

⑬木下良氏 「古代を考える 古代遺跡」吉川弘文館 平成8年

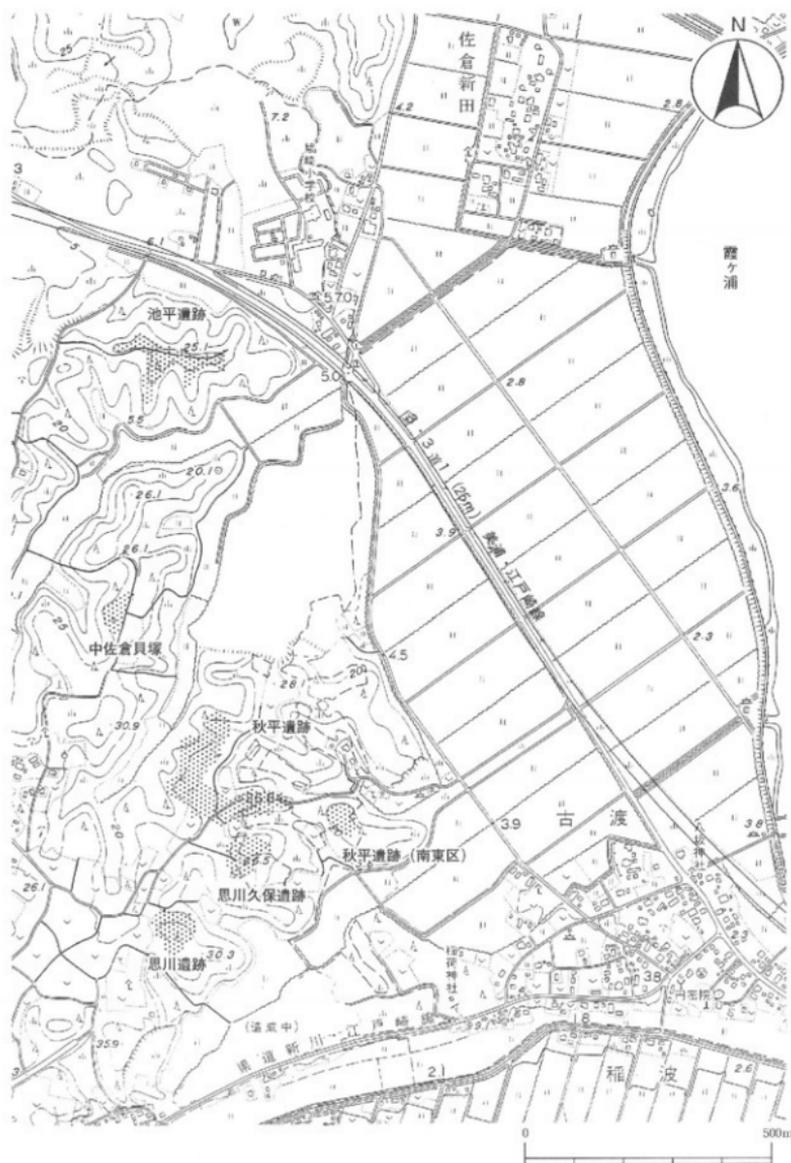
木下良 「常陸国古代駅路に関する一考察、一直線的計画古道跡の検出を主として。」『国学院雑誌』85巻1号 昭和59年



第2図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

町番号	県番号	遺跡名	所在地	種類	主な時期	文献(備考)
1	1612	江戸崎城跡	江戸崎大宿平3194	城	中世	
2	1613	見晴塚古墳	江戸崎乙2602	古墳	古墳時代	
3	1614	9.燕塚古墳	江戸崎乙2602	古墳	古墳時代	
4	1615	明神貝塚	大塚三本松1248	貝塚	縄文時代	
5	1616	吹上貝塚	江戸崎法蓮坊平526	貝塚	縄文時代	
6	1617	村田貝塚	村田山尾26	貝塚	縄文時代	S43早大調査 学術研究30
7	1618	魚ヶ谷城古墳	羽賀新堀1352	古墳	古墳時代	
8	1619	荒施古墳群	羽賀荒地平1,321	古墳群	古墳時代	
9	1620	木納塚古墳群	羽賀木納場1616	古墳群	古墳時代	
10	1621	人塚古墳	羽賀人塚1881	古墳	古墳時代	湮滅
11	1622	梅屋塚古墳	下君山羽黒1726	古墳	古墳時代	
12	1623	下君山廃寺跡	下君山富士台2521	廃寺	古代	
13	1624	浅間山古墳群	沼田東前1,064-1	古墳群	古墳時代	湮滅
14	1625	神田通貝塚	小羽賀神田道690	貝塚	縄文時代	
15	1626	百輪前古墳	沼田百輪前2,361	古墳	古墳時代	湮滅
16	1627	大夫屋敷古墳	沼田大夫屋敷1,856	古墳	古墳時代	
17	1628	南平貝塚	佐倉南平2,350	貝塚	縄文時代	
18	1629	山中貝塚	佐倉山中1,505	貝塚	縄文時代	
19	1630	大神山古墳	佐倉山中平1,621	古墳	古墳時代	
20	1631	小松川貝塚	佐倉小松川896	貝塚	縄文時代	史前学雑誌123
21	1632	殿屋敷古墳	佐倉殿屋敷1,509	古墳	古墳時代	
22	1633	榎の台古墳群	佐倉榎の台2,728外	集落・古墳	弥生～古墳時代	1986報告書発行 町教委
23	1634	佐倉原古墳群	佐倉浅間2,648外	古墳	古墳時代	
24	1635	椎塚貝塚	椎塚中の基120	貝塚	縄文時代	人類学雑誌87他
25	1636	人塚山古墳	駒塚人塚420	古墳	古墳時代	
26	1637	稲草の塚古墳	椎塚台1747	古墳	古墳時代	
27	1638	蓮沼貝塚	高田蓮沼	貝塚	縄文時代	不明
28	1639	中根貝塚	高田中根	貝塚	縄文時代	不明
29	1640	駒塚貝塚	駒塚	貝塚	縄文時代	不明
30	1641	藩ヶ山貝塚	上藩ヶ山	貝塚	縄文時代	
31	1642	沼田貝塚	沼田寺台2,077-6	貝塚	縄文時代	
32	1643	二ノ宮貝塚	佐倉二ノ宮2,608-2	集落・墓跡	古墳時代～中世	1991報告書発行 教財65
33	1644	センゲン貝塚	佐倉浅間	貝塚	縄文時代	湮滅 史前学雑誌123
34	1645	高山岡貝塚	高山岡大畑	貝塚	縄文時代	
35	1646	合柳貝塚	佐倉合柳	貝塚	縄文時代	
36	2823	駒塚台上遺跡	駒塚	包蔵地	縄文時代	
37	5636	中峰古墳	村田中峰3,910	古墳	古墳時代	
38	5637	大目古墳	羽賀大目1,411-2	古墳	古墳時代	
39	5638	根古屋古墳	羽賀根古屋1,102-2	古墳	古墳時代	
40	5639	中城古墳	羽賀中城1,568	古墳	古墳時代	
41	5640	人目峠古墳	松山人目峠2,772	古墳	古墳時代	
42	5641	山王古墳	下君山山王3,305-1	古墳	古墳時代	
43	5642	大塚古墳	上君山大塚2,409	古墳	古墳時代	
44	5643	沼口古墳	上君山沼口3,492	古墳	古墳時代	
45	5644	栗山古墳群	小羽賀栗山581-4外	古墳群	古墳時代	
46	5645	土戸古墳	時崎土戸255-1	古墳	古墳時代	
47	5646	寅高古墳	時崎寅高619	古墳	古墳時代	
48	5647	迎田古墳	藩ヶ山迎田台257-2	古墳	古墳時代	
49	5648	長塚古墳	佐倉長塚326	古墳	古墳時代	
50	5649	庭宮古墳群	佐倉庭坪1,801-2	古墳	古墳時代	
51	5650	大目山古墳群	古渡大目山1,908	集落・塚	縄文時代～中世	1991報告書発行 教財65
52	5651	桑山古墳群	桑山中ノ台307外	古墳群	古墳時代	
53	-	思川遺跡	佐倉思川2,622外	集落	縄文～平安時代	1991報告書発行 教財65
54	-	日高古墳	鳩崎日向906	古墳	古墳時代	
55	-	池平遺跡	佐倉池平1,407	集落・墓跡	弥生～平安時代	本書 1992発掘調査
56	-	秋平遺跡	佐倉秋平2,122外	集落	旧石器時代～中世	本書 1992発掘調査
57	-	思川久保遺跡	佐倉思川久保2,153	集落	弥生～平安時代	1992発掘調査
58	-	中佐倉貝塚	佐倉中佐倉1,779外	貝塚・集落	縄文～平安時代	本書 1992発掘調査



第3図 遺跡の位置(2)

第3節 遺跡の立地

第1項 秋平遺跡

本遺跡は江戸崎町の市街より北東2.7km、稲敷台地の東端部に位置し、東方約1kmには霞ヶ浦が広がる。北東0.6kmには国道125号線が南北に走る。

遺跡は標高20～26mを測る樹枝状に開析を受けた舌状台地上にある。この台地は、鳩崎小学校の南側に開口する谷が二又に分かれて南西方向に台地奥深くにまで入り込み、大きく三つに分けられている。この内、最も東側に位置する台地の中央部付近で、C字形に本遺跡は展開している。台地先端側に位置する下位水田面の標高は4m前後で、台地上との比高は20m程である。

遺跡の地目は畑及び山林であった。

同一台地上には思川遺跡、思川久保遺跡、大目山古墳群、楯の台古墳群、佐倉原古墳群等が存在する。

第2項 池平遺跡

本遺跡は霞ヶ浦の西岸より西に1km、鳩崎小学校の南方100mの台地状にある。稲敷台地の東北端に位置する。周囲には田圃が広がり、直下には佐原から土浦に向かって、国道125号線が直線的に延びている。

遺跡は標高20～26mを測る樹枝状に開析を受けた舌状台地上にある。この台地は、鳩崎小学校の南側に開口する谷が二又に分かれて南西方向に台地奥深くにまで入り込み、大きく三つに分けられている。この内、最も北西側に位置する台地にあたる。台地先端側に位置する鳩崎小学校の標高は6m前後で、台地上との比高は凡そ20m程である。遺跡の地目は雑木林であった。

遺跡は細い変せ尾根上に展開しており、台地平坦部分の最大幅は20m程で、最も狭い部分では10m前後の尾根上にも住居跡が構築されている。狭い尾根上に密集して繰り返し住居が作られ、遺構の重複が激しい。

同一台地上には山中貝塚、殿屋敷古墳、天神山古墳が存在する。

第3項 中佐倉貝塚

本遺跡は、霞ヶ浦の南西約1.4kmの丘陵上に位置し、樹枝状に開析を受けた稲敷台地の東端に立地する。鳩崎小学校の南側に開口する谷が二又に分かれて南西方向に台地奥深くにまで入り込み、大きく三つに分かれているが、遺跡は中央にあたる台地上に位置している。

遺跡は標高20～26mを測り樹枝状に開析を受けた舌状台地中程にある。さらに細かに見れば西側に向かって穏やかに張り出す、西向き斜面頂上付近に展開しており、台地の直下に入り込んでくる谷部との比高は凡そ20mを測る。

遺跡の地目は雑木林であった。

同一台地上には鉾宮古墳群が台地の基部付近に存在している。山中貝塚とは谷を挟んで対峙している。

第3章 調査の方法と経過

第1節 秋平遺跡（発掘調査）

第1項 試掘調査の方法と経過

調査の方法

確認調査対象区は東側地区と北側地区（第3区）であり、中央地区（第1区）は本調査の対象区となっていた。トレンチ法により試掘調査を行うもので、トレンチは20m間隔に幅2m、方向は台地を横断する方向で任意に設定した。トレンチの呼称は第3区の南側からA・B・・・H、東側地区の南側よりI・J・・・Lとした。掘り下げは重機で行い、その後人力により精査した。確認された遺構は、200分の1で配置図を作成し、トレンチの一部で上層の観察を行うセクション実測は20分の1で実施した。写真撮影はモノクローム大形カメラ1台、35mm1台、スライド35mm1台で調査の進捗に合わせて随時実施した。

試掘調査の結果第3区及び東側地区双方に於て多数の遺構・遺物が検出されたが、東側地区は工事計画の変更から対象から除外された。この結果、調査区は本来の調査区域である第1区と、第3区が対象となった。

試掘調査の経過

試掘調査 平成4年1月27日～平成4年3月3日

平成4年

1月27日 第3区の試掘調査を開始する。重機によるトレンチ掘削その後、人力でトレンチ内の精査を行う。トレンチは20m間隔に幅2mで設定し、第3区より開始し東側地区へと進めた。

2月17日 両地区の試掘調査を終了する。この結果、確認された遺構は以下のとおりである。

第3地区 住居跡16軒、土坑30基、溝7条

東側地区 住居跡5軒、土坑24基、溝5条

出土遺物から判断される遺構の時期は、縄文時代前期・弥生時代後期・古墳時代～奈良・平安時代があり、中でも奈良・平安時代を中心に確認された。

第2項 本調査の方法と経過

本調査の方法

確認調査の結果、本調査の対象となったのは15,950㎡である。その内訳は当初からの本調査区域である第1区6,650㎡、確認調査の結果、本調査の対象となった第3区の8,200㎡、同第3区西側の追加調査区域の1,100㎡である。

調査区域は全体に10mのメッシュを被せ、北西側端部を起点に東西方向にA・B・C・D・E・・・V、南北方向に1・2・3・4・5・・・26とし、調査区域北側端部をL-9杭とした。また、この杭を素に南東側のますをA-1グリッドと呼称し、調査及び実測の基準にした。

本調査は第1区より開始した。表土除去は重機によって行い、その後人力によって遺構の確認作業を実施した。遺構番号は検出された順に任意に付した。遺構の掘り下げは土層の観察用ベルトを設置して行い、土

層の観察後に完掘した。実測は平面図・上層図・断面図は20分の1、微細図・カマドは10分の1、全体図は20分の1の縮尺で行った。

写真は試掘調査と同じくモノクローム用大形カメラ1台と、モノクローム用とスライド用の小形カメラ2台で状況に応じて遠景・近景で撮影を行い、各遺構は調査の進捗に合わせて随時実施した。終了写真は航空撮影により行った。

本調査の経過

本調査 平成4年2月5日～平成4年11月20日（試掘調査と一部並行）

平成4年

- | | | |
|------|----|---|
| 2月期 | 上旬 | 5日、重機による第1地区の表土除去作業を開始する。
これに並行して遺構検出作業を開始する。 |
| 3月期 | 上旬 | 第1及び第3区の表土除去作業を終了する。確認された遺構の配置図を作成する。 |
| | 下旬 | 遺構確認作業をほぼ終了する。24日、遺構の掘り下げ調査を開始する。
31日、平成3年度の調査を終了する。 |
| 4月期 | 上旬 | 1日、平成4年の調査を前年度に引き続き開始する。 |
| | 中旬 | 調査区北側部分の表土除去作業を開始する。 |
| 5月期 | 上旬 | 第1区の遺構調査を継続。実測作業を主体に進める。 |
| | 下旬 | 28日、調査区域南側部分（第1区）の遺構調査を終了する。
29日、調査区域北側部分（第3区）の遺構検出作業を開始する。 |
| 6月期 | 上旬 | 調査区北側部分の遺構検出作業終了。 |
| | 下旬 | 現場内の安全確認を行う。 |
| 7月期 | 上旬 | 着手した住居跡の軒数は50軒を越す。 |
| | 下旬 | 遺構調査を継続する。 |
| 8月期 | 下旬 | 拡張区の表土除去作業を開始する。並行して遺構検出作業を開始する。 |
| 9月期 | 上旬 | 表土除去作業・遺構確認作業を終了する。 |
| | 中旬 | 拡張区の遺構調査を開始する。 |
| | 下旬 | 27日、現地説明会を実施する。午前と午後に分け、3回の説明を実施する。見学者は総数74名。パンフレットの配付、パネル展示も合わせて実施する。 |
| 10月期 | 下旬 | 31日、江戸崎町民文化祭の「江戸崎町史編纂資料展」実施にあたり、本遺跡調査中に出土した遺物の展示を行う。 |
| 11月期 | 上旬 | 3日、文化祭終了。 |
| | 中旬 | 全体測量図作成。13日、航空撮影実施。14日、遺構調査を終了する。
16日、残務整理関係書類の作成を開始する。
19日、調査終了確認を行う。
20日、機材を撤収し、現地での調査を終了する。 |

第2節 池平遺跡（発掘調査）

第1項 本調査の方法と経過

本調査の方法

本調査の対象となったのは9,500㎡である。その内訳は、町教育委員会が事前に実施した結果より当初から確定していた本調査区域の7,900㎡、さらに調査の過程で新たに拡張が必要となった1,600㎡である。

調査区域は全体に5mのメッシュを被せ、北西側端部を起点に南北方向にA・B・C・D・E・・・2A・2B・・・2H、南北方向に1・2・3・4・5・・・47とし、調査区域北側端部をB-13杭とした。また、この杭を基に南東側のますをB-13グリッドと呼称し、調査及び実測の基準にした。

遺構は3方向に延びる痩せ尾根上に位置するもので、調査は中央部分の比較的幅の広い平坦面より開始した。表土除去は重機によって行い、その後人力によって遺構の確認作業を実施した。調査の結果、東側の尾根部分にも遺構が延びることが確認され、教育委員会の指導により三角形の凡そ1,600㎡について拡張調査を行った。

遺構番号は検出された順に任意に付した。遺構の掘り下げは上層の観察用ベルトを設置して行い、土層の観察後に完掘した。実測は平面図・土層図・断面図は20分の1、微細図・コマドは10分の1、全体図は20分の1の縮尺で行った。

写真は試掘調査と同じくモノクローム用大形カメラ1台と、モノクローム用とスライド用的小形カメラ2台で状況に応じて遠景・近景で撮影を行い、各遺構は調査の進捗に合わせて随時実施した。終了写真は航空撮影により行った。

本調査の経過

本調査 平成4年2月7日～平成4年9月22日

平成4年

- | | | |
|-----|-----|---|
| 2月期 | 上旬 | 7日、本調査を開始する。調査区の現況写真撮影並びに、同区内の採探を実施する。 |
| | 中旬 | 12日、重機による表土除去作業を開始する。 |
| | 下旬 | 遺構の確認作業を主体に進める。 |
| 3月期 | 上旬 | 重機による表土排土及びプランの確認作業を継続する。 |
| | 中旬 | 19日、佐倉地区遺跡発掘調査会を開催する。 |
| | 下旬 | 23日、重機による表土除去作業終了。
25日、プラン確認作業を終了する。 |
| 4月期 | 上旬 | 2日、公共座標を設定する。遺構の掘り下げ、実測、写真撮影を開始する。 |
| | 中旬 | 遺構の掘り下げは東側（中央部分）より開始する。 |
| 5月期 | 上旬 | 遺構の掘り下げ調査に並行し、遺構の再確認作業を実施する。 |
| | 中下旬 | 遺構調査を継続する。また標準堆積土層の調査を実施する。 |
| 6月期 | | 実測・写真撮影を中心に行う。掘り下げは南側及び西側区へと進める。 |
| 7月期 | 上旬 | 遺構の掘り下げをほぼ終了する。調査は実測作業主体になる。 |
| | 下旬 | 21日、遺跡の全体測量を実施する。 |

	28日、佐倉地区遺跡発掘調査会総会を開催する。
	30日、空撮を実施する。
	31日、当初の調査区の調査を終了する。
8月期 上旬	拡張区（東側）の調査を開始する。重機による表土排除を実施する。プラン確認を行う。
中下旬	12日、公共座標を設定し、遺構の掘り下げ調査を開始する。
9月期 上旬	遺構の掘り下げを継続する。
	9日、拡張区の全体測量を行う。
	17日、拡張区域全域の終了全景写真を撮影し本遺跡の調査を完了する。
	同日、教育委員会による終了確認を行う。
	22日、機材の撤収を完了する。

第3節 中佐倉貝塚（発掘調査）

第1項 本調査の方法と経過

本調査の方法

本調査の対象となったのは1,600㎡である。当初の調査予定には含まれていなかったが、新たに貝塚の存在が確認され新規に調査対象となったものである。

調査区域は全体に1mのメッシュを被せ、北西側端部を起点に南北方向にA・B・C・・・2A・2B・・・3A・3B・・・3Y、東西方向に1・2・3・・・63とし、調査区域北側端部をA-61杭とした。また、この杭を基に南東側のますをA-61グリッドと呼称し、調査及び実測の基準にした。

遺跡は現道（工事用道路）を挟んで東西両方の調査区域に分かれる。現道の東側区域は幅2mのトレンチ調査になっている。また、西側は谷に向かい緩やかに突出する台地上で、各所に貝の散布が見られた。この為、遺跡は貝塚と判断され、詳細な調査を目指す目的で全体に1mのメッシュを被せることにした。

トレンチ部分の表土掘削は重機を用いて行ったが、貝の散布が見られる西側調査区域は、表土より人力によって掘り下げた。遺構番号は明瞭に遺構が把握できるまで付せず、1mのグリッドをもって遺物の取り上げを進めた。更に、各グリッドは上層より20cm単位で掘り下げを行い、上層・中層・下層・最下層の順に調査を進めた。遺構番号は存在が確認された段階で任意に付している。尚、遺構内出土の遺物は整理作業段階で小グリッドから遺構へと戻してある。

遺構の掘り下げは、大形の住居跡は、1mメッシュ及び20cm単位毎に土層観察用ベルトを設置して掘り下げた。土坑は半載して土層観察を行っているが、貝を混入するものには住居跡同様の方法を使った。

貝はいずれの遺構も基本的に全量採取することを目指し、一部は西側谷頭部にある池の水をくみ上げ、現地水洗を実施した。

実測は平面図・土層図・断面図は20分の1、微細図・カマドは10分の1、全体図は20分の1の縮尺で行った。

写真は試掘調査と同じくモノクローム用大形カメラ1台と、モノクローム用とスライド用の小形カメラ2台で状況に応じて遠景・近景で撮影を行い、各遺構は調査の進捗に合わせて随時実施した。終了写真は航空撮影により行った。

本調査の経過

本調査 平成4年9月24日～平成5年4月23日

平成4年

9月期 下旬 24日、本調査を開始する。5×5mの公共座標を設定し地形測量を行う。
重機により東側地区の表土除去作業を開始する。

10月期 西側区の掘り下げに平行して、遺物取り上げを1m方眼で進める。
遺構確認作業を行う。西側谷部に貝の洗浄施設を設置する。

11月期 中旬 A区の表土除去作業を継続する。

12月期 中旬 A区の表土除去作業を継続する。

平成5年

1月期 上旬 A区の遺構検出作業を継続し、確認された遺構の配置図を作成する。
中旬 遺構の掘り下げ・実測・写真撮影を開始する。混貝土層の水洗いを進める。

2月期 掘り下げを主体に遺構調査を進める。混貝土層の水洗いを進める。

3月期 上旬 4～6日、遺跡見学会を実施する。
中旬 実測及び写真撮影を主体に作業を進める。混貝土層の水洗いを進める。
下旬 27日、貝層を残した状態で遺跡の空撮を行う。

4月期 上旬 実測及び写真撮影を主体に作業を進める。混貝土層の水洗いを進める。
8日、全体測量を終了する。

下旬 23日、機材の撤収を終了し、終了の確認を受けて本調査を終了する。



中佐倉貝塚発掘風景

第4節 整理調査の方法と経過

第1項 概要

平成8月4月1日～平成10年6月30日にわたり整理調査を実施した。3遺跡共に異なる台地上に位置しており別遺跡であるが、事業目的が同一であることより一冊の報告にまとめる方針となった。

秋平遺跡・池平遺跡では遺物を掲載した遺構は基本的に良好な資料を出土しているものに限ったが、未掲載となった遺物については、遺跡・遺構毎に分類し、基本的な内容が判るように分類表に基づく模式一覧表にまとめて掲載することにした。中佐倉貝塚ではすべての遺構出土遺物について掲載している。

尚、各遺跡の遺構・遺物の取扱については凡例で述べてある。

第2項 貝の分析

中佐倉貝塚出土の貝については、国立歴史民俗博物館教授西本豊弘先生及び小林岡子氏のご指導のもと、以下の方法で洗浄及び分類を実施した。

採取した貝は十糞袋で凡そ1000袋を数え、全資料の洗浄・分類は予算的にも困難であった。この為、住居跡覆土内の貝層は各住居跡共に中心部分の3グリッド（1m×1m×3ヶ所）のみを抽出し洗浄を行った。更に、状況を判断し、この3グリッド中で最も良好な1グリッドについて詳細な分類・分析を実施した。

又、土坑内部から出土した貝は、SK-7及びSK-11の2基について、全量の種類・分析を実施した。

洗浄方法は乾燥状態で5mmメッシュの篩いかけを行い、大まかな貝については取りあげる。更に細かな1mmの篩いで洗浄と並行して実施し魚骨等を含めた細かな資料の採取にまで心がけた。

第3項 経過

平成9年

4月期 3日、整理作業を開始する。

土器の水洗い及びバブルジェットによる注記作業を行う。

5・6月期 秋平遺跡より遺構図修正、遺物の接合を実施する。同時に遺物の選別も行う。

7・8月期 池平遺跡の遺構図修正、遺物の接合・選別を行う。

9・10月期 秋平・池平遺跡の実測・遺物写真撮影、遺構図面のトレースを行う。

11月期 中佐倉貝塚の貝層の水洗いを開始する。

中佐倉貝塚の貝層以外の遺物洗浄に取りかかる。

12月期 中佐倉貝塚の遺物接合・選別作業を実施する。

平成10年

1月期 中佐倉貝塚の実測・遺物写真撮影を行う。貝の洗浄を終了する。

2・3月期 遺物実測図の点検とトレースを行う。町文化財保護審議委員会による整理進捗状況の視察。

4・5月期 遺物版組を実施する。

6月期 遺物分類表作成・原稿執筆・貝の分析を行う。

平成11年

7月 報告書の刊行。

第4章 土層

第1項 概要

秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚を包括する稲敷台地東部では、基本的に地表より腐食土層、関東ローム層、常総粘土層、竜ヶ崎砂礫層、成田層の層順が水平堆積を示す、比較的単調な堆積が知られている。今回の調査によって得られた結果に於てもほぼ同様であるが、秋平遺跡では関東ローム層の堆積が認められない部分も確認されている。

遺跡は、いずれも樹枝状に開析される台地上に展開している。標高では秋平遺跡・池平遺跡が25m前後でほぼ一致し、中佐倉貝塚で26.5m前後とやや高くなるものの全体的に大差は認められない。しかしながら、標準堆積土層を遺跡別に見れば、それぞれの台地を被覆する上層には一部に同一上層が観察されるものの、個々の遺跡で明瞭な差がある。

第2項 各遺跡の標準堆積土層

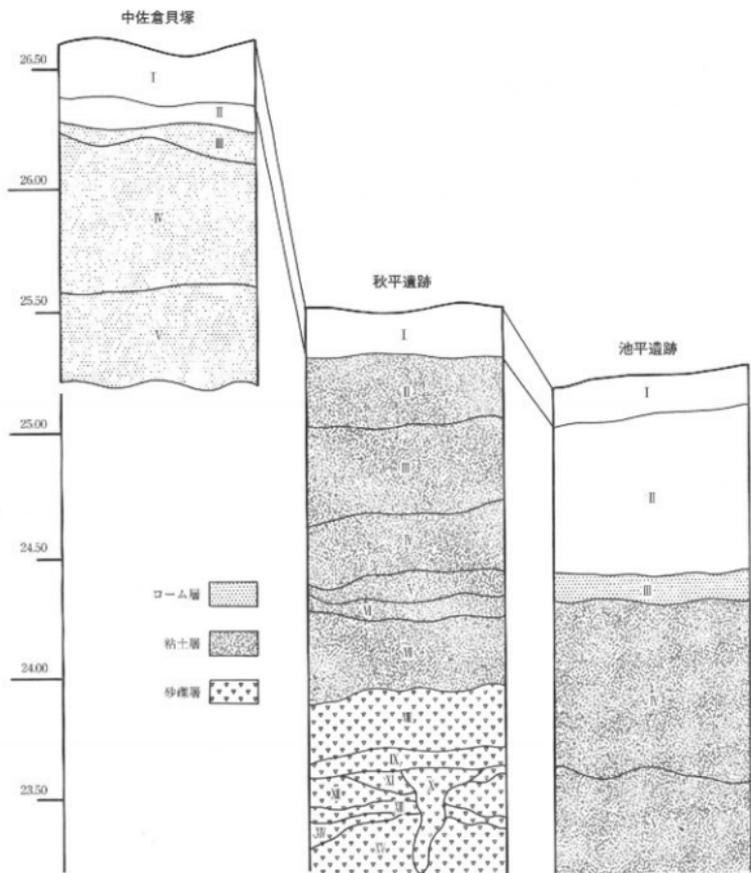
秋平遺跡

標準堆積土層の観察は台地中央付近I-16グリッドに於て行った。

本遺跡の表土層は凡そ20cmで、表土直下より粘質土層の堆積が確認されている。明瞭なローム層の堆積は確認されていない。Ⅱ層は褐色を呈し、やや関東ローム層に似るが、非常に粘性に富み、ロームと粘土層の漸移層的な様相である。木層上面が遺構確認面になっている。Ⅲ層以下はⅤ層までが粘質土（常総粘土層）で、以下が砂層（竜ヶ崎砂礫層）になる。

土層観察結果

- 第Ⅰ層 表土層 粘性乏しい。
- 第Ⅱ層 褐色土 ロームに近い色調であるが粘性に富む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土 粘土層。まだらにピンク色の土が混じる。
- 第Ⅳ層 灰白色土 粘土層。φ5～20mmの黒褐色の鉄分粒子が混入される。
- 第Ⅴ層 橙色土 粘土層。酸化が顕著。
- 第Ⅵ層 白黄色土 粘土層。
- 第Ⅶ層 灰白色土 粘土層。部分的に酸化。
- 第Ⅷ層 褐色土 砂質土と粘土の水平な堆積を示す互層。砂質土は酸化が顕著である。
- 第Ⅷ層 白色土 粘土層。Ⅶ層に近似する。
- 第Ⅸ層 灰黄褐色土 砂質層。部分的に酸化が見られる。噴砂又は地割れカ。
- 第Ⅹ層 灰黄褐色土 砂質層。部分的に酸化が見られる。
- 第Ⅺ層 灰黄褐色土 砂質層。部分的に酸化が見られる。
- 第Ⅻ層 灰白色土 やや粘性のある上層で間に薄い砂質層をはさむ。
- 第Ⅼ層 灰白色土 砂質層。
- 第Ⅽ層 灰黄褐色土 砂質層。全体に酸化している。



第4図 標準堆積土層

池平遺跡

上層の観察は台地北西側D-15グリッドに於て行った。

本遺跡の表土層は凡そ35cmの堆積が確認されている。表土層直下には褐色のやや柔らかい土（第Ⅱ層）が堆積しており、同層の上面が遺構の確認面となっている。やや明瞭さにかけるが、ローム漸移層であろう。第Ⅲ層は堆積は薄い粘性的なロームと判断される。Ⅳ層は細かに細分されるがいずれも粘土層でロームとは異なる。常態粘土層になろう。Ⅴ層以下はシルト質の上層が堆積しており、常態粘土層下部から竜ヶ崎砂礫層の上部と判断される。

土層観察結果

第Ⅰ層 暗褐色土 表土。腐食土層。

第Ⅱ層 褐色土 やわらかい。下層には暗黄褐色土を含む。

第Ⅲ層 褐色土 ローム層。粘性強くやや硬い。

第Ⅳ層 淡黄褐色、淡青褐色粘土層。黒褐色鉄分を多量に含み硬い。

第Ⅴ層 淡黄褐色土、淡青褐色粘土層。黒褐色鉄分を若干含むやや硬い。下層はシルト層。

中佐倉貝塚

土層の観察は工事用道路の法面に於て行った。

表土層の第Ⅰ層は最大で60cmの堆積が確認されているが、一部造成による攪乱が及んでいる。第Ⅱ層は褐色土でロームの漸移層である。以下Ⅲ～Ⅴ層までは比較的明瞭なローム層である。この堆積状況は秋平遺跡・池平遺跡とは異なっている。これらの土層はいずれも粘質に欠ける土層で、常態粘土層・竜ヶ崎砂礫層はさらに下層に位置するものと考えられる。

尚、遺構の確認面は第Ⅱ層中層から第Ⅲ層上面である。

土層観察結果

第Ⅰ層 暗褐色土 表土。造成工事により攪乱された土層。

第Ⅱ層 褐色土 粘性やや少ない。しまり弱い。

第Ⅲ層 明褐色ローム 粘性やや少なく、しまり弱い。

第Ⅳ層 黄褐色ローム 粘性やや少なく、しまりは非常に強い。

第Ⅴ層 淡褐色ローム 粘性やや少なく、しまりは非常に強い。

II 秋 平 遺 跡

第1章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡調査区は、「く」の字に折れ曲がるやや幅の広い尾根状の台地上に位置している。北側区では尾根の最大幅は30m程度で、西側の屈曲部では50m程を測る。台地上の標高は最高位で25.5mを測る。南東側区域は東側に向かって傾斜する緩斜面で、遺構は南側斜面部に集中する傾向を示している。

検出された遺構は住居跡120軒、土坑26基、溝19条、性格不明の遺構6基であった。

遺跡の立地でも触れたが、調査区の屈曲部分に当たる南西側の地区の南200mには思川遺跡、南東側区の更に南東方向200mには大日山古墳群（集落跡）がそれぞれ位置する。また、思川遺跡の西側100mの小谷を挟んだ台地上には二の宮貝塚が存在している。これらの遺跡は昭和63年度に一般県道新川-江戸崎線建設に伴い発掘調査が実施されたもので、いずれも本遺跡の立地する台地と同一の台地南端側にあって、舌状に突出する台地先端部分の調査である。したがって、本来はこれらの遺跡は全て同一の遺跡若しくは関連した遺跡と考えるべきものであろう。

二の宮貝塚では古墳時代後期の住居跡5軒、平安時代後期の住居跡が3軒検出されている。又、大日山古墳群では弥生時代後期の住居跡8軒、古墳時代中期から後期の住居跡が8軒検出されている。さらに、思川遺跡では弥生時代後期3軒、古墳時代後期14軒、平安時代36軒が検出されている。

一方で、本遺跡では弥生時代は僅かに1軒であるが、古墳時代後期から平安時代にわたる住居跡が検出されており、前述の3遺跡に於ける遺構の所属時期と、やはり外観的に一致している。

第2節 住居跡

第1項 遺構の概略

検出された住居跡は121軒である。「く」の字形に広がる台地の北側から南西側の屈曲部にかけてと、南東側の斜面部分から遺構が検出されている。南側の平坦部分は、大きく遺構の空白域が広がっているが、この部分は後世の削平によって遺構が消滅したものと考えられる。

検出された121軒の住居跡の内、時期が決定できたものは弥生時代後期1軒、古墳時代後半38軒、奈良・平安時代38軒であった。尚、各住居跡の概略については表2～5にまとめた。

弥生時代

後期の住居跡はS I - 51の1軒のみで、西側調査区域の台地中央部分に於いて検出されている。長方形プランと考えられ、4本の柱と中央南寄りには地床炉が確認されている。

古墳時代

6世紀代と判断された住居跡は16軒を数える。南東区で唯一検出されたS I - 24を除いて、北及び南西側の平坦部に分布する傾向が見られ、更に、台地でも西側斜面寄りに偏在する傾向が顕著である。住居跡の形状では、大形で方形のものが主体で、北若しくは北西側壁の中央部分にカマドを有するものが多い。カマドの設置位置が特異なものでは、S I - 33で南西壁、S I - 71で北東、S I - 26で西側となる。柱穴は概ね4

本が主体であるが、S I-102では6本を基調とする配列が確認されている。

7世紀代の住居跡では22軒が確認されている。6世紀代に西側斜面に偏在する傾向を示したものが、徐々に全体へ分散する傾向となる。また、それまでの大形住居跡S I-33・54・92・107に加え、規模的にもやや小型のS I-26・61・74・112が見られる。形状的には北西方向の壁中央部分にカマドを設置するものが多く、S I-33で1軒のみ南東側のコーナー寄りに設置されるが、遺構は偶然にも火災に連っている。

8世紀代では23軒の住居跡が確認されている。集落の中心はそれまでに集中が見られた南西側区域に於て明らかな減少傾向が見られ、新たに北側区域と南東側斜面部分に集中する傾向が出てくる。規模的には7世紀代の住居跡よりも、更に小型化が進む傾向が見られる。カマドの設置される方向は概北側であるが、S I-6・49で西側、S I-68・108で北東から東側となっている。柱穴はS I-11・21・49・73等の、比較的大形の住居では4本を主体としているが、小形のS I-29・30・68・70・108・119等では、明瞭な柱穴が確認できていないものも多い。

9世紀代では屈曲部の南西側区域では住居跡は確認されず、北側区域の南東斜面7軒、南東側端部斜面部に3軒と2地区に分散し、8世紀に23軒見られた集落は9世紀に至って10軒と減少している。形状では、小型の住居跡が多く、柱穴を4本有するS I-84・85・93・132と明瞭な柱穴を持たないその他に分けられる。カマドは北西側と北東側の双方が見られる。

10世紀代では5軒の住居跡が確認されている。北側区域1軒、屈曲部で1軒、南東側斜面部2軒が検出されている。いずれも単独に存在し規模は小さい。カマドは北東側に付されるものが多く、柱穴はS I-72で5本確認されているが、その他は検出されていない。

中世

S I-46・76の2軒が検出されている。S I-46の形状は南西側に緩やかなスロープを有するもので、カマドは持たない。中央部分に2本の小規模な柱穴が配される。また、南側コーナー部分には僅かに灰と焼土の分布が見られる。S I-76も同様の状況である。いずれからも遺物の検出はなかった。

櫻村宣行は「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団 1993の中で同様の遺構についての分類を行っている。これによれば、本遺跡の2遺構についてはB₁類に含まれるものである。同遺跡では中世の遺構であることが確認されており、本遺構も中世の所産と考えた。

第2項 住居跡出土遺物の概略

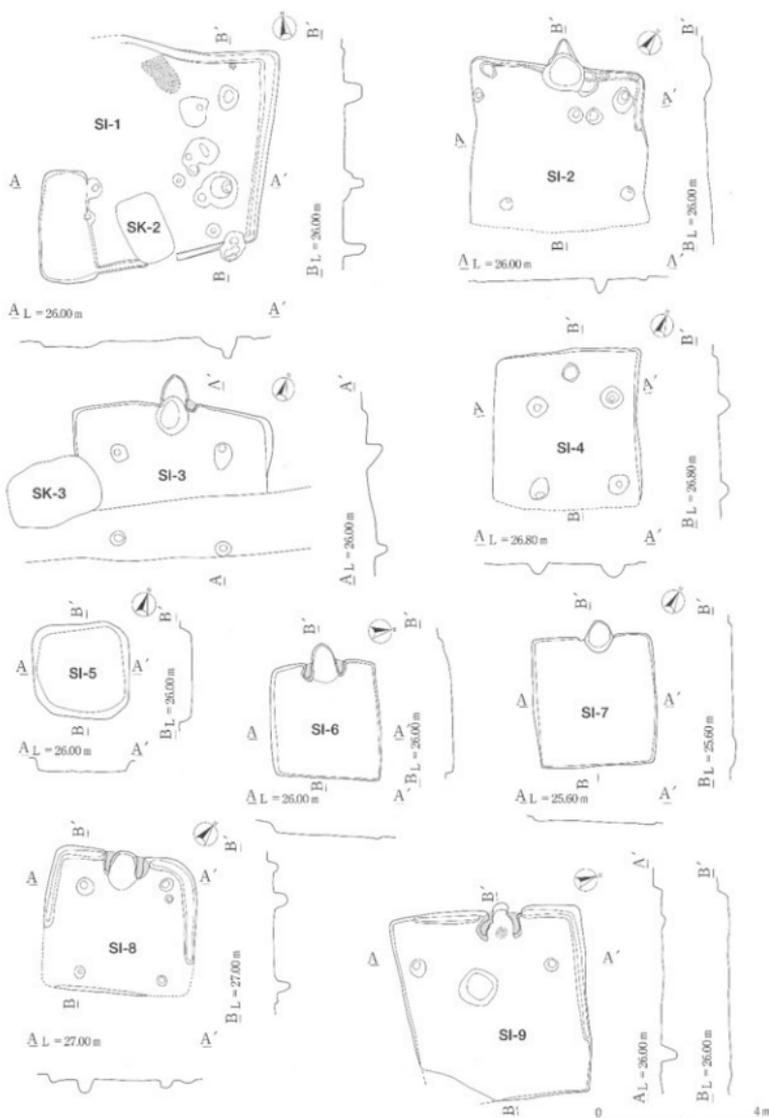
本遺跡の住居跡から出土した遺物は、大形の整理箱で凡そ70箱を数える。遺物は各住居跡毎に水洗い・注記・接合を行い、遺構の所属時期を明確にした後、良好なセット関係と時期判定が下せる住居跡について選別し掲載した。その他の遺物を含め出土遺物については「V まとめ」に略図を掲載した。

弥生時代 S I-51の1軒のみの検出であった。

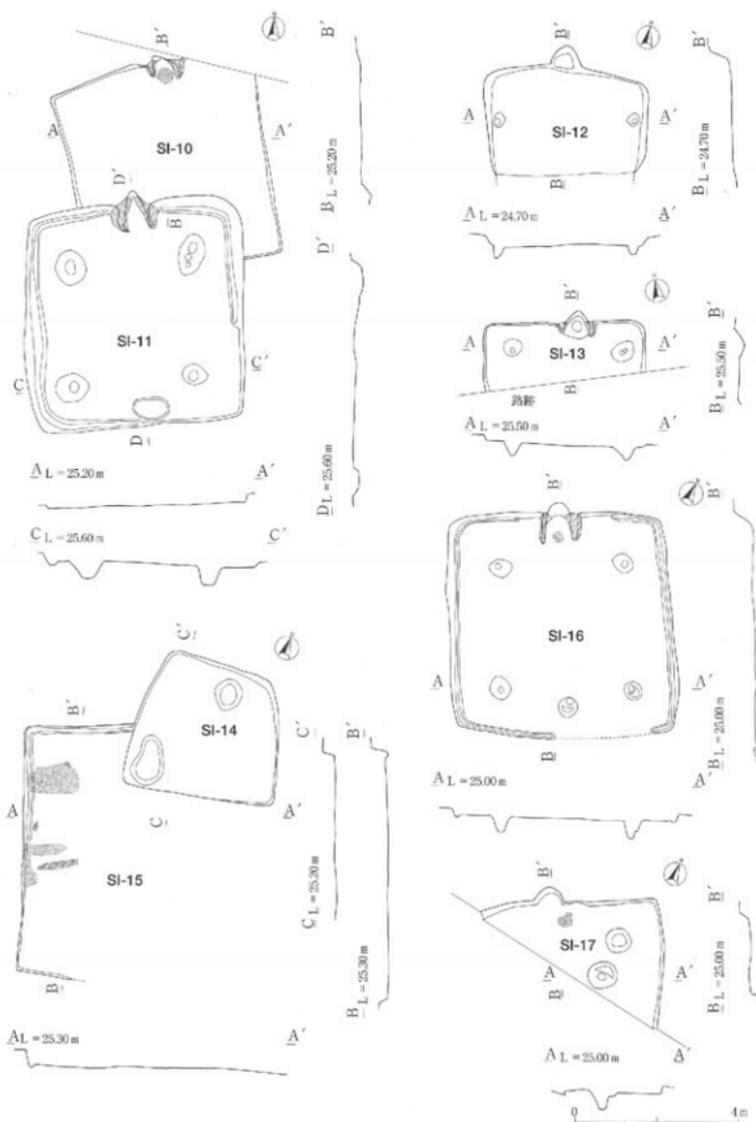
甕形土器7点について掲載している。口縁部は平縁で折り返し1縁。折り返し部の端部には刻みが施される。また、口唇部、口縁の折り返し部、頸部を除く胴部には付加条第1種の縄文が施文され、底部には木葉痕が多い。これらの特徴から上桶古式土器と考えられるが、該期の特徴とされる瘤の貼り付け、口縁部の縦方向の縄文施文による羽状構成等は見られない。

古墳時代

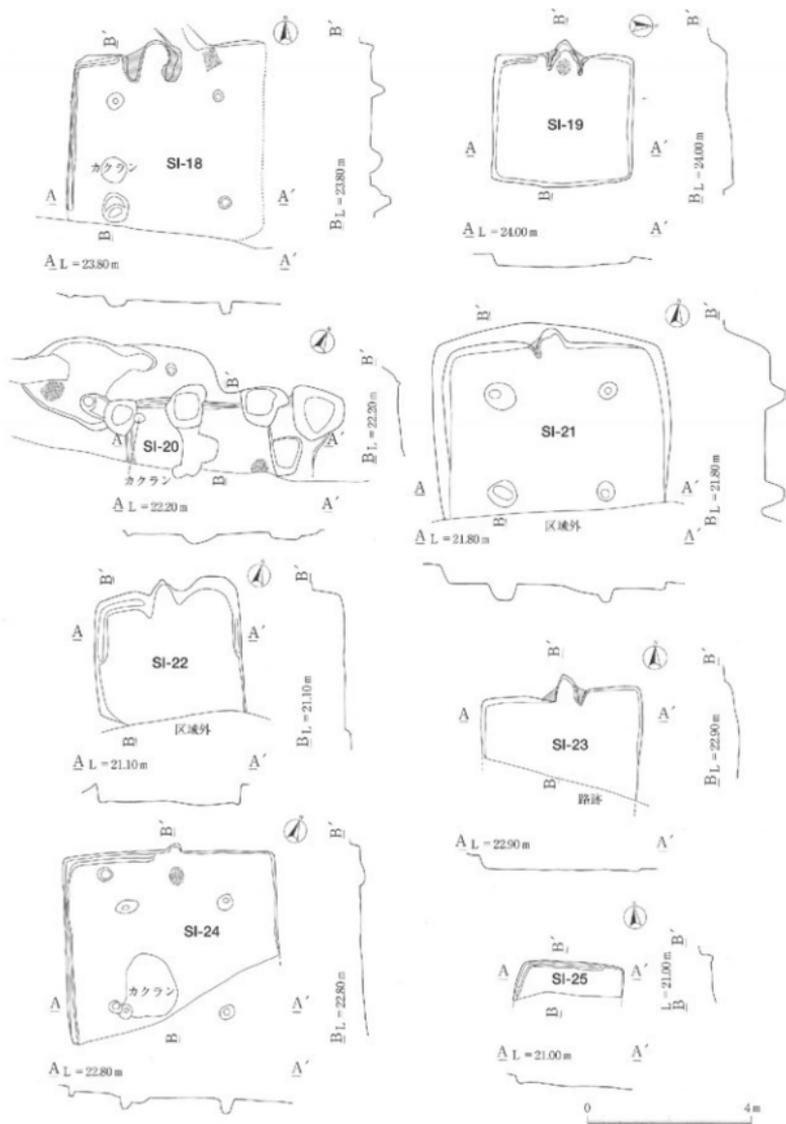
古墳時代の遺物では前期・中期の資料は検出されていない。



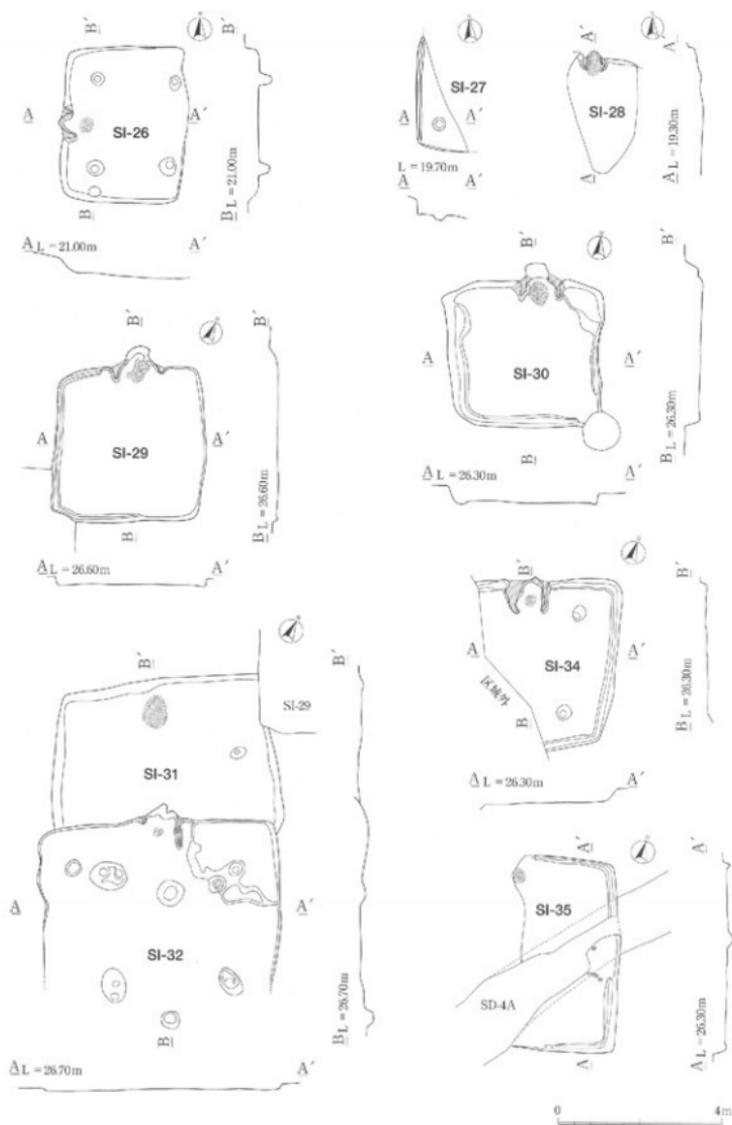
第6図 SI-1~9



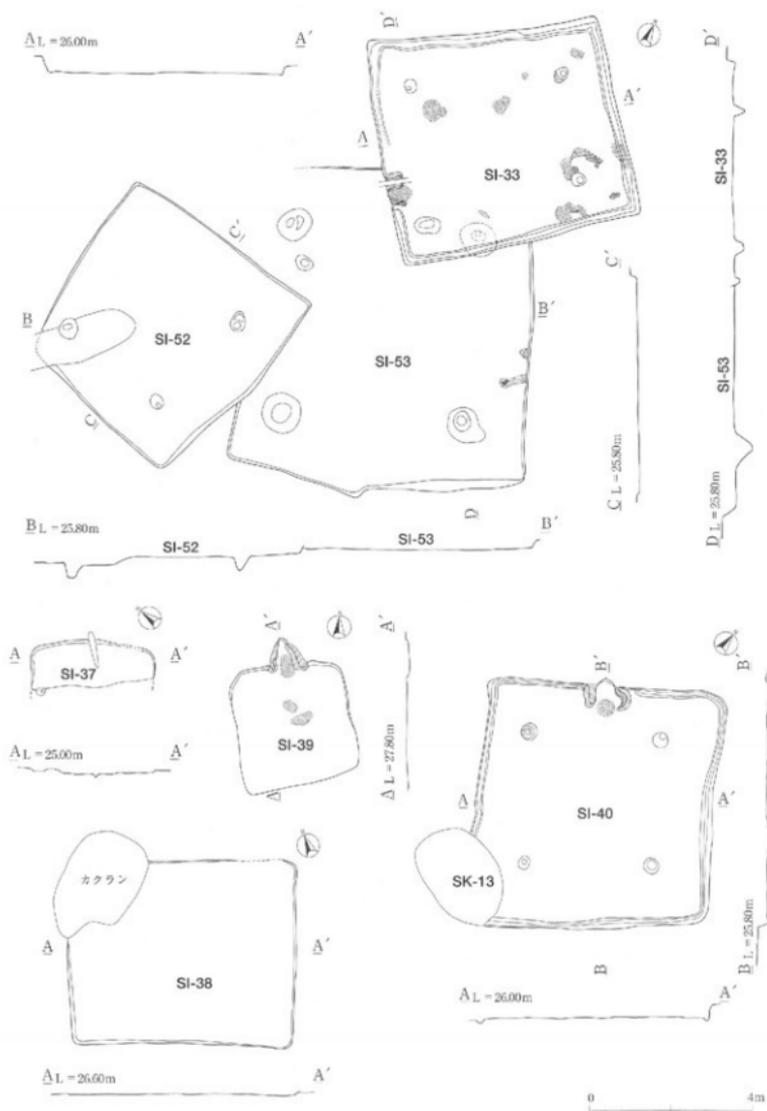
第7図 SI-10~17



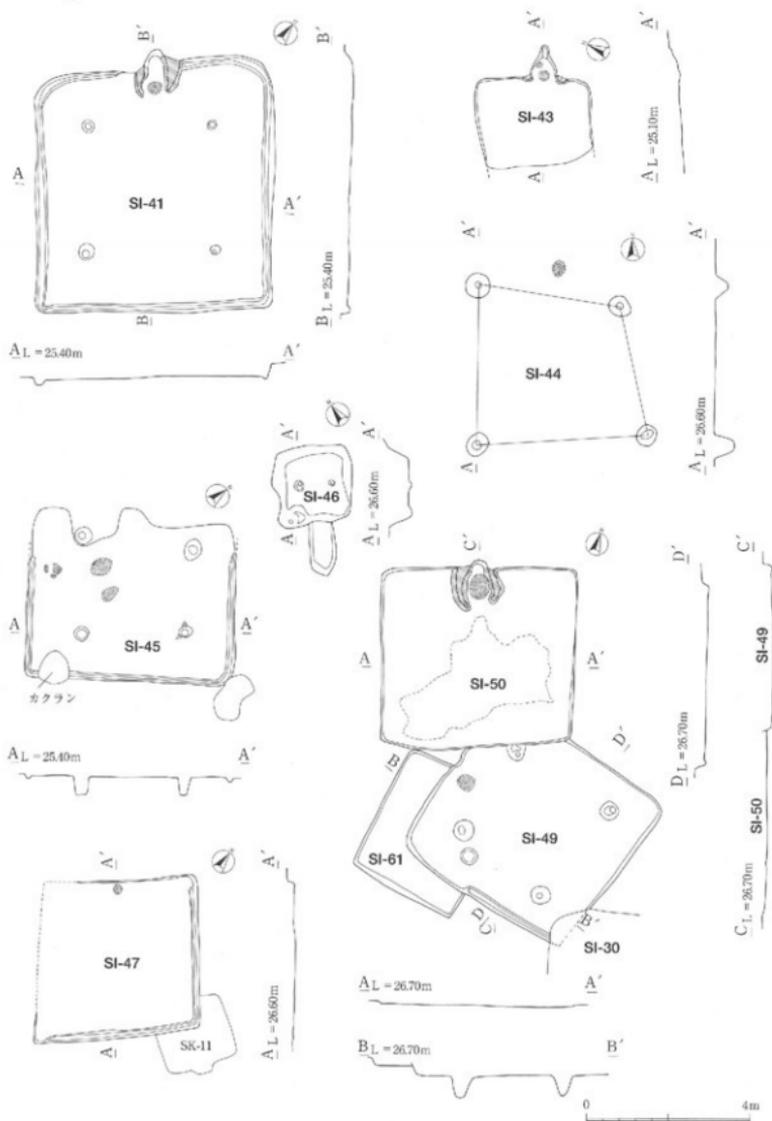
第8図 SI-18-25



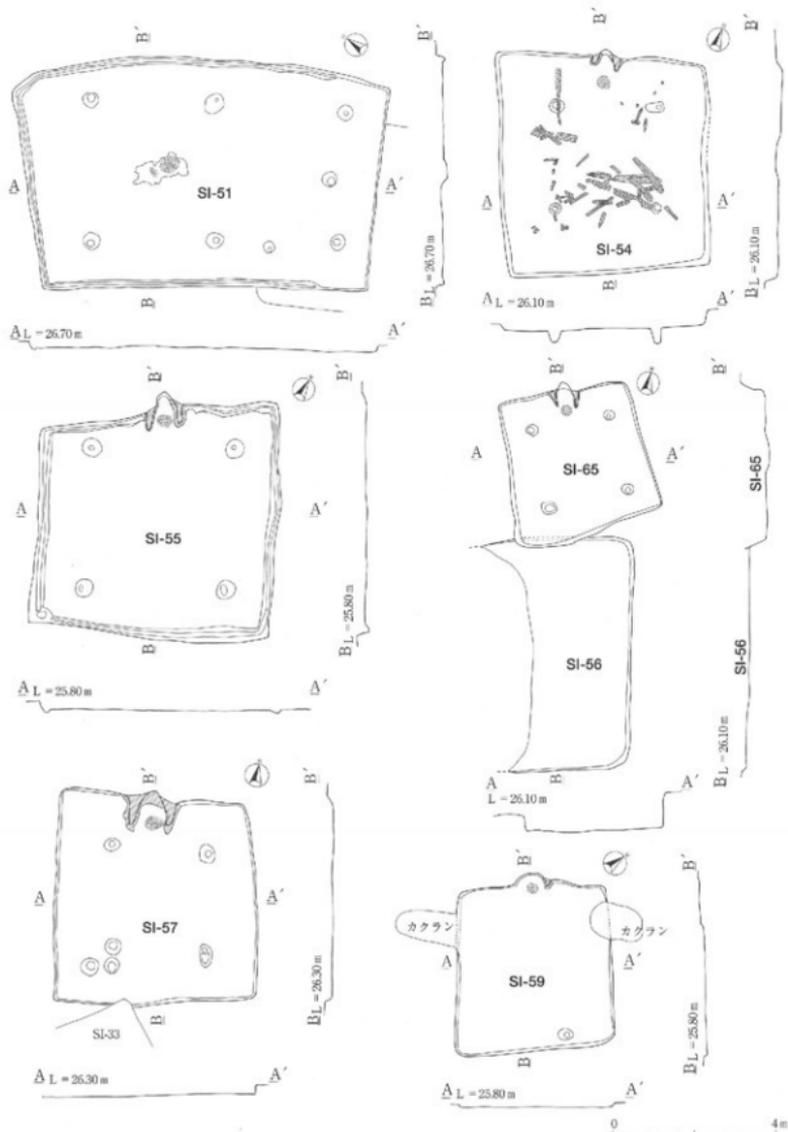
第9圖 S I - 26 ~ 32 · 34 · 35



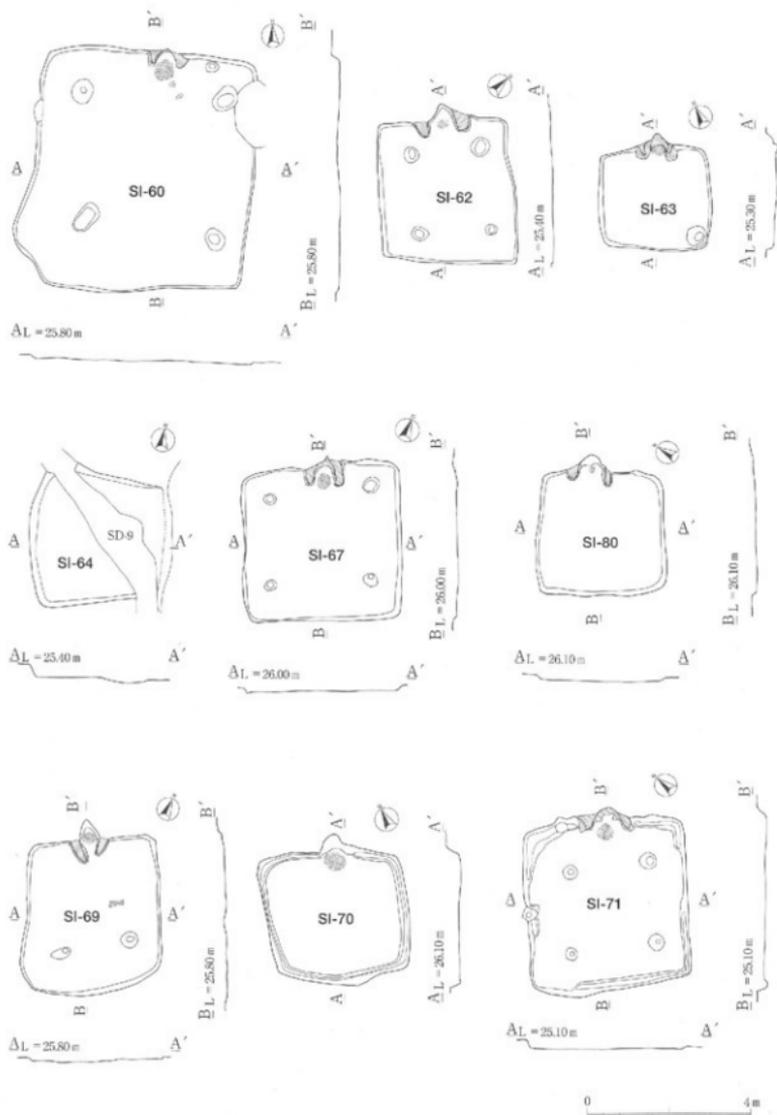
第10図 S I - 33 · 37 ~ 40 · 52 · 53



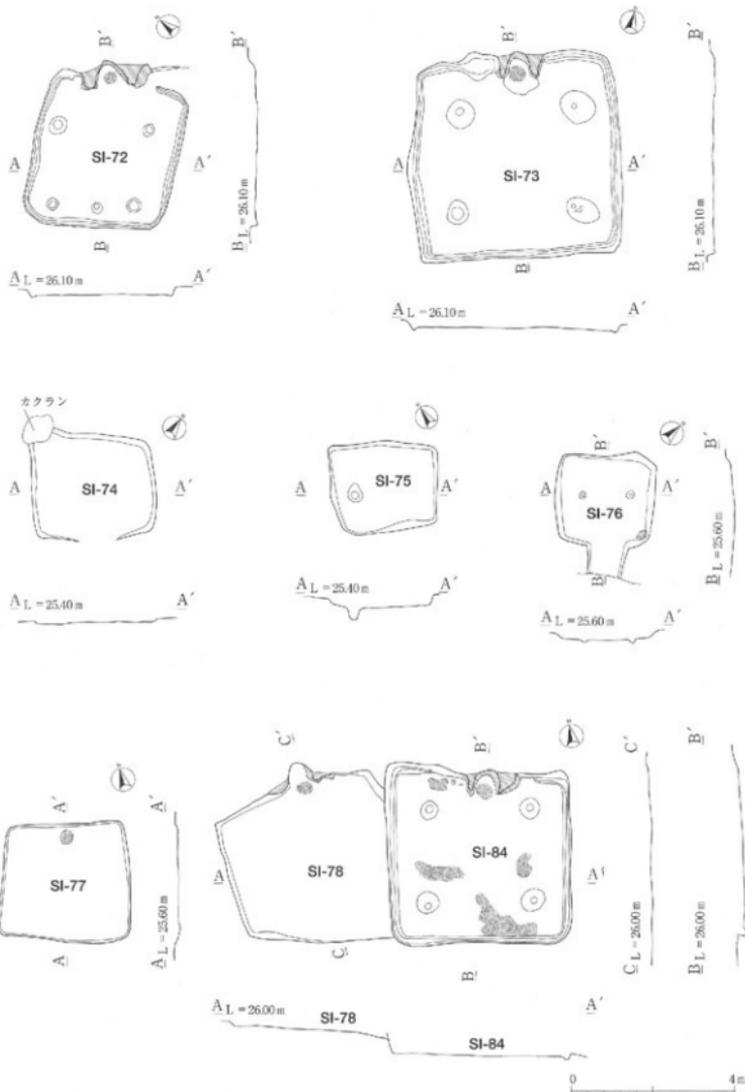
第11圖 S I - 41・43~47・49・50・61



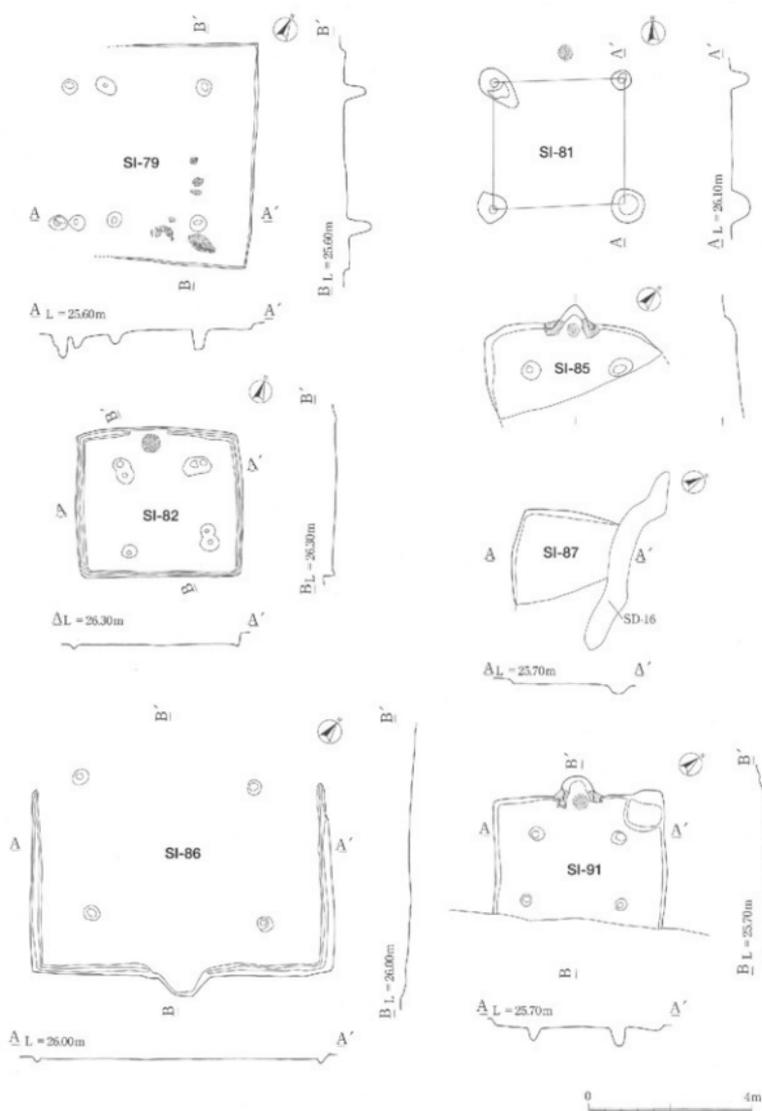
第12図 S I - 51・54~57・59・65



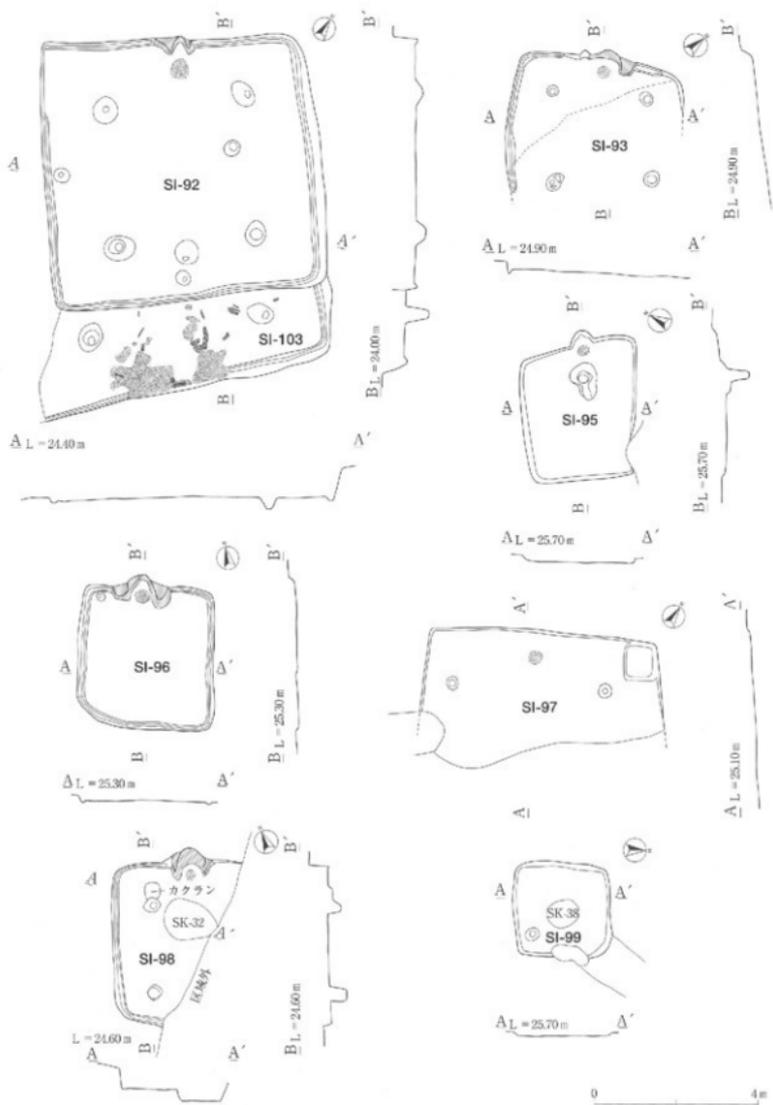
第13圖 S I - 60・62~64・67~71



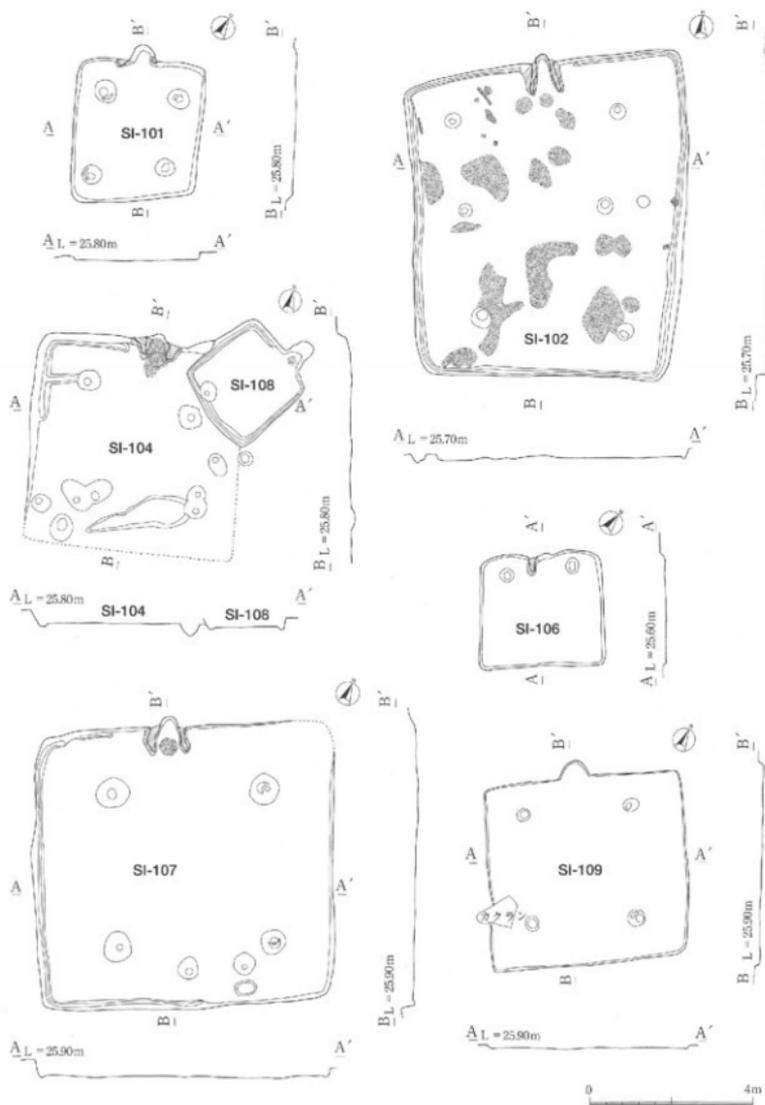
第14図 S I - 72 ~ 78 · 84



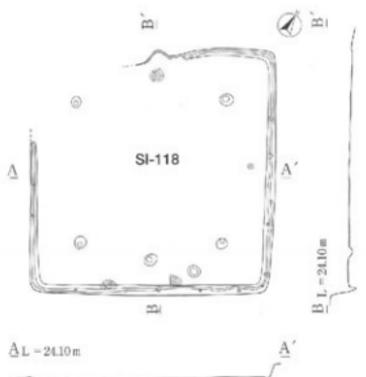
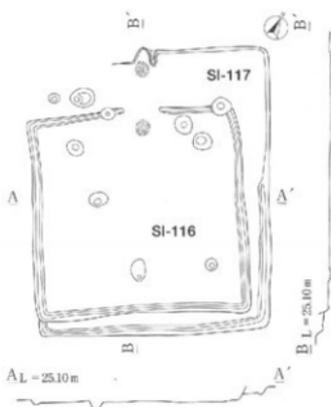
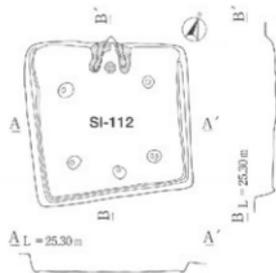
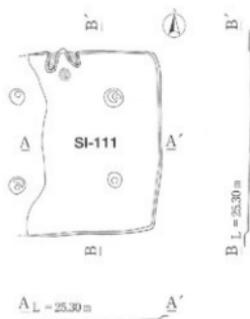
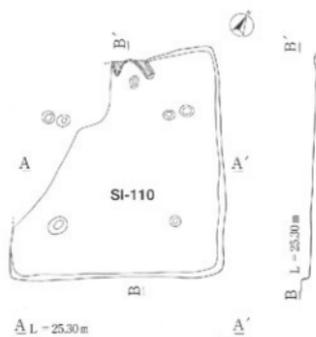
第15圖 S I - 79 · 81 · 82 · 85 ~ 87 · 91 · S D - 16



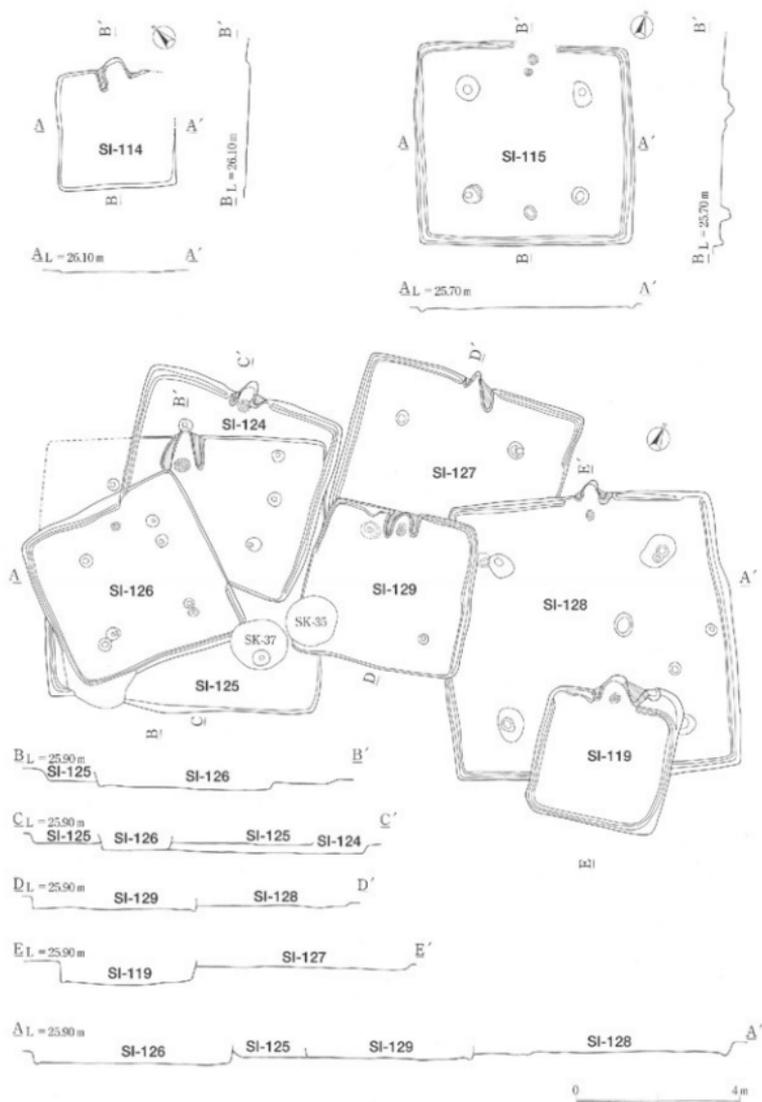
第16図 S I - 92・93・95~99・103



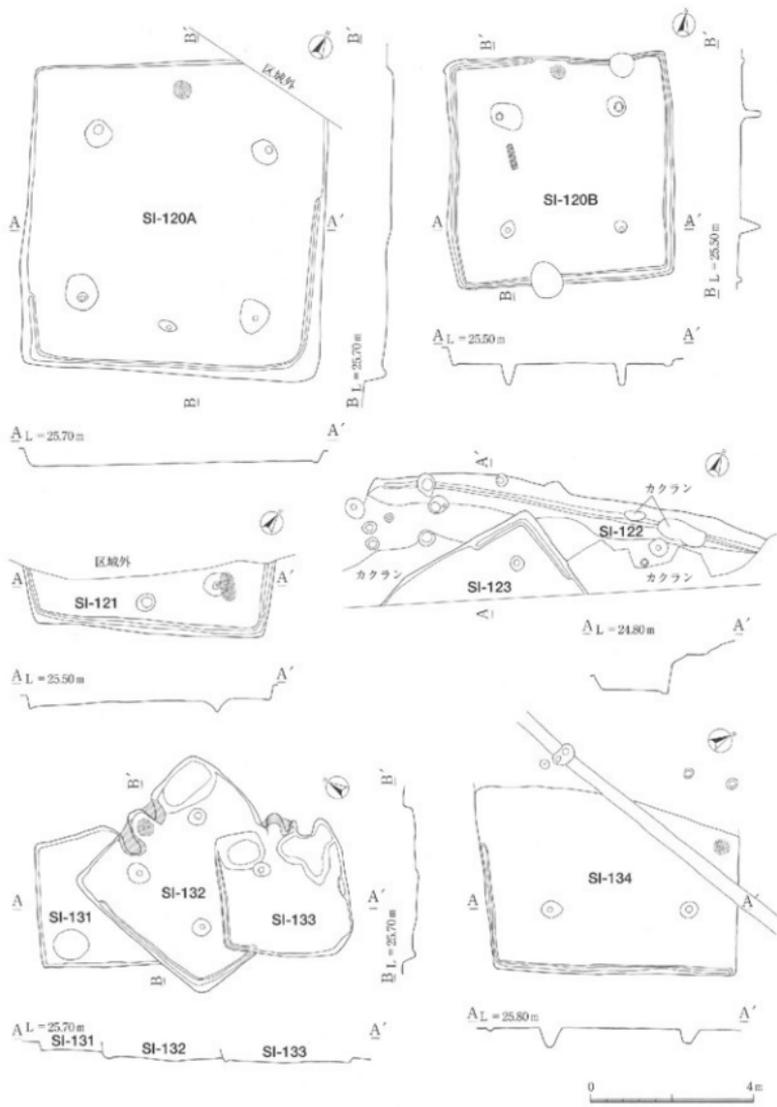
第17圖 S I - 101 · 102 · 104 · 106 ~ 109



第18圖 S I - 110 ~ 113 · 116 ~ 118



第19圖 S I - 114 · 115 · 119 · 124 ~ 129



第20図 SI-120A・B・121~123・131~134

表2 住居跡一覧表(1)

SI	グリッド	主軸方位	平面形	規模(m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	備考
1	E-24	-	不整形	5.05×(4.30)	8	一部	
2	J-26	N-33°-W	方形	4.30×4.12	6	一部	
3	K-26	N-16°-W	方形?	4.85×(3.50)	4	無	
4	L-25	-	方形	3.80×3.54	5	無	
5	L-23	-	方形	2.34×2.35		無	
6	N-22	N-83°-W	方形	2.97×2.70		無	
7	N-23	N-28°-W	方形	3.23×3.05		無	
8	M-23	N-27°-W	方形	3.55×3.21	5	半周	
9	N-24	N-74°-W	方形	4.67×4.63	3	半周	
10	N-24	N-24°-W	方形	4.85×(5.00)		無	SI-11と重複
11	N-24	N-14°-W	方形	5.50×5.30	5	半周	SI-10と重複
12	N-25	N-13°-W	方形?	3.95×(2.68)	2	無	
13	O-23	N-8°-E	方形?	4.00×(1.67)	2	無	
14	P-23	-	不整形	3.50×3.42	1	無	SI-15と重複
15	P-23	-	方形?	6.23×(6.20)		一部	SI-14と重複
16	P-24	N-28°-W	方形	5.57×5.45	5	全周	
17	Q-24	N-30°-W	方形?	(4.30)×(3.10)	2	無	SI-18と重複
18	Q-24	N-13°-E	方形?	4.85×4.80	4	一部	SI-17・19と重複
19	Q-24	N-83°-W	方形	3.43×3.20		一部	SI-18と重複
20	Q-25	-	方形?	3.57×(1.72)		一部	SX-2と重複
21	R-25	N-13°-W	方形?	5.77×(4.72)	4	無	
22	S-25	N-19°-W	方形?	3.60×(3.33)		半周	
23	R-24	N-7°-W	方形?	3.97×(2.75)		無	
24	R-22	N-22°-W	方形?	5.69×(4.60)	6	半周	
25	S-23	-	方形?	2.60×(1.00)		一部	
26	S-24	N-88°-W	方形	3.80×3.08	4	無	
27	T-24	-	方形	(2.68)×(1.20)	1	一部	
28	T-22	N-00°-W		(2.72)×(1.82)		無	
29	G-22	N-25°-W	方形	3.83×3.70		半周	SI-31と重複
30	H-22	N-10°-W	方形	3.70×3.60		半周	
31	G-22	N-32°-W	方形?	5.57×(3.56)		無	SI-29・32と重複
32	G-23	N-30°-W	方形?	5.80×(5.10)	6	無	SI-31と重複
33	E-21	W-15°-S	方形	6.00×5.28	4	全周	SI-53と重複、カマド南西コーナー古り
34	C-24	N-15°-W	方形?	4.15×(3.30)	2	半周	

表3 住居跡一覧表(2)

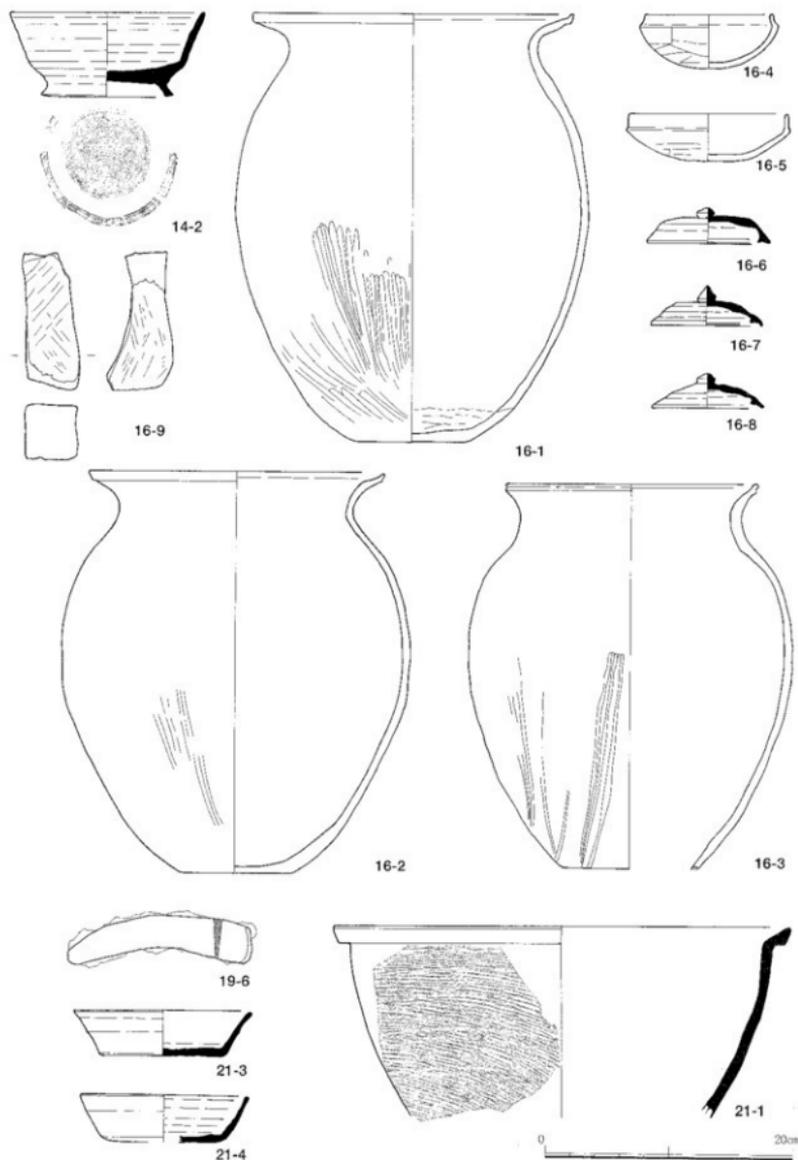
SI	グリッド	主軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	備 考
35	C-24	-	方形?	4.76×(2.72)		半周	SD-4と重複
36	欠番						
37	D-25	-	方形?	3.03×(1.04)	1	無	
38	G-20	-	方形	5.60×4.51		無	壁穴状遺構
39	F-23	N-12°-W	方形	3.80×3.52		無	
40	E-23	N-36°-W	方形	6.18×5.81	4	全周	
41	D-22	N-41°-W	方形	6.23×5.87	4	全周	
42	欠番						
43	C-22	N-72°-E	方形?	2.82×(2.23)		無	
44	F-20	-	-	4.72×2.70	4	無	柱穴のみ検出
45	F-19	-	方形?	5.12×4.28	2	半周	
46	F-24	-	方形	3.24×1.98	2	無	入口施設あり
47	D-24	-	方形	4.28×3.90		半周	
48	欠番						
49	G-21	-	方形	6.05×7.02	5	一部	
50	G-21	N-25°-W	方形	4.77×4.50		無	
51	G-21	-	長方形	8.93×5.62	8	一部欠	炉あり、SI-50と重複
52	E-22	-	不正方形	5.50×5.32	4	無	SI-53と重複
53	E-22	-	方形?	8.01×(6.25)	5	無	SI-33、52と重複
54	E-20	N-25°-W	方形	5.55×5.08	4	無	炭化材多数
55	H-16	N-32°-W	方形	5.08×5.96	4	全周	
56	C-23	-	方形?	5.76×(3.70)			SI-65と重複
57	E-21	N-6°-W	方形	5.05×4.92	6	無	
58	欠番						
59	H-18	N-63°-W	方形	4.18×3.91		無	
60	I-17	N-6°-E	方形	6.03×5.37	5	無	
61	G-21	-	方形?	3.35×2.80		無	SI-49と重複
62	I-16	N-48°-W	方形	3.36×3.35	4	無	
63	I-19	N-22°-E	方形	2.75×2.58	1	無	
64	I-20	-	不整形方形	3.50×3.18		無	
65	C-22	N-11°-W	方形	3.65×3.63	4	無	SI-56と重複
66	欠番						
67	K-14	N-22°-W	方形	3.95×3.33	4	無	
68	K-15	N-65°-E	方形	3.35×3.00		無	

表4 住居跡一覧表(3)

SI	グリッド	主軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	備 考
69	K-15	N-29°-W	方 形	3.78×3.28	2	無	
70	L-14	N-28°-E	方 形	3.45×3.20		全周	
71	J-16	N-46°-E	方 形	4.05×3.92	5	半周	
72	L-14	N-57°-W	方 形	3.80×3.60	5	全周	
73	L-13	N-15°-W	方 形	5.23×4.79	4	全周	
74	L-16		不整形	3.03×2.62		無	
75	I-15		方 形	2.60×2.68	1	無	堅穴状遺構
76	I-15		方 形	2.47×(2.92)	2	無	入口施設あり
77	I-16		方 形	3.13×2.93		無	
78	M-14	N-7°-W	不整形	4.18×(4.10)		無	SI-84と重複
79	D-21		方形?	5.50×(5.00)	7	無	
80	欠番						
81	F-24			(4.47)×(4.10)	4	無	柱穴のみ検出
82	F-23		方 形	4.10×3.70	4	全周	
83	欠番						
84	N-14	N-11°-E	方 形	4.48×4.46	4	全周	SI-78と重複
85	N-14	N-43°-W	方形?	4.30×(2.30)	2	無	
86	L-12		方形?	7.30×(5.50)	4	半周	
87	H-16		方形?	2.35×2.30		無	
88	欠番						
89	欠番						
90	欠番						
91	N-12	N-49°-W	方形?	4.16×(3.07)			
92	B-22	N-33°-W	方 形	6.86×6.17	8	全周	SI-103と重複
93	N-13	N-47°-W	方形?	4.22×(3.45)	4	半周	カマド2つあり
94	欠番						
95	J-15	N-63°-E	不整形	3.52×2.88	1?	無	
96	M-15	N-15°-E	方 形	3.52×3.33		全周	
97	Q-11	-	方形?	5.85×(3.48)	3	無	
98	P-12	N-24°-E	方形?	4.10×(3.12)	2	半周	
99	H-16	N-00°-W	方 形	2.40×2.35	1	無	
100	欠番						
101	J-13	N-25°-W	方 形	3.57×3.10	4	無	
102	J-13	N-13°-W	長方形	7.96×6.95	6	全周	

表5 住居跡一覧表(4)

S1	グリッド	土軸方位	平面形	規模(㎡) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	備考
103	C-22	-	方形?	(7.25)×(2.35)	2	一部	SI-92と重複
104	N-11	N-00°-W	方形?	5.30×5.10	9	一部	SI-108と重複、仕切り溝あり
105	欠番						
106	II-15	N-43°-W	方形	3.02×2.88	3	無	
107	O-10	N-17°-W	方形	7.30×6.98	7	半周	SI-134と重複
108	O-11	N-29°-E	方形	2.37×2.35		全周	SI-104と重複
109	G-15	N-28°-W	方形	4.64×4.37	4	無	
110	G-14	N-32°-W	方形?	5.27×5.11	6	無	
111	G-15	N-02°-W	方形?	4.60×(3.47)	4	無	
112	H-13	N-19°-W	方形	4.03×3.88	5	一部欠	
113	P-12	N-00°-W	方形	4.25×3.75		無	
114	L-12	N-50°-E	方形	2.92×2.90		無	
115	G-15	-	方形	5.20×5.05	5	全周	
116	I'-15	N-29°-W	方形	7.00×5.69	4	半周	SI-117と重複
117	F-15	-	方形	5.20×5.00	6	全周	SI-116と重複
118	E-14	N-38°-W	方形	6.10×5.90	7	一部欠	
119	N-11	N-13°-W	方形	3.35×3.12		全周	SI-128と重複
120A	M-10	-	方形	7.43×7.40	5	半周	SI-120Bと重複
120B	M-10	-	方形	5.60×5.50	4	全周	SI-120Aと重複
121	D-20	-	方形?	6.07×(1.89)	2	半周	SI-123と重複
122	K-16	-	-	(9.80)×(2.50)			SI-122と重複
123	K-16	-	方形?	(4.30)×(2.60)	1	一部	
124	M-11	N-4°-W	方形	5.00×4.72	4	半周	SI-125・126と重複
125	M-11	N-25°-W	方形	6.84×6.75	2	一部	SI-124・126・129と重複
126	M-11	-	方形	4.48×4.20	6	半周	SI-124・125と重複
127	M-10	N-00°-W	方形?	5.42×(3.90)	4	半周	SI-128・129と重複
128	N-10	N-26°-W	方形	7.21×6.98	8	全周	SI-119・127・129と重複
129	M-11	N-12°-W	方形	4.15×3.98	1	半周	SI-125・127・128と重複
130	欠番						
131	O-11	-	方形?	3.90×(2.50)		無	SI-132と重複
132	O-11	N-13°-E	方形	4.50×4.42	4	半周	SI-131・133と重複
133	O-11	N-60°-W	方形	3.13×3.00		一部	SI-132と重複
134	N-10	-	方形?	6.12×(5.70)	6	半周	SI-107と重複



第21圖 S I-14・16・19・21出土遺物

6世紀代の遺物を出土した住居跡はS I-24・40・41・50・52・53・79・86・102・103・110・111・116・118・121・127の16軒である。この内S I-40・86・102の3軒及びS I-52-4の甔について図を掲載している。

遺物の組み合わせでは、土師器の甕・甔・坏・鉢・高坏、須恵器の短頸壺・有蓋坏身、土製品では球状土錘・支脚、石製品では磨石・砥石がある。

土師器の甕では初頭の常総甕が見られ、その他の甕ではやや小形化している。甔では牛角状の把手を有するものがS I-40で出土しており、S I-86では把手を持たないタイプが見られる。坏では体部に明瞭な稜を有し、S I-40では口縁がやや直立し、その他の住居出土資料では内傾する。一方、須恵器ではS I-86で短頸壺、S I-102で坏身が出土している。産地は特定できないが、いずれも6世紀代の遺物と判断されるもので、編年基準の好資料となっている。

6世紀代の資料としては、S I-40がやや古い様相で前半、その他は後半の資料であろう。

7世紀代の遺物を出土した住居跡はS I-15・16・26・33・35・47・54・57・61・67・71・74・92・104・107・112・117・120・123・124・125・126の22軒で、この内S I-16・33・54・112の4軒について図を掲載している。

遺物の組み合わせでは、土師器の甕・甔・坏・鉢、須恵器の蓋・坏身・高台付坏、土製品の球状土錘がある。

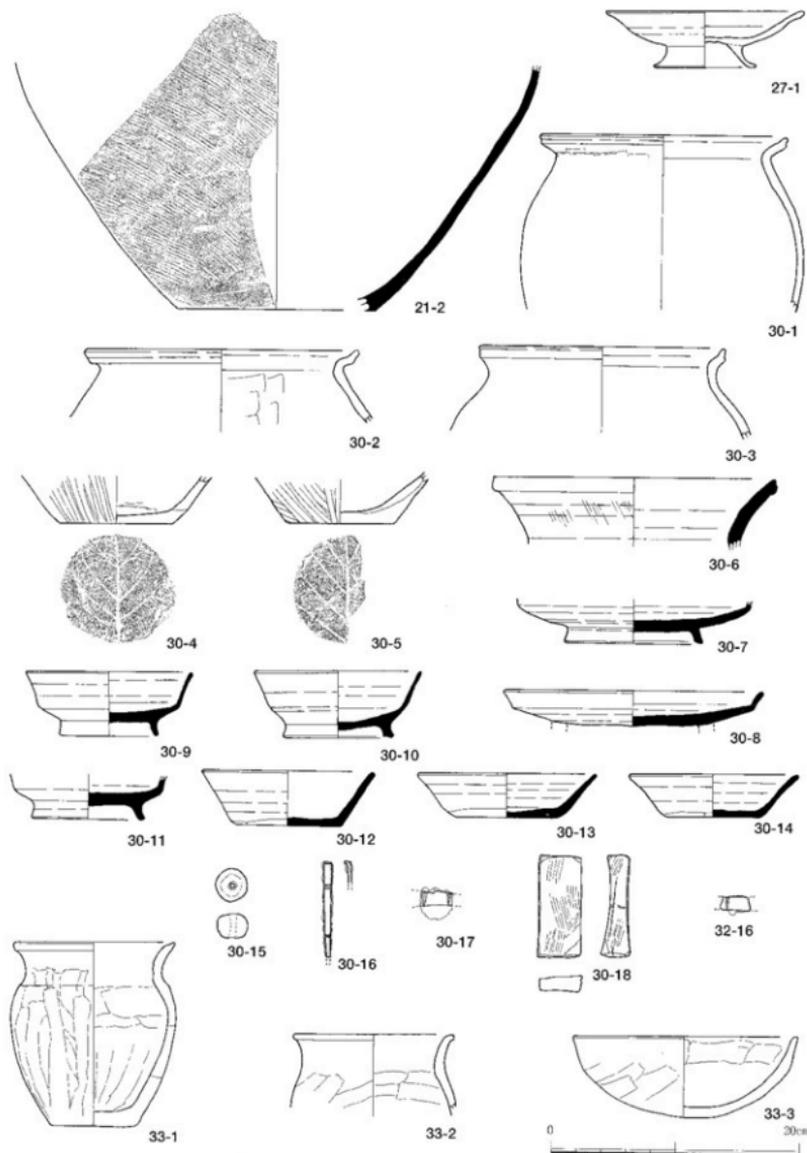
土師器の甕では常総甕が主流を占め、小形の甕・やや長胴を呈する甕がこれに加わる。

甔ではS I-54で把手を持たない単孔のものが1点出土しているが、やや古い7世紀初頭頃のS I-33で牛角状の把手を有する資料が出土している。坏では、体部に稜を有するものが若干残っているものの、稜を持たない丸底の坏が主体になる。鉢では口縁部の直下に稜を有するものが見られる。須恵器ではS I-16の蓋、S I-33の坏身、S I-54の蓋・高台付坏が出土している。いずれも7世紀代の資料として良好な編年基準となりうるもので、S I-33は7世紀初頭の資料であろう。

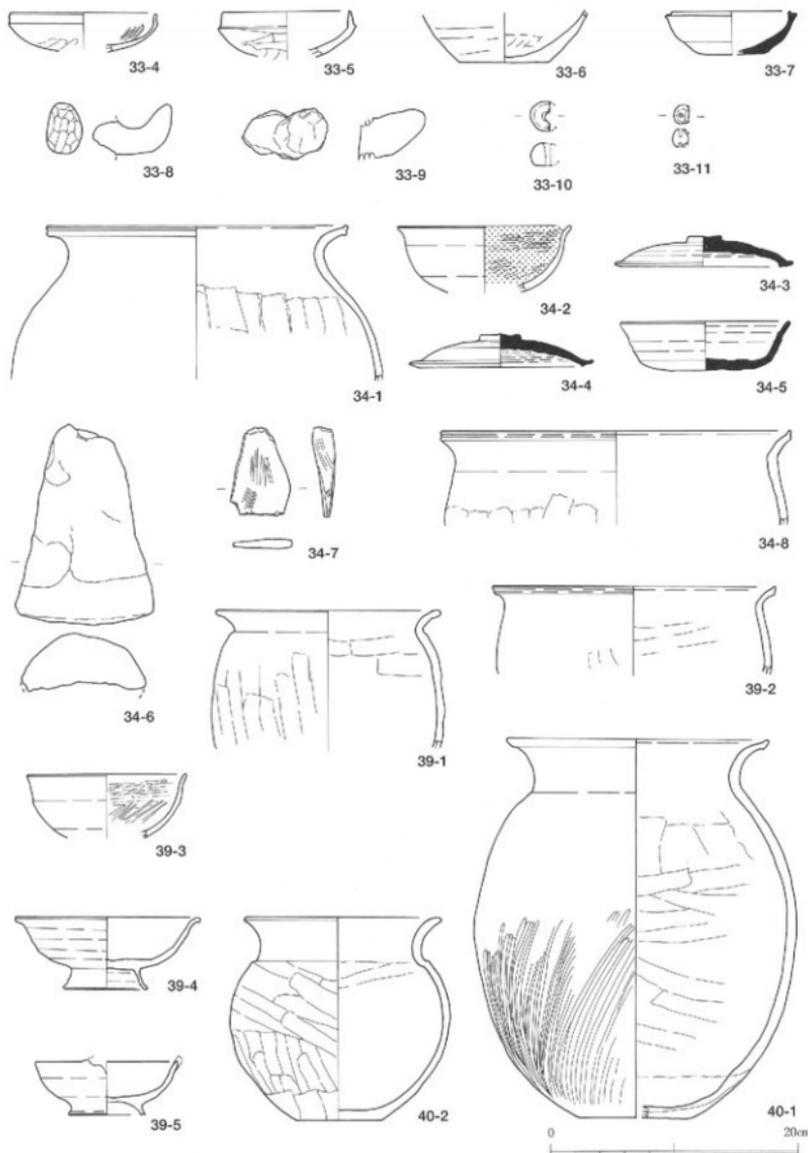
8世紀代の遺物を出土した住居跡はS I-6・8・11・12・17・18・19・21・29・30・34・49・60・64・65・68・69・70・73・77・91・101・108・119の24軒である。この内S I-21・30・34・49・65・70・73・119の8軒について図を掲載している。遺物の組み合わせでは、土師器では甕・甔・坏、須恵器は双耳甔・甕・蓋・坏・高坏・高台付坏・甔、土製品では球状土錘・管状土錘・支脚・手捏土器・簡羽門、鉄製品では釘・刀子・鉢、石製品では砥石がある。

土師器の甕ではそれまでの小形甕が姿を消し、常総型の割合がさらに高くなり、小形の甕は初頭段階のS I-65のみで確認されたにとどまっている。甔は胴部に膨らみを持たないタイプのものがやはりS I-65で出土している。坏もS I-65・73等でまとまって出土しているが、いずれも7世紀代の形状的特徴を残すものである。8世紀代のセットで初頭段階に見られた土師器の坏は後半段階では姿を消して、S I-21・49・119では須恵器の坏のみとなっている。

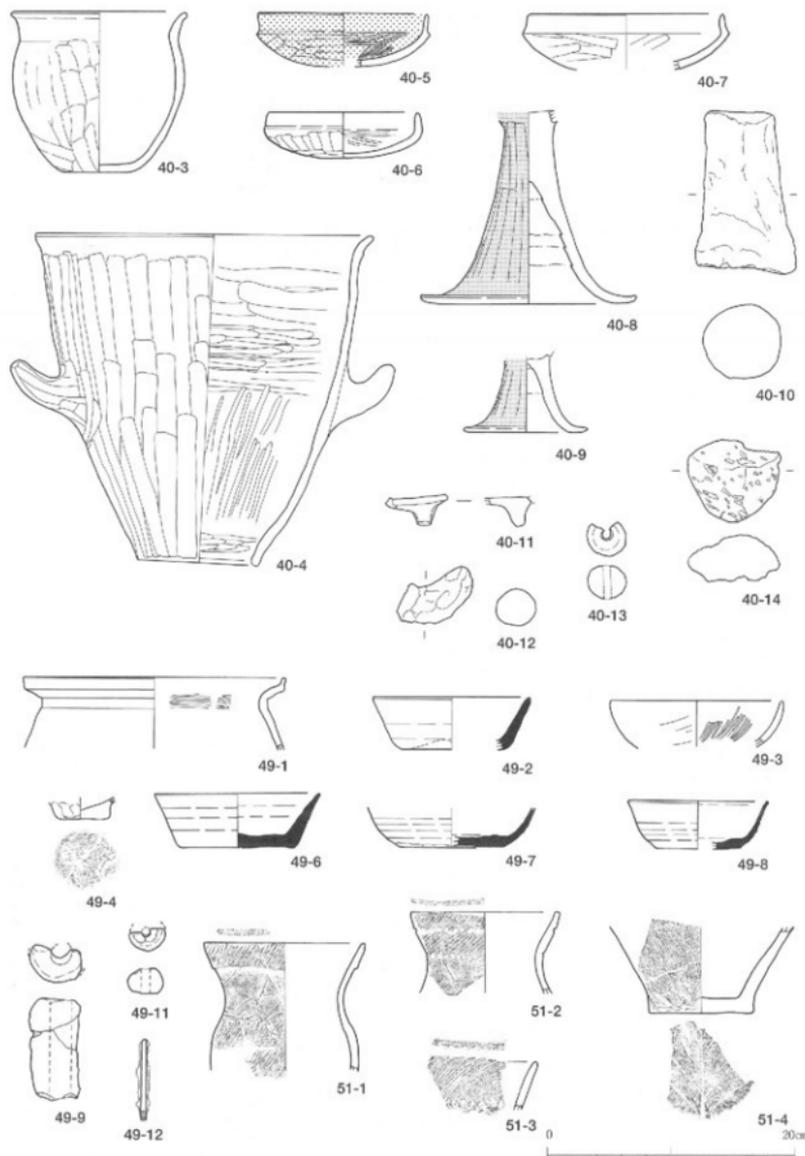
須恵器は本期に入ると量的に爆発的な増加を示している。甕では偏平な楕円に返りを有するものがS I-65・73で出土している。坏は1径と底径の比が2:1未満のもので、底部にやや丸みを持つものが古く、平坦なものが後半段階での資料となっている。高坏では、脚部に1段の透かしを有するものと透かしを持たないものの双方が8世紀中葉頃で見られる。甔も体部が緩やかに内湾するものと、口縁で「く」の字に折れるものの2種類が見られる。特殊な遺物としてはS I-119出土の須恵器の双耳甔がある。双耳甔は県内では美野早野羽鳥字宮前、及び水戸市大塚新地遺跡での報告が知られているもので、資料的には極めて少ない。本資料の形状は美野早野出土の資料に比べ、やや肩の張りが強いようにも思える。また胴上半部の資料の為に胴下半部の状況がつかめないが、おおよそ年代は8世紀中葉頃と考えた。いずれの須恵器資料も本遺跡の編年基準となる良好な資料である。



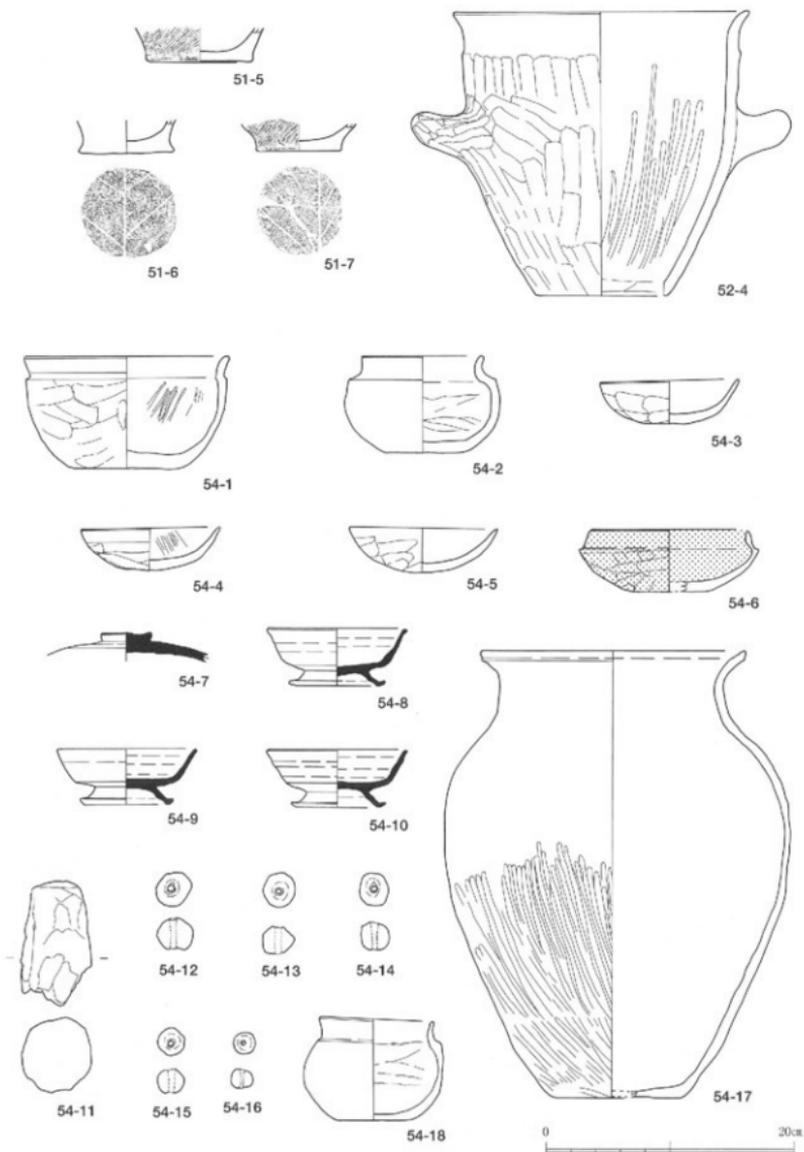
第22圖 S I - 21・27・30・32・33出土遺物



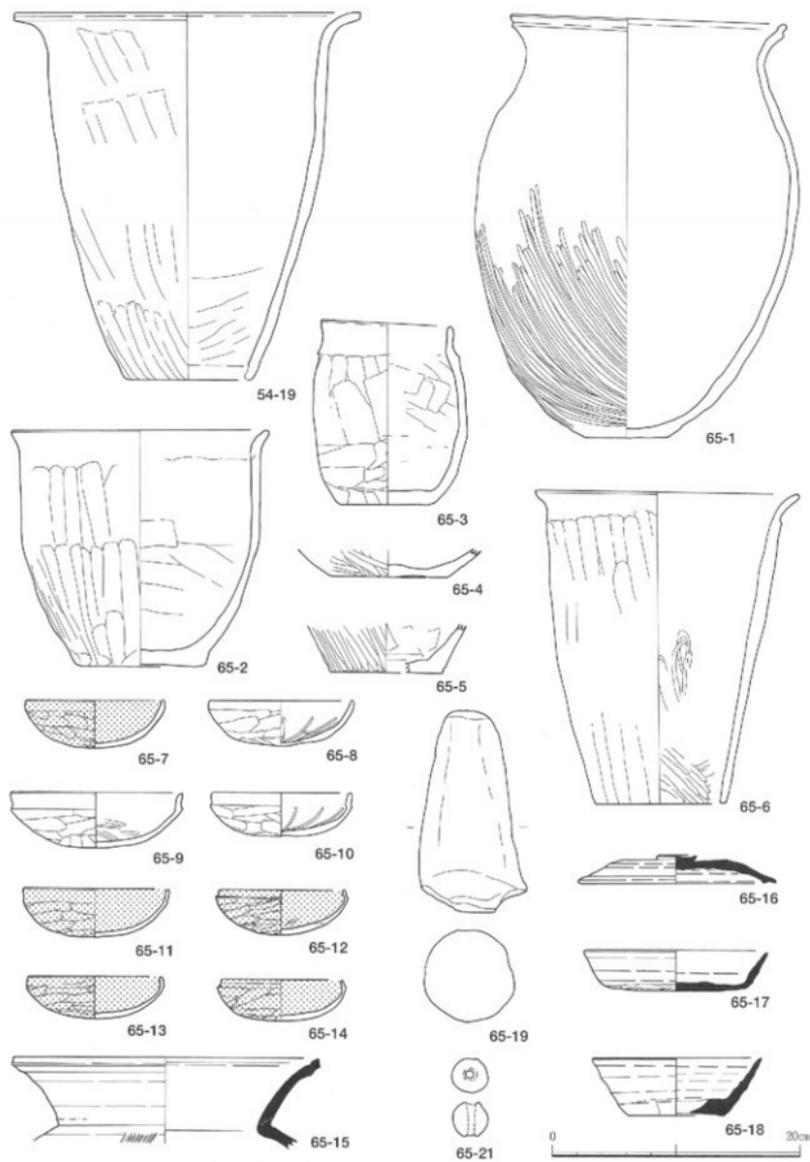
第23図 S I - 33・34・39・40出土遺物



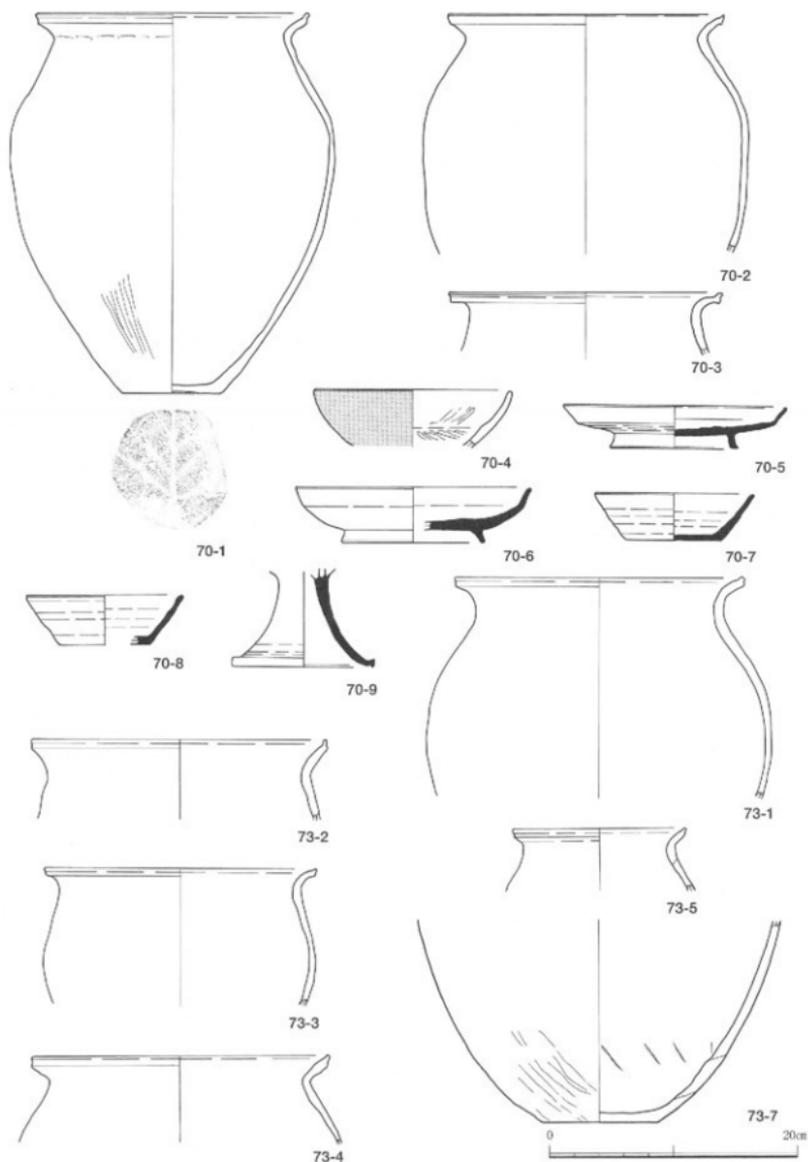
第24圖 S I - 40・49・51出土遺物



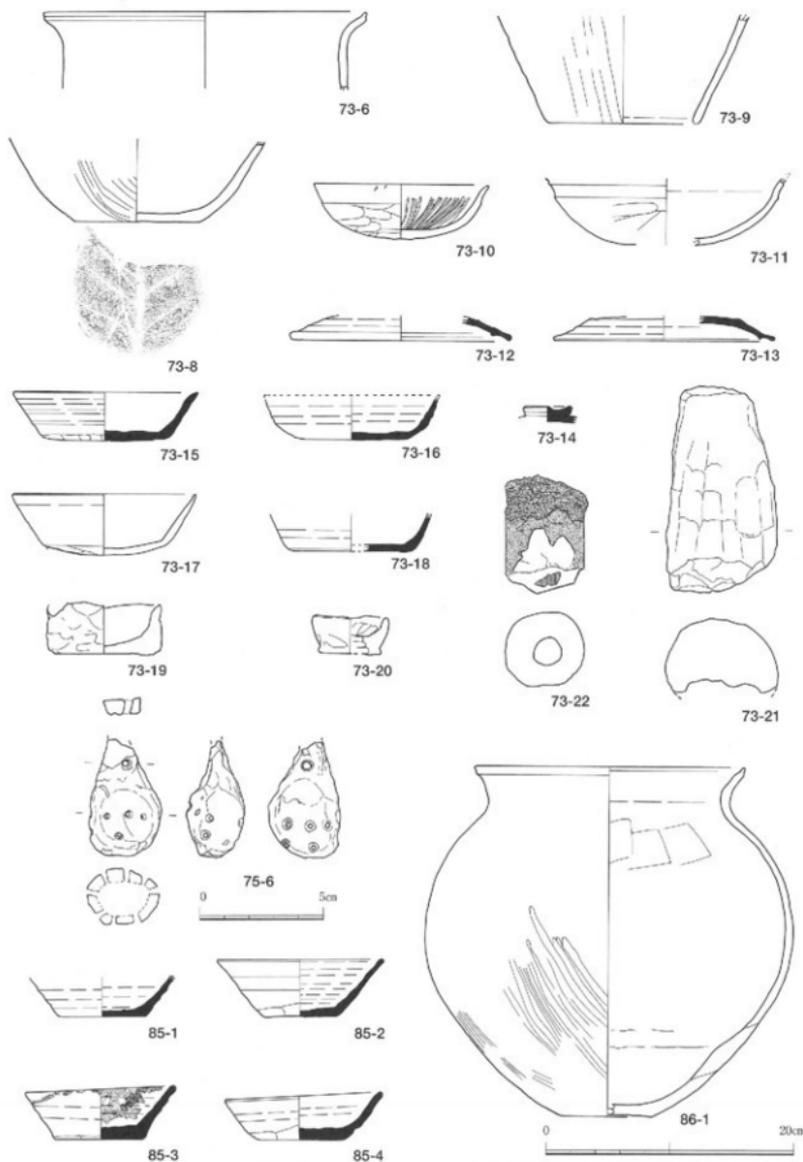
第25図 S I - 51・52・54出土遺物



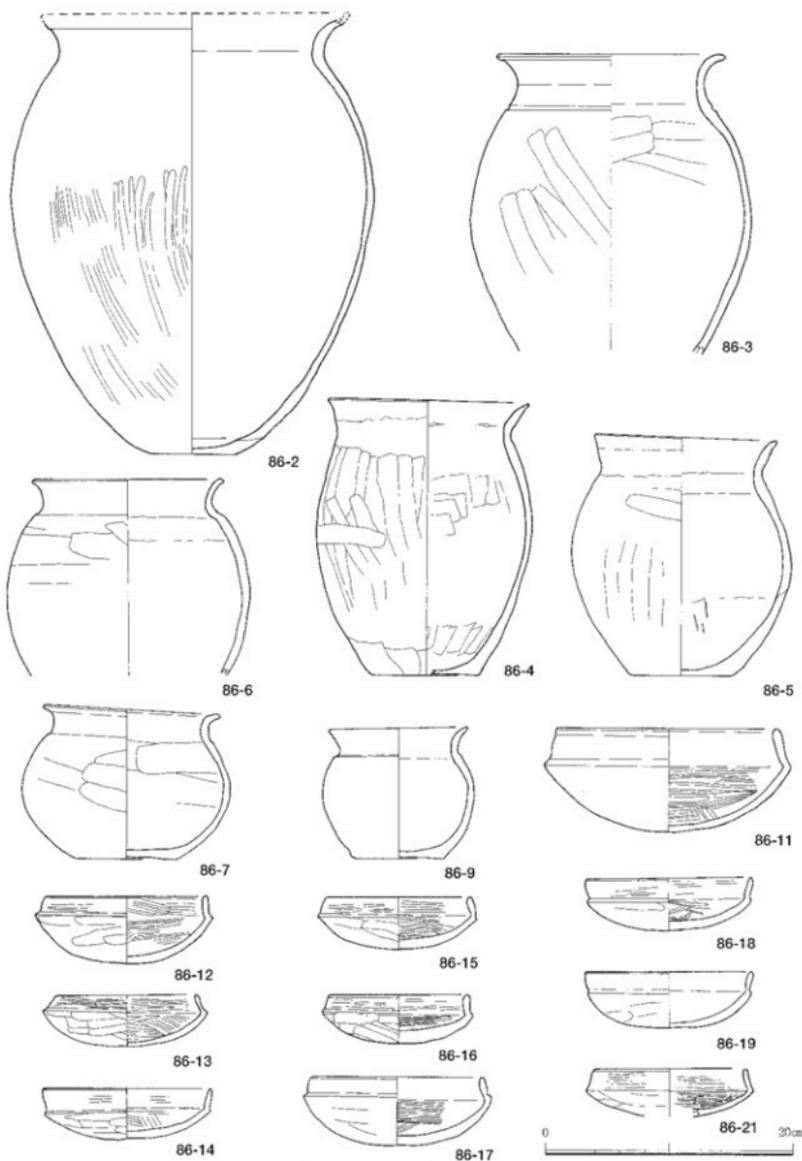
第26圖 S1-54・65出土遺物



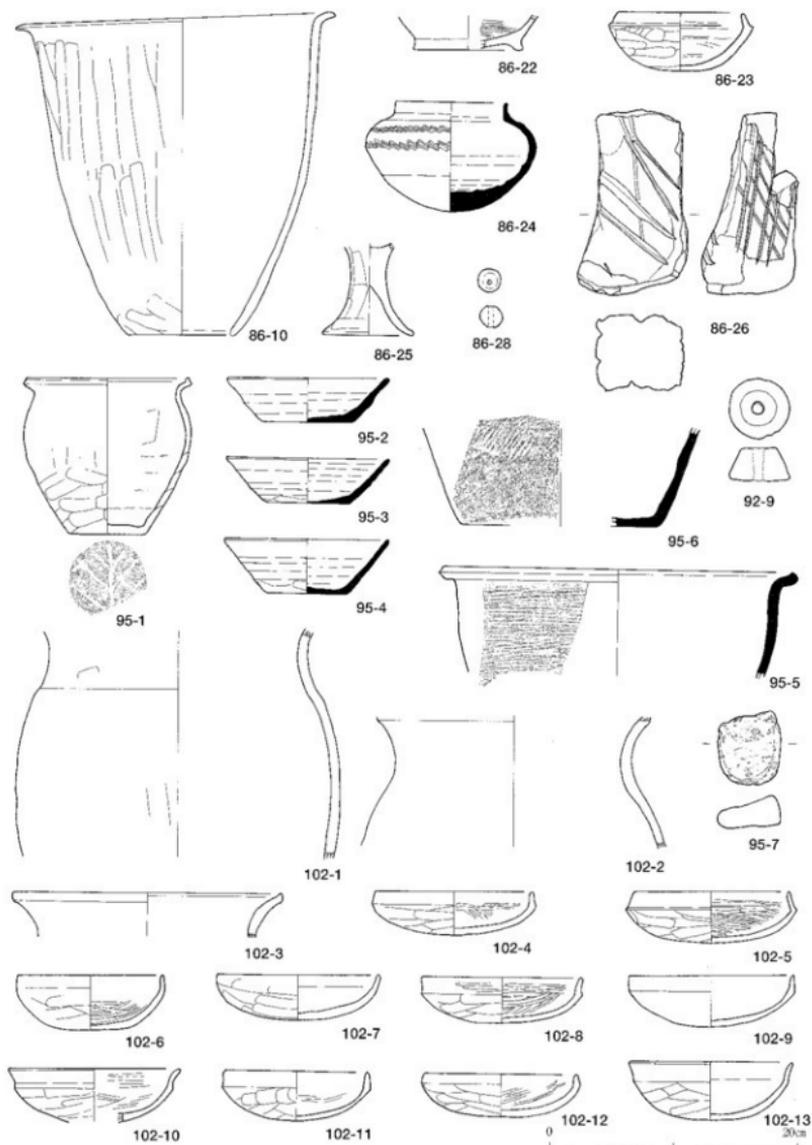
第27図 S I - 70・73出土遺物



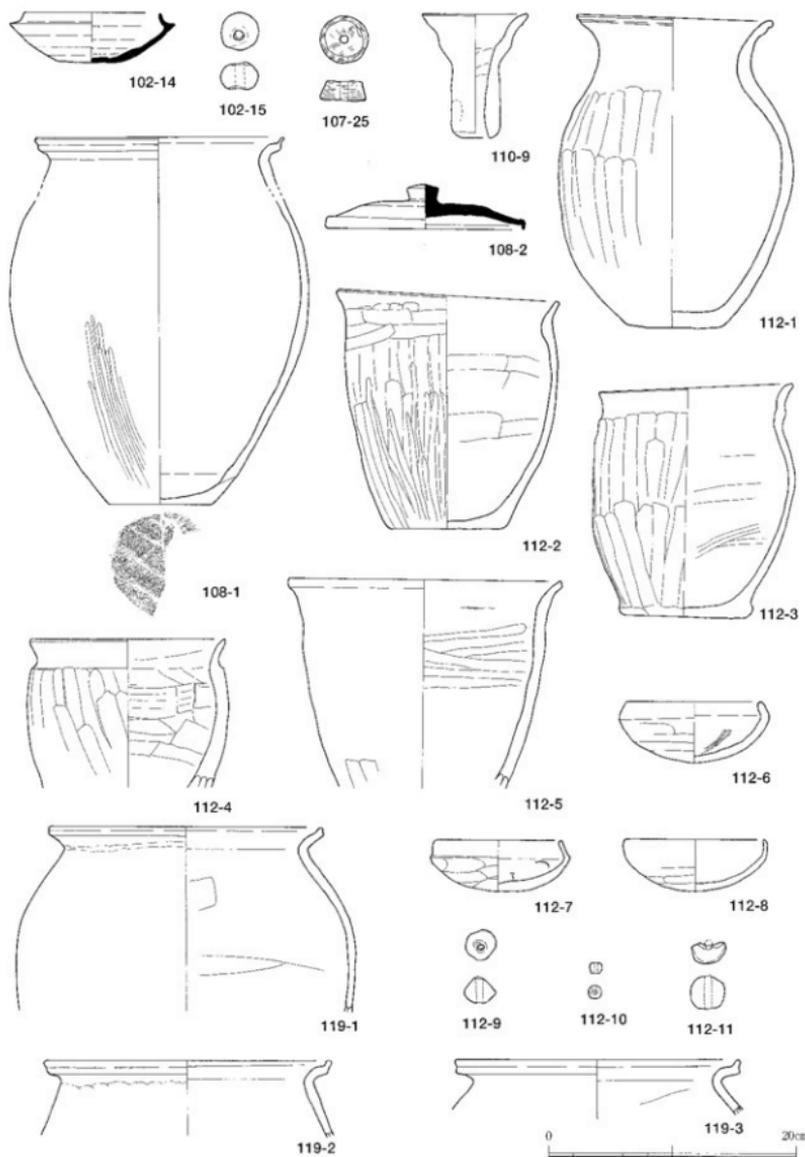
第28圖 S I - 73・75・85・86出土遺物



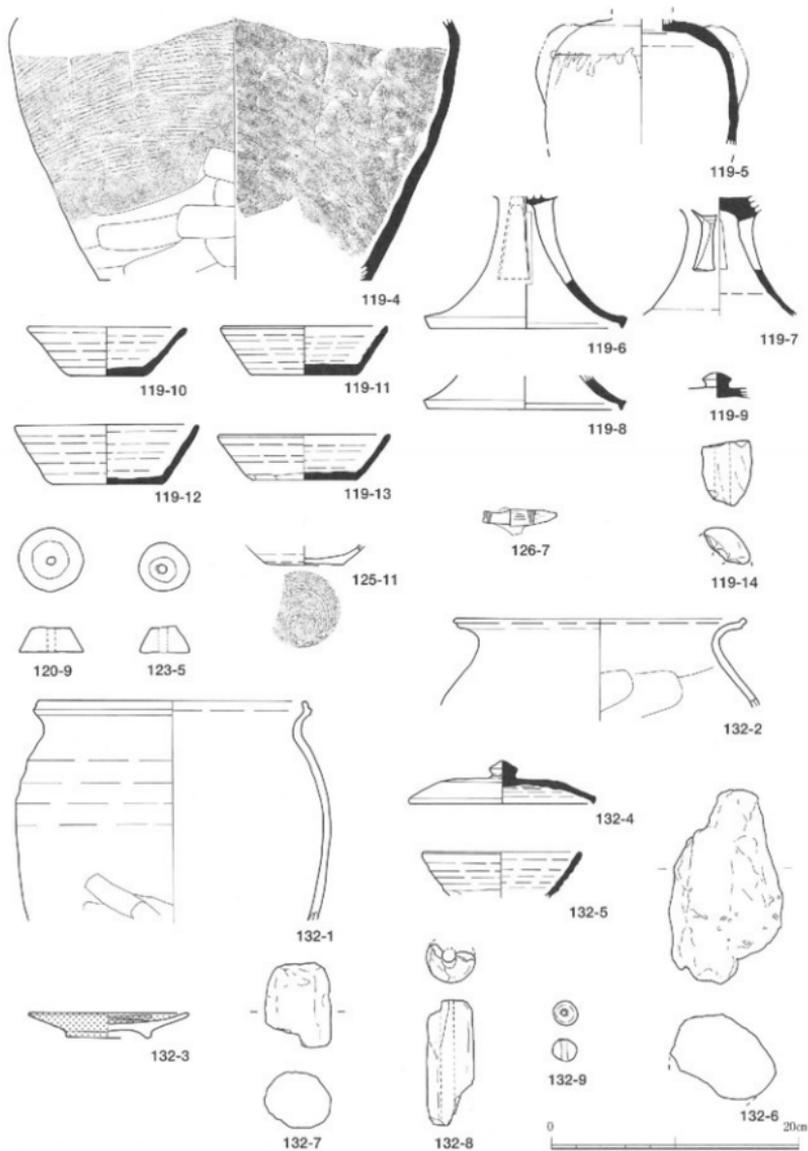
第29圖 S I - 86出土遺物



第30圖 S I - 86・92・95・102出土遺物



第31图 S I - 102 · 107 · 108 · 110 · 112 · 119出土遺物



第32圖 S I - 119 · 120 · 123 · 125 · 126 · 132出土遺物

表6 S I-14遺物観察表

番号	器形 遺存度	口 径 高 (cm)	口 徑 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	須恵器 高台付耳 体部1/4欠	156 108 6.9		体部は造形的に固く、高台部は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り難し。	砂粒を含む	良好	灰色	

表7 S I-16遺物観察表

番号	器形 遺存度	口 径 高 (cm)	口 徑 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 1/2	26.0 9.5 35.0		胴部は内湾しながら立ち上がり、「く」の字状に外反する。口縁部は横み上げられる。外面胴部中位より丁寧に施されたミガキが観察される。内面胴部にはヘラナデ時のヘラ当て痕が見える。	雲母を多く含む砂粒を含む	良好	緑褐色	
2	土師器 1/2	21.0 9.0 32.0		口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや横み上げられている。器唇の潤滑は良い。口縁部はヨコナデ、胴部は中位よりミガキ、内面はヘラによってナデられている。	雲母・灰石 他砂粒を多量に含む	やや良好	褐色	
3	土師器 底部欠	20.0 — —		口縁部は緩やかに「く」の字状に外反し、胴部は内湾する。口唇部は横み上げられる。口縁部はヨコナデ、胴部は中位よりミガキ内面はヘラナデ。	雲母・灰石 他砂粒を多量に含む	良好	褐色	
4	土師器 ほぼ完形	10.5 9.1		底部は丸底で、内湾しながら立ち上がり、後を持った後口縁部は内傾している。体部外面は削りの後ナデ、口縁部、内面は単位は不明だがミガキが施される。	灰石・雲母を含む	良好	褐色	
5	土師器 口縁一部	13.0 3.6 3.9		底部は平底、体部は緩やかに内湾し、後生有した後口縁部は少し内傾する。器唇の状態は悪く、単位、方向とも不明だが外面体部にヘラ削りの後ナデ、口縁部体部にまばらにミガキが見られる。	灰石を少量含む	やや不良	褐色	
6	須恵器 完形	10.0 — 2.9		ややつぶれた宝珠状のつまみがつく。そこから平らに繋ぎ、先端部で外傾している。また明瞭な返しがある。ロクロ製形で、外面つまみ周辺は回転ヘラ削り。	滑かい	良好	灰色	
7	須恵器 完形	9.0 3.2		先端の尖った宝珠状のつまみがつく。つまみの周辺は平らだが先端部はやや内湾するように開く。明瞭な返しがある。つまみの周辺は回転ヘラ削り。器唇にはやや雲母が見られる。	砂粒を含む	良好	淡灰色	
8	須恵器 一部欠	9.0 2.8		つまみは宝珠状でやや内湾しながら開く。先端部には明瞭な返しがついている。	灰石をわずかに含む	良好	灰色	
9	磁器 一部欠	長さ112cm、幅44cm、厚さ44cm、重さ3039g、4面にわたって使われている。						

表8 S I-19遺物観察表

番号	器形 遺存度	法・製・形・整の特徴	備考
6	須恵器 一部欠	長さ148cm、幅30cm、厚さ0.6cm、重さ1028g、山り鎌、右鎌。先端は丸い。	

表9 S I-21遺物観察表

番号	器形 遺存度	口 径 高 (cm)	口 径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 門一側中	37.0 — —		口縁は外反しながら立ち上がり外面は内湾りされ口唇部は尖り気味になる。胴部上位には「矢」の線跡が見られる。外面は横位の平行タタキ。	灰石を含む	良好	緑灰色	「矢」口、線跡あり
2	須恵器 胴中一底部	16.0 — —		底部は平底で胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面は斜位の平行タタキ、下腹はヘラ削りが施されている。	灰石を含む	良好	灰色	指紋あり
3	須恵器 環体部1/2	14.0 10.0 3.7		底部は平底で、体部は反りながら立ち上がる。底部は回転ヘラ削り、「×」印が観察されている。器唇の状態は悪い。	雲母を含む	やや不良	灰色	環状線あり
4	須恵器 破片	13.6 10.0 3.9		底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ削りで、体部下腹はヘラ削りされている。	雲母を含む	良好	灰色	

表10 S I—27遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・形の特長	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 高台付風 摩部1/2	15.6 7.4 4.6	底部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。高台部は「ハ」の字状に開き縁部で反っている。肩部と高台部の接合部が明確に残る。	灰石を含む 細かい	良好	褐色	

表11 S I—30遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・形の特長	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 土師類 口縁破片	(19.6) — —	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は顕著に積み上げられている。外面はへう削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘナデ。	雲母他砂粒を多量に含む	良好	褐色	
2	土師器 口縁破片	(19.2) —	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は明確に積み上げられている。外面はへう削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はへうナデ。	雲母を多量に、他砂粒を含む	良好	明褐色	
3	土師器 口縁破片	(21.7) —	口縁部は緩やかに「く」の字状に外反し口縁部で積み上げられている。外面削りはへう削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はへうナデが施されている。	雲母を多量に含む	良好	褐色	
4	土師器 底部	9.0 —	底部は平底で木葉状が残る。肩部はやや内湾しながら立ち上がる。外面は際限なくミガキが磨かれ、内面はナデられている。また底部との境には輪痕み痕が残る。	雲母他砂粒を多量に含む	良好	褐色	
5	土師器 底部	8.5 —	底部は平底で木葉状である。体部は直線的に開く。外面はミガキが磨きに磨かれ、内面はナデられている。	雲母他砂粒を多量に含む	良好	褐色	
6	須恵器 口縁破片	(22.7) —	口縁部は緩やかに外反し、口唇部で折り返されている。外面部はわずかに顕著による平行輪痕が残る。	細かい	良好	淡灰色	
7	須恵器 肩部1/3	10.9 —	内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ立つ。肩部は「ハ」の字状に開く。底部は回転へう削り。	灰石を含む 細かい	不良	淡灰色	還元不良
8	須恵器 高台付環 肩部1/3	(20.7) 7.6 —	内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ、反りながら開く。底部は回転へう削り。底部に「く」の字のへう記りあり。	砂粒を含む	良好	灰色	
9	須恵器 高台付環 ほぼ完整	13.3 7.6 5.3	やや反りながら立ち上がり、口縁部で弱く開く。高台部は「ハ」の字状にしっかりと開く。底部は回転へう削り。	灰石他砂粒を少量含む	良好	灰色	
10	須恵器 高台付環 1/2	(13.3) 8.3 —	体部は直線的に開く。口縁部はわずかに外反する。高台部は「ハ」の字状に開く。底部は回転へう削り。	灰石を多く含む。細かい	良好	淡灰色	
11	須恵器 高台付環 体部欠	— 9.8 —	体部はやや反りながら開く。高台部は「ハ」の字状に開く。底部は回転へう削り。	雲母他砂粒を含む	不良	淡灰色	
12	須恵器 環 1/2	13.7 3.2 4.5	底部は平底。体部は直線的に開き口縁部で外へ開く。底部は回転へう削りの後、ナデ。	砂粒を少量含む	良好	灰色	
13	須恵器 環 体部1/3	14.4 8.3 3.6	底部は平底で、体部はやや内湾しながら大きく開き、口唇部で外反する。底部は回転へう削り。	灰石を含む	良好	灰色	
14	須恵器 環 体部1/4	(13.3) 7.5 3.5	底部は平底。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。底部は回転へう削り。	細かい	良好	灰色	
15	土製品 漆上珠毛瓶	長さ2.8cm、幅2.0cm、孔径0.6cm、重さ132g。上下からつぶされている。		細かい	良好	褐色	
16	鉄製品 刺。丸座欠	長さ7.9cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm、重さ7.61g。胴部は曲げられている。					
17	鉄製品 刀子。一部	長さ5cm、幅1cm、厚さ0.4cm、重さ13.54g。両部分の両片である。両開き。					
18	磁石。定形 観灰管	長さ11.2cm、幅4.4cm、厚さ4.4cm、重さ303.9g。6面とも磨かれている。					

表12 S I-32遺物観察表

番号	器形 存在度	口径 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16	鉄製品 刀、部		長さ24cm、幅1.1cm、厚さ0.2cm、重さ29g。				

表13 S I-33遺物観察表

番号	器形 存在度	口径 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小型委 一底欠	128 6.8 15.0	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部との境で稜を有した後、緩やかに外反する。器底はかなり厚減している。外面はヘラ削りの後、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	灰石を含む 細かい	良好	赤褐色	
2	土師器 小型委 口縁破片	65.0 — —	頸部から緩やかに外反する。口縁部はヨコナデ、外面はヘラ削り内面はヘラナデ。	細かい	良好	褐色	
3	土師器 片 口縁1/4欠	17.8 — 4.7	底部は丸底で内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや外へ開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部は内外ともにヨコナデ、内面はナデが施されている。	雲母を含む 細かい	良好	明褐色	
4	土師器 片 底欠破片	(11.8) — —	緩やかに立ち上がり、稜を持った後口縁部は短く直立する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は擦れて残っているミガキが残る。	細かい	良好	明褐色	
5	土師器 片 底欠破片	(10.0) — —	緩やかに立ち上がり、明瞭な稜を持った後、内湾する。外面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧なナデが施される。	細かい	良好	褐色	
6	土師器 底欠破片	7.4 — —	底部は平底で、胴部は内湾しながら緩やかに立ち上がる。外面はかなり潤滑しているがヘラ削り、内面はヘラによるナデが見られる。	細かい	良好	赤褐色	
7	須恵器 杯 口縁1/2	9.4 5.4 3.6	底部は平底で中央が深い。胴部は内湾しながら立ち上がり、稜で尖る。受部は狭く、口縁部は内積して立す。	雲母を含む 細かい	良好	灰色	
8	土師器 一方のみ	— — —	角状で「く」の字に折れる。ヘラ削りの後ナデがなされている。	細かい	良好	明褐色	
9	土師器 一方のみ	— — —	角状に真っ直ぐに伸びる。ヘラ削りの後ナデが施されている。	灰石を含む	良好	褐色	
10	土製品 母状土、1/2	長さ24cm、口径0.7cm、重さ7.5g。上下からつぶされている孔は一度で開けられている。		細かい	良好	褐色	
11	土製品 母状土、1/2	長さ1.5cm、幅1.5cm、口径0.3cm、重さ2.9g。孔が上と下からそれぞれ孔が開けられ、貫通していない。		細かい	良好	褐色	

表14 S I-34遺物観察表(1)

番号	器形 存在度	口径 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 口一側上段	(24.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は鋭く曲み上げられている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面にはヘラナデ風が明瞭に残る。	雲母・石灰 を含む	良好	褐色	
2	土師器 底欠破片	(14.0) — —	胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外反する。外面はヨコナデ、内面は細かいミガキが施されている。	雲母を少量 含む	良好	明褐色	内面黒色処理
3	須恵器 ほぼ完形	14.2 — 2.4	つまみは肩でそこから内湾しながら固き胴部で真横に底びる。雄内面には差しが見られる。つまみの断面は細軟ヘラ削り。	細かい	良好	灰色	
4	須恵器 1/2	15.0 — 2.7	つまみはつぶれているが中央がやや出る。内湾しながら開き、底部で真横に底びる。底部内面には差しがある。	細かい	良好	淡灰色	
5	須恵器 片 作部1/2	(13.6) 10.8 4.0	底部は丸底に近い平底で、外反しながら立ち上がり、そのまま開く。底部は回転ヘラ削りだが、外面はロクロ。	細かい	良好	灰色	
6	支 1/2	長さ16.4cm、最大径11.3cm、最小径4.3cm。ナデによって面が整えられている。		灰石、雲母 を含む	良好	褐色	

表15 S I -34遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	砥石 一次	-	長さ72cm、幅50cm、厚さ17cm、重さ619g、4面にわたって使われている。				
8	土師器 壺、口縁 上破片	(28.4) -	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はわずかに積み上げられている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。	長石・雲母 を含む	良好	褐色	

表16 S I -39遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺、口縁 上破片	18.2 -	胴部は横やかに内湾し、口縁部で「く」の字状に大きく外反する。胴部外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデが施されている。	雲母・長石 を含む	良好	褐色	
2	土師器 小形壺 口縁破片	(18.0) -	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はわずかに積み上げられている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデられている。	細かい	良好	褐色	
3	土師器 杯 底破欠	(13.0) -	内湾しながら立ち上がり、口縁で外反する。ロコ壺形だが、内面には細かいミガキが施されている。	雲母を含む	良好	褐色	高台付 内面黒色処理土
4	土師器 高台付杯 口縁破片	15.0 6.7 5.9	杯部は内湾しながら立ち上がり、口縁で外反する。内面は「ハ」の字状に開く。	砂粒を含む	良好	明褐色	
5	土師器 高台付杯 杯部一部	(11.6) 6.2 4.3	杯部は内湾しながら立ち上がり、口縁でやや外反する。台部は「ハ」の字状に開く。ロコだが内面は丁寧にナデられている。	雲母を含む	良好	明褐色	片口カ

表17 S I -40遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺下段1/3欠	21.2 8.8 30.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は「く」の字状に外反する。口唇部は積み上げはかり弱い。外面は中位からミガキが施され、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母と砂粒 を含む	良好	明褐色	
2	土師器 壺 一次	16.5 4.8 16.0	底部は平底だが中心がやや凸く、体部は縁部に近く口縁上の間に明瞭な輪を有す。口縁は大きく外反する。体部はへう割りの後ナデ、口縁はヨコナデ、内面はへうによって丁寧にナデられている。	長石・雲母 を含む	良好	褐色	
3	土師器 壺 口縁1/3欠	14.4 6.8 13.1	底部は平底で、体部は横やかに内湾し、口縁は開く。器形は少し異なっている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はへうによるナデ。	長石・雲母 を含む	良好	赤褐色	
4	土師器 壺 一次	27.3 9.6 27.3	口は底部全体に及ぶ厚孔で、体部は横く内湾しながら大きく開く。口縁は外反する。把手は胴部中位に上方に向かって付く。体部外面はへう割りの後ナデ、内面はヨコナデ、両面はミガキが施される。	細かい	良好	褐色	
5	土師器 杯 1/3欠	(13.8) -	底部は丸底で、内湾しながら立ち上がり、明瞭な輪を持った後口縁部はわずかに外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面は丁寧にミガキが施されている。	雲母を含む 細かい	良好	暗褐色	黒色処理
6	土師器 杯 1/4	(12.8) -	底部は丸底で、体部は横やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有した後、口縁はわずかに内湾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁、内面はミガキが施されている。	雲母を含む 細かい	良好	明褐色	
7	土師器 杯 1/4	(13.6) -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり口縁部との境で縁を持つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁、内面は粗くミガキが施されている。	雲母を含む	良好	褐色	
8	土師器 壺 胴部のみ	17.5 -	胴は両きながら下がり胴部で大きく開く。さらに胴部で反る。外面はへう割りの後ナデ。胴部内外面はヨコナデ、内面は縁部のみが明瞭に焼く。風乾なナデが施されている。	雲母を少量 含む 細かい	良好	明褐色	赤彩
9	土師器 壺 胴部のみ	(10.1) -	胴は両きながら下がり胴部で大きく開く。さらに胴部で反る。外面はへう割りの後ナデ、胴部内外面はヨコナデ、内面は簡単にナデられたのみで粘れみ度が残る。	雲母を少量 含む 細かい	良好	赤褐色	赤彩
10	土師器 下段	-	長さ10cm、最大径8.3cm、最小径5.5cm、胴部はきれいに削り取られている。	雲母を含む 細かい	良好	褐色	
11	土師器 三足盤の 破片	-	脚は厚く、体部がロコ壺形された後に削りつけられている。脚は削りによるナデ。	長石・雲母 を少量含む	良好	明褐色	遺人物カ

表18 S I -40遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	上部器 瓶口手 一方のみ	- -	把手は横やかに「く」の字状に折れている。ナデ。	雲母を少量 含む	良好	明褐色	
13	土製品 瓶口手、1/2	長さ32cm、 幅2.8cm、 孔径0.7cm、 重さ20.8g	丁寧にナデられ形は整っている。	細かい	良好	褐色	
14	群石	長さ7.5cm、 幅6.7cm、 厚さ3.8cm、 重さ40.7g					

表19 S I -49遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土部器 口縁のみ、1/3	(9)25 -	口縁は「く」の半状に開き口唇部は明確に積み上げられている。口縁部はヨコナデ。	雲母を少量 含む、砂粒を 含む	良好	明褐色	
2	須恵器 底、胴、1/2	12.8 4.3	体部は直線的に開く。体部下端は手持ちへう折られている。	細かい	やや 不良	淡灰色	
3	土部器 杯 胴部破片	(11)0 (3)8	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁もそのまま開く。体部はへう折りの後ナデ。口縁はヨコナデ。内面は放射状にミガキが施されている。	細かい	良好	明褐色	
4	手裡の上器 底部のみ	- -	底部は平底だが内凹している。手によるナデ、指頭痕ナデが残る。	灰石を含む	良好	褐色	
6	須恵器 杯 胴部1/4	(13)4 9.4 4.4	底部は平底で、体部はやや反り気味に口縁まで開く。底部は明瞭にへう折りの後ナデ。	雲母を少量 含む	良好	赤褐色	
7	須恵器 杯、胴部 瓶部1/2	- 6.09 -	底部は平底で、体部はやや内湾しながら立ち上がる。底部、体部下端は手持ちへう折りの後ナデ。	雲母を多く 含む	やや 不良	灰色	
8	須恵器 杯 破片	(11)4 6.09 3.09	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は外反する。体部は口唇部が明瞭に残る。底部は手持ちへう折りの後ナデ。	雲母を含む	良好	灰色	
9	土製品 上端、1/2	長さ8.9cm、 幅4.2cm、 孔径1.7cm、 重さ7.0g	孔の周囲は蓋取りきれ外面はなでられている。		良好	褐色	
11	土製品 瓶口手、1/2	長さ33cm、 幅2.1cm、 孔径0.7cm、 重さ11.8g	上下から押された形をしている。孔の周囲は蓋取りきれされている。	雲母を含む	良好	褐色	
12	鉄製品 棒状、先端	長さ6.5cm、 幅0.4cm、 厚さ0.5cm、 重さ8.8g	断面形状は方形。				

表20 S I -51遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須 口-胴上片	-	胴部は球形。胴部で横やかに外反し、口縁は折り返す。胴、口縁口唇には、付加条第1種の縄文を施す。	砂粒多い	良好	褐色	
2	須 口-胴破片	-	胴部は横やかに外反し、口縁は内湾気味に立ち折り返す。口縁及び口唇には付加条第1種の縄文を施す。二条の割突列。	砂粒多い	良好	褐色	
3	須 口縁破片	-	口縁は外反して開く。口縁及び口唇部には付加条第1種の縄文を施す。折り返し部分には割突列が通る。	砂粒多い	良好	褐色	
4	須 底-胴下片	-	底部は平底。胴部は外反して立つ。底部本裏面。付加条第1種の縄文を施す。	砂粒多い	良好	褐色	
5	須 底部破片	-	底部は平底。	砂粒多い	良好	褐色	
6	須 底部破片	-	底部は木炭痕。	砂粒多い	良好	褐色	
7	須 底部破片	-	底部は平底。	砂粒多い	良好	褐色	

表21 S I-52遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	上部器 瓶 1/2	φ34.0 10.0 23.2	底部は孔令体に見ふ平で体部は内湾しながら立ち上がり、接を 持った後、口縁は外反する。胴部小位よりやや上に高次の把手が 対峙して付される。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁はヨコナデ、 内面は丁寧なミガキ。	長石を含む	良好	明褐色	

表22 S I-54遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 鉢 1/2	16.6 8.5 9.2	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部との境に 明瞭な沈線を有す。最大径は口縁部にある。外面体部はヘラ削り の後にナデが、口縁部内外面はヨコナデが、内面体部はナデら れているがまばらにミガキが施される。	雲母・長石 を含む	良好	暗褐色	
2	土師器 鉢 1/4欠	9.8 6.5 7.9	底部は平底で、体部はやや凸つ内湾しながら立ち上がり、接を 持った後反りながら外へ開く。最大径は胴部中位にある。器蓋の 割線が直しいが、体部はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、 内面はヘラによってナデられている。	長石・雲母 を含む	良好	褐色	
3	土師器 杯 一部欠	11.2 3.6 3.6	底部は丸底に近い平底。体部は緩い曲線を描きながら立ち上り 口縁はそのまま開く。器蓋の先は直しい。外面はヘラ削りの後 ナデ、口縁部付近はヨコナデ、内面はナデ。	長石・雲母 を含む	やや 良好	褐色	
4	土師器 一部分欠	11.2 — —	底部は丸底。緩く内湾しながら立ち上がり、そのまま開く。体部 外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部は内湾してもヨコナデされてい る。内面はナデが軽くミガキがなされている。	長石を多く 雲母をわず かに含む	良好	褐色	
5	土師器 鉢 1/2	(12.0) — 3.7	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁もそのま ま開く。外面はヘラ削りの後、ナデ。口縁部・内面はナデがなされ ている。	砂粒を少量 含む	良好	明褐色	
6	土師器 杯 1/4	(13.0) — 0.6)	底部は丸底だがやや凸を持つ。体部は緩やかに内湾しながら立ち 上がり、明瞭な接を持った後口縁部は内湾する。器蓋は厚紙の やうに体部外面にヘラ削り、一部にミガキが残るのみだが、全面にミ ガキが施されていたと見られる。	雲母を含む	良好	明褐色	黒色処理
7	須恵器 先輪部欠	— — —	つまみは脚実球を呈しつぶれて広がっている。またつまみから や内湾しながら開いてく。ロク口。	雲母を多く 他砂粒を含 む	良好	灰色	
8	須恵器 高台付杯 完形	11.2 7.8 4.7	杯部はやや内湾の尖味に立ち、口唇部で少し外反する。高台部は 「ハ」の字状に開き先輪で反る。ロク口型。	長石他砂粒 を含む	良好	灰色	
9	須恵器 高台付杯 完形	11.2 7.2 5.6	杯部は緩く内湾しながら立ち、口唇部でやや外反する。高台部は 「ハ」の字状に開き、先輪部は反り、薄くなる。ロク口型だが 高台部下端はヘラ削りによって細く削られている。	長石他砂粒 を含む	良好	灰色	
10	須恵器 高台付杯 1/2	0.14 7.6 4.6	杯部はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部で弱く外反する。高 台部は「ハ」の字状に開き、先輪部で反り薄くなる。高台部下端 はヘラ削りされている。	長石他砂粒 を含む	良好	灰色	
11	支脚 下部欠	— — —	長さ104cm、最大径58cm、最小径40cm。ヘラ削りの後、ナデら れている。	長石を多く 含む	良好	褐色	
12	土製品 球状土片、完形	長さ2.8cm、幅2.6cm、孔径0.5cm、重さ19.1g。影は差んで孔の周りに面取り されていない。		長石を含む	良好	褐色	
13	土製品 球状土片、完形	長さ2.8cm、幅2.3cm、孔径0.6cm、重さ14.1g。上下からつぶされて孔の 周りは面取りされている。		細かい	良好	褐色	
14	土製品 球状土片、完形	長さ2.6cm、幅2.4cm、孔径0.6cm、重さ14.4g。ナデが施されている。		長石を含む	良好	明褐色	
15	土製品 球状土片、完形	長さ2.2cm、幅2.0cm、孔径0.5cm、重さ8.1g。孔の周りに面取りされていない。		細かい	良好	褐色	
16	土製品 球状土片、完形	長さ1.8cm、幅2.8cm、孔径0.4cm、重さ4.2g。小型であるが形はナデによって 整えられている。		細かい	良好	褐色	
17	土師器 壺 1/4欠	21.4 9.1 36.4	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、胴部から緩やか に外反する。口唇部は横み上げられている。胴部小位から下端 までミガキが密に施されている。上位はヘラ削りの後ナデ、口縁は ヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	雲母・砂粒 を多量に含 む	良好	明褐色	
18	土師器 鉢 1/3欠	9.1 6.0 8.4	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、接を持った後口 縁は反るようになつて立つ。最大径は胴部中位にある。器蓋の先は 直しい。外面はヘラ削り、口縁はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母・長石 を含む	やや 良好	褐色	
19	土師器 碗 1/2	28.0 10.0 29.0	口は底部全体に見ふ平孔。体部はやや内湾しながら立ち上がり、 口縁部で大きく開く。口唇部は内湾している。外面はヘラ削り の後ナデ、口縁部はヨコナデ。下縁は直しいミガキ。	雲母・砂粒 を多く含む	良好	明褐色	

表23 S I -65遺物観察表

番号	器形 遺存状況	口径 器高 (cm)	底・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 交形	22.2 6.4 34.1	口縁は「く」の字状に外反し、口縁部で積み上げられている。口縁部はヨコナデ、外面上半はヘラ削りの後ナデ、中央より下端まではミガキ。内面側部はヘラナデされ、ヘラ当て痕が残る。	灰白・赤母を多く含む 磁粒を含む	良好	明褐色	
2	土師器 交形	10.9 10.9 19.3	底部は平底で、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。最大径は口縁にある。一部粘粘土質が残る。胎形には赤みが残る。外面はヘラ削り、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	赤母・石英 磁粒を含む	良好	褐色	
3	土師器 交形	10.6 7.2 14.8	底部は平底で、やや内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は反り気味に立つ。全体的に輪縁部が残り、胎形の赤みは残る。胎形中に最大径を持つ。外面はヘラ削り、口縁はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	灰白を少量 含む	良好	赤褐色	
4	土師器 交形	9.5	底部は平底だが、凹凸がある。胎部は緩やかに開いている。外面にはミガキが見られる。	赤母・石英 磁粒を多量 含む	良好	褐色	
5	土師器 交形	9.0	底部は平底で、胎部は内湾をもって立ち上がる。外面はミガキ、内面にはヘラによるナデられ、ヘラ当て痕が残る。	赤母を多く 含む	良好	褐色	
6	土師器 交形	21.3 10.4 25.5	乳は底部全体に及び単乳で、胎部はわずかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は外へ開く。外面はヘラ削り、口縁はヨコナデ、内面は胎部で覆れているが一部にミガキが残る。	灰白・石英 磁粒を多量 含む	良好	明褐色	
7	土師器 交形	11.2 3.9	胎部は丸底で、内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ、直立する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁はヨコナデ、内面はナデが見られるが、胎部は全体的に覆れているため胎形は不明。	赤母を含む 細かい	良好	明褐色	黒色処理
8	土師器 交形	11.6 3.7	胎部は丸底で、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れやや内湾する。外面胎部はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は「草」にナデられた後、放射状の胎文が施される。	赤母・長石 を含む。細 かい	良好	明褐色	
9	土師器 交形	13.7 4.3	胎部は丸底で、胎部は内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は外反する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はミガキが残る。	赤母を多く 含む。細かい	良好	暗褐色	
10	土師器 交形	11.2 3.5	胎部は丸底で、胎部は内湾しながら立ち上がり、弱い縁を有した後口縁部は直立する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデだが、一部ミガキが残る。内面は放射状の胎文が施される。	赤母を多く 含む。細かい	良好	暗褐色	
11	土師器 交形	11.7 4.0	胎部は丸底で、内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れる。外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヨコナデ、内面は一部にミガキが残る。	赤母を含む 細かい	良好	明褐色	黒色処理
12	土師器 交形	10.1 3.6	胎部は丸底で、緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は内湾している。外面はヘラ削り、口縁はヨコナデ、一部にミガキが残る。内面は覆れているがミガキが見られる。	赤母を含む 細かい	良好	明褐色	黒色処理
13	土師器 交形	10.8 3.4	胎部は丸底で、内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ内湾気味に立つ。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁はヨコナデだが一部にミガキが残る。内面は覆り気味にミガキが残る。	赤母を少量 含む	良好	明褐色	黒色処理
14	土師器 交形	9.4 3.4	胎部は丸底で、緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は内湾する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁はヨコナデ、内面は覆り気味にミガキが残る。	赤母を少量 含む。細かい	良好	明褐色	黒色処理
15	土師器 交形	24.7	胎部は緩やかに外反し、口縁部部でつまみ上げられ胎部は尖っている。一部にミガキが見られる。胎部は放射状の胎文が施される。	赤母を多く 含む	良好	灰色	新治産
16	土師器 交形	16.0 2.3	つまみは縦長楕円でつまみ上げられ胎部は丸底で、そこから直線的に内湾し胎部でまた開く。胎部内面には弱い返しがある。つまみの周りは回転ヘラ削り。つまみは緩やかに折られている。	赤母を多く 含む	良好	淡灰色	新治産
17	土師器 交形	14.9 3.3	胎部は丸底で、胎部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。胎部が胎部で下端は下持ちヘラ削り。	赤母を多く 含む	良好	淡灰色	新治産
18	土師器 交形	13.6 7.8 4.8	胎部は丸底であるが、厚みがあり、やや中心が浮いている。胎部はやや内湾気味に立ち、口縁もそのまま開く。胎部と外面下端は下持ちヘラ削り。	細かい	良好	灰色	
19	土師器 交形	長さ16.5cm、最大径9.6cm、最小径3.5cm、ヘラ削りされ、削り取られている。		細かい	良好	褐色	
21	土師器 交形	長さ29cm、幅2.8cm、口径0.7cm、重さ21.3g。形はいびつで孔の周りを削り取られている。		赤母を少量 含む	良好	褐色	

表24 S I-70遺物観察表

番号	器形 遊存度	口徑 底器 高 (cm)	成・形の特長	胎土	成焼	色調	備考
1	土師器 丸 胴部1/2	22.0 8.0 31.0	口縁は「く」の字状に外反し口縁部は積み上げられている。底は平底で、胴部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。底縁は本質面。外面は器面の割離が強く一部にミガキが残るのみ。口縁はヨコナテ、内面はナテが観察される。	赤土	良好	褐色	
2	土師器 丸 口へ胴下	(22.3) -- --	口縁は「く」の字状に外反し、口唇部はやや積み上げられている。外面は割離している為、胴りの後ナテのみが見られ、口縁部はヨコナテ、内面はヘラナテが観察される。	赤土	良好	褐色	
3	土師器 丸 口縁破片	(22.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は明瞭に積み上げられている。口縁部にはヨコナテが施されている。	赤土	良好	明褐色	
4	土師器 丸 胴部破片	(16.0) 10.4 --	緩やかに内湾しながら立ち上がり、内面の中心に縦を持つ。口縁はやや内傾している。外面はヘラ胴りの後ナテ、内面はミガキが施されている。	赤土を含む	良好	明褐色	外面一部赤影が残る。
5	土師器 丸 口縁1/2	(18.0) 10.4 3.5	内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ立つ。底縁は回転ヘリ切り、上部は「ハ」の字状に開く。底縁はやや反り加味。	赤土を少量含む。細かい	良好	灰色	
6	土師器 丸 一部	(19.0) (11.6) --	内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れ立つ。上部は「ハ」の字状に開く。全体的に器面は割離している。	赤土を多量を含む	良好	淡灰色	
7	土師器 丸 1/3	(13.0) 7.9 3.8	底縁は平底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁に至る。底縁および体部下縁は手持ちヘリ胴り。	赤土を含む	良好	淡灰色	
8	土師器 丸 一部	(12.6) 7.3 4.0	底縁は平底で、体部は直線的に開く。底縁と体部下縁は手持ちヘリ胴りがなされている。	赤土を含む	良好	灰色	
9	土師器 丸 胴部のみ	11.4	胴は大きく開き、底縁で反った後直立する。透かしはない。	赤土・堆(φ5mm)を含む	良好	灰色	

表25 S I-73遺物観察表(1)

番号	器形 遊存度	口徑 底器 高 (cm)	成・形の特長	胎土	成焼	色調	備考
1	土師器 丸 口へ胴中1/4	(23.4) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は少し積み上げられる。胴部外面はヘラ削りの後ナテ、口唇部内外面はヨコナテ、胴部内面はヘラナテ。	赤土・長石他砂粒を含む	良好	褐色	
2	土師器 丸 口縁破片	(24.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は強く積み上げられている。口縁部はヨコナテ、内面胴部はヘラによるナテ。	赤土・長石を含む	良好	明褐色	
3	土師器 丸 胴部1/2	(22.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は明瞭に積み上げられている。外面胴部はヘラ削りの後ナテ、口縁部はヨコナテ、内面はヘラナテ。	赤土・長石他砂粒を多量を含む	良好	褐色	
4	土師器 丸 口縁破片	(24.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は少し積み上げられている。胴部外面は割離が強く残っているが、ヘラ削りの後ナテ、口縁部は内外面ともにヨコナテ、内面はヘラナテ。	赤土・他砂粒を多量を含む	良好	明褐色	
5	土師器 丸 口縁破片	(14.0) -- --	口縁部は「く」の字状に大きく外反し、口唇部は強く積み上げられている。胴部の外面はヘラ削りの後ナテ、口縁部はヨコナテ、胴部内面はヘラナテ。	赤土・長石他砂粒を多量を含む	良好	褐色	
6	土師器 丸 口縁破片	(26.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は強く積み上げられている。胴部の丸みは強い。口縁部はヨコナテ。	赤土・他砂粒を含む	良好	明褐色	
7	土師器 丸 胴中～底縁	16.5	底縁は平底、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。器面は大部分が割離しているが、外面はミガキ、内面はヘラナテ時のヘラ当て痕が観察される。	赤土・長石他砂粒を多量を含む	良好	明褐色	
8	土師器 丸 胴下～底縁	10.0	底縁は平底で木葉痕が残る。体部は内湾しながら立ち上がる。外面はミガキが観察されるが、器面が荒れている為単位不明、内面はナテ。	赤土他砂粒を多量を含む	良好	明褐色	
9	土師器 丸 胴下破片	(8.9) -- --	口縁部全体に見ぶき孔で、胴部は直線的に開く。外面はミガキが施され、内面はヘラによるナテが見られる。	赤土・長石他砂粒を含む	良好	明褐色	
10	土師器 丸 1/4	(14.0) -- --	底縁は丸底で、緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部との境で強い傾を有した後外へ開く。外面胴部はヘラ削りの後ナテ、口縁部内外面はヨコナテ、内面体部は放射状にミガキが施される。	長石を多量を含む	良好	赤褐色	

表26 S I -73遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11	上頸部 1/4, 口縁欠	- -	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら稜を有した後大きく開く。体部外面はヘラ切りの後ナデ、口縁部、内面はミガキ。	雲母を含む	やや 良好		黒色焼成
12	須恵器 破片	(18.0) -	緩やかに内湾しながら底部でわずかに外反する。また、肩部には古い返しを持つ。ロクロ整形。	雲母を多く含む	良好	淡灰色	
13	須恵器 破片	(18.0) -	直線的に開いた後、内湾し肩部で開く。返しを持つ。内外面ともロクロ。	雲母を少量含む。砂粒を含む	良好	淡灰色	
14	須恵器 つまみ	- -	つまみは回転ヘラ切りの後に付けられたもので、扁平な碗状を示す。	雲母を少量含む。砂粒を含む	良好	淡灰色	
15	須恵器 1/2	(15.0) (10.5) 4.0	底部は平底だがやや中心部がふくらむ。体部は外反気味に立つ。外面はロクロ直が明瞭。底部・肩部下縁は手持ちヘラ削り。	雲母、長石を含む	不良	褐色	
16	須恵器 1/4 口縁欠	- 9.0 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立つ。ロクロ整形で、底部は回転ヘラ切りの後、体部下縁まで手持ちヘラ削り。	雲母を多く含む	不良	褐色	
17	須恵器 1/2	15.0 5.0	底部は丸みを帯びた平底。体部は直線的に開く。内面はロクロ直が残る。底部は手持ちヘラ削り。	雲母を含む	やや 不良	淡灰色	
18	須恵器 1/2	(13.0) 9.0 3.1	底部は平底で、体部は内湾しながら開く。器底は全体的に揃っておりロクロ直は残らない。底部・体部下縁は手持ちヘラ削り。	雲母を多く含む。長石を含む	やや 良好	淡灰色	
19	手捏土器 1/2	65.0 65.0 65.0	底部は平底で中央が薄く、両面が厚い。体部はほぼ直立する。指痕が残る。	長石を含む	良好	暗褐色	
20	手捏土器 1/2	65.0 65.0 63.0	底部は平底で厚い。体部はやや内湾しながら立ち上がる。指痕が明瞭に残る。	長石を含む	良好	褐色	
21	支脚 一部欠	長さ16.8cm、最大径9.0cm、最小径5.4cm。	ヘラ削りされ、面取りされている。	長石を含む	良好	褐色	
22	羽 一部欠	長さ9.7cm、最大径6.4cm、最小径2.5cm。	円錐形でヘラによって面取りされている。先端部は焼熱によってガラス化している。	長石を少量を含む	良好	灰色	

表27 S I -75遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土製品 上輪、完形	4.7 3.0 2.2	上部に貫通している孔が一つ。そのほかに4か所に孔が開けられている。内部に小輪が入っており、振るとかすかに音が鳴る。手によるナデが施されている。	細かい	良好	明褐色	

表28 S I -85遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 1/4 口縁欠, 1/4	- 7.0 -	底部は平底で、体部は直線的に開く。整形はロクロ。体部下縁部底部は手持ちヘラ削り。	雲母を多く含む。長石を含む	不良	褐色	
2	須恵器 1/4 一部欠	13.0 5.8 4.7	底部は平底で、体部はやや内湾し、口縁部は少し外反して開く。底部は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラ削り。体部下縁部もヘラ削りされている。	長石・他砂粒を多く含む	良好	灰色	
3	須恵器 1/4 一部欠	12.0 7.1 4.1	底部は平底で厚みがある。体部はやや反り気味に開く。底部は回転ヘラ切りの後、体部下縁部まで手持ちヘラ削り。内面・外面とも直が付着している。	長石をわずかに含む	良好	淡灰色	有明風力
4	須恵器 1/4 一部欠	12.5 6.9 3.6	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに反る。器底は全体的に直んでいる。底部・外面下縁部は古い手持ちヘラ削り。	長石を含む	良好	淡灰色	

表29 S I - 86遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	底・壁形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺 1/3	(21.59 17.0) 18.0	底部は平底で、胴部は丸みを帯びて立ち上がる。口縁部で弱い稜を持ち、口縁部で横み上げられているが弱い。器面は丸れ気味だが、胴部中央より下端までミガキが施され、口縁部はヨコナデ、内面裏面はヘラナデ。	黒母・長石を多く、胎砂粒を含む	やや良好	明褐色	
2	土師器 壺 1/2口縁欠	6.8 -	縦やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。胴部は大きく湾を持つ。口唇部にわずかに稜が観察される。器面は割離が激しいが胴部外面中央からミガキが、口縁部内外面はヨコナデ。	黒母・長石を多く、胎砂粒を含む	やや良好	褐色	
3	土師器 底部分	18.5 -	胴部は緩やかな曲線を帯びながら立ち上がり、胴部に太い沈線が1条走り、口縁は大きく外反する。全体的に器面は割離している。外面胴部はヘラナデ、口縁部ヨコナデ、内面胴部はヘラナデ。	長石を多く、胎砂粒を含む	やや良好	褐色	
4	土師器 壺 胴一部分欠	16.2 8.5 22.4	底部は平底で、中心が非常に深い。胴部は緩やかに立ち上がり口縁は外反する。外面はヘラナデ、口縁内外面はヨコナデだが輪痕み痕が明瞭に残る。内面はヘラによるナデ。	長石・石英を含む	良好	褐色	
5	土師器 壺 胴一部分欠	14.7 8.1 19.4	底部は下湾で、胴部は緩やかに立ち上がり、口縁は緩やかに外反する。胴部外面は上段では緩位、下段では縦位のヘラナデが施される。口縁部は輪痕み痕が弱るヨコナデ、内面はヘラナデ。	長石他胎砂粒を含む	良好	明褐色	
6	土師器 壺 底部分欠1/2	15.1 15.9	胴部は球形を呈し、胴部で稜を持った後大きく外反する。胴部はヘラナデ、口縁はヨコナデ、内面胴部はナデが施されているが、器面はかなり荒れている。	胎砂粒を含む	やや不良	赤褐色	
7	土師器 壺 胴1/4欠	14.4 8.0 12.2	底部は平底だが中央がやや上がっている。胴部は曲線を帯びて立ち上がり、胴部で稜を有した後C字帯に外反する。外面胴部はヘラナデの後のナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデされている。	石英・長石他胎砂粒を含む	やや良好	明褐色	
8	欠 壺						
9	土師器 小壺 胴1/3欠	11.2 7.5 10.6	底部は平底で太直。底部は球形で、胴部で稜を持った後上方へ開く。外面はヘラナデの後のナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデが観察される。	長石他胎砂粒を少量含む	良好	褐色	
10	土師器 壺 胴一部分欠	25.9 8.9 25.7	口は底唇全体に直り厚く、胴部は緩やかに立ち上がり口縁は強く外反する。胴部外面はヘラナデ、口縁部はヨコナデ、内面はほとんど割離しているがヘラナデである。	長石を少量含む	良好	明褐色	
11	土師器 壺 口縁1/2欠	17.8 -	底部は丸底で、内湾しながら立ち上がり稜を有した後、内湾する大帯であるが内湾は丁寧である。器面は割離しているが器形外面はヘラナデの後のナデ、口縁と内面は密なミガキが施されている。	黒母・長石を少量含む	良好	明褐色	
12	土師器 壺 口縁一部分欠	13.0 -	底部は丸底で、器面は内湾しながら立ち上がり、明瞭な稜を有した後口縁部はゆるやかに内湾し立つ。外面胴部はヘラナデの後のナデ、口縁部・内面は丁寧なミガキが施されている。	長石を多く含む	良好	明褐色	
13	土師器 壺 底部分	11.5 -	底部は丸底、内湾しながら立ち上がり、口縁部との境で明瞭な稜を持った後、内湾する。器形外面はヘラナデの後のナデ、口縁部・内面は密なミガキが施されている。	長石・黒母を含む	良好	褐色	
14	土師器 壺 口縁1/2欠	13.7 4.1	底部は丸底。器面は緩やかに立ち上がり、稜を有した後口縁部がやや外反し立つ。外面の器面はヘラナデの後のナデ、口縁部・器面は密なミガキが見られる。	長石・黒母を含む	良好	褐色	
15	土師器 壺 底部分	11.8 4.3	底部は丸底で、緩やかに内湾した後弱い稜を有し、口縁が内湾する。外面器面はヘラナデの後のナデ、口縁・内面は密なミガキが観察される。	長石・黒母を含む	良好	褐色	
16	土師器 壺 底部分	11.2 4.0	底部は丸底で厚みがある。緩やかに立ち上がり器面と口縁部との境で明瞭な稜を持つ。口縁は内湾する。外面の器面はヘラナデの後のナデ、口縁部・内面は丁寧にミガキがなされている。	長石・黒母を含む	良好	明褐色	
17	土師器 壺 口縁一部分欠	(14.09 5.6)	底部は丸底で、器面は内湾しながら立ち上がり、稜を持った後、口縁がやや内湾しながら立つ。器面は割離している部分が多いが器形はヘラナデの後のナデ、口縁・内面は密なミガキが観察される。	長石を多く含む	やや良好	赤褐色	
18	土師器 壺 ほぼ完成形	13.5 4.3	底部は丸底で、器面は緩やかに立ち上がり器面と口縁部との境で外反気味に立ち上がるが口唇部がやや内湾している。器面はヘラナデの後のナデ、口縁部と内面は密なミガキが施されている。	長石・黒母を含む	良好	褐色	
19	土師器 壺 1/2	(13.6) 4.3	底部は丸底で、器面は緩やかに立ち上がり口縁部との境で稜を持ち、口縁は強く外反する。全体的に割離しており厚み、均質は不明だが器形外面はヘラナデ、口縁・内面はミガキが見られる。	長石・胎砂粒を少量含む	やや良好	赤褐色	
20	欠 壺						
21	土師器 壺 1/3	12.3 3.9	底部は丸底で、強く内湾しながら立ち上がり、口縁部との境で折れ、内湾している。器面は一部割離しているが、器形はヘラナデの後のナデ、口縁部・内面はミガキが観察される。	長石をわずかに含む	良好	褐色	
22	土師器 高台付 底部分破片	- (8.8)	高内面は強く外反し立つ。全体にミガキが施され、黒色処理されているが外面はほとんど割離している。	黒母・長石を含む	良好	明褐色	黒色処理 混入遺物

表30 S I - 86遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23	土師器 丸形	102 — 48	底部は丸底で、体部は曲線を抜きながら立ち上がるが踵部に近い橋を有した丸し縁部は内側に折す。体部はへう割りの後ナテで残っているが輪痕み痕を明確に折す。口縁部、内面はミガキ。	雲母・長石を含む	良好	褐色	体部に焼成後穿孔あり
24	須恵器 はねた形	90 — 89	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり縁部を導す。口縁にははねた形。唇部に段状文が2段に溝で施されている。口縁部は丸底で唇部から下はへう割りが見られる。	長石を多量に含む	良好	灰色	口縁には欠損後口縁力
25	土師器 丸形	75	唇部はその下ばまで垂直して立ち縁部が大きく開く。内外側ともへう割りの後ナテが施されている。	雲母をわずかに含む	良好	褐色	ミニチュアカ
26	瓦 部欠破片	—	長さ150cm、幅89cm、厚さ6.2cm、重さ11200g。4面にわたって筋状の研ぎ跡が残されている。	—	—	—	—
27	白 瓦	—	長さ33.3cm、幅22.4cm、厚さ5.7cm、重さ6910g。片面が非常に使い込まれている。	—	—	—	—
28	土製品 厚板状瓦、瓦形	—	長さ1.9cm、幅1.9cm、孔径0.5cm、重さ6.3g。孔の周囲は凹み取られている。	細かい	良好	褐色	—

表31 S I - 92遺物観察表

番号	器形	法量・形態の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土製品 特種 瓦形	長さ19cm、厚さ2.8cm、孔径0.9cm、重さ61.3g。断面台形の特種瓦。	細かい	良好	褐色	—

表32 S I - 95遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小型 1/2	63.0 (1.2) 12.7	底部は平底で、内湾しながら立ち上がり頸部は「く」の字状に外反し、口唇部は内湾し上げられている。頸部と口縁部に紐状の痕跡を持つ。底部は中央から外側にかけて下位がへう割り、上位は割りの後ナテ、口縁部は内外面ともヨコナテ、胴部内面はヘラナテ。	雲母・右美長石を含む	良好	褐色	—
2	須恵器 丸形	42.3 (1.4) 3.6	底部は平底で、体部は直線的に開く。器部は歪れているが、内外側とも口縁部、底部は手持ちへう割り。	雲母を多く他砂粒を含む	良好	褐色	—
3	須恵器 丸形 胴部一部欠	12.9 (6.6) 3.7	底部は平底で、中心が非常に薄い。体部は直線的に開く。器部は断面が鋭いが口縁部が見える。底部及び体部下縁は手持ちへう割り。	雲母・他砂粒を含む	良好	淡灰色	—
4	須恵器 丸形 胴部1/2	13.2 (6.3) 4.4	底部は平底で、体部は直線的に開く。頸部は口縁部であるが厚くしておりその厚さは不明でない。底部及び体部下縁は手持ちへう割りがなされている。	雲母を多く他砂粒を少量含む	良好	灰色	—
5	須恵器 丸形 口縁部破片	28.2 — —	胴部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の字状に外反し口唇部は面をなす。外面胴部は傾位の平行ナテ。	長石を含む	良好	淡灰色	—
6	須恵器 丸形 底部破片	15.8 — —	底部は平底で、胴部は直線的に開いている。底部下縁はへう割り胴部下縁は胴部の平行ナテ。	雲母を多く他砂粒を含む	良好	明褐色	—
7	瓦	—	長さ6.5cm、幅5.1cm、厚さ2.6cm、重さ40.0g。全面研磨される。	—	—	—	—

表33 S I - 102遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 丸形 胴部破片	— — —	胴部は緩やかな曲線を抜き、頸部で明確な橋を持たずに口縁に向かって開く。胴部外面はへう割りの後ナテ、胴部から口縁にかけての内外面はヨコナテ、胴部内面は器部が割れているがへう割りによるナテ。	右美・雲母少量、他砂粒を含む	やや良好	褐色	—
2	土師器 丸形 口縁部破片	— — —	口縁部は緩やかに開く。胴部外面は割りの後ナテ、胴部から口縁にかけての内外面はヨコナテ、胴部内面はヘラナテ。	右美をわずかに含む	やや良好	褐色	—
3	土師器 丸形 口縁部破片	21.6 — —	口縁部はわずかに内湾し上げられている。整形はヨコナテ。	右美・長石他砂粒を含む	やや良好	褐色	—

表34 S1-102遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 高さ (cm)	成・形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	土師器 杯 宛形	12.7 — 3.6	底部は平底。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は屈曲して立つ。外部外面はヘラ削り、外面口縁部・内面は磨滅している為単位は不明だがミガキが施されている。	灰石を多く含む	良好	褐色	
5	土師器 杯 宛形	12.4 — 4.5	底部は平底。体部は緩やかに外反しながら緩急を有した後、口縁部で内湾している。外面体部はヘラ削り、口縁部外面は細いミガキが施されている。	灰石・雲母を多く含む	良好	褐色	
6	土師器 杯 口縁1/2	11.6 5.2 4.5	底部は平底に近い平底。内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに内湾する。外面はヘラ削り、口縁部は割離が激しいが口縁部で緩やかに内湾する。外面はヘラ削りだが、口縁部のみ口縁部がなされているか。内面は単位不明だがミガキ。	灰石・雲母を少量、他砂粒を含む	やや良好	褐色	
7	土師器 杯 口縁1/4次	13.0 — 3.7	底部は丸底。体部は緩やかな曲線を描きながら立ち上がり、口縁部で緩やかに内湾する。外面はヘラ削りだが、口縁部のみ口縁部がなされているか。内面は単位不明だがミガキ。	細かい	やや不良	黒褐色	
8	土師器 杯 口縁1/4次	13.0 — 3.7	底部は丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、緩急を有した後、口縁部は外へ開く。体部外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部外面と内面はミガキが施されている。	灰石他砂粒を含む	良好	褐色	
9	土師器 杯 口縁1/2	(13.2) — 4.2	底部は丸底で体部は内湾し、口縁部で折れて直線的に立つ。器部はほとんど割離しているため、単位・方向とも不明だが全面的にミガキが施されている。	細かい	やや不良	赤褐色	
10	土師器 杯 口縁1/4	13.6 — —	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部との間に明確な縁を持つ。口縁部は外へと大きく開く。外面体部はヘラ削りの後ナデ、口縁部と内面は丁寧なミガキ。	灰石を含む細かい	良好	褐色	
11	土師器 杯 口縁1/4次	11.6 — 4.2	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、緩やかな縁を境に口縁部はわずかに内湾する。外面は全体的に荒れている。体部外面は細いヘラ削り、口縁部から内面は単位は不明だがミガキ。	細かい	良好	暗褐色	
12	土師器 杯 口縁1/4次	12.3 — 3.5	底部は丸底。緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で折れて内湾する。外面の体部はヘラ削りの後削り痕を消すようにナデられている。口縁部と内面はミガキ。	灰石・雲母を含む	良好	暗褐色	
13	土師器 杯 口縁1/2	13.0 — 4.8	底部は丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、緩急を有した後口縁部は外反する。外面体部はヘラ削りの後ナデ、口縁・内面は器部の荒れが激しいがミガキが施されている。	灰石を多く含む。細かい	良好	明褐色	
14	無患器 杯 ほぼ宛形	10.9 — 4.1	底部は丸底で、内湾しながら立ち上がり受け部で横に突出している。口縁部は内湾し口縁部で突っ出ている。口縁部外面と内面は面削りヘラ削り。	砂粒を含む	良好	灰色	
15	土師器 厚状十掛 宛形	— — —	長さ2.2cm、幅2.0cm、孔径0.8cm、重さ18.9g。両側から押されたようにつぶれている。孔は一度で削りられている。孔の修理は両面とも面削りされている。	細かい	良好	褐色	

表35 S1-107遺物観察表

番号	器形 遺存度	法・形の特徴	備考
25	石製品 紡錘車 宛形	長さ28cm、厚さ15cm、孔径0.7cm、重さ36.9g。滑石製。断面台形の紡錘車。	

表36 S1-108遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 高さ (cm)	成・形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺・口縁一 底部の部	(20.0) 8.2	口縁部の狭み1/3は割離である。底部は本素直。胴部は緩やかに内湾する。口縁部外面は口縁部、胴部外面1/3は削りの後ナデ、胴部中位より下位はミガキ、胴部内面はナデが施されている。	灰石・雲母を少量、砂粒を含む	やや良好	明褐色	
2	須恵器 壺 尖形	16.0 — 3.6	御宝珠のつまみがつく。全体として扁平である。中心から直線的に広がって外反気味に開く。胴部はやや内湾して立つ。口縁部外面は面削り。	雲母を含む	良好	淡灰色	

表37 S1-110遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 高さ (cm)	成・形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土師器 杯 1/2	(8.6) (4.0) (10.1)	直線的に立ち、字ばで外反し、緩急を有した後口縁部は更に外反して開く。外面は手によるナデが施され、口縁部は口縁部、内面はヘラ削りによってナデが施されている。灰褐色は見られない。	灰石を多量を含む	良好	褐色	フィゴ頭口・底なし

表38 S I-112遺物観察表

番号	器形 名称 寸法	口徑 底徑 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 壺 実形	16.0 9.0 25.5	胴部中央に最大径を持つ。頸部から口縁部にかけては緩やかに外反し、大きく開く。肩部から口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は曲面が剥落しているがへう割りの後ナデ。内面はヘラナデ。	砂粒・炭 (φ 5mm) 長石を含む	良好	褐色	
2	土器 壺 ほぼ実形	19.8 9.2 19.5	胴部は緩やかな曲線を描き、口縁はあまり大きく開かない。肩部は平底。胴部外面はへう割りの後、広いミガキ。その後口縁内外面にヨコナデがなされている。胴部内面はヘラによるナデ。	砂粒を含む	良好	褐色	
3	土器 壺 実形	19.5 9.8 19.2	全体的に作りが堅く、器形は定んでいる。底部は平底。胴部は緩やかに立ち上がり、口縁は大きく開かない。体部外面はへう割りの後ナデ、その後口縁内外面をヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	長石を多く 石英を少量	良好	褐色	
4	土器 壺 底部欠1/2	(15.9) -- --	胴部上位に最大径を持つ。口縁部は緩やかに外反して開く。肩部に緩を持つ。胴部外面はへう割りの後ナデ、口縁部内外面はヨコナデ。内面胴部はヘラナデが明確に観察される。	砂粒を多く 含む	良好	褐色	
5	土器 下部 欠	(22.2) -- --	胴部は緩やかに内湾して立ち、口縁は大きく開く。胴部外面は器形の直線が感じられるがへう割りの後ナデ。口縁部内外面はヨコナデ。内面胴部は緩方向の広いミガキ。	長石他砂粒 を含む	良好	褐色	
6	土器 壺 1/2	(11.0) -- --	底部は丸底。体部は内湾し、口縁部で短く内傾している。外面は器形が荒れているがへう割りの後ナデ、内面はミガキがなされている。	他微量の炭 石・長石 を含む	良好	明褐色	
7	土器 壺 一部欠	(10.0) -- 4.2	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、横を有した後口縁は内傾する。体部外面はへう割りの後ナデ、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ。	長石・炭等 の砂粒を含む	良好	暗褐色	
8	土器 壺 1/2	(11.0) -- --	底部は丸底。体部は内湾し、口縁部で短く内傾している。外面は器形が荒れているがへう割りの後ナデ、内面はミガキがなされている。	他微量の炭 石長石を含む	良好	明褐色	
9	土製品 埴土・実形	長さ2.8cm、幅2.5cm、孔径0.6cm、重さ11.7g。作りが粗くみがある孔の周囲は削り取られていない。		砂粒・炭(φ 5mm)を含む	やや 良好	明褐色	
10	土製品 小玉・実形	長さ0.9cm、幅1.1cm、孔径0.3cm、重さ1.54g。種小サイズが作りはとでも丁寧であり、孔の周囲の削りもされて					埴土片
11	土製品 埴土・実形	長さ2.8cm、幅2.7cm、孔径0.6cm、重さ12.9g。簡単にナデられている孔の周囲は削り取られていない。		細かい含む	良好	明褐色	

表39 S I-119遺物観察表(1)

番号	器形 名称 寸法	口徑 底徑 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 壺 胴部上半1/3	(20.4) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し口唇部はやや積み上げられている。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ。胴部内面は横方向のヘラナデ。	炭粒を多く 包砂粒を含む	良好	明褐色	
2	土器 壺 口縁部破片	(23.0) -- --	口縁部は「く」の字状に外反し口唇部の積み上げは顕著である。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はへう割りの後ナデ。内面はヘラによるナデ。	砂粒を多く 含む	良好	明褐色	
3	土器 壺 口縁部破片	(22.6) -- --	口縁部は「く」の字状に大きく外反し、口唇部は明確に積み上げられている。内外面とも口縁部はヨコナデ。外面はへう割りの後ナデ、内面はヘラナデ。	砂粒・炭 (φ 5mm) を含む	良好	明褐色	
4	須恵器 壺 胴部一底部	(22.0) -- --	底部は平底。胴部は内湾しながら立ち上がる。胴部外面は平行タテタテ、胴部下半は横方向のへう割りの後ナデ。内面はナデ。	長石を多く 含む	良好	灰色	
5	須恵器 瓦 胴部一胴中	-- -- --	比較的小形で、最大径は16cm程度である。積耳は板状を呈し、穿孔の痕(朱江流)が見られる。板は胴部から胴部中央にかかる。内面には口唇口縁が明確に見える。	細かい	良好	濃緑	
6	須恵器 壺 外環部欠	(15.6) -- --	胴部に向かって大きく外反する。頸部部はやや内側に湾かって立つ。3か所に方形の透かしが穿たれている。	炭石・砂粒 を少量含む	不良	淡灰色	
7	須恵器 壺 外環部欠	-- -- --	胴部に向かって大きく外反する。方形の透かしが3か所に施されている。	炭石・砂粒 を少量含む	不良	淡灰色	
8	須恵器 壺 外環部欠	(13.6) -- --	胴部は大きく広がっている。頸部はやや内湾して立っている。	炭粒を少量 含む	不良	淡灰色	
9	須恵器 壺 つまみ部	-- -- --	ややつぶれた半球状のつまみ部である。	砂粒を少量 含む	良好	灰色	

表40 S I-119遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整 形の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須恵器 坏 1/4欠	12.6 6.0 4.0	底部は平底。体部、口縁部はやや外反気味に固く。底部外面は手持ちへう折り、体部は内外面ともにロクロ風が明顯に残る。	砂粒を少量含む	良好	灰色	
11	須恵器 坏 体部1/2欠	(13.9 8.5 4.0)	底部は平底。体部、口縁部は急峻的に固く。底部外面は手持ちへう折り、体部は内外面ともにロクロ。	雲母・砂粒を含む	不良	暗灰色	
12	須恵器 坏 体部1/2欠	14.6 8.8 4.9	底部は平底で、回転へう切りの後、へう折りがなされている。体部は急峻的に固く。体部は内外面ともにロクロ。	砂粒・糠(ふるま)を含む	良好	灰色	
13	須恵器 坏 1/3	13.5 8.5 3.8	底部は手持ちへう折り、体部外面の下縁は四方向の手持ちへう折り、他内外面はロクロ。	砂粒を少量含む	良好	灰白色	
14	土製品 土埴、1/4	長さ(5.2)cm、幅(4.5)cm、孔径1.2cm、重さ40.9g。紡錘形の土埴。		細かい	やや良好	褐色	

表41 S I-120遺物観察表

番号	器形 遺存度	法量・形 造の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
9	土製品 紡錘 完全形	長さ5.3cm、厚さ2.0cm、孔径0.6cm、重さ56.0g。断面台形の紡錘中。	雲母・長石を含む	良好	褐色	

表42 S I-123遺物観察表

番号	器形 遺存度	法量・形 造の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
5	土製品 紡錘 完全形	長さ4.0cm、厚さ2.2cm、孔径0.8cm、重さ33.5g。断面台形の紡錘中。やや歪みがある。	雲母・長石を含む	良好	明褐色	

表43 S I-125遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整 形の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
11	土製器 坏 胴部欠	6.1 -	底部は平底だが、中央がやや窪く。体部は内凹しながら立ち上がる。内面に「×」印の彫刻あり。底部は回転系切り。	細かい	良好	褐色	

表44 S I-126遺物観察表

番号	器形 遺存度	法量・形 造の特 徴	備考
7	鉄製 刀子、一部	長さ66.0cm、幅1.4cm、厚さ0.7cm、重さ11.6g。異国産。	

表45 S I-132遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整 形の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上部器 受、口一 半位破片	(21.5 - -)	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部の痛み上げは明瞭である。胴部の張りは弱い。口縁部内外面はロコナテ、外面胴部上縁はロクロ回転による擦痕。下半はへう折り。内面はナテ。	砂粒を多量に雲母を少量含む	良好	明褐色	
2	下部器 受 口縁部破片	(23.5 - -)	口縁部は「く」の半状に大きく外反し、口唇部は上方に痛み上げられている。口縁部の整形はロコナテ、胴部外面はナテ、胴部内面はへう折り。	砂粒を多量に、雲母を少量含む	良好	褐色	
3	土製器 付付 1/3	(12.7 6.9 2.0)	内部分は厚く直立する。器部は大きく固く。ロケは球形で、全面にミガキが施され、黒色処理されているが、外面は摩滅されておりほとんど残らない。	細かい	良好	明褐色	黒色処理
4	須恵器 一 部欠	15.0 - 3.5	つまみは宝珠状で、天上部から底部にかけては緩やかに内湾して大きく開き、滑部で内側に折れる。逆しはない。内外面ともにロクロ風が見える。	砂粒を含む	良好	灰色	

表46 S I -132遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 径高 (cm)	成・器形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
5	須恵器 胴部1/4	(12.9) —	体部はやや内約しなから立ち、口縁部は直線的に開く。外周はロクロ整形の残像へう有り。	細かい	良好	灰褐色	
6	支 下部欠	長さ13.6cm、最大径8.8cm、最小径3.6cm。へうによって面取りされている。		細かい	良好	褐色	
7	支 下部欠	長さ6.8cm、最大径3.2cm、最小径1.0cm。へうや手によるナデがなされている。		細かい	良好	褐色	
8	土製 十鉢、1/2	径3.8cm、孔径1.0cm、重さ10.9g。棒状の工具によって穿孔されており、表面は丁寧にナデがなされている。		細かい	良好	明褐色	
9	土製 十鉢、1/2	長さ2.0cm、径1.8cm、孔径0.6cm、重さ6.5g。小形である。孔は真っ直ぐであるが、その側面は面取りされていない。		細かい	良好	褐色	

9世紀代の遺物を出土した住居跡はS I -14・23・75・84・85・93・95・108・132・133の10軒である。8世紀代に比べ遺構数は減少している。この内S I -85・95・108・132の4軒について図を掲載した。遺物の組み合わせでは、土師器では甕・皿・高台付皿、須恵器は甕・甕・甕・甕・高台付坏で所謂灰胎陶器は検出されていない。

土師器の甕では小形の甕が少量確認されている。また、常総甕が依然として残るものS I -95に見られる大形のものに加えて、小形のタイプが出現している。さらに、S I -132ではロクロ使用の須恵器を模倣した甕が出土している。口唇部の形状は常総甕同様明瞭な積み上げが行われる。坏ではS I -75で小形の皿状のものが1点出土している。S I -132の高台付皿は黒色処理が施されるもので、他の遺物との同伴関係より初期的なタイプと考えられる。

須恵器甕では口縁部の最大径が胴部最大径よりも大きい鉢状を呈する資料が見られる。同様の器形で底部に複数の孔を有する甕も出土している。蓋はS I -108・132で出土している。擬宝珠状の積み部分は高く、返りはない。坏はS I -85で良好なセットが出土しているが、口径と底径の比が2:1以上となるもので底部は回転へら切りの後にへらナデされる。3の資料は油煙の付着が見られ、灯明使用の坏である。

本期の遺物を含め、木遺跡では墨書が施されている資料は1点も確認できていない。隣接する思川遺跡でまとまった資料が出土しているにもかかわらず、出土が無い点は不思議である。一般に最も墨書が見られる時期の資料が少ないことも原因であろうか。

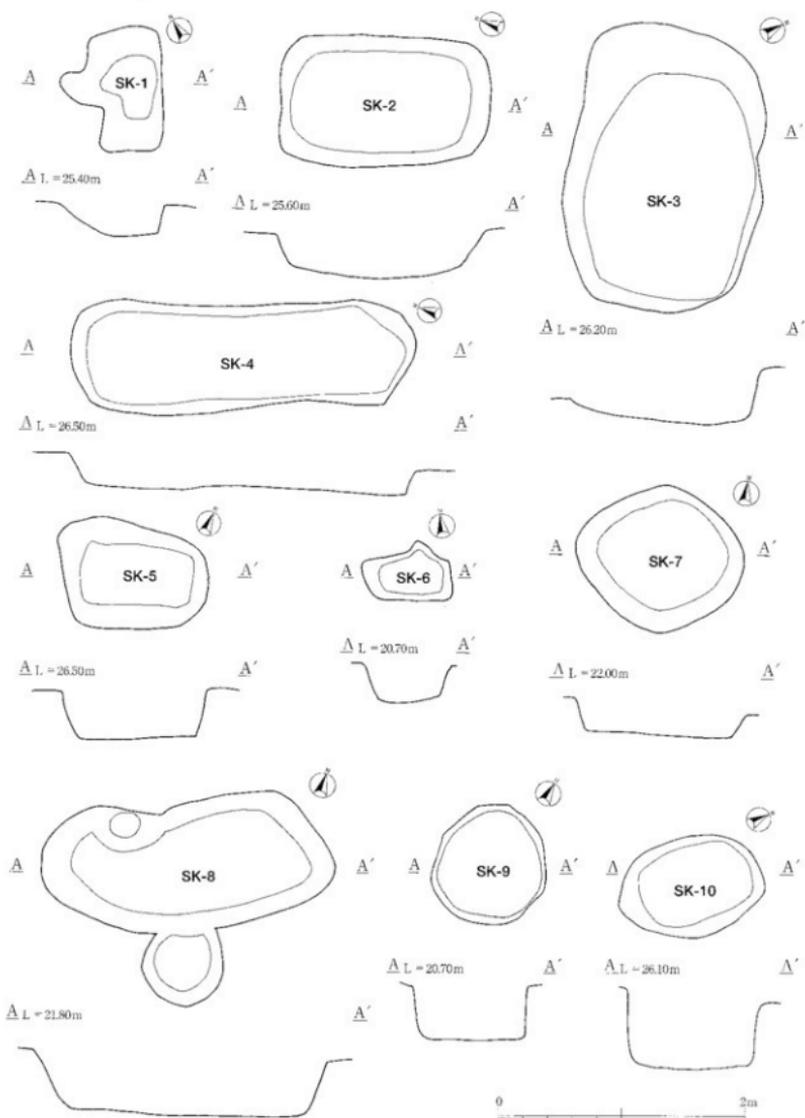
特筆される遺物としてS I -75より土鈴が1点出土している。

10世紀代の住居跡はS I -13・27・39・131の4軒が検出されている。この内S I -27・39について図を掲載した。遺物の組み合わせでは、土師器甕・皿・高台付坏、須恵器甕がある。

土師器甕は破片で混入した資料が多く明確に捉えられるものは無かった。高台付坏はS I -27・39で検出されており、足高で「ハ」の字に開く高台を有する。S I -131のように内面に細かな磨きが施され、黒色処理されるものも見られる。

その他、時期不明の住居跡として取り扱ったものの中には比較的良好な資料を出土したものもあったが、時期の異なる遺物の混入が見られる為に、以下の住居跡は時期不明として取り扱っている。

S I -22・31・32・55・62・81・96~99・115・128・129・134



第33図 SK-1~10

第3節 土坑

第1項 遺構

本遺跡に於て検出された土坑は33基である。その分布は、遺跡全体に渡るものであるが、南西側平坦部分に若下の集中が認められるものの、取り立てて偏在する傾向は認められない。しかしながら、土坑の形状別の分布で見れば、南西側及び南東側の地域では不整形円形や長方形を呈するものが多く、S D - 7 ~ 13で区切られる北東側の調査区域では円形の土坑が主体となっており、明らかに地区での差が認められる。

形状では、①方形若しくは隅丸の方形を呈するもの、②方形を呈し、一部に半円形の突出部が付されるもの、③円形若しくは楕円形を呈するもの、④不整形を呈するもの、の4タイプに分類される。

①タイプ (SK-2・3・4・5・7・11・14)

分布はE-24グリッド周辺とK-26グリッド周辺の2カ所に集中が見られる。断面形は緩やかな箱形で掘り込みは明瞭である。覆上は概自然堆積である。遺物を出したものはSK-4・5の2基のみであった。

②タイプ (SK-1・6)

分布は南西側と南東側の両端部に離れて位置する。2基が検出されているが、いずれも長軸側が1m前後の小形で、断面形は箱形である。内面に粘土の貼り付けは確認できていないが、若干の焼土が覆土中に確認されている。時期を決定する遺物はなく、骨や炭の出上もない。

③タイプ (SK-9・10・13・23・24・28・30~38)

分布は北側に集中の傾向が見られるが、規模がやや大きいものが南側に、また小さいものは北側になる傾向がある。断面形は浅い皿状になるものと、箱形でしっかりした掘り込みを呈するもの双方がある。年代決定ができる遺物を出したのはSK-31・35の2基である。

④タイプ (SK-8・16)

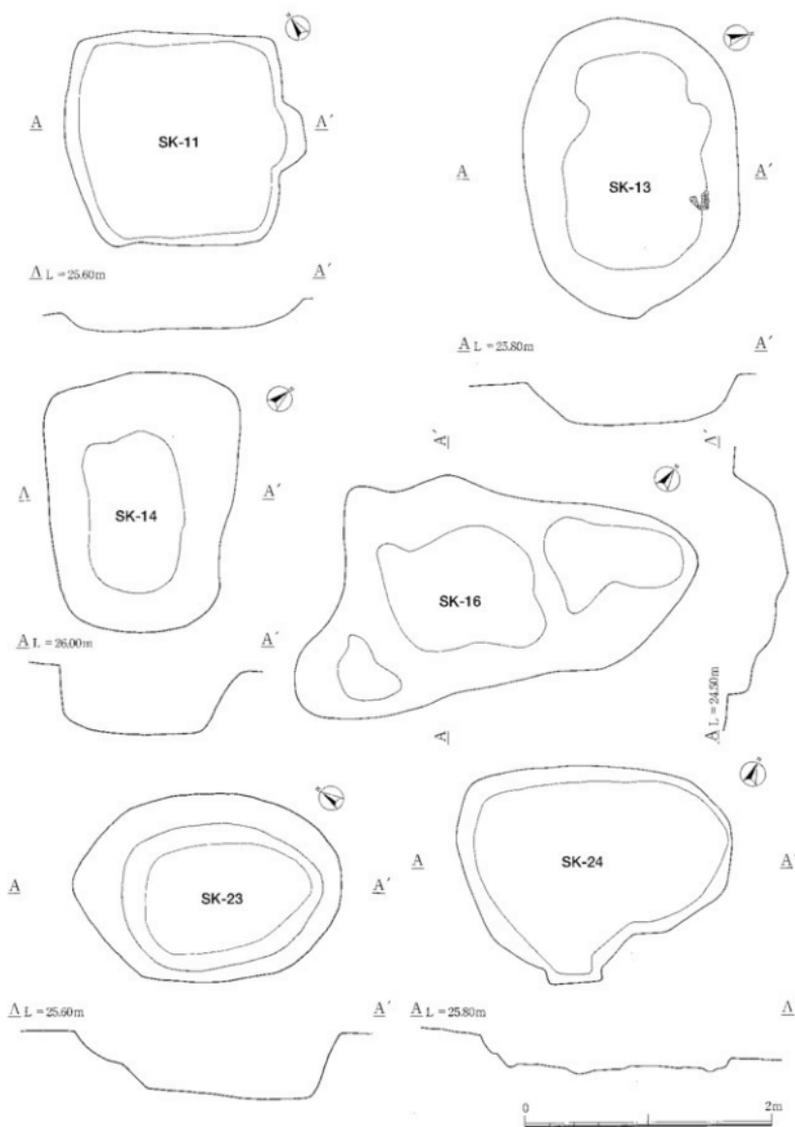
分布は③タイプ同様に南側の東と西の両端に離れて検出されている。2基が検出されているが、いずれからも時期を決定できる遺物の上はなかった。

第2項 出土遺物

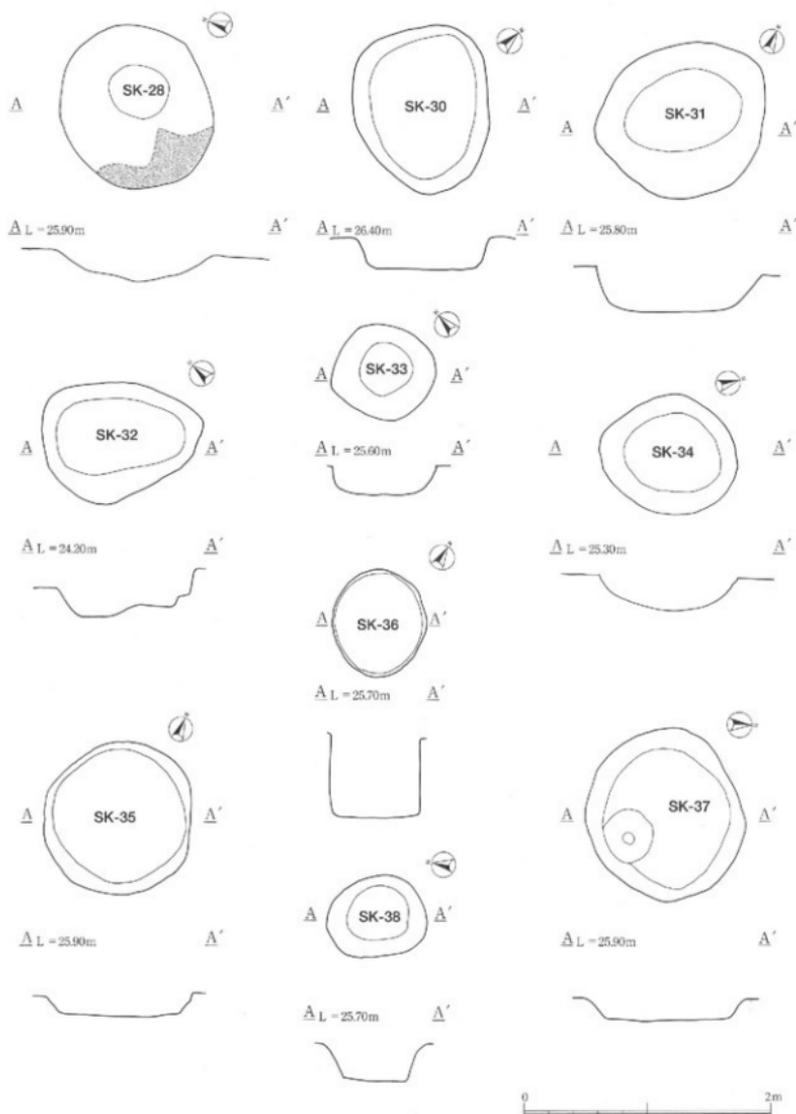
遺物の出土があったのはSK-4・5・21・31・35の5基で、この内SK-4・31・35では遺構の所属時期を決定させる遺物の出土があった。遺物はいずれもロクロ整形の土師器の小形皿で、回転糸切りの切り離しが行われている。所属時期は10世紀中葉以降と考えられる。

該期の住居跡の分布との比較では、その状況に関連性は見いだせない。

S I - 5出土の遺物は鉢形の土師器で古墳時代の所産であろう。また、SK-21では球状と管状の土罐が各1点ずつ出土しているが、調査時のミスで遺構の位置が確認できていない。所属時期も不明である。



第34図 SK-11・13・14・16・23・24



第35圖 SK-28・30~38

表47 土坑一覧表

SI	グリッド	長軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	深さ	備 考
1	E-25	N-30°-E	不整長方形	8.02×0.83	0.25	火葬墓
2	E-24	N-20°-W	長方形	1.69×1.09	0.38	SI-1と重複
3	K-26	N-56°-E	長方形	2.29×1.62	0.45	SI-3と重複
4	K-25	N-22°-W	長方形	2.80×0.84	0.30	
5	K-24	N-65°-E	楕円形	1.18×0.88	0.47	
6	S-22	N-80°-W	不整長方形	0.70×0.48	0.28	火葬墓
7	Q-25	N-65°-E	楕円形	1.19×1.16	0.17	SX-3と重複
8	Q-25	N-55°-E	不整楕円形	2.40×1.67	0.25	SX-3と重複
9	H-22	N-55°-E	不整楕円形	2.40×1.67	0.44	
10	H-20	N-22°-W	楕円形	1.18×0.83	0.54	
11	D-23	N-56°-W	方形	1.93×1.72	0.25	SI-49と重複
12	欠番					
13	E-23	N-13°-W	楕円形	2.45×1.73	0.43	SI-40と重複
14	E-23	N-31°-E	長方形	2.12×1.50	0.50	
15	欠番					
16	C-24	N-42°-W	不整楕円形	3.42×1.78	0.49	
17~22欠番						
23	J-15	N-39°-W	楕円形	2.18×1.53	0.51	
24	I-20	N-66°-E	不整楕円形	2.17×1.88	0.24	
25~27欠番						
28	M-14	N-12°-E	円形	1.33×1.24	0.15	
29	欠番					
30	H-23	N-43°-E	円形	1.39×1.11	0.28	
31	H-15	N-56°-E	円形	1.41×1.25	0.37	
32	P-12	N-43°-E	楕円形	1.32×1.01	0.33	SI-98と重複
33	H-14	N-50°-W	円形	0.85×0.77	0.18	
34	I-13	N-17°-E	円形	1.10×0.97	0.20	
35	M-11	N-22°-E	円形	1.23×1.18	0.22	SI-129と重複
36	M-11	N-30°-W	円形	0.88×0.75	0.70	SI-131と重複
37	O-11	N-60°-E	円形	1.89×1.23	0.22	SI-125・126と重複
38	G-16	N-10°-E	円形	0.79×0.66	0.41	SI-99と重複

第4節 溝

本遺跡に於て検出された溝は19条である。遺構個別の平面図については紙面の都合上、付図1の全体図中に掲載した図をもって代表させた。尚、断面図は第37図に掲載している。

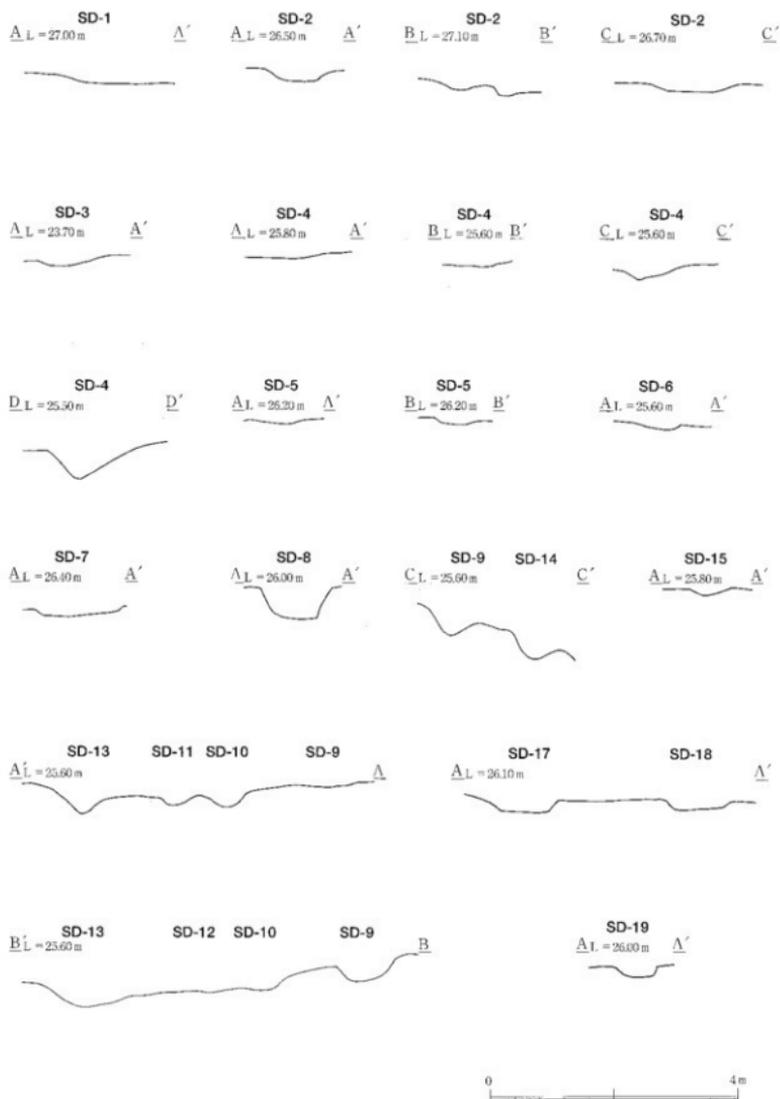
溝の配置状況では台地を寸断するかのよう横断している、SD-2、9~13、15と、台地の尾根に添って配されるSD-17~19、SD-3・4、斜面部に配されるSD-1等がある。

断面形状では、概浅い皿状若しくはじ字状である。覆上は表土に近いやや砂質のものが多いが、水が流れた痕跡を示すものはない。

各遺構共に伴う遺物の出土はなく時期は不明となっている。

表48 溝一覧表

番号	グリッド		北行方向	長さ (m)	断面形	深さ (m)	備 考
	起 点	終 点					
1	L-26	J-27	SW→NE	24.0	皿 状	0.20	SI-3・SK-3と重複
2	J-21	N-25	NW→SE	48.0	皿 状	0.20	SI-11と重複
3	D-23	C-24	SW→NE	3.7	皿 状	0.10	
4	E-22	C-21	SW→NE	30.5	Vじ字状	0.60	SI-35・52と重複
5	E-22	E-23	NW→SE	14.5	皿 状	0.10	
6	D-21	E-22	NW→SE	9.1	皿 状	0.15	SI-79と重複
7	F-19	G-20	NW→SE	10.1	皿 状	0.20	SD-8と重複
8	H-19	G-20	NW→SE	15.5	じ 字 状	0.60	SD-7・9と重複
9	G-18	I-22	NW→SW	58.6	じ 字 状	0.50	SI-64・SD-8と重複
10	G-18	I-20	NW→SE	47.5	じ 字 状	0.50	SD-11と重複
11	F-17	H-19	NW→SE	20.5	皿 状	0.20	SD-10と重複
12	H-19	I-20	NW→SE	17.5	皿 状	0.10	
13	F-17	J-20	NW→SE	47.5	じ 字 状	0.40	
14	J-21	I-22	NE→SW	6.0	じ 字 状	0.90	
15	L-12	N-14	NW→SE	20.2	皿 状	0.10	
16	H-16	I-17	NW→SE	5.0	じ 字 状	0.25	
17	J-14	G-16	NE→SW	37.0	皿 状	0.20	SI-99・102と重複
18	J-14	I-15	NE→SW	22.4	皿 状	0.30	SI-102と重複
19	L-12	J-13	NE→SW	27.0	皿 状	0.30	SI-102と重複



第36圖 SD-1~15・17~19

第5節 性格不明遺構

検出された性格不明遺構はSX-1～6の6基である。いずれも調査区域の南東側端部の斜面部に位置しており、カマドの検出はないものの、斜面の為に南側を流出した住居跡の可能性のあることはゆがめない。

尚、遺構個別の図面は紙片の都合上割愛し、付図1の全測図に位置のみ掲載している。

SX-1はN・O-24・25グリッドに於て検出されている。L字に屈曲する溝状を呈する。覆土中からは7世紀代の坏・甌・手捏土器が出土している。

SX-2はQ-25・26グリッドで検出されたもので、SI-20に近接する。やや不整形の平坦部が確認されたものである。遺物には土師器坏・皿、須恵器坏・高台付坏、球状土錘、鉄釘等が検出されており、9世紀中葉以降から10世紀中葉の所産と考えられる。

SX-3はR-24グリッドで検出されたものである。SI-21の北西側に近接する。不整形の平坦部分として捉えられている。柱穴状の掘り込みも確認されており住居跡の可能性もある。遺物は須恵器高台付坏が1点出土している。遺物より9世紀の所産と考えられる。

SX-4はT-24グリッドに於て僅かな平坦部の広がりをもって検出されたものであるが、検出遺物も無く時期不明である。

SX-5はU-23・24グリッドに於て検出されたものである。南北幅凡そ7mの平坦部分が方形に広がるもので住居跡である可能性が高い。カマドの検出は無い。遺物は土師器の坏3点が出土しており、遺物の特徴より7世紀代後半の所産と考えられる。

SX-6はT-22グリッドに於て検出されたものである。北西から南東方向に長い、長方形を呈する平坦部分の広がりをもって確認されたものである。やはり住居跡の可能性はあるが、カマドは確認されていない。

第6節 遺構外出土遺物

遺構以外から出土した遺物、及び遺構に伴わない遺物について本節で説明を行う。尚、詳細については遺物観察表にまとめた。

旧石器時代～縄文時代草創期の資料としては、ナイフ形石器1点・尖頭器が検出されている。

1のナイフ形石器はやや褐色味を帯びた乳白色のメノウの縦長剥片を素材としている。基部側の左側縁を刃部とし、残る2側縁に刃潰しを施している。刃部は斜行する。

所謂、茂呂型ナイフ形石器である。県内の資料では勝田市武田西端遺跡・鹿島町厨台No13遺跡出土遺物に類例を見ることができる。

2は縄文時代草創期の尖頭器である。表皮を大きく残すガラス質安山岩の剥片を素材とするもので、側縁より剥離を行い、表皮の2分の1ほどを剥がした段階で製作を放棄したと考えられるものである。側縁の刃部は直線的で表皮側の剥離は長い。形状より草創期の資料と判断した。しかしながら、本資料以外に該期の資料は確認されおらず本遺跡内で製作が行われていたものとは考え難い。

ガラス質安山岩については、近年の研究で大洗周辺域に於てその産出が知られており、本資料も当該地域産出の石材が持ち込まれたものと判断される。

縄文時代の遺物では土器片9点と石器4点が出土している。該期の遺構はまったく検出されておらず、検出された僅かな資料より、足跡を垣間見ることができる。

遺物の1は太い沈線により文様が描かれる田戸下層式土器で、早期の資料はこれ1点であった。

2・3は胎土中に織継が混入されるもので、地文に縄文が施文されその上に肋骨文が描かれる。黒浜式でも新しい段階の資料であろう。

4～9は浮島式土器である。このうち4～5は変形爪形文が施文され、6・7には貝殻腹縁による鋸歯状文が施文される。文様構成より浮島I b～II式と判断した。

10・11はいずれもチャート製の石鏡である。基部の挟りが浅く、両側縁が緩やかに内湾する凹基三角鏡である。10の方が長身で、薄く作りが良い。

12は硬質の砂岩製の礫器若しくは核である。端部に片面からの剥離が2回以上行われ、先端部分はやや潰れている。表面には僅かに擦痕が認められる。

13は安山岩製の磨石である。2分の1を欠損している。側面は使用によって磨り減り面取られたような様子が立つ。裏面には凹みが1孔確認され、側面には敲きによる潰れが見られる。

弥生時代の遺物では3点の破片を提示している。S I - 51出土遺物の中に見られなかった器種について掲載している。

1は壺形土器の口縁である。上層吉式の段階で壺形土器の資料と考えられる。口縁部には縄文が施文されるが瘤は貼付されない。

2は条線による器面の整形を行うもので1と型式は異なる。

3は底部でS I - 51出土資料と同様である。

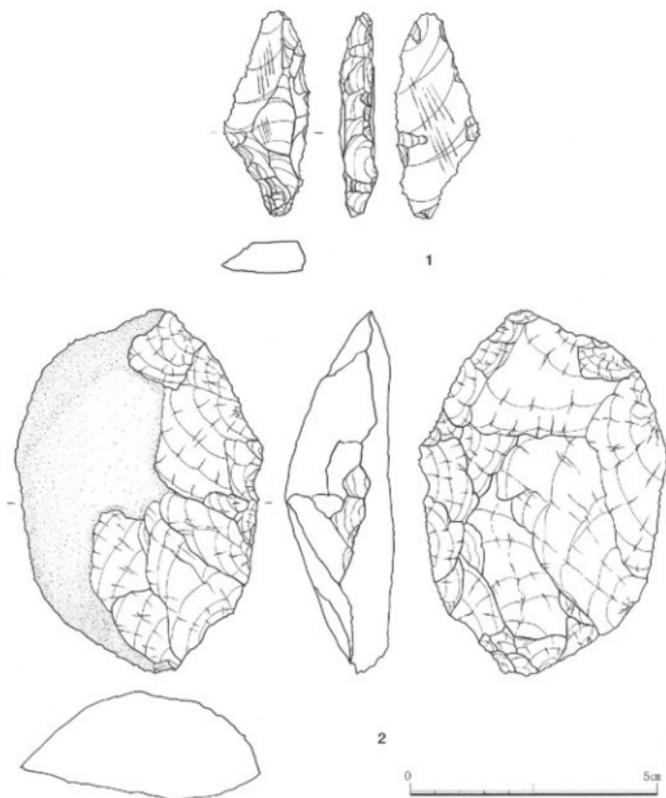
歴史時代の遺物では土師器皿1点と球状土鍾2点を提示した。

1は体部が外反する小形の皿で底部は回転糸切りによる切り離しが行われている。同様の遺物はSK - 31等で出土しており、10世紀中葉以降の遺物と判断される。

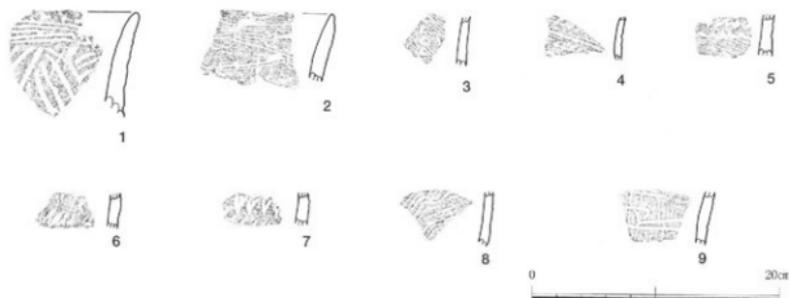
2・3は球状土鍾(土玉)である。本報告書では、土玉の使用目的について漁労具として取り扱っているが何の根拠もない。本遺跡では大形で管状を呈するものと2種類が確認されている。これらの遺物の所属時期についてはさまざまな遺構の覆土から検出されており、時期も特定できてはいない。

近世の遺物では陶器1点と寛永通宝1点がある。

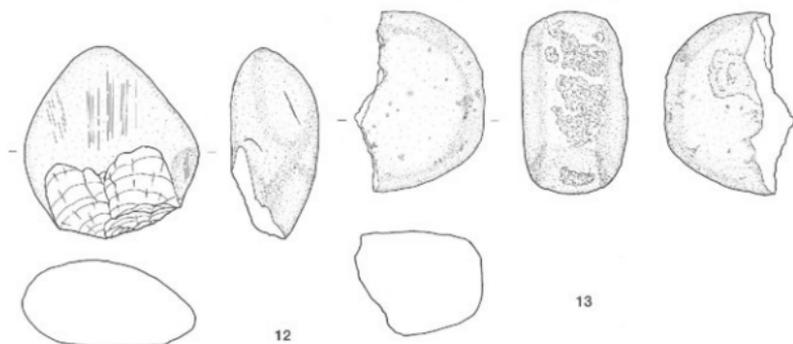
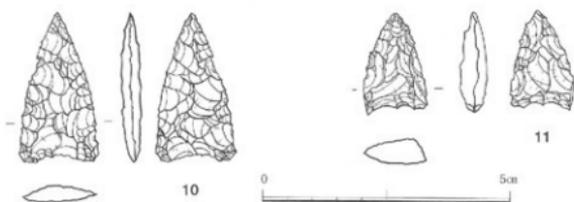
1の陶器は白色の生地に灰釉が被る。



第38圖 遺構外出土旧石器時代遺物



第38圖 遺構外出土縄文時代遺物



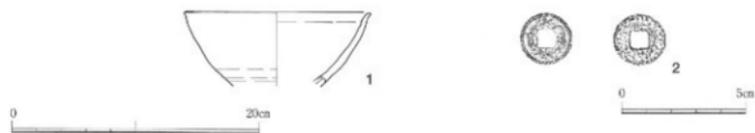
第39圖 遺構外出土縄文時代遺物



第40圖 遺構外出土弥生時代遺物



第41圖 遺構外出土古代・歴史時代遺物



第42圖 遺構外出土近世遺物

表49 遺構外出土旧石器時代遺物観察表

番号	種類	石材	方量	特徴
1	ナイフ形石器	メノウ	長さ41cm、幅17cm、厚さ07cm。	
2	石槌木製品	黒色旗雲安山岩	長さ74cm、幅50cm、厚さ2.2cm、重さ85.54g。表皮を焼し、縦線に溝部を作出している。	

表50 遺構外出土縄文時代遺物観察表

番号	器形	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	太い沈線	砂質	良好	暗褐色	田戸下層
2	深鉢口縁	粘着文。	繊維	良好	褐色	関山
3	深鉢胴部	粘着文、円筒刺突。	繊維	良好	褐色	関山
4	深鉢胴部	梨形爪形。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅰb。
5	深鉢胴部	梨形爪形・平行沈線。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅰb。
6	深鉢胴部	貝殻紋線刺突文。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅱ
7	深鉢胴部	貝殻紋線刺突文。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅱ
8	深鉢胴部	平行沈線(波状)。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅱか
9	深鉢胴部	太い沈線。	砂質	良好	褐色	浮島Ⅱか
10	円蓋三角張	チャート 長さ3.0cm、幅1.6cm、厚さ4.0cm、重さ1.38g。側縁は丸みを持ち、基部の縁りは浅い。				
11	凹蓋三角張	チャート 長さ2.1cm、幅1.7cm、厚さ3.1cm、重さ1.94g。側縁は丸みを持ち、基部の縁りは浅い。				
12	漆器	砂質 長さ7.4cm、幅5.1cm、厚さ2.2cm、重さ237.38g。2～3枚の薄片を刺している。				
13	炭石	安山岩 長さ7.5cm、幅5.2cm、厚さ4.3cm、重さ232.6g。全面によく研かれる。下層には敷きの痕が残る。				

表51 遺構外出土弥生時代遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	器 口縁部破片	-	折り返し口縁の裏面には早期ししが施文され、下層部には筒状のつまみが施される。	白色砂粒を多く含む	良好	淡褐色	後期
2	器 胴部破片	-	平行沈線による条線。	粗砂粒多い	良好	褐色	後期力
3	器 底部破片	-	胴下層部が突出するもので、底部は木炭痕。胴部下層は早期しRの施文が施文される。	砂粒多い	良好	暗褐色	後期

表52 遺構外出土古代・歴史時代遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土製器 小皿 破片	(10)29 58 20	底部は平底だが中央がやや厚く、側部は反りながら大きく開く。状部は唇状縁切り。	細かい	良好	褐色	
2	土製器 磁器鉢、笠形	長さ26cm、厚さ23cm、口径6.5cm、重さ15.6g。上下から軽く押されている。		細かい	良好	褐色	
3	土製器 磁器鉢、笠形	長さ20cm、厚さ18cm、口径6.6cm、重さ6.5g。形はいびつ。孔の周囲は掘取りされていない。		細かい	良好	褐色	

表53 遺構外出土中・近世遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	灰陶器 平碗 体部破片	(15)0 -	内面しながら立ち上がり、口縁部は内面で縁を持ち、外反する。外面下層は露胎。その他は滑面付。	細かい	良好	白色	
2	鉄貨 寛永通宝	径21cm、孔径07cm、重さ1.2g。					

第2章 小 結

検出された遺構・遺物から見た遺跡の概観

本遺跡で検出された遺構は住居跡121軒、土坑26基、溝19条、性格不明遺構6基であった。古墳並びに墓坑と判断されるものもなく、遺跡の種類は概ね集落跡といえる。

集落が構成される時期は古墳時代後期6世紀前半段階で、その数は6世紀後半より徐々に増加し、7世紀から8世紀にかけてが最大となる。以後9・10世紀では、急激に数を減らし、中世になると2軒の住居跡のみで遺物は確認されていない。集落の中心は8世紀代後半には移動したものと判断される。同一台地上に位置する思川遺跡に於ては、8世紀代の第4四半期に遺構の営みが再開され始めている。更に、9世紀第2四半期より第3四半期にかけての住居跡より、12点の黒書土器が確認されている。一方で、本遺跡では黒書資料は1点も確認できなかった。このことは、黒書土器が一般に増加する時期の9世紀第2～3四半期以降の遺構が激減した為といえる。同様の事は灰釉陶器の出土がなかった点にも言える。換言すれば、同一台地上に於て、集落の中心の移動が想定できる。

更に、二の宮貝塚では地下式土坑・土坑墓・井戸・溝が検出されている。同遺跡では住居跡は検出されていないが比較的豊富な遺物が検出されている。これらの遺構・遺物を本遺跡検出の住居跡とただちに関連づけることはできない。

本遺跡の性格が集落跡と判断することは、遺構の検出状況より首肯できる所であるが、これらの集落を支えた経済的な背景として農業と漁業が考えられる。関連する出土遺物では、球状と管状の土玉や鉄製鎌の出土がある。土玉（土錘）の出土は、眼下に広がる葦ヶ浦に於ける漁業活動を表している。さらに、「常陸国風土記」に記される信太郡の条では、本遺跡の東方に近接する浮島の様子を「乗濱に行き至りましき。時に、濱浦の上に多に海苔を乾せりき。・・・浮島の村あり。・・・戸は一十五個、田は七八町餘なり。居める百姓は塩を焼いて菜と爲す。」と記されている。海辺で海苔の生産を行ったり、農耕に適した耕作地が狭い為に、製塩を行っていたことがわかる。しかしながら、本遺跡の出土遺物の中に製塩を示す遺物の出土は無い。

遺物では、6世紀から10世紀にかけての良好な須恵器が出土しており、古墳時代後期より律令期にかけての編年基準となる資料が得られている。中でも、S I - 86出土の短頸壺、S I - 54出土の高台付杯、S I - 16の蓋などは良好な資料である。更に、S I - 119の双耳甕は県内の資料としては数が少なく、遺構出土であり、さらに他の須恵器資料に伴う点は重要な基準資料と言える。

尚、本遺跡出土の須恵器の産地については、一部新治窯産とした資料を除き筆者の勉強不足もあり敢えて特定の窯名を示していない。



1. 調査区全景

秋平遺跡

図版
2



1. 遺構確認状況 (S1-1付近)



2. 遺構確認状況 (S1-26付近)



3. 同 (南東部)



4. 同 (北部)



5. テストピット



6. テストピット



7. 調査終了状況 (S1-9~16付近)



8. 同 (北東部)



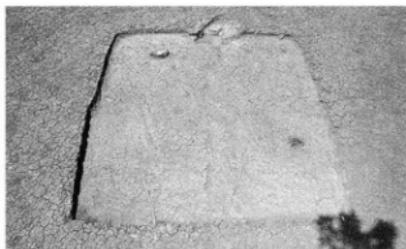
1. SI-1



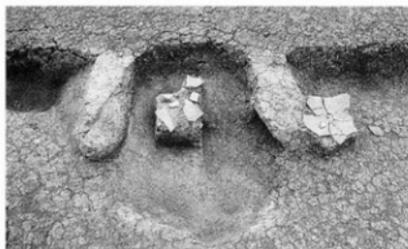
2. SI-2~4付近



3. SI-6



4. SI-7



5. SI-8カマド



6. SI-9



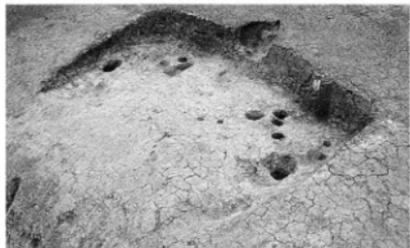
7. SI-10



8. SI-11

秋平遺跡

図
版
4



1. S I-12



2. S I-13



3. S I-14・15



4. S I-16



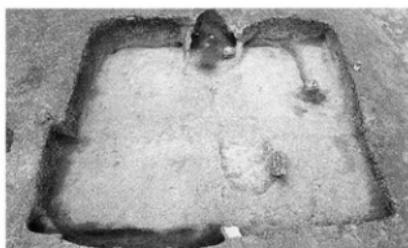
5. S I-16遺物出土状況



6. S I-17



7. S I-18カマド遺物出土状況



8. S I-19



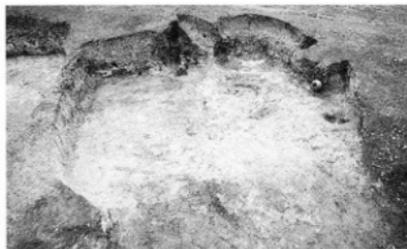
1. S I -19カマド



2. S I -20



3. S I -21



4. S I -22



5. S I -23



6. S I -24



7. S I -26



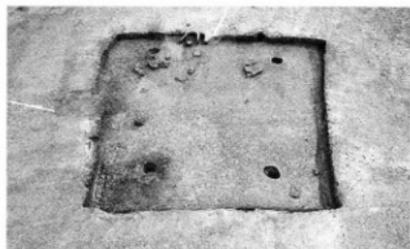
8. S I -29

秋平遺跡

図版
6



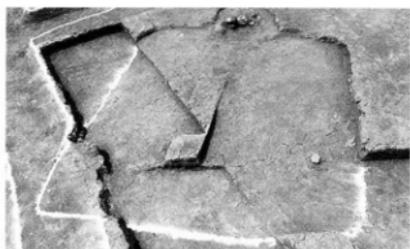
1. S I-30



2. S I-33



3. S I-35遺物出土状況



4. S I-39



5. S I-40



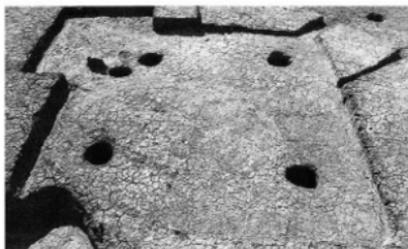
6. S I-41



7. S I-46



8. S I-47



1. S I-49



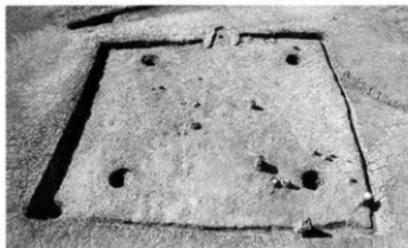
2. S I-49・50



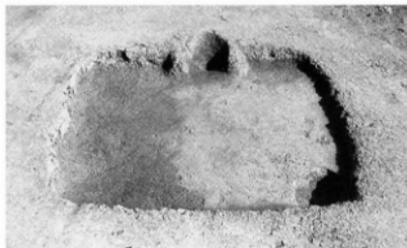
3. S I-50



4. S I-51



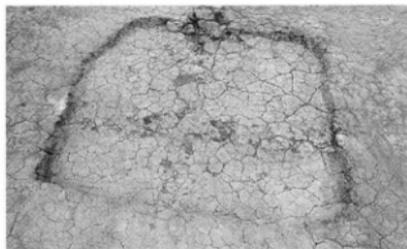
5. S I-55



6. S I-63



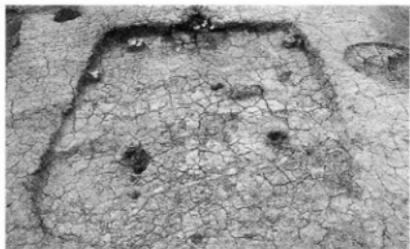
7. S I-65:遺物出土状況



8. S I-68

秋平遺跡

図版
8



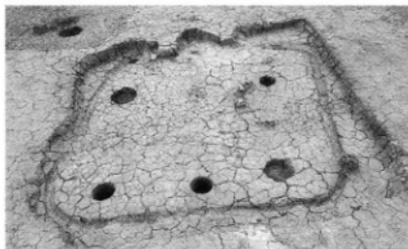
1. SI-69



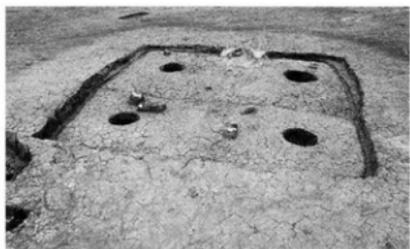
2. SI-70



3. SI-71



4. SI-72



5. SI-73



6. SI-75



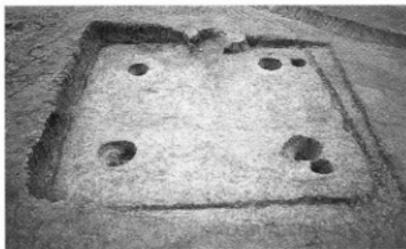
7. SI-76



8. SI-77



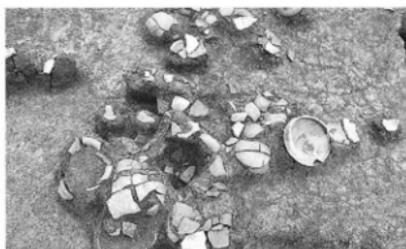
1. S I-79



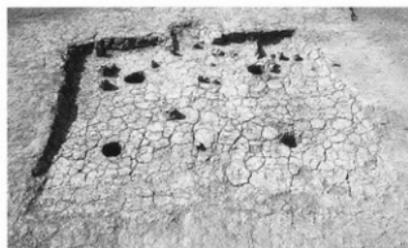
2. S I-84



3. S I-86



4. 同 遺物出土状況



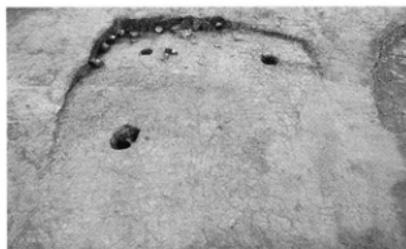
5. S I-91



6. S I-92



7. S I-92・103



8. S I-93

秋平遺跡

図版
10



1. S I-95



2. S I-96



3. S I-92・103



4. S I-98



5. S I-101



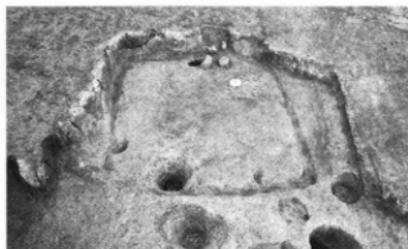
6. S I-102



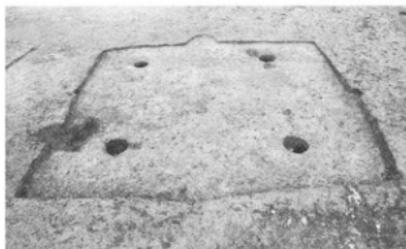
7. 同 カマド



8. S I-107



1. S I-108



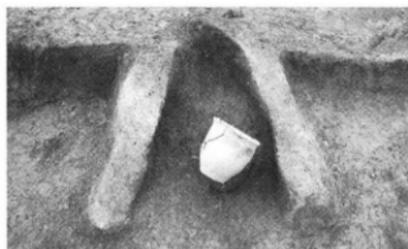
2. S I-109



3. S I-112遺物出土状況



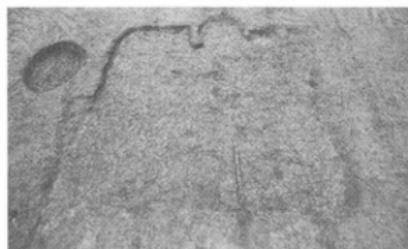
4. 同



5. 同 カマド遺物出土状況



6. 同 遺物出土状況



7. S I-114



8. S I-115

秋平遺跡



1. S I-116・117



2. S I-119



3. S I-120A・B



4. S I-124カマド



5. S I-125



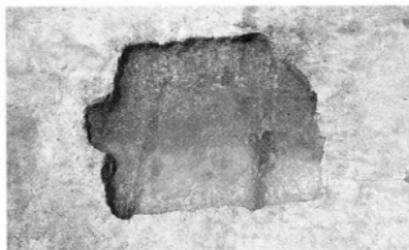
6. S I-127カマド



7. S I-119・128



8. S I-131~133



1. SK-11



2. SK-13



3. SK-17



4. SD-7



5. SD-8~11



6. SD-11



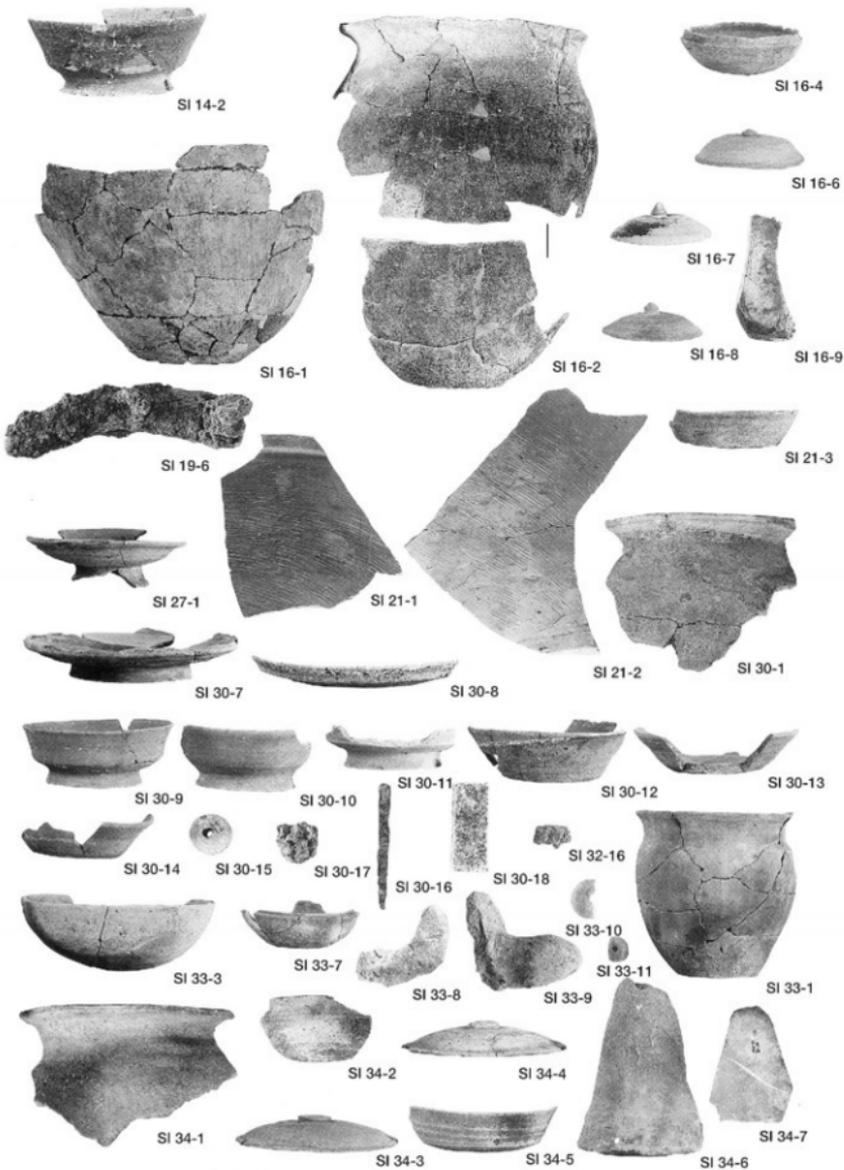
7. SD-12



8. SX-3

秋平遺跡

図版
14



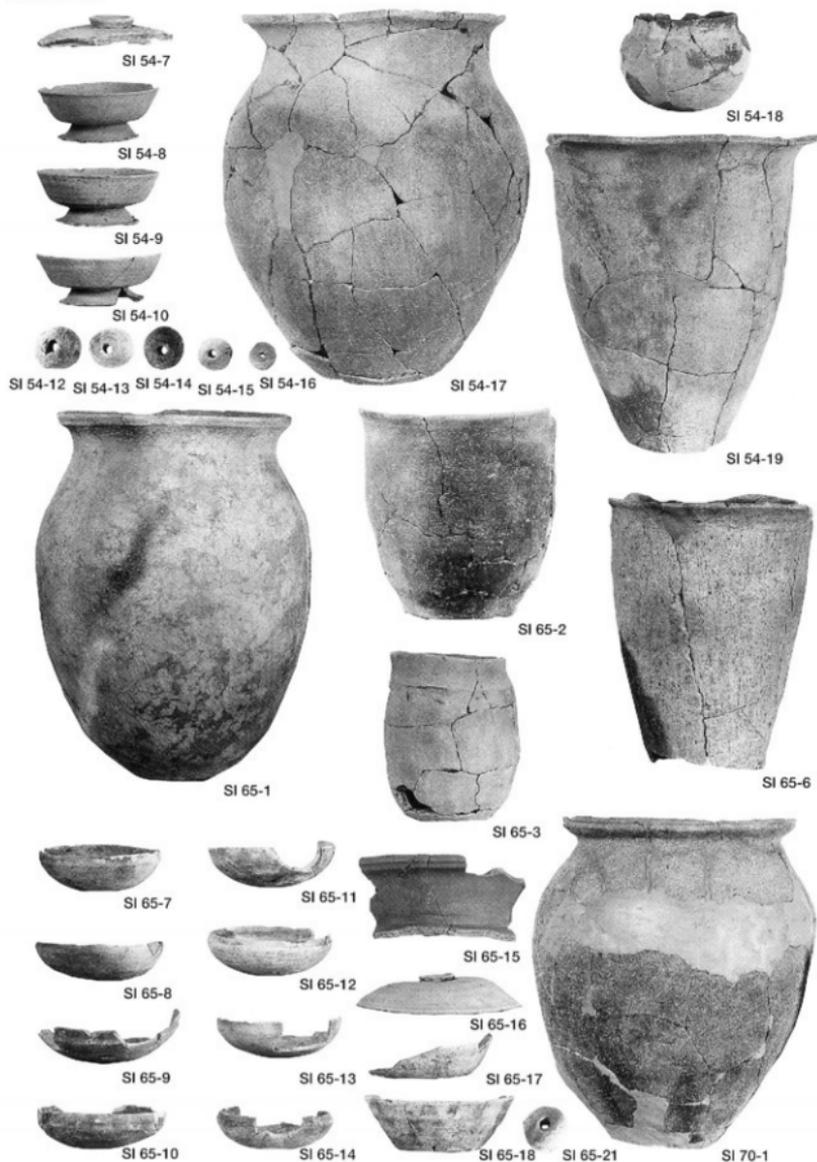
S I -14・16・19・21・27・30・32・33・34出土遺物



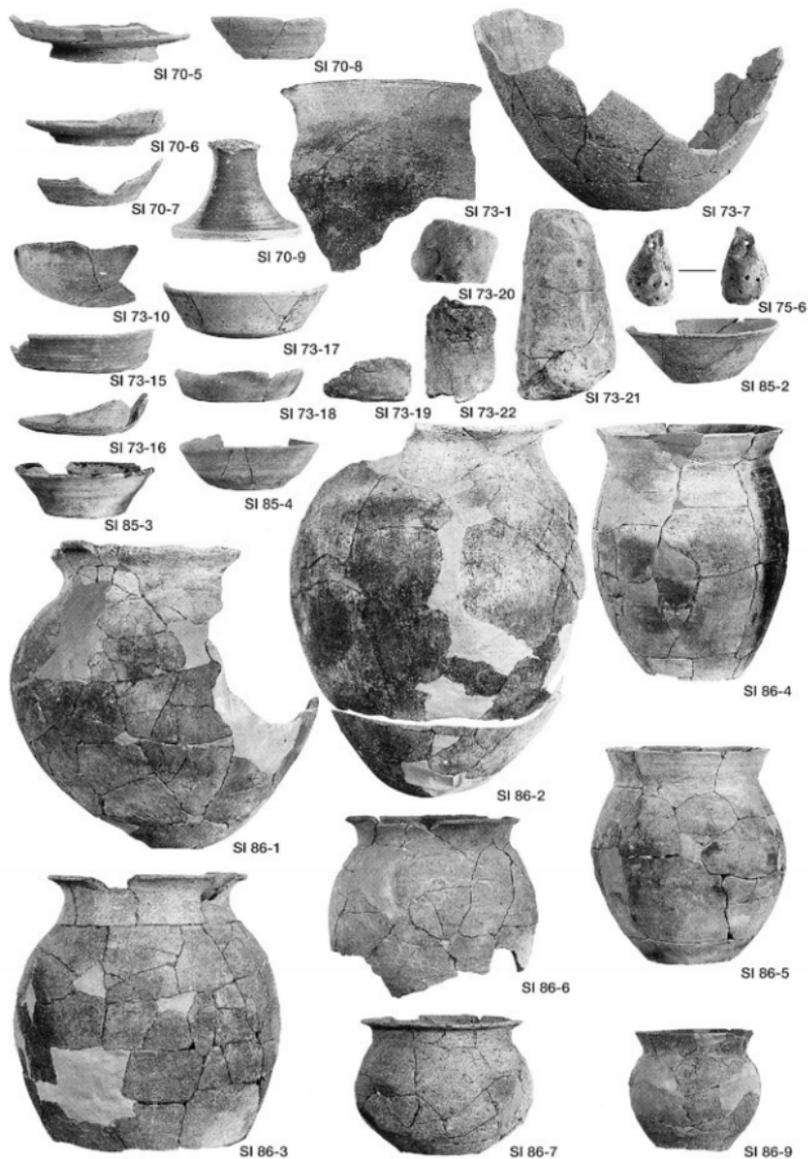
S I - 39・40・49・51・52・54出土遺物

秋平遺跡

図版
16

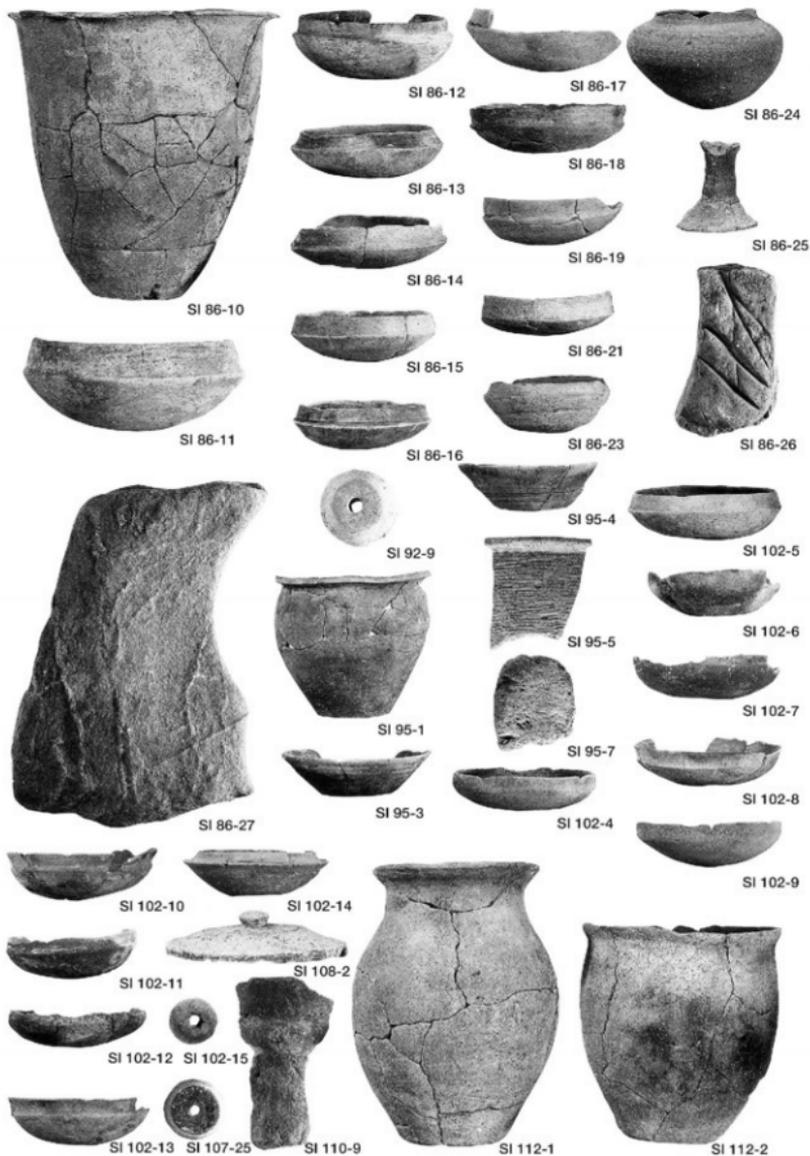


SI-54・65・70出土遺物

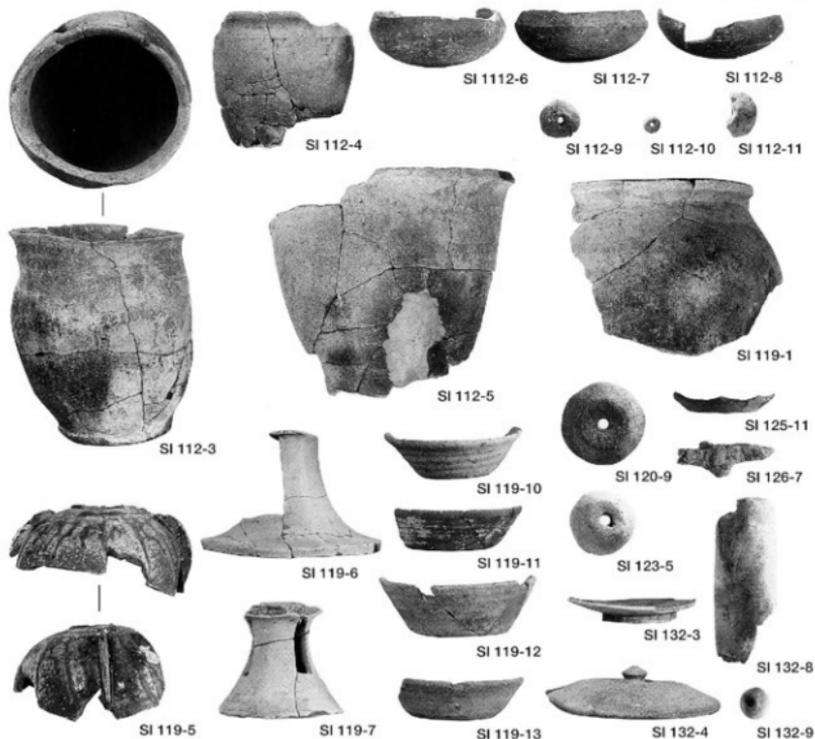


SI 70・73・75・85・86出土遺物

秋平遺跡



S | -86・92・95・102・107・108・110・112出土遺物



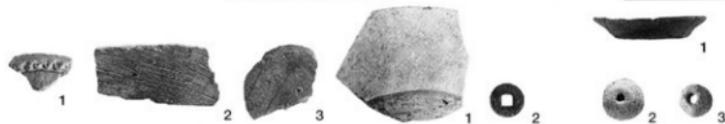
S I - 112・119・120・123・125・126・132出土遺物



遺構外出土遺物(縄文)



遺構外旧石器



遺構外出土遺物(弥生)

遺構外出土遺物(中世)

表 探

Ⅲ 池 平 遺 跡

第1章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡の調査区は、中央のやや幅広い地区と西北側、南西側、南側、東側の5地区に分けられる。平面的には疾走する若駒のような形状の調査範囲で、西北側が頭部、南西側が前足、中央部が胴部、南側が後足、東側区がしっぽの部分にあたる。遺構は北西側地区を除き全体に密集して検出されている。序章の第2章第3節でも述べたが、標高は北西側の最高位で25.5mを測り、細尾根の平坦部分の幅は最大で20m前後で、最も狭い部分では10m前後である。大形の住居跡が立地すると、通路は尾根の斜面になるものと想定される部分でもある。

検出された遺構は住居跡79軒、土坑22基、溝2条、火葬墓2基で、時期的に見れば古墳時代初頭より平安時代まで検出されているが、集落の中心は5世紀後半より6世紀の古墳時代後期である。

第2節 住居跡

第1項 遺構の概略

検出された住居跡は79軒である。細い尾根のほぼ全域に於て遺構が検出されている。

この内、時期が決定できたものは古墳時代前期2軒、古墳時代中期2軒、古墳時代後期43軒、平安時代1軒であった。

古墳時代前期

前期の住居跡はS I - 3・49の2軒である。東側の細く括れる（若駒のしっぽの付け根部分）と、南西側先端（つま先）の部分に於て検出されている。S I - 3は長方形のプランで、4本の柱と不規則な補足的な柱穴が配されている。南西側のコーナー付近には方形の貯蔵穴が、また中央やや北寄りには地床炉がある。壁溝は確認されていない。S I - 49はS I - 50・53・58と重複しており余容は不明である。しかしながら、明瞭な壁溝が掘り込まれている。また、炭化材の出土状況より、火災に遭ったものと考えられる。

古墳時代中葉

5世紀前半の住居跡はS I - 2・4・51の3軒が検出されている。南西側先端部分と南側部分及び、折れ部分の3ヵ所に分かれる。いずれも方形を基調とするプランであるが、斜面の為に全容を窺い知ることできるものはない。3軒の住居跡のいずれからも焼土・炭化物の出土が見られ、火災に遭ったものと考えられる。S I - 2・4には貯蔵穴が確認されている。

古墳時代後期

5世紀後半と判断された住居跡はS I - 13・15・16・19・20・22・24・37・42・67・75の11軒を数える。その

分布は台地中央部の西側半分から南西側地区（前足側）にかけてに集中する傾向が見られ、S I-15・16及びS I-19・75は重複関係にありながら同時期と判断される資料が出土している。

住居跡の形状はいずれも方形のプランを呈するものであるが、S I-13・15・22・24・42・67はカマドを持たず、地床炉となる住居跡も見られる。その他では、S I-20の1軒でカマドの掘り方が壁の外に大きく張り出す新しいタイプが見られるが、概カマドの袖が平行若しくは大きく「ハ」の字に開き、長く伸びる古いタイプのカマドが付される。カマドと知が併設されるものはない。カマドはほぼ北方向で一致している。

6世紀前半と判断された住居跡はS I-12・17・18・21・25・29・31・33・35・43・45・54・58・66の14軒であった。その分布状況は台地の全域で検出されており、時期的に見た住居跡の軒数では最大となっている。

住居跡の形状ではS I-35等の大形では方形を呈するものが多いが、S I-17・18等の小形のものには長方形を呈するものも見られる。カマドはS I-12で西カマドになるが、その他は北側から北西側壁の中央に設置されている。また、小形の住居跡の中にはS I-31・32等でカマドが検出されなかったものもある。柱穴は4本を基本にするが、S I-17・18の小形の住居跡では柱穴を持たない住居跡も確認されている。

6世紀後半では、S I-1・8・9・10・14・23・36・38・50・62の10軒が確認されている。分布の状況は中央の台地上より南側にかけて確認されており、東西の両端部では検出されていない。時期別に見た遺構の軒数では徐々に減少の傾向が見られる。

住居跡の形状では方形のプランを呈し、4本の柱穴を有するものが基本的である。カマドはS I-8・9・23・38では北西壁の中央部分に設置され、S I-23・36では北東側に設置される。近接する同時期の住居跡でカマドが異なる方向に設置されるのは、立地条件による制約とは考え難い。S I-1・14・50・62ではカマドは確認されていない。この内消失住居跡はS I-1・8・36・50の4軒である。

7世紀前半の住居跡ではS I-7・30の2軒が確認されている。6世紀代に台地の全域に分散傾向を示していた住居跡は、台地の中央部分に於て確認され、その数は圧倒的に減少し、さらに偏在傾向を呈す。

明瞭に住居跡の形状が判断できたのはS I-30の1軒で、方形プラン、4本の柱穴、北東側壁中央にカマドが設置されている。

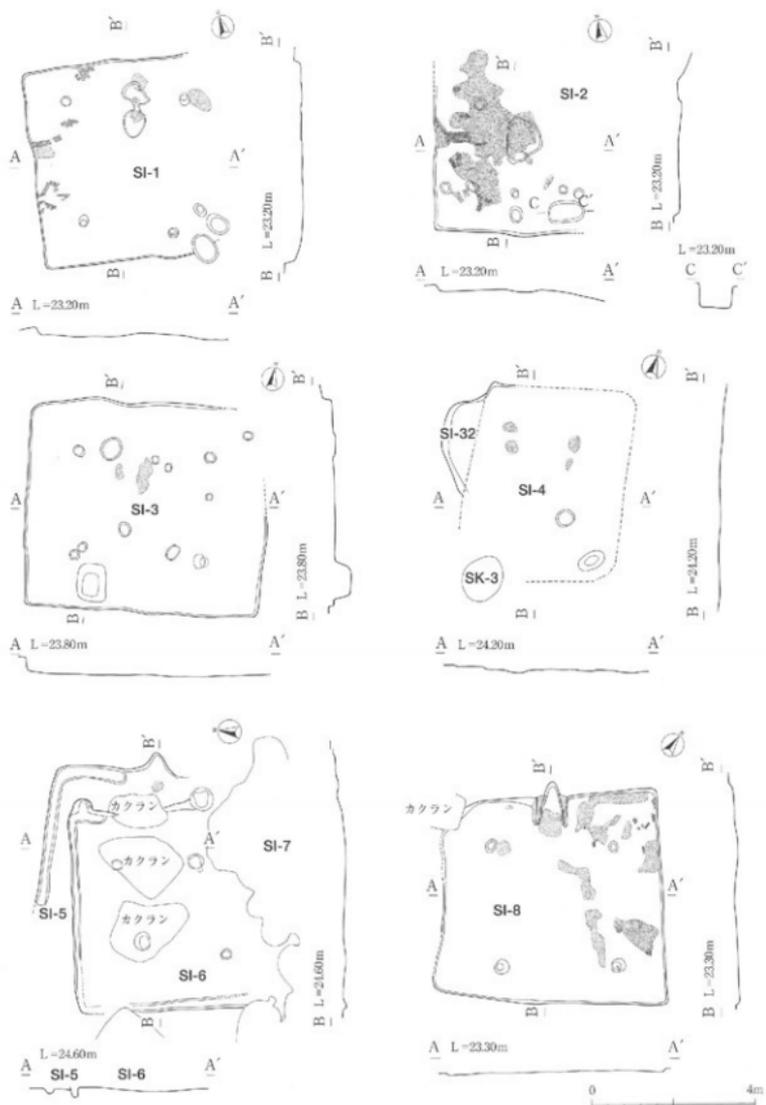
尚、S I-63も7世紀前半頃の遺物が出土しているものの明瞭ではない。

7世紀後半の住居跡ではS I-26の僅かに1軒が台地の中央で確認されている。

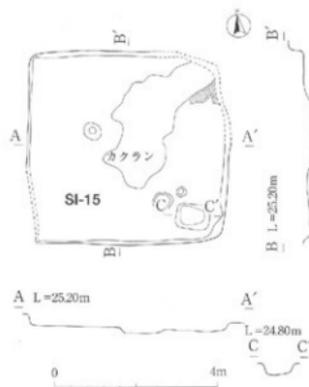
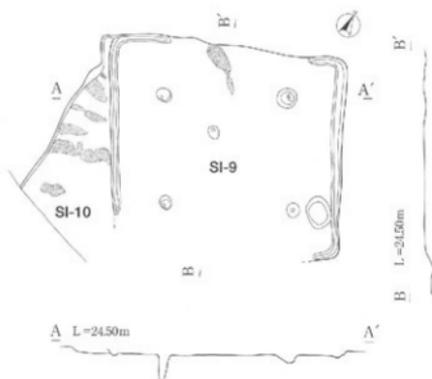
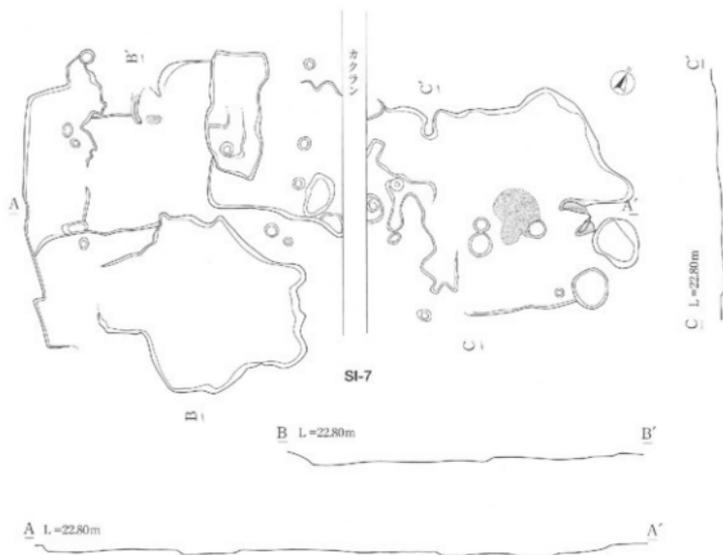
住居跡の形状は主軸割が長い長方形を呈するもので、北側コーナー部分には間仕切り状の溝が3条確認されている。柱穴の配置は4本の主柱穴と考えられるが、南西側の2本の柱穴の配置状況から、住居跡が西側へ拡張された可能性がある。カマドは北西側の壁中央部分に位置し、袖は丸みを帯び「ハ」の字に開いている。又、壁溝が全周している。尚、本住居跡は火災に遭っている。

10世紀代ではS I-47がやはり1軒のみ台地の中央付近で確認されている。

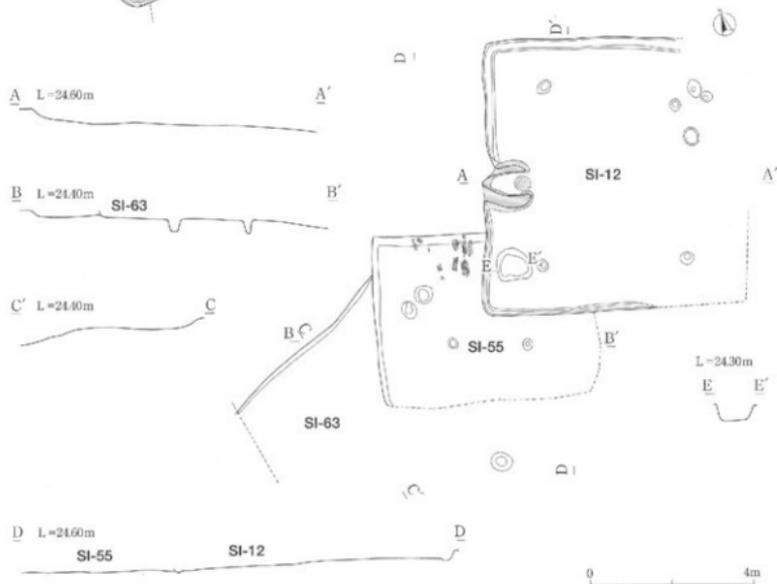
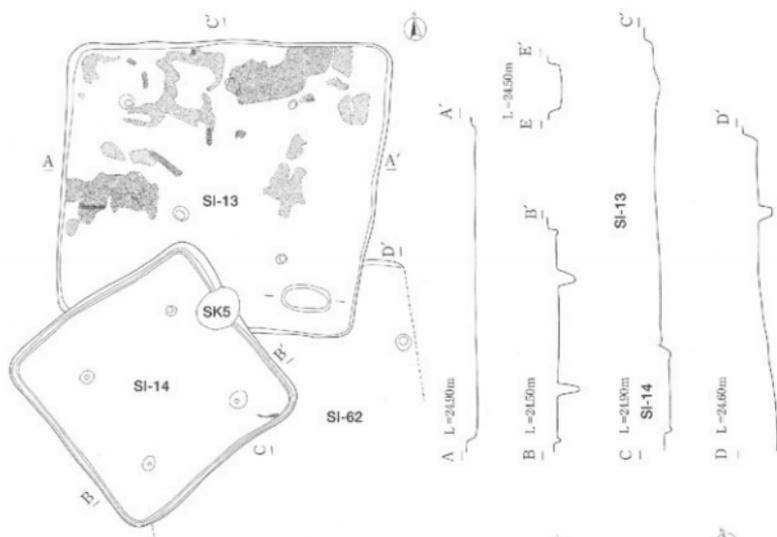
形状は南東側の1辺が長い台形状を呈し、柱穴と思われる掘り込みが8本確認されている。周溝が4面ともに確認されているが、カマドはない。9世紀後半から10世紀代にかけての遺構としては、S X-1・2が近接している。



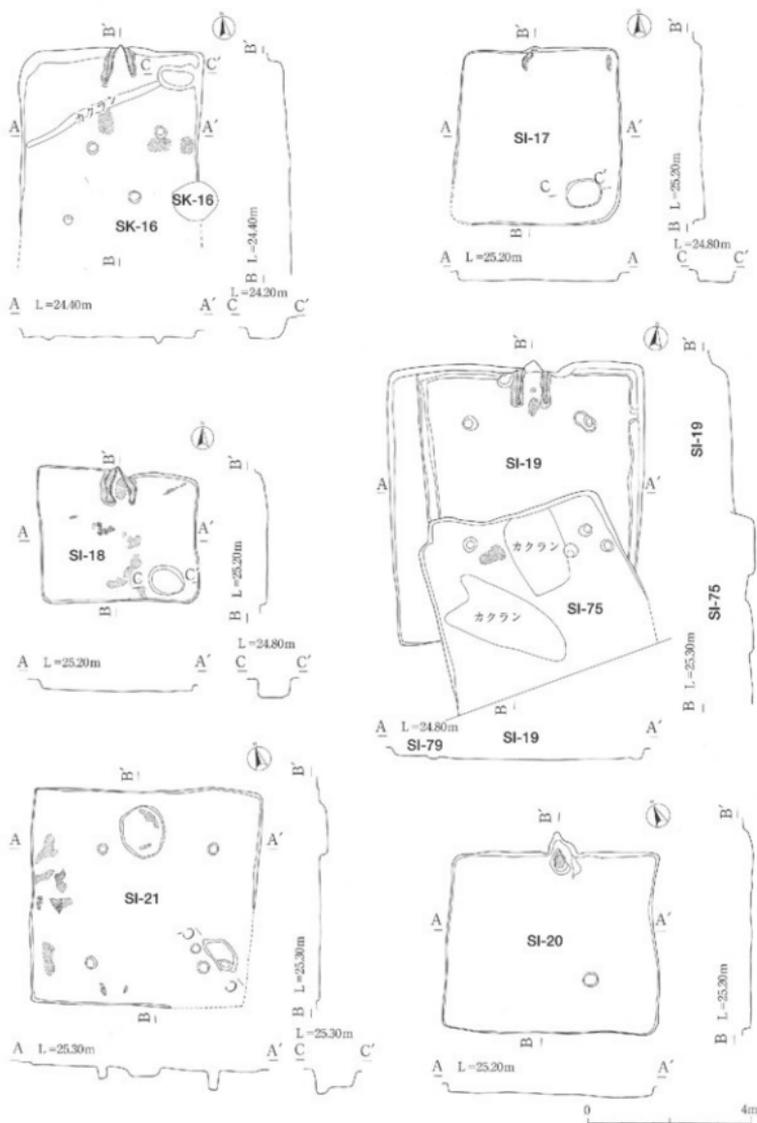
第44図 SI-1~6・8・32



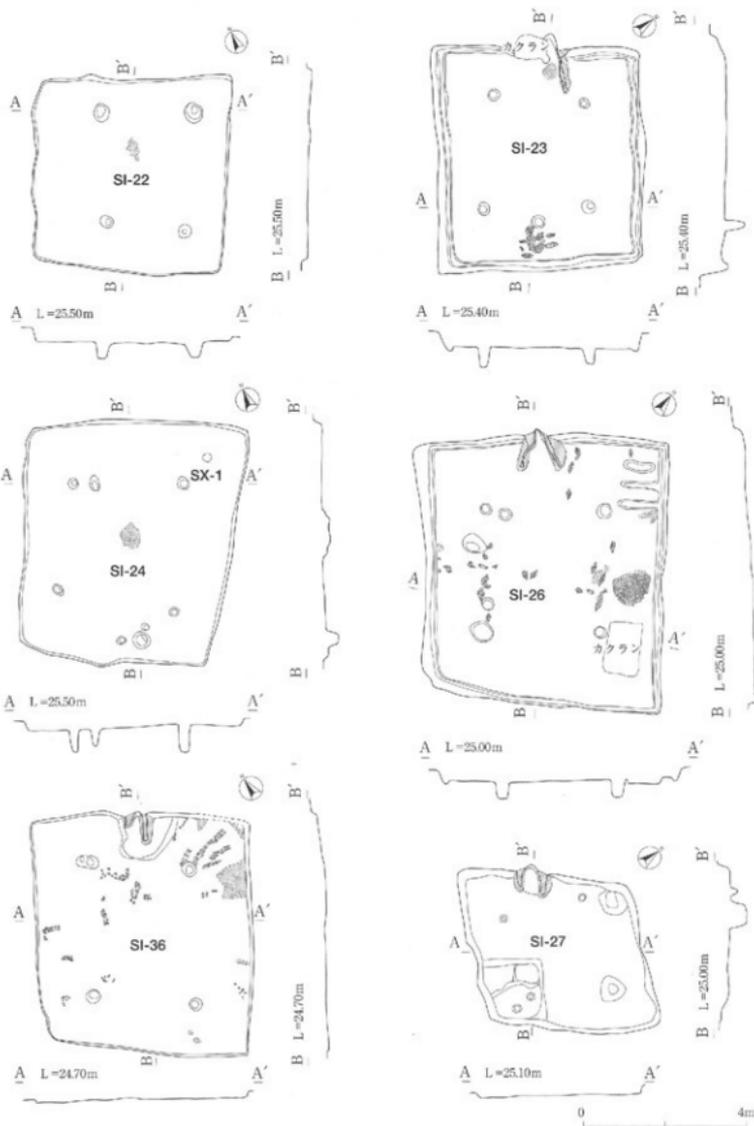
第45図 SI-7・9・10・15



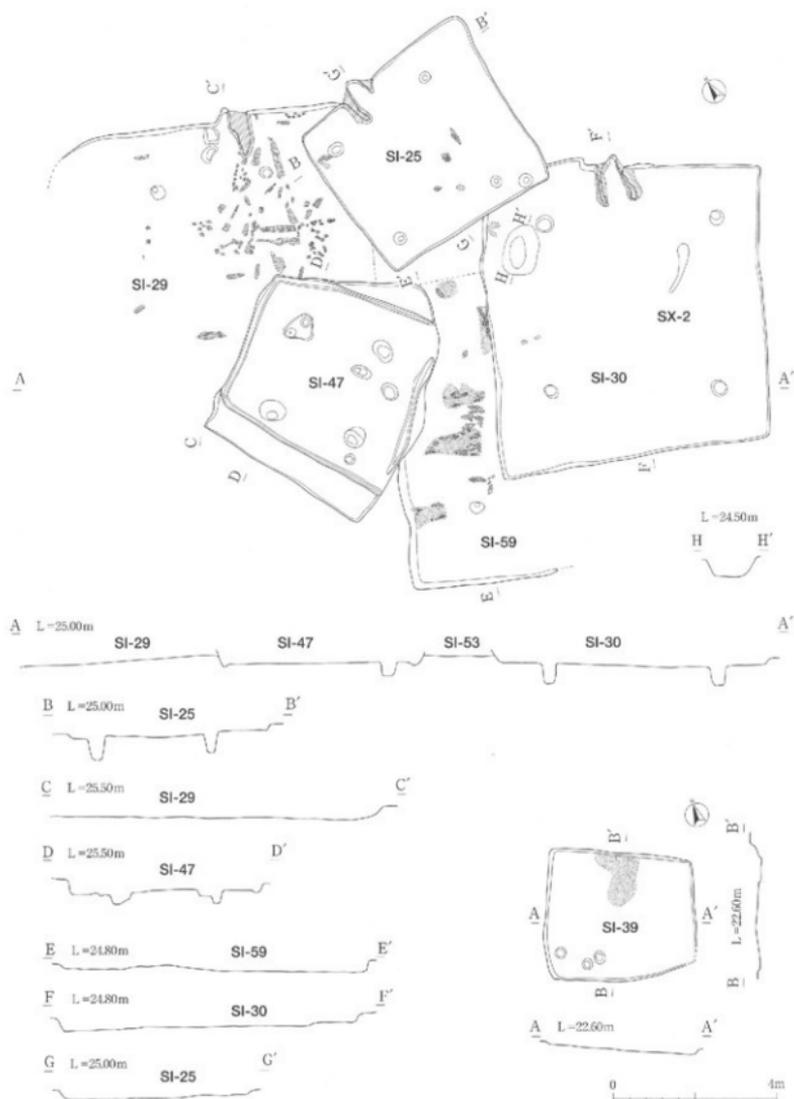
第46圖 S I - 12 ~ 14 · 55 · 62 · 63



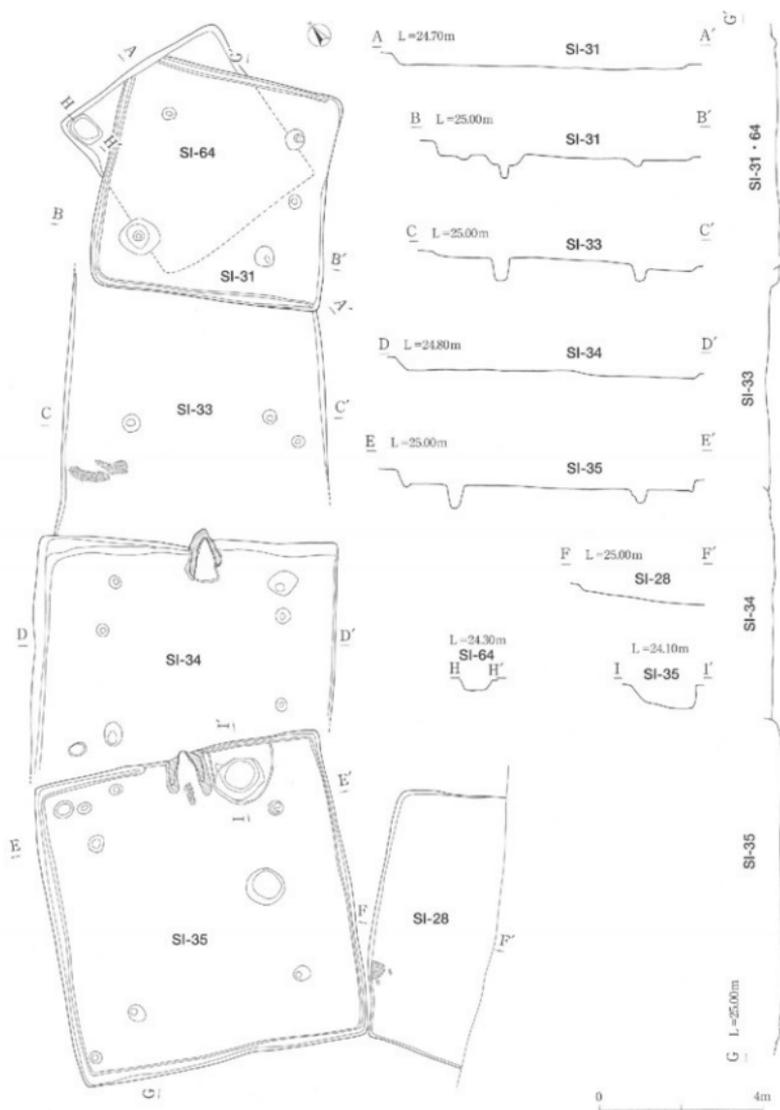
第47図 S I - 16 ~ 21 · 75 · 79



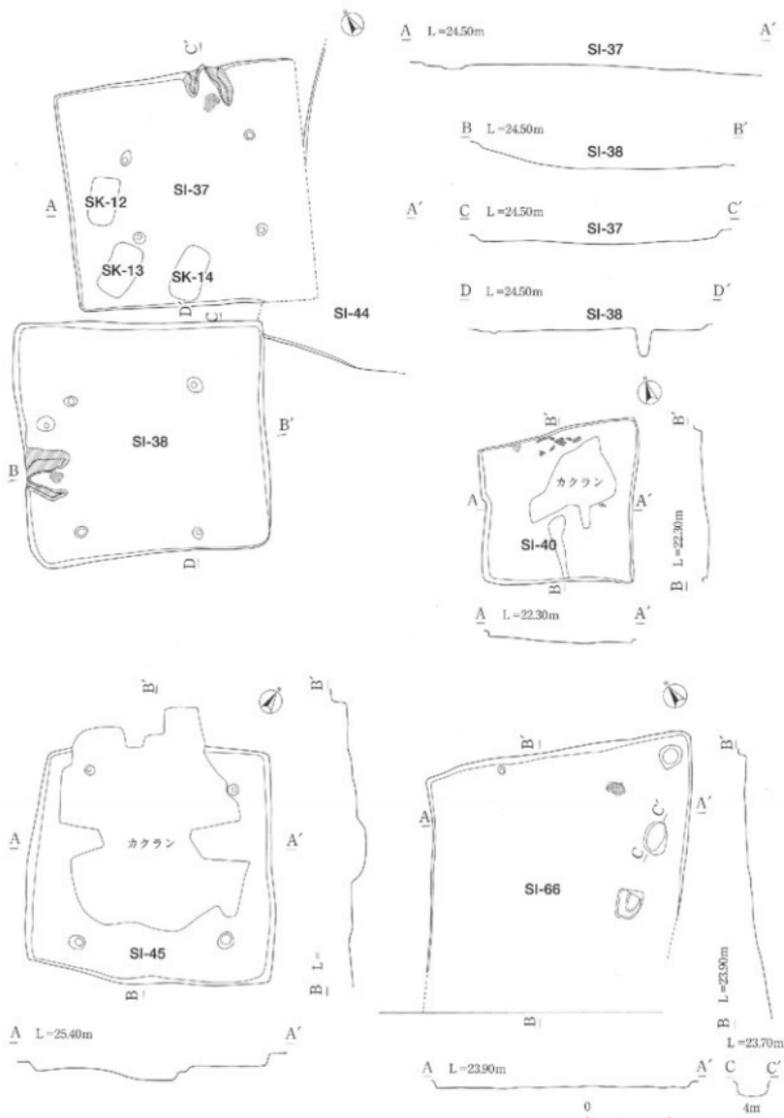
第48図 S I - 22 ~ 24 · 26 · 27 · 36



第49図 S I - 25 · 29 · 30 · 39 · 47 · 59



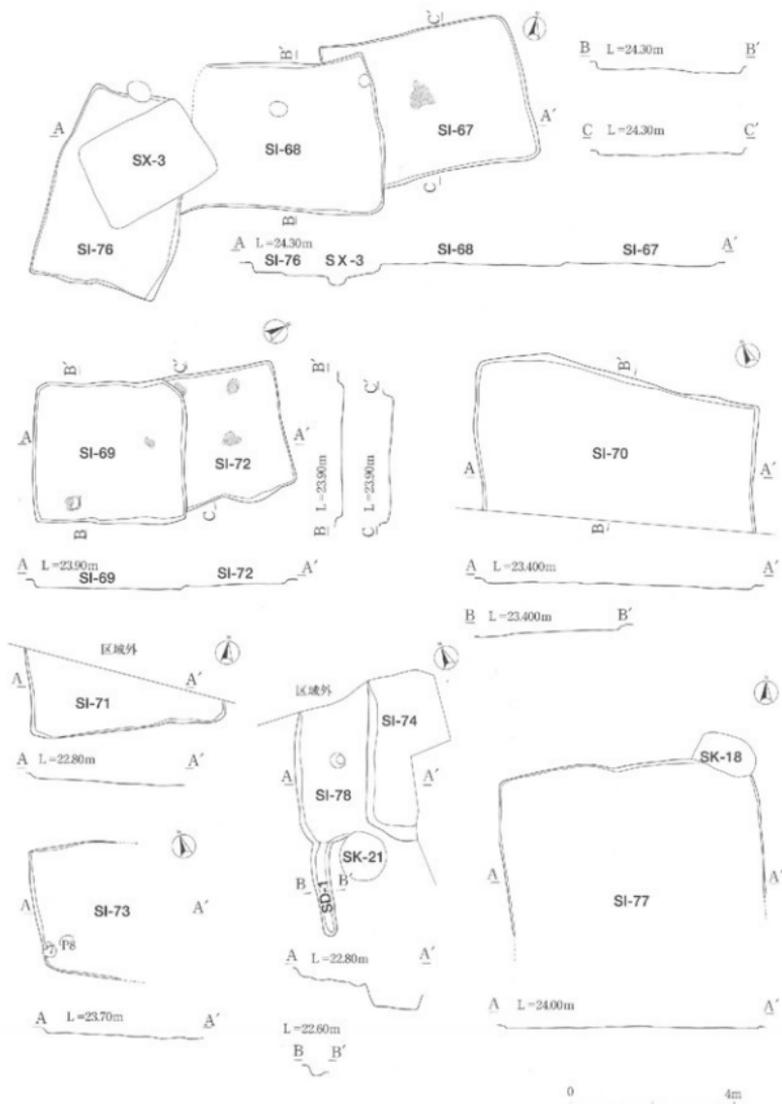
第50図 S I - 28 · 31 · 33 ~ 35 · 64



第51図 S I - 37・38・44・40・45・66



第52図 S | -11・41~43・46・48~54・56~58・60・61・65・S D - 2



第53図 S I - 67・74・76~78・S D - 1

表54 住居跡一覧表(1)

S1	グリッド	主軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	カマ ド	炉	貯蔵 穴	備	考
1	W-29	—	方形?	5.01×4.05	5	無		2			
2	V-29	—	方形?	3.71×3.59	7	無		1	1		
3	R-35	—	長方形	5.98×5.23	11	無		1	1		
4	Q-33	—	長方形	4.78×3.95	2	無		2	1	SI-32と重複	
5	Q-33	N-90°-E	方形?	(4.00)×(3.10)	4	一部	1			SI-6・7と重複	
6	Q-33	—	方形?	5.00×(4.53)		半周				SI-5・7と重複	
7	P-31	N-60°-W	不整形	7.04×4.10	19	無	2	1	1	SI-5・6と重複	
8	N-31	N-39°-W	方形	5.85×5.70	4	無	1				
9	M-29	N-20°-W	方形?	5.80×5.05	6	半周	1			SI-10と重複	
10	M-29	—	不明	3.40×3.30		無				SI-2・10と重複	
11	2F-11	—	方形?	1.45×(1.00)		無				SI-56・57と重複	
12	N-29	N-67°-W	方形	3.37×3.24	7	半周	1		1	SI-55と重複	
13	N-25	—	方形	3.85×3.55	5	無		1	1	SI-14・62と重複	
14	N-25	—	方形	2.69×2.63	4	全周		1		SI-14・62・SK-14と重複	
15	N-25	—	方形	4.90×4.85	3	無			1		
16	P-23	N-5°-W	長方形	(5.25)×4.84	4	無	1		1	SK-6と重複	
17	L-23	N-6°-E	方形	4.27×4.08		無	1		1		
18	N-23	N-00°-W	長方形	3.84×3.44		無	1		1		
19	D-21	N-8°-W	方形?	5.50×5.10	6	半周	1			SI-75・79と重複	
20	L-21	N-20°-W	方形	5.25×4.48	1	無	1				
21	N-21	—	方形	5.61×5.32	5	無		1	1		
22	N-21	—	方形	4.90×4.85	4	無		1			
23	L-19	—	方形	5.62×5.13	5	全周	1				
24	N-19	N-50°-W	方形	6.00×5.45	8	無		1			
25	P-17	—	方形	2.37×2.38	5	無				SI-2・30と重複	
26	P-19	N-4°-W	方形	6.75×6.30	8	全周	1				
27	P-17	N-43°-W	方形	4.30×3.78	7	無	1				
28	V-17	N-54°-W	方形?	3.22×(1.45)		無					
29	P-17	—	方形?	(4.03)×(3.53)			1			SI-25・47と重複	
30	R-17	N-39°-W	方形	3.44×3.38			1		1	SI-25・59と重複	
31	R-17	N-28°-W	方形	(2.41)×2.22		無	1		1	SI-64と重複	
32	Q-33	N-00°-W	不明	(2.45)×(0.78)		無				SI-4と重複	
33	T-17	—	方形?	3.25×(3.10)	3	無				SI-34・64と重複	
34	T-15	N-39°-E	方形?	3.70×(3.09)	7	半周	1			SI-33・35と重複	

表55 住居跡一覧表(2)

S1	グリッド	主軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	カマド	炬	貯蔵 穴	備 考
35	V-15	N-22°-E	方 形	3.81×3.69	8	全周	1		1	SI-34・SK-7と重複
36	T-13	N-33°-W	方 形	5.98×5.38	4	無	1			
37	V-15	N-35°-W	方 形	(2.94)×2.81	4	無	1			SI-44と重複
38	X-13	N-64°-W	方 形	2.99×2.95	5	無	1			SI-44と重複
39	2B-13	—	不整形	3.76×3.23	3	無		1		
40	2D-13	—	方 形	4.05×3.68		無				
41	2F-11	—	方形?	2.72×2.50		無			1	SI-42・65と重複
42	2F-13	—	方 形	2.61×(2.40)	7	一部欠				SI-41・SK-8と重複
43	2H-9	—	方形?	(2.77)×(2.75)	7	一部				SI-51・52と重複
44	X-15	—	不 明	(3.80)×(1.70)		無				SI-37・38と重複
45	D-13	—	方 形	6.10×5.95	4	無				
46	2F-11	—	不 明	(1.45)×(0.40)		無				SI-57と重複
47	P-17	—	方 形	2.42×2.32	8	全周				SI-59・29と重複
48	2F-9	—	方形?	(2.05)×(1.45)	4	無				
49	2H-11	—	方形?	3.11×(1.49)	1	半周				SI-50・56・58と重複
50	2H-11	—	方形?	3.15×2.48	5	無			1	SI-49・53・58と重複
51	2H-9	—	方形?	3.55×(1.14)	1	一部				焼失か? SI-43・52・61
52	2H-10	—	不 明	(2.14)×(0.30)		無				SI-43・51・61と重複
53	2H-11	—	不 明	(2.15)×(1.40)		無				
54	2H-11	—	不 明	(1.72)×(0.82)		無				SI-52・60と重複
55	N-27	—	方形?	(2.64)×(2.11)	4	無				焼失か? SI-12・63
56	2F-11	—	方形?	(2.75)×(2.31)	5	無		1		SI-11・49・57と重複
57	2F-11	—	方形?	(1.88)×(0.53)		無				SI-11・46・57と重複
58	2H-13	—	不 明	(2.77)×(1.84)	2	無		1	1	SI-49・50と重複
59	R-17	—	不 明	(1.80)×(1.70)	1	無				SI-30・47と重複
60	2H-11	—	不 明	(1.25)×(0.67)		一部				SI-54と重複
61	2H-10	—	不 明	(1.07)×(0.73)		無				SI-51と重複
62	N-27	—	不 明	(3.52)×(3.00)		無				SI-13・14・63と重複
63	N-29	—	不 明	(2.40)×(2.00)		無				SI-55・62と重複
64	R-17	—	方 形	2.86×2.84	5	一部欠				SI-31と重複
65	2F-11	—	不 明	(1.40)×(0.63)		無				SI-41・46・57と重複
66	T-41	—	方形?	(6.40)×6.32		4			1	
67	Q-45	—	長方形	2.31×1.79		無				SI-68と重複
68	R-45	—	長方形	2.28×1.28		無				SI-68・76と重複

表56 住居跡一覧表(3)

SI	グリッド	主軸方位	平面形	規模 (m) 長軸×短軸	ピット 数	壁溝	カマド	炉	貯蔵 穴	備 考
69	S-41	—	方 形	3.73×3.51	1	無				SI-72と重複
70	Q-38	—	方形?	6.97×4.00		無				
71	P-37	—	不 明	4.78×(2.15)		無				
72	R-41	—	方形?	3.37×(2.31)		無				
73	V-43	—	不 明	3.40×(2.61)		無				
74	V-45	—	不 明	(4.16)×(2.03)		無				SI-78と重複
75	P-21	—	方形?	5.20×4.22		無				SI-19・79と重複
76	R-43	—	長方形	2.42×1.65		無				SI-68・SX-3と重複
77	T-43	—	方形?	6.43×(5.20)		無				SK-18と重複
78	V-45	—	不 明	(3.50)×(1.78)		無				SI-74と重複
79	P-21	—	方形?	6.78×1.00		無				SI-19・75と重複

第2項 住居跡出土遺物の概略

本遺跡の住居跡から出土した遺物は、大形の整理箱で凡そ60箱を数える。遺物は各住居毎に水洗い・注記・接合を行い、遺構の所属時期を明確にした後、良好なセット関係と時期判定が下せる住居跡について選別し掲載した。また、掲載遺物の観察結果は遺物観察表57～96にまとめた。

その他の遺物を含め出土遺物については「V まとめ」に模式図と実測図の混合図を掲載した。

古墳時代前期の遺物を出土した住居跡ではSI-3・49の2軒がある。SI-49では複合口縁となる壺形土器の口縁部細片が1点出土しているものの明瞭ではない。SI-3では壺2点、埴1点、手捏土器4点、球状土錘(土玉)3点が出土している。1・2は胴部が球形を早する壺形土器で、1では頸部に貼付文が、また2には細沈線による幾何学的な文様が描かれ頸部には凸帯が1条廻る。いずれも口縁部を欠損しているが、弥生時代終末より古墳時代初頭の遺物と考えられる。

古墳時代中期の資料はSI-2・4・51の3軒より出土している。SI-2・51では細片のみで不明瞭である。

SI-4では高杯1点、壺口縁部破片1点、甕1点、鉢1点が検出されている。1の高杯は外面に赤彩が施されるもので、台付甕に近い形状である。2の甕は口縁が鋭く「く」の字に外反する。4の鉢は底部が上げ底になる。いずれも和泉期の遺物である。

古墳時代後期

5世紀後半の資料はSI-13・14・15・16・19・20・22・24・37・42・67・75の12軒より出土している。

甕ではSI-16-1、SI-22-1～3、SI-42-1・2・4等に於て良好な資料が得られている。球状の大きく張る胴部で口縁は緩やかな「コ」の字に外反して開くものが多い。坏類は須恵器模倣の稜を有する坏が出現し、稜を持たない前時期の遺物が混じる。坏・小形の壺類に赤彩が施されるものが多い。甗では

牛角状把手を有するものがS I-22で確認されている。

S I-16-2は土師器の甕である。外面には赤彩が施され、胴部には焼成前の穿孔がある。

S I-14出土の古式須恵器の装飾器台脚部細片は、伴出の須恵器甕と対比して古い。同伴居跡への混入資料と考えられるが、県内の資料としても出土例に乏しく貴重な資料である。この他に、古式須恵器ではS I-15に於て蓋1点及び無蓋の高杯口縁部破片1点が僅かながら出土している。竈地については甕内産の可能性が考えられる。

6世紀前半の資料はS I-12・17・18・21・25・29・31・33・35・43・45・54・58・66の14軒より出土している。

特にS I-29・35で良好なセット資料が出土している。甕の形状では大形のものでは5世紀後半の「コ」の字甕がのこり、緩やかに「く」の字に外反する小形の甕が含まれるようになる。また甕では、胴部が緩やかに内湾するタイプが見られる。坏では須恵器模倣坏が主流をなし、口縁部が外反して大きく開くものが主体となる。さらに、鉢形の器形を呈する資料が増加するのも特徴的である。赤彩資料は5世紀後半と比較してやや量的には減少の傾向がある。本時期に於ける須恵器の供伴例は少ない。

6世紀後半の資料はS I-1・8・9・10・14・23・36・38・50・62の10軒より出土している。

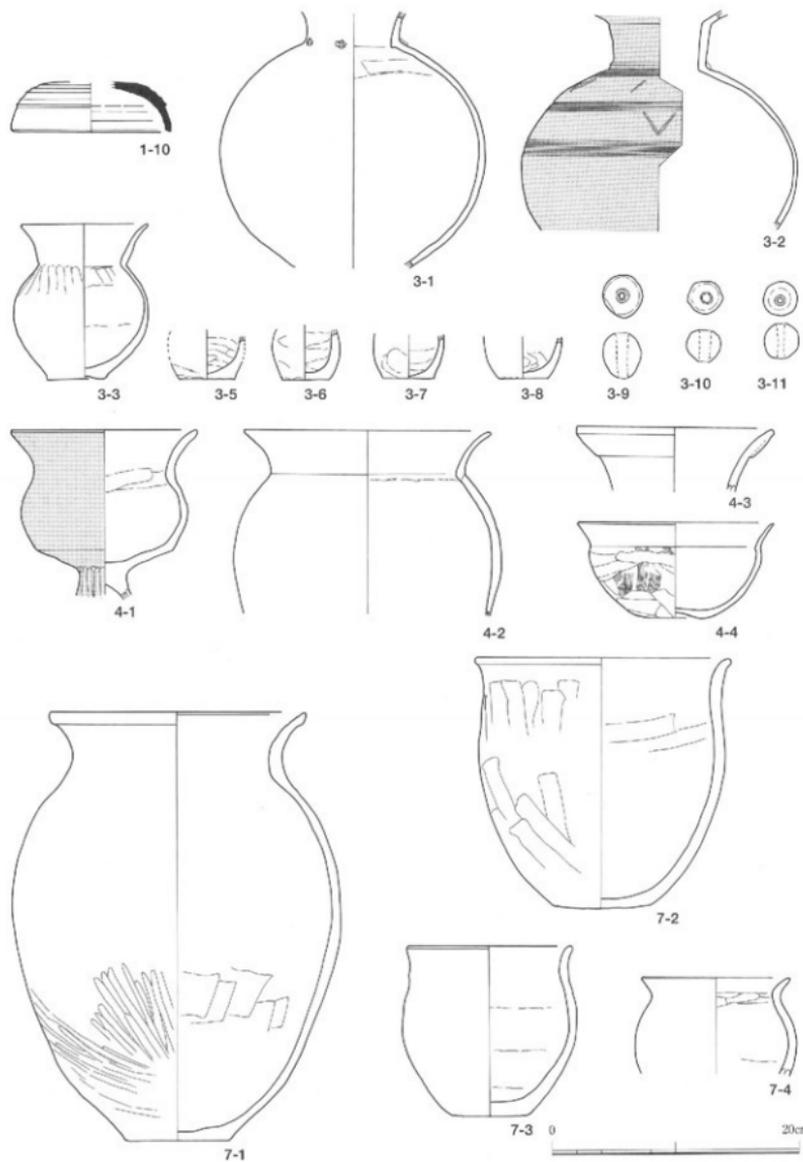
S I-23・38で良好なセット資料が出土している。本時期に於ける特徴的な資料としては常総型の甕の出現がある。S I-23-1・25は口縁部の積み上げは明瞭でなく、胴部の最大径を中位に持つ。胴中位から下位にかけて磨きが施され、胎土中には金雲母の混入が特徴的である。一方で口縁が「コ」の字に外反し、球形の胴部を有する人形の甕が姿を消している。その他の甕では短く「く」の字に外反する中形から小形のやや長胴化する甕も出現している。甕では、牛角状の突起を有するものが見られる。坏は体部に稜を有するタイプの坏で、口縁部の軸がやや短く直立するものから内傾するものが増えてきている。

須恵器の出土量はやはり少ないが、S I-14で大形の甕が出土している。その他では天井部が緩やかに丸みを帯びる蓋や甕の口縁部破片等が出土している。

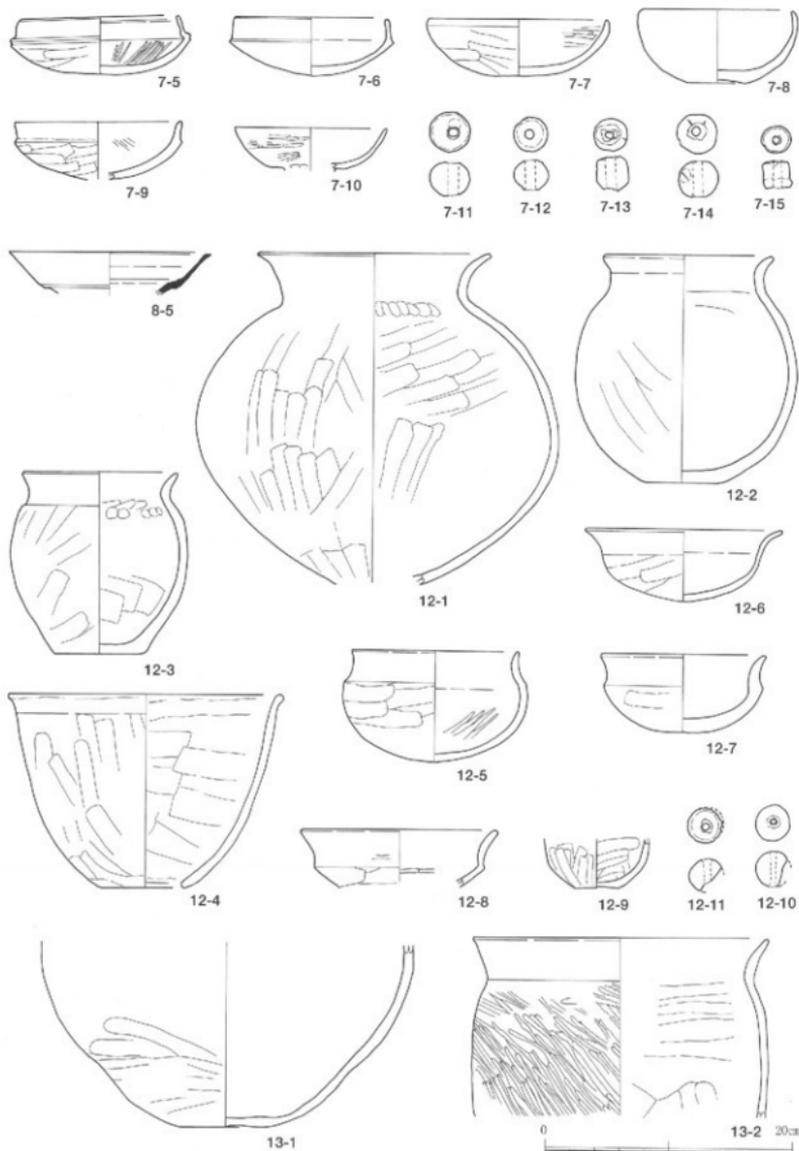
7世紀前半の住居跡ではS I-7・30の2軒が確認されているが、いずれからも良好な資料が検出されている。6世紀後半で出現した常総甕はやや長胴化している。甕は胴部の内湾が弱いものが出土している。また坏は稜を有する模倣坏では口縁部が短く内傾するものが多く、これに稜を持たず口唇部で直立若しくは短く内傾するやや深めの坏が加わる。

7世紀後半の住居跡ではS I-26の1軒が確認されている。遺物は余り良好な資料ではないが、7世紀前半に見られた土師器坏に、平底で体部がやや低い須恵器の坏が出現している。また、甕も長胴甕が出土しているが常総甕は出土していない。

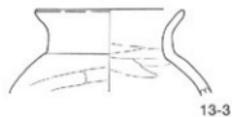
10世紀代ではS I-47が1軒確認されている。8世紀より9世紀にかけての遺構は検出されておらず、古墳時代末期の後は若干の空白がある。甕は須恵器模倣形態の口縁部が短く外反し、口唇部が面取りされるものが出土している。坏では高台が付され内面が細かに磨かれて黒色処理されるものが出土している。



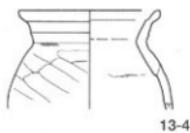
第54図 S1-1・3・4・7出土遺物



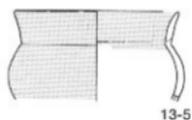
第55図 SI-7・8・12・13出土遺物



13-3



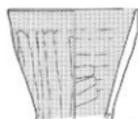
13-4



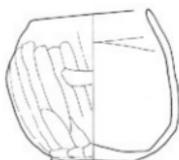
13-5



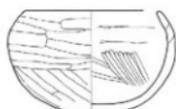
13-6



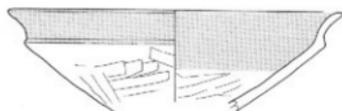
13-7



13-8



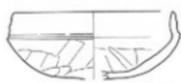
13-9



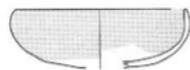
13-10



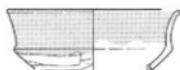
13-11



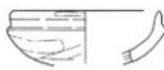
13-12



13-13



13-14



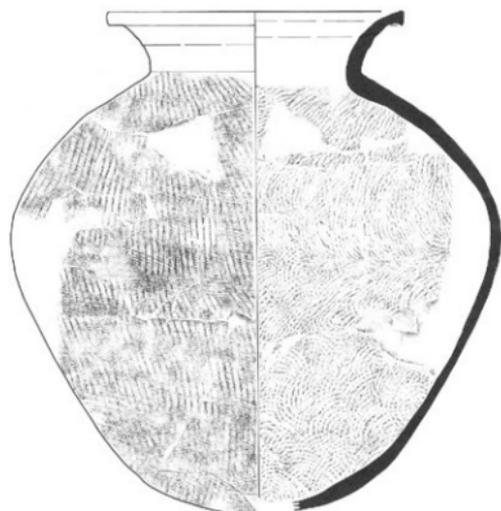
13-15



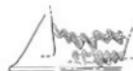
13-16



13-17



14-1



14-2



14-3



14-4



14-5



14-6



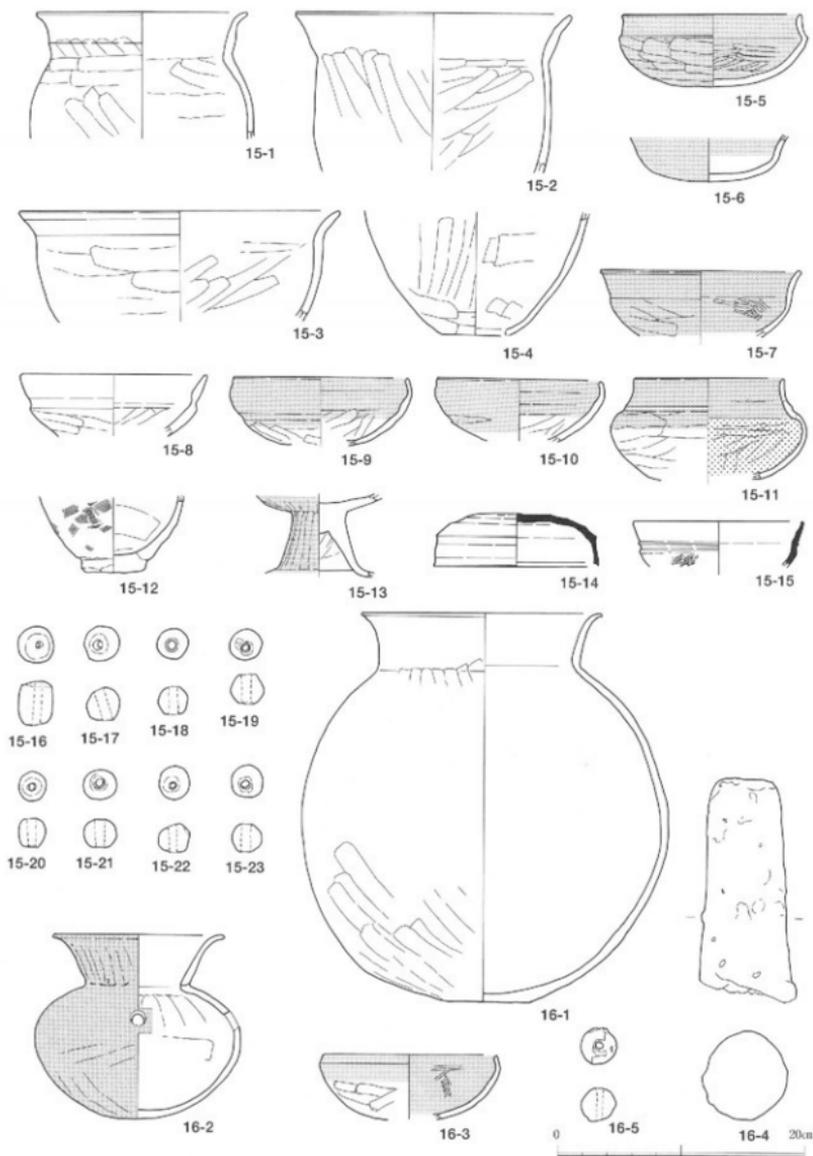
14-7



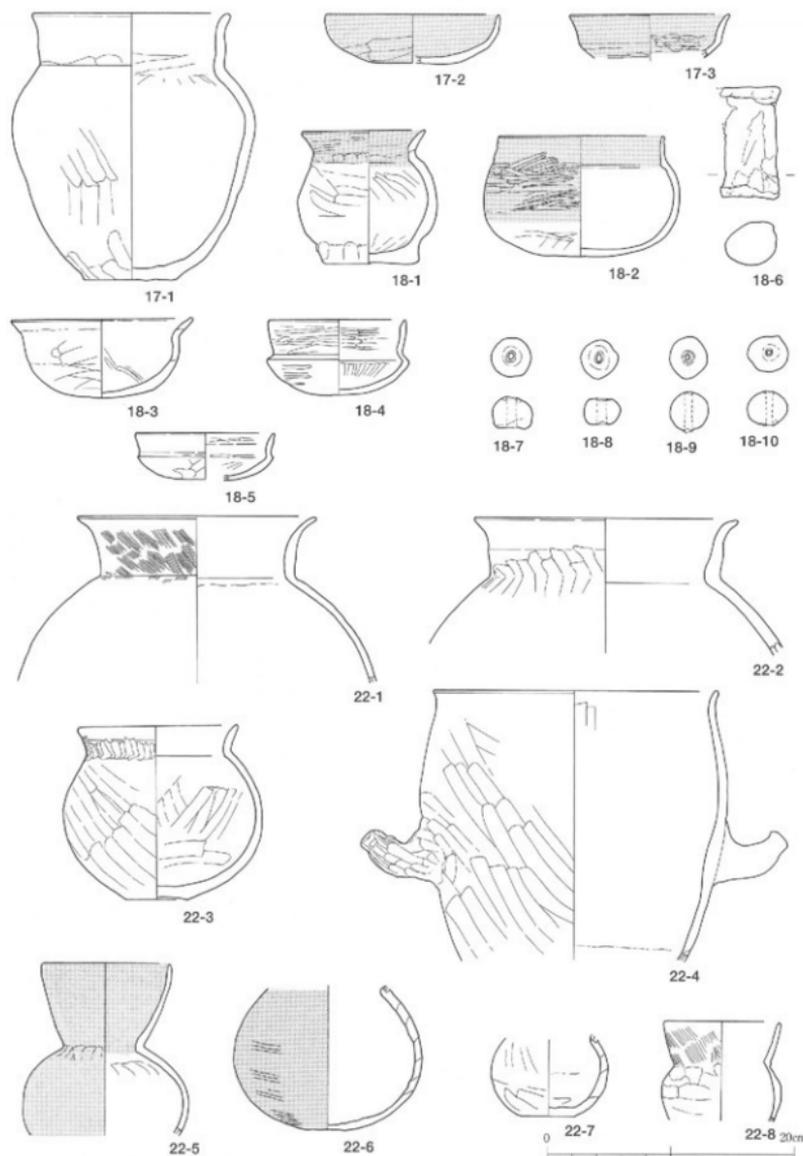
14-8



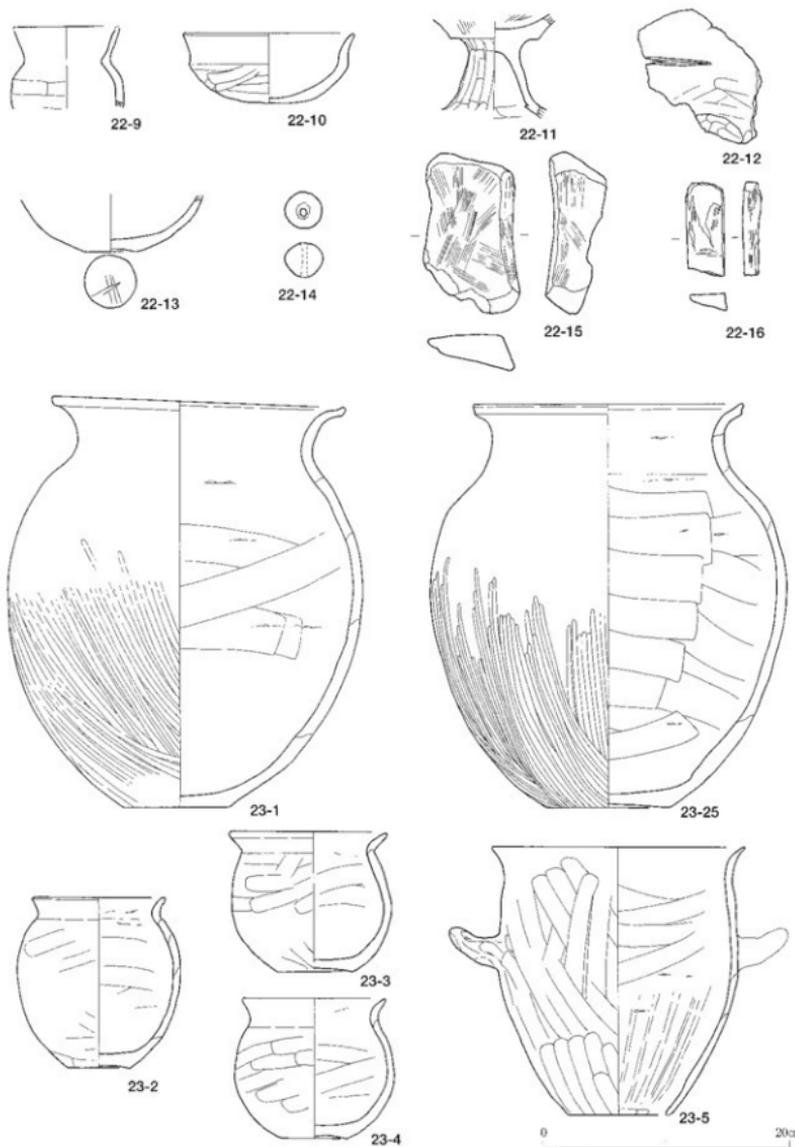
第56圖 S I - 13 · 14出土遺物



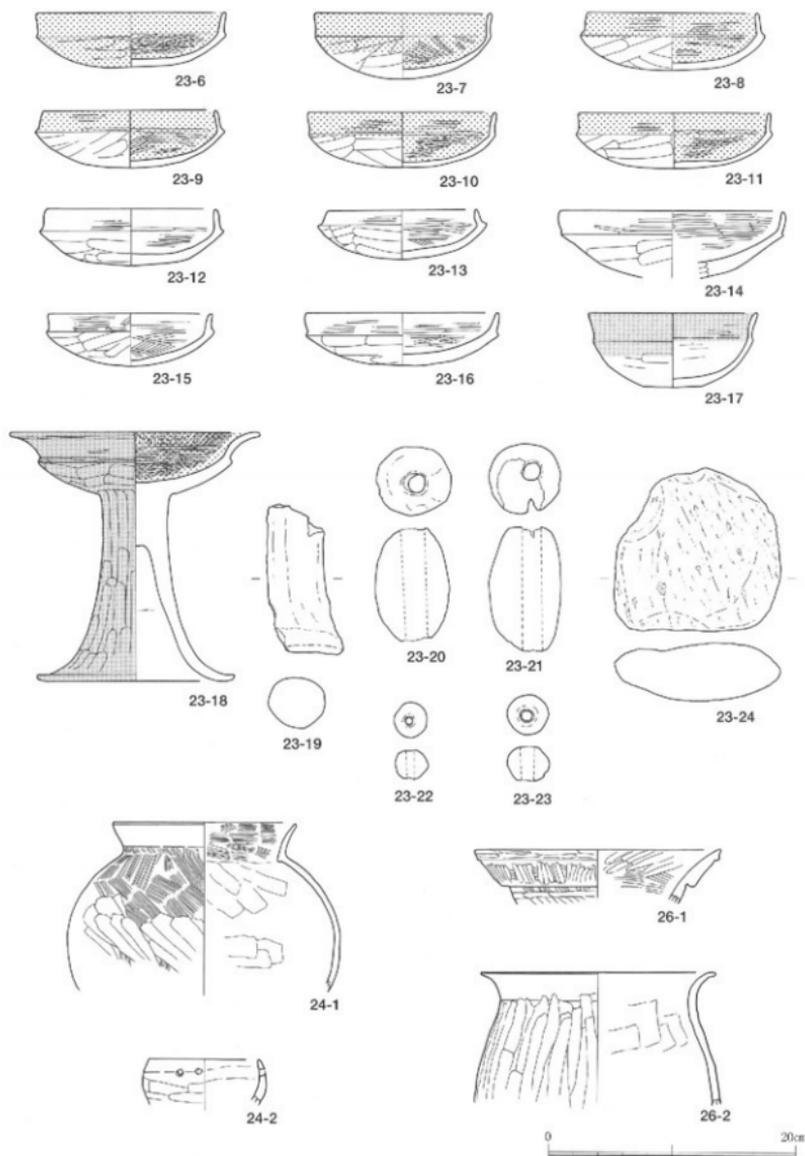
第57圖 S I-15・16出土遺物



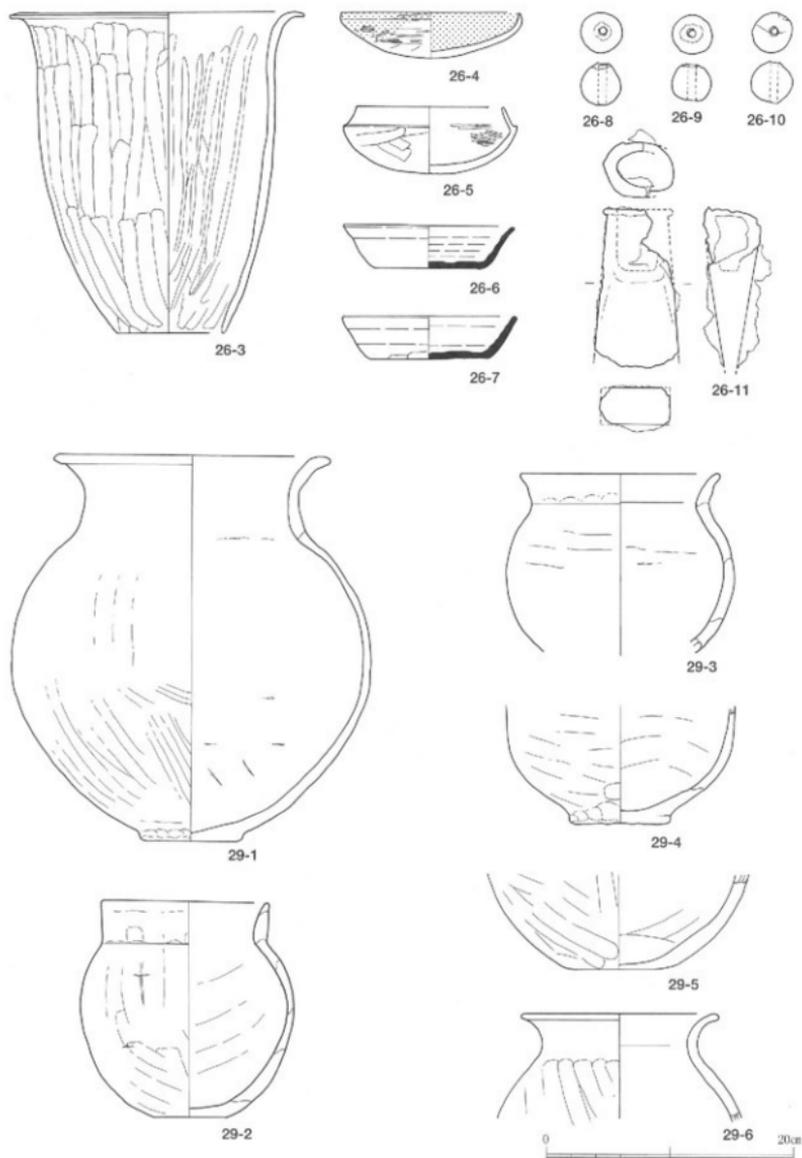
第58圖 S | -17・18・22出土遺物



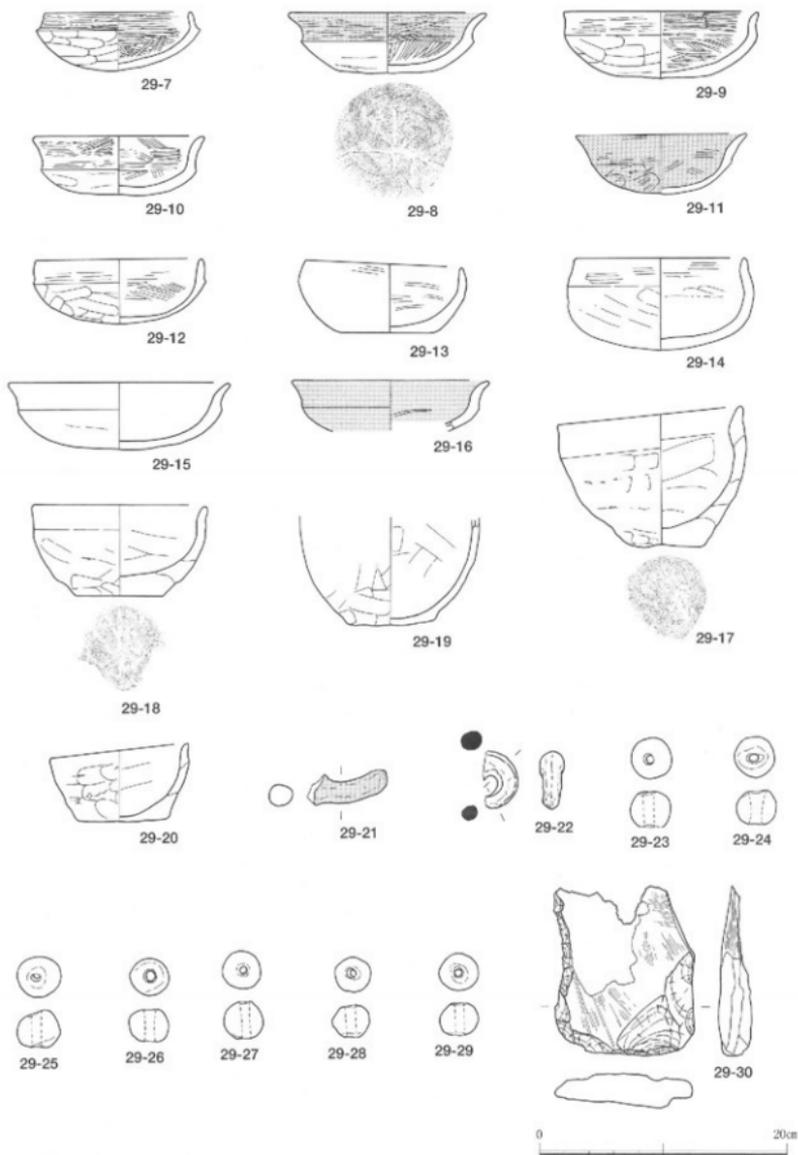
第59圖 S1-22・23出土遺物



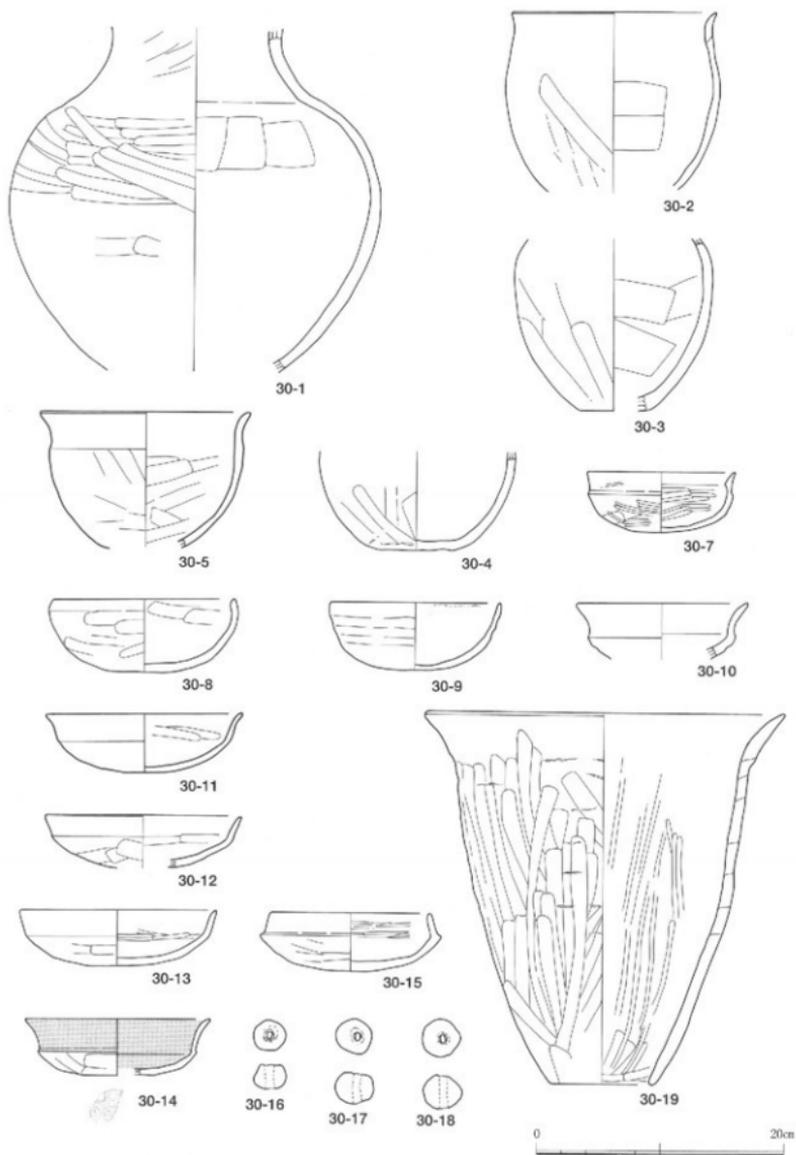
第60図 S I - 23・24・26出土遺物



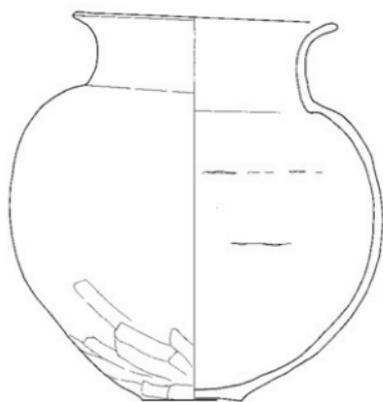
第61圖 S I-26・29出土遺物



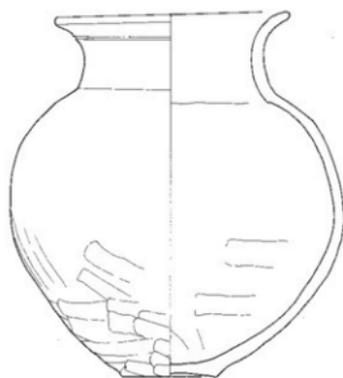
第62図 S I - 29出土遺物



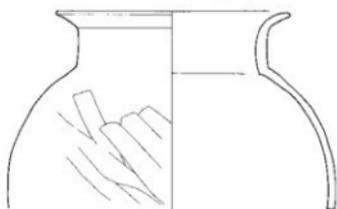
第63図 S1-30出土遺物



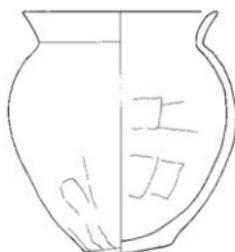
35-1



35-2



35-3



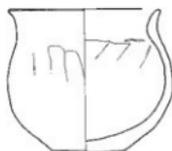
35-4



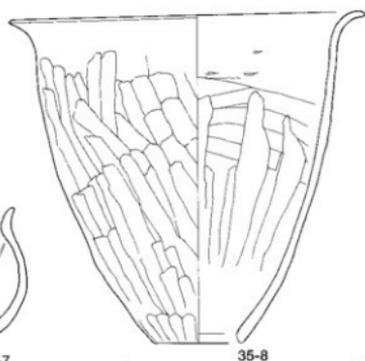
35-5



35-6



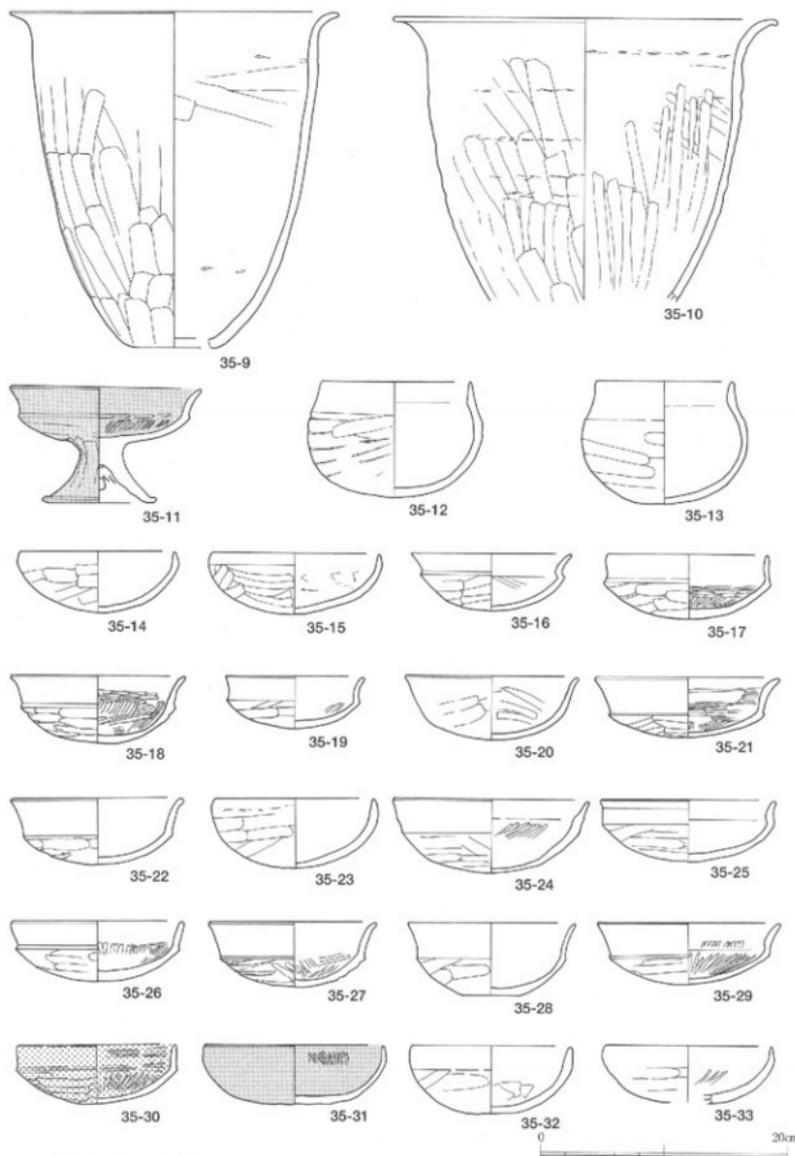
35-7



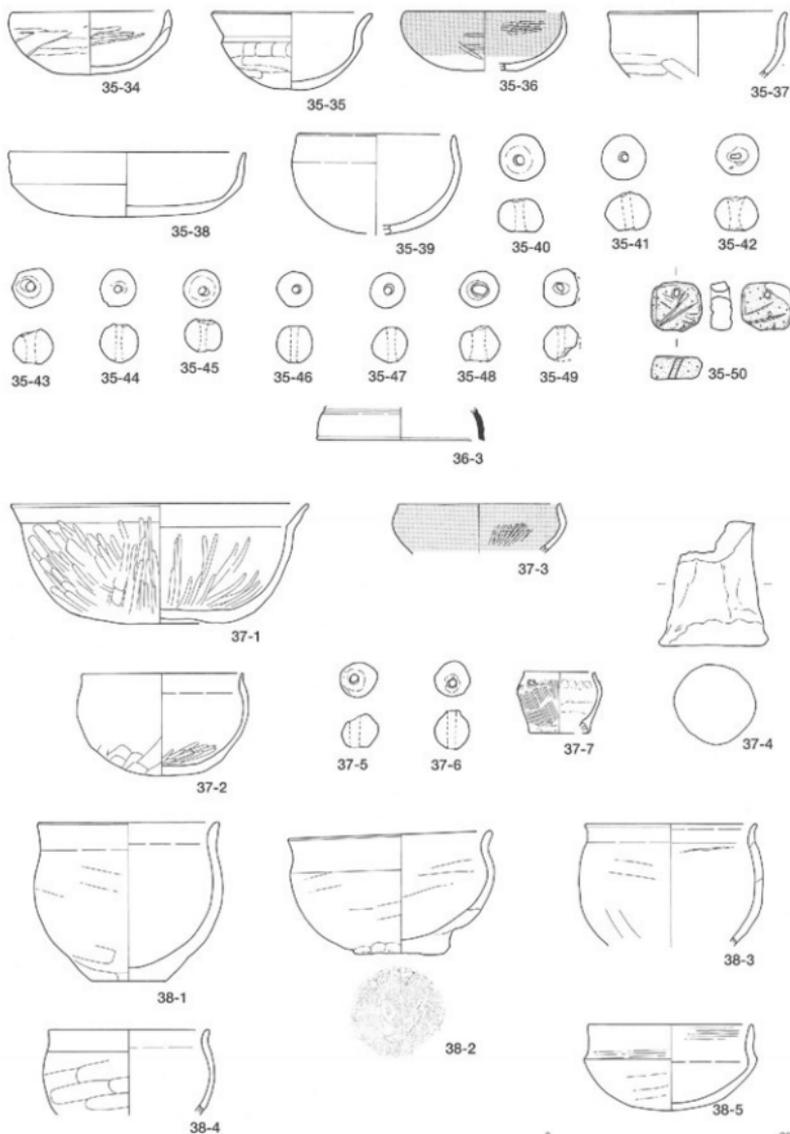
35-8

0 20cm

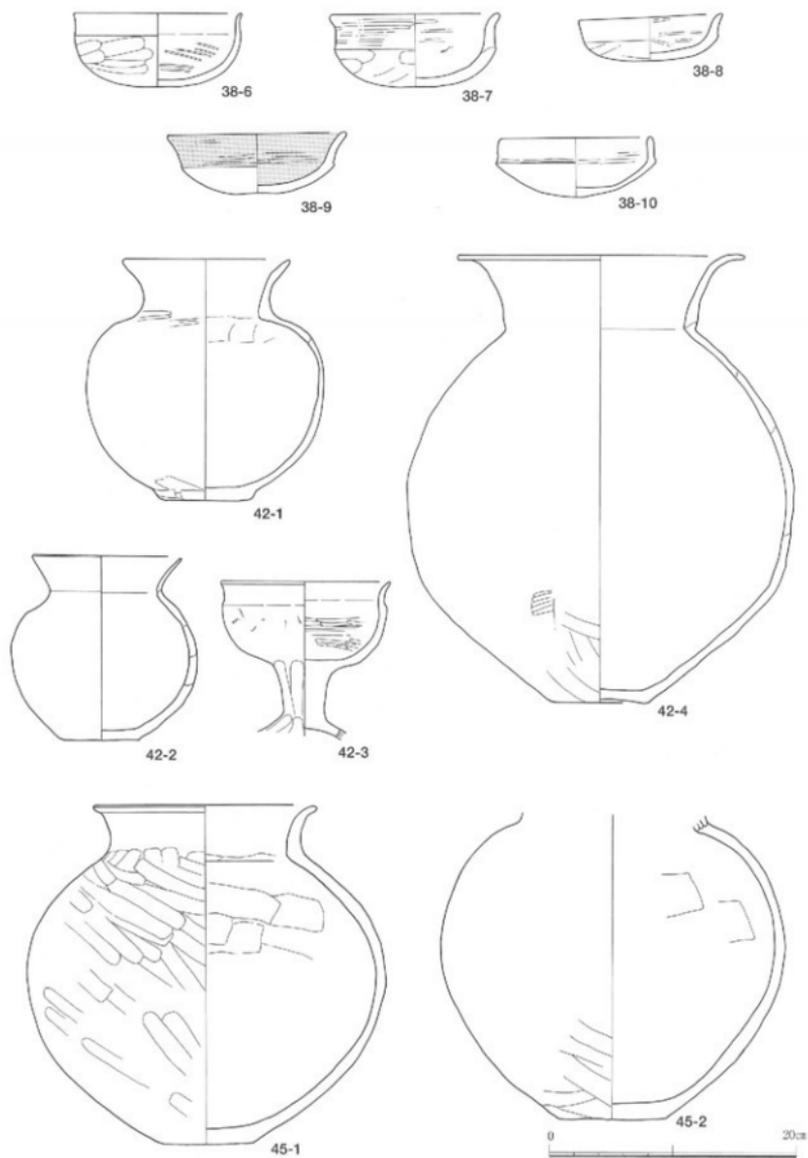
第64図 S I - 35出土遺物



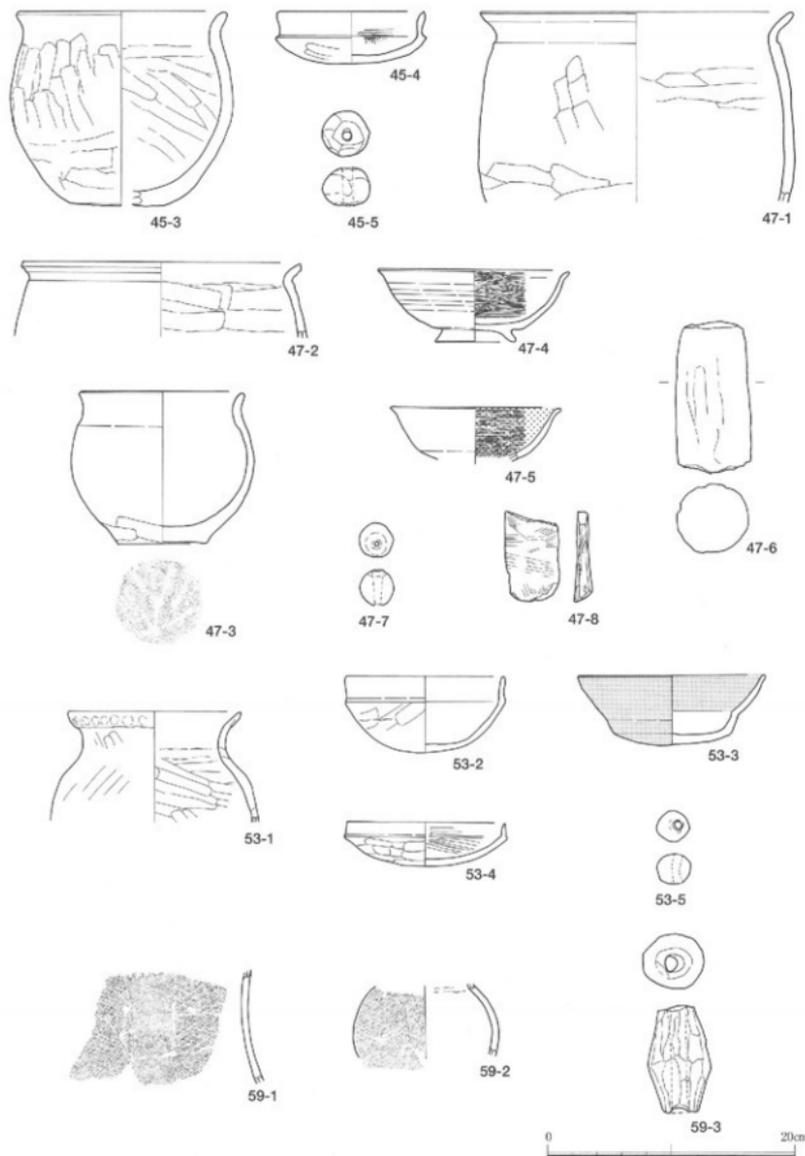
第65圖 S1-35出土遺物



第66圖 S I - 35 · 36 · 37 · 38出土遺物



第67圖 S I - 38・42・45出土遺物



第68圖 S1-45・47・53・59出土遺物

表57 S I - 1 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	須臾器 1/4	(0.29) - 4.1	天上部はほぼ水平で体部は内湾しながら開き、口縁と体部の境に線をもち、口部内面に凹線を持つ。ロケリ整形。	砂粒を含む	良好	灰色	

表58 S I - 3 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上 部 器 遺 存 欠 1/2底部欠	- -	胴部はほぼ球形に近く、口縁はやや反るが直立する。胴部には浮文がさか所に残り、それぞれ4つの突起が見られる。器部の厚薄は激しく、内面にわずかにヘラナガが見られる。	砂粒を含む	良好	褐色	
2	十 部 器 上・胴一割 1/5	- -	胴部は球形を呈し、口縁は直立した後大きく開く。腹部中に最大径をもち、そこより上に柳枝1具によって三段に沈線が施されそれぞれ間に隆帯状の沈線がわずかに残存される。また胴部には突起が彫りつけられている。器部の厚薄が激しく整形不明。	細かい	良好	赤褐色	本形
3	土 部 器 埋 口・胴1/3次	40.3 4.7 2.8	腹部は輪内整形。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく開く。器形の歪みは大きい。器面はほとんど剥離しており、整形不明だが輪積み痕が数か所に観察される。	長石・砂粒を含む	良好	赤褐色	
5	手捏土器 体部1/3次	4.5 -	底部は平底で、体部は内湾しているがほぼ直立。腹口に近い。指頭痕が見られるが外面は平分が剥離している。	長石・砂粒を含む	良好	褐色	
6	手捏土器 体部1/2次	4.8 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁も内湾している。内外面ともナデ。	砂粒を含む	良好	褐色	
7	手捏土器 口縁欠	4.0 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
8	手捏土器 口縁欠	3.8 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。内外面ともナデ。	長石・砂粒を含む	良好	褐色	
9	上 製 品 厚紙1張、光5	長さ37cm、幅35cm、口径1.1cm、重さ41.9g。歪みがある。		砂粒を含む	良好	褐色	
10	上 製 品 厚紙1張、光5	長さ27cm、幅26cm、口径1.0cm、重さ19.4g。		砂粒を含む	良好	黒色	
11	上 製 品 厚紙1張、光5	長さ29cm、幅28cm、口径0.5cm、重さ22.7g。		砂粒を多く含む	良好	褐色	

表59 S I - 4 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上 部 器 内付巻 口欠・胴3/4	15.0 4.0	体部は大きく開き腹線をもった後、内湾しながら立ち上がる。口縁は胴部よりも外反して開く。器面はほとんど剥離している。右部にミダキが残る。	砂粒を含む	良好	赤褐色	全面赤彩
2	土 部 器 口一割中1/3	(20.0) -	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁は大きく反りながら開く。器面は光れが激しい。外面はヘラ削りの残ナデ。	砂粒を含む	良好	褐色	
3	土 部 器 口縁1/2	(0.69) -	口縁は大きく外反しながら開き、折り返される。器面はひどく荒れている。	砂粒を多く含む(φ5mm)	良好	明褐色	
4	上 部 器 口縁 1/3	(0.69) 4.0) 7.8	底部は上唇状気味。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁は大きく開く。口縁部に驚人様を持つ。外側は刷毛目も施した後、ナデ口縁はヨコナデ、内面はナデ。	砂粒を含む	良好	褐色	

表60 S I - 7 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 口径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上脚器 1/3	02.9 8.0 (33.3)	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状を呈し、口縁部は高く積み上げている。胴部外面中位より下はミガキ。胴部上位は頂りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデが観察される。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
2	土器器 壺 体部1/3欠	20.8 8.5 20.3	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口縁と胴部上縁はほぼ直線。体部はヘラ削りの後、ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	砂粒・灰石粒(φ5mm)を含む	良好	褐色	
3	土器器 小形壺 体部1/5	(13.6) 7.0 13.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外へ開く。器面の荒れはかなり激しいが、外面はヘラ削りの後ヨコナデ内面はナデ、口縁部はヨコナデ。	砂粒を含む	良好	赤褐色	
4	土器器 小形壺 口-胴中内	12.0 -	体部は内湾し、口縁で開く。最大径は胴部中位にある。外面胴部はヘラ削りの後ヨコナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	灰石・砂粒を含む	良好	赤褐色	
5	土器器 壺 口縁2/3欠	13.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、腹を有した後、口縁部は内傾する。胴部外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・灰石を含む	良好	褐色	
6	土器器 壺 口縁1/2欠	12.6 -	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、腹を持った後、口縁部は内傾する。器面の荒れは激しい。体部はヘラ削りの後ナデ。	砂粒を含む	良好	褐色	
7	土器器 壺 口縁1/2欠	11.8 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は器面の割離が激しいが、ミガキが観察される。	砂粒を含む	良好	褐色	
8	土器器 壺 口縁3/4欠	(13.6) 8.0 6.0	底部は1/7底。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。器面は割離が激しく、揃っている。外面は頂りの後ナデ。	雲母・砂粒(φ5mm)を含む	やや良好	赤褐色	
9	土器器 壺 1/2	(13.6) -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、明確な腹を有した後、口縁部はやや外反する。体部外面はヘラ削りの後、ナデ、口縁部内面はミガキ。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	褐色	
10	土器器 高杯 環部1/4	02.0 -	体部は内湾しながら立ち上がり、そのまま口縁に至る。外面はミガキだが、網毛目をわずかに残す。内面はナデ。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	明褐色	
11	土製品 皿状+鉢、立形	長さ34cm、幅29cm、口径0.8cm、高さ28.0g。		細かい	良好	褐色	
12	土製品 皿状+鉢、立形	長さ24cm、幅23cm、口径0.7cm、高さ17.3g。		細かい	良好	褐色	
13	土製品 皿状+鉢、立形	長さ28cm、幅25cm、口径0.8cm、高さ17.3g。		砂粒を含む	良好	明褐色	
14	土製品 皿状+鉢、立形	長さ32cm、幅29cm、口径0.7cm、高さ29.0g。穿孔している。		雲母を少量 砂粒を含む	良好	褐色	
15	土製品 皿状+鉢、立形	長さ24cm、幅23cm、口径0.5cm、高さ13.4g。門扉形。中心がやや窪む。		砂粒を含む	良好	褐色	

表61 S I - 8 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 口径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須臾器 口縁破片	(14.4) -	口縁部は二段になって大きく開く。口縁部は更に外へ開く。ロクロ整形。	細かい	良好	灰色	焼

表62 S I - 12 遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口徑 口径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 壺 底欠、胴1/2	(19.0) -	体部は内湾しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を持つ。口縁部は大きく外反する。体部はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラによるナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ。	雲母・石炭灰・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土器器 壺 胴1/2欠	13.8 7.0 23.5	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外へ開く。器面は割離が激しいが、ミガキが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	

表63 S I -12遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土師器 小形甕 胴部1/3欠	(13.6) 7.4 14.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い稜を有した後、口縁部は大きく反りながら開く。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はへうナデ。頸部外面に輪積み痕が残る。	雲母・長石・石英・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土師器 甕 1/4	(22.4) 7.0 15.7	内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。外面はへう割り、内面はへうナデ、口縁部はヨコナデ。	雲母・長石・石英・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土師器 坏 口縁1/3欠	(13.4) - 9.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を有した後、口縁部は反りながら立ち上がる。器面は押れているが外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	明褐色	
6	土師器 坏 口縁1/4欠	16.0 - 6.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い稜を有した後口縁部は反りながら大きく開く。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面は単位不明だがミガキ。	長石・石英・砂粒を含む	良好	褐色	
7	土師器 坏 口縁1/4欠	13.1 - 6.4	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い稜を有した後口縁部は反りながら開く。口縁に細大径を持つ。外面はへう割りの後丁寧ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はわずかにミガキ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
8	土師器 坏 口縁3/4	16.0 - 4.5	体部は内湾し、稜を持った口縁部は反りながら開く、体部はへう割りの後ナデ、内面、口縁部はミガキ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
9	土師器 - 底～体一部	3.8 - 4.0	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。外面はへう割りの後丁寧ナデ、内面はへうによるナデ。	雲母・長石を含む	良好	褐色	
10	土製 土器上段、2/3	長さ29cm、幅28cm、口径0.6cm、重さ190g。		砂粒を含む	良好	明褐色	
11	土製 土器上段、1/3	長さ2.8cm、幅2.0cm、口径0.9cm、重さ145g。		雲母を含む	良好	明褐色	

表64 S I -13遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕 胴～底1/2	7.0 - -	底部はやや上げ底。体部は内湾しながら大きく立ち上がる。外面はへう割りの後ナデ、内面はへうによるナデが施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	明褐色	
2	土師器 甕 胴～底1/4	(24.9) - -	胴部はあまり内湾せず、口縁部は大きく開く。胴部外面はミガキが丁寧に施され、口縁部はヨコナデ、内面はナデやまぼろしミガキが観察される。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
3	土師器 小形甕 口縁1/3	(12.0) - -	口縁は直立した後、幅を持ったまま外反する。体部外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土師器 小形甕 口～胴1/2位	11.5 - -	口縁部は開きながら立ち上がる。体部はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデで、輪積み痕が残る。内面はナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土師器 甕 口縁1/3	(13.0) - -	口縁部は大きく開く。体部外面はへう割りの後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面はナデで全体的にナデは丁寧に施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	赤褐色	赤影
6	土師器 甕 底部破片	- - -	孔は底部全体に及ぶ穿孔で、体部は細やかに内湾しながら立ち上がる。外面はへう割りの後ナデ、内面は丁寧ナデが観察される。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
7	土師器 甕 口縁のみ	10.2 - -	口縁は大きく開きながら立ち上がり、口縁部で深く内湾する。外面はへう割りの後、非常に丁寧ナデが施されている。口縁部はヨコナデ、内面はナデが施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	赤影	
8	土師器 钵 ほぼ完全	9.5 7.0 12.0	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内湾する。器形にかなり重みがあるためか胴部中位より下位に最大径を持つ。外面はへう割りの後ナデ、内面はナデが施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
9	土師器 钵 穴形	11.0 - 8.4	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内湾している。胴部1位に最大径を持つ。外面はへう割りの後、丁寧ナデ、内面には細かいミガキが観察される。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
10	土師器 高坪方 体部1/4底部	(39.0) 6.5 (8.0)	体部はほぼ直線的に大きく開く。明確な稜を有した後、口縁部は反りながら大きく開く。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧ナデが見られる。胴部は欠失。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	灰色	赤影
11	土師器 坏 ほぼ完全	(14.0) - 6.9	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を有した後口縁部は大きく外反して立ち上がる。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は密なミガキが施される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	内面黒色地肌

表65 S I -13遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12	土器 環 1/3	(130) — 5.3	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、明瞭な稜を有した後、口縁部は内傾する。外面体部はヘラ削りの後ナゲ口縁部はヨコナゲ。内面はナゲが施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	明褐色	
13	土器 環 1/4	(140) — 4.5	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はヘラ削りの後ナゲ、内面は施されているがミギキ。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部内外面赤彩
14	土器 環 口縁1/2	140 — 5.0	体部は内湾しながら立ち上がり、明瞭な稜を持った後、口縁部は反りながら立ち上がる。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ。内面は丁寧なナゲが施されている。	雲母・砂粒・少量を含む	良好	明褐色	口縁部内外面赤彩
15	土器 環 口縁一部	(120) — 4.5	体部は円みを有したまま緩やかに内湾しながら立ち上がり、稜を有した後口縁部は内傾する。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ。内面はナゲが見られる。器面は荒れ気味。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
16	土器 環 口縁一部	長さ2.4cm、幅3.0cm、口径0.7cm、重さ20.2g。ナゲの痕が明瞭に観察され、また上下からつぶされている。		長石・砂粒を含む	良好	褐色	
17	土器 環 口縁一部	長さ2.7cm、幅3.0cm、口径0.8cm、重さ19.8g。ナゲが見られる。		長石・砂粒を含む	良好	褐色	

表66 S I -14遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 環 口縁一部	20.2 — 41.5	底部は丸底で、体部内湾しながら立ち上がり、胴部上部で大きく張る。口縁部は大きく反折して立ち上がる。また口縁部は折り返され下方へ突る。ロク口縁部。外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具。	長石・砂粒を含む	良好	灰色	
2	土器 環 口縁一部	— — —	緩やかに開く。また2か所の透かしが残る。外面には増減波状文が施され、内面には明瞭なロク口縁が観察される。	細かい	良好	灰色	
3	土器 環 口縁一部	長さ2.5cm、幅2.7cm、口径1.8cm、重さ19.2g。施されているが丁寧なナゲが施されている。		雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土器 環 口縁一部	長さ2.4cm、幅2.7cm、口径0.6cm、重さ16.3g。かなり歪みが見られる。		雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土器 環 口縁一部	長さ1.8cm、幅1.9cm、口径0.5cm、重さ8.1g。小さいが丁寧な作り。		雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
6	土器 環 口縁一部	長さ2.0cm、幅2.2cm、口径0.5cm、重さ9.2g。小さいが丁寧な作り。		雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
7	土器 環 口縁一部	長さ1.8cm、幅2.1cm、口径0.4cm、重さ8.1g。小さいが作りは丁寧。		雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
8	土器 環 口縁一部	長さ1.7cm、幅2.1cm、口径0.4cm、重さ6.9g。小さいが作りは丁寧。		雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	

表67 S I -15遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 環 口縁上1/4	(17.0) — —	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立した後、口部で外反する。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ。内面胴部はヘラナゲ。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土器 環 口縁上1/4	(22.2) — —	胴部は鋭く内湾し、口縁部は反折した後、口縁部は内湾して開く。外面胴部はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ。内面はヘラナゲ。	雲母・長石を含む	良好	褐色	
3	土器 環 口縁上1/4	(26.0) — —	胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で大きく開く。外面胴部はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ。内面はヘラナゲ。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土器 環 胴下・底部	5.8 — —	乳は尖部全体に及ぶ平孔で体部は内湾しながら立ち上がる。ヘラ削りの後、ナゲ。内面はナゲ。器面はかなり粗雑している。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	明褐色	
5	土器 環 口縁一部	14.2 — 5.9	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がる。稜を有した後口縁部は反りながら立ち上がる。外面はヘラ削りの後ナゲ。口縁部・内面はミギキが施されている。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	赤褐色	赤彩

表68 S I-15遺物観察表(2)

番号	器形 存在度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土師器 口部一底	-	底部は平底に近い丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。器面の摩滅は散見し、外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部内面は不明瞭だがミガキ。	雲母を多量に、砂粒を含む	良好	赤褐色	赤彩
7	土師器 口部一底	(16.2) 1/5	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い稜を持った後、口縁部は反りながら開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部内面はナデだがまばらにミガキが残る。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	赤彩
8	土師器 口部1/2	(15.0)	体部は内湾しながら立ち上がり、稜を有した後、口縁部は外反して開く。体部はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧なナデが施される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
9	土師器 口部1/4	(14.1)	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部内外面は器面は荒れているが、わずかにミガキが残る。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部赤彩
10	土師器 口部1/5	(13.2)	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部、内面はナデで、まばらにミガキが施される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部赤彩 口同一製作か
11	土師器 底削欠1/2	(12.0) 8.3	体部は内湾しながら立ち上がり、内傾した後、口縁部は反りながら立つ。外面はヘラ削りの後丁寧なナデで、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	胴-口縁赤彩 内面黒色処理
12	土師器 胴下一底部	4.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。器面の磨滅は散見し、外面には刷毛目、内面にはヘラナデが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
13	土師器 口部一底部	-	胴部はやや開いた後、腹部で大きく開く。口部内面底部はナデ、外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、胴部内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	外周赤彩
14	須恵器 口部一底部	13.2 1/4欠	胴部はやや開いた後、腹部で大きく開く。口部内面底部はナデ、外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、胴部内面はヘラナデ。	砂粒を含む	良好	灰色	
15	須恵器 無蓋高環 口縁部破片	-	口縁は稜を有した後、大きく開く。体部外面には磨擦波状文が施されている。	炭石を含む	良好	灰色	
16	土師器 耳状土師、光彩	長さ37cm、幅30cm、孔径07cm、重さ364g。円錐形。作りは丁寧。		砂粒を含む	良好	明褐色	
17	土師器 耳状土師、光彩	長さ27cm、幅29cm、孔径08cm、重さ226g。ナデが見られる。		炭石・雲母を含む	良好	褐色	
18	土師器 耳状土師、光彩	長さ28cm、幅26cm、孔径07cm、重さ143g。孔は大きい。		雲母・炭石を含む	良好	明褐色	
19	土師器 耳状土師、光彩	長さ25cm、幅28cm、孔径08cm、重さ161g。円凸が残る。		炭石を含む	良好	褐色	
20	土師器 耳状土師、光彩	長さ24cm、幅25cm、孔径07cm、重さ147g。円凸が残る。		炭石を含む	良好	褐色	
21	土師器 耳状土師、光彩	長さ24cm、幅27cm、孔径08cm、重さ170g。円凸が残る。ナデ残しあり。		炭石・雲母を少量含む	良好	褐色	
22	土師器 耳状土師、光彩	長さ25cm、幅29cm、孔径06cm、重さ166g。器みがある。		砂粒を含む	良好	褐色	
23	土師器 耳状土師、光彩	長さ24cm、幅26cm、孔径08cm、重さ162g。丁寧なナデが施されている。		細かい	良好	明褐色	

表69 S I-16遺物観察表(1)

番号	器形 存在度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 口部1/2欠	19.6 6.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、球形を呈す。口縁部はやや外反して立ち上がった後、口唇部は大きく開く。体部外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
2	土師器 一部欠	13.8 14.9	底部は丸底で、体部はつぶれた球形を呈し、口縁部は外反しながら直立した後、口唇部は大きく開く。器面は磨滅している部分もあるが、外面は丁寧なミガキ、内面はナデが観察される。	雲母・砂粒を多く含む	良好	赤褐色	外面赤彩
3	土師器 口部1/2	14.2 5.4	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はわずかにミガキが残る。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	内面・口縁部赤彩

表70 S I -16遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	支脚 足形	脚 長さ18.4cm、最大径7.3cm、最小径4.5cm、ヘラ削りの長、ナデがなされている。		雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	上製 器上縁、足形	高さ3.0cm、幅2.8cm、孔径0.6cm、重さ21.9g。器面が剥落しているが丁寧にナデがなされている。		細かい	良好	褐色	

表71 S I -17遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土加 器 口一隅欠	(16.0) 7.2 21.7	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、胴部上位に最大径を有す。口縁部は直立した後、口唇部で外反する。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はヨコナデが一帯にミガキ、内面は割縁が強いが丁寧にナデが残る。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	内面黒付着
2	上脚 器 口一隅欠	(14.0) - 4.0	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。器面は剥落しているが、外面はヘラ削りの後丁寧なナデがなされているが一部にミガキが残る。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	赤影
3	上脚 器 口縁破片	(13.0) - -	口縁は反りながら立ち上がる。輪郭のみを残すのが、全体的に丁寧なミガキがなされている。	雲母を多く含む	良好	褐色	赤影

表72 S I -18遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上脚 器 口一隅欠	10.0 7.0 10.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は大きく開く。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。輪郭のみが残る。	砂粒・長石を含む	良好	褐色	口縁赤影
2	上脚 器 口一隅欠	13.5 5.0 9.8	底部は丸底で、体部はつぶれた球形を呈し、口縁部は内面に割縁を有して内湾して立つ。外面は非常に丁寧にナデがなされているが一部にヨコナデ、内面は丁寧にナデが施されている。	雲母・砂粒を少量含む	良好	褐色	外面、内面内縁赤影
3	上脚 器 口一隅欠	14.8 - 6.4	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデがまばらにミガキも観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土加 器 口一隅欠	11.0 1.2 6.1	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに内湾して立つ。器面は剥落している部分もあるが全体的にミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	上脚 器 口一隅欠	(11.0) - 3.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で緩やかに内湾して立つ。器面は剥落している部分もあるが全体的にミガキが施されている。	雲母・長石を含む	良好	褐色	
6	支脚 器 口一隅欠	長さ9.1cm、最大径4.8cm、最小径3.6cm。上下が太い円錐形を呈す。帯によるナデが明確に観察される。		長石を多量に含む	良好	褐色	
7	上製 器 器上縁、足形	長さ2.6cm、幅3.3cm、孔径0.8cm、重さ26.8g。上下につぶれた形を呈す。器面は丁寧にナデがなされている。		細かい	良好	褐色	
8	上製 器 器上縁、足形	長さ2.2cm、幅3.3cm、孔径0.8cm、重さ17.3g。上下につぶれた形を呈す。器面は剥落しているが、外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部、内面はナデがまばらにミガキも観察される。		細かい	良好	褐色	
9	上製 器 器上縁、足形	長さ3.3cm、幅3.3cm、孔径0.6cm、重さ31.5g。器面はなでられている。		雲母を少量含む	良好	褐色	
10	上製 器 器上縁、足形	長さ2.9cm、幅3.3cm、孔径0.6cm、重さ25.9g。器面が剥落している。		砂粒を含む	良好	明褐色	

表73 S I -22遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口径 器高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土加 器 口一隅上1/4	(19.5) - -	口縁部は直立した後、口唇部が大きく開く。外面胴部はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はナデが割縁のみが残る。口唇部はヨコナデ、内面はナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
2	上脚 器 口一隅上片	(21.9) - -	口縁部は直立した後口唇部で大きく開く。体部はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はナデが割縁のみを残す。口唇部はヨコナデ、内面はナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	

表74 S1-22遺物観察表(2)

番号	器形 遺存状況	口径 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	土器器 小形壺 底部1/3欠	130 47 142	底部は弱い上げ底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で開く。外面はへう割りの後ナデで、内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
4	土器器 瓶 口一側1/2	(21.0) —	体部は幅やかに内湾しながら立ち上がり、把手を有した後、肩部に上に最大径を持つ。口縁部はわずかに外反する。外面はへう割りの後ナデ、内面はナデ。把手は指によるナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
5	土器器 罎 朝下一底欠	106 —	体部はつぶれた球形を呈し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。器面はほとんどを覆っている。外面と口縁内面にわずかにミガキが観察され、内面肩部はナデが施されている。	長石・雲母砂粒を含む	良好	赤褐色	外側・口縁内面赤彩
6	土器器 罎 朝下一底部	— 5.4 —	底部は平底で、体部はややつぶれた球形を呈す。外面はミガキで内面は大部分が剥離しているが、ヘラナデ、また輪積み面が明瞭に残る。	雲母・砂粒を多く含む	良好	赤褐色	外周赤彩
7	土器器 罎 口縁欠	— 4.4 —	底部は平底で、体部は球形を呈す。外面はへう割りの後、非常に丁寧なナデが施されている。内面はナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
8	土器器 罎 口一側中片	(9.2) —	口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、朝部はへう割りの後ナデ口縁部は朝毛目。内面はナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
9	土器器 罎 口一側中片	(8.5) —	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく開く。器面はかなり剥離しているが、外面はへう割りの後ナデ、内面は丁寧なナデが施されている。	雲母を含む	良好	明褐色	
10	土器器 罎 口一側中片	138 — 5.7	底部は平底に近い丸底で、体部は幅やかに内湾しながら立ち上がり、横を有した後口縁部は外反する。外面肩部はへう割りの後ナデ、口縁部、内面は意威しているがナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
11	土器器 罎 口一側中片	— —	肩部は肩部で大きく開く。底部は横を有した後反りながら立ち上がる。外面外部はミガキ、脚部はへう割りの後ナデ、内面はミガキ、内面はヘラナデ。ナデが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
12	土器器 罎 口一側中片	— —	一歪の漬が残る。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
13	土器器 罎 朝下一底部	(4.4) —	底部は平底で、体部は球形を呈す。底部には縦筋が観察される。外面はへう割りの後ナデ、内面はナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
14	土器器 罎 口一側中片	長さ31cm、幅29cm、口径0.7cm、重さ229g。	つぶされた球形を呈す。	雲母を含む	良好	明褐色	
15	土器器 罎 口一側中片	長さ13.1cm、幅7.7cm、厚さ4.6cm、重さ393.8g。	2面が非常に良く使われ、磨り減っている。				砂岩
16	土器器 罎 口一側中片	長さ7.7cm、幅3.1cm、厚さ1.6cm、重さ16.3g。					粘板石

表75 S1-23遺物観察表(1)

番号	器形 遺存状況	口径 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 罎 口一側中片	236 8.4 33.0	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状を呈し、口縁部は弱く狭み上げられている。外面肩部に下位はミガキ、脚部上段はナデ、口縁部はナデ、内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
2	土器器 罎 口一側中片	108 5.0 13.9	底部はやや上げ底で、体部は内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。肩部中に最大径を持つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はへうによるナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
3	土器器 罎 口一側中片	103 5.2 11.3	底部は弱い上げ底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部には帯みが見られる。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土器器 罎 口一側中片	125 6.0 11.4	底部は上げ底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面にはヘラナデが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土器器 罎 口一側中片	204 4.2 21.9	口は底部全体に及ぶ単孔で、体部は内湾しながら立ち上がり、肩部に把手を持つ。口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ、下部にはミガキが見られる。把手は指によるナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
6	土器器 罎 口一側中片	152 4.4	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、横を有した後、口縁部はほぼ直立する。外面はへう割りの後、丁寧なナデ、口縁部内外側・内面はミガキが施されている。底部に「+」の縦筋が見られる。	雲母・長石を含む	良好	褐色	黒色処理

表76 S I -23遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 環 口縁1/4欠	14.1 - 3.4	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後、口縁部はやや反り気味に直立する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部・内面黒色処理が残る
8	土師器 環 口縁部欠	13.6 - 4.6	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾し、縁を有して口縁部は内傾する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが施されている。底部には「+」模様が認められる。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部・内面黒色処理が残る
9	土師器 環 口縁部2/3欠	14.0 - 4.7	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有して口縁部は内傾する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが明瞭に観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部・内面黒色処理が残る
10	土師器 環 口縁部欠	13.2 - 4.5	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は直立する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが観察される。底部には「-」模様が認められる。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	口縁部・内面黒色処理が残る
11	土師器 環 ほぼ完形	15.4 - 4.5	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが丁寧に施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	口縁部・内面黒色処理が残る
12	土師器 環 口縁1/4欠	13.6 - 4.6	底部は半底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は内傾する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面は「+」等ミガキが観察される。	雲母を含む	良好	褐色	
13	土師器 環 口縁1/4欠	12.0 - 4.0	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は内傾する。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面は緩いミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
14	土師器 環 1/2	18.0 - 3.5	底部は丸底で、厚みを持つ。緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部は内湾して立つ。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面は丁寧にミガキが観察される。	雲母を少量砂粒を含む	良好	褐色	
15	土師器 環 1/2	13.2 - 4.2	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を持った後口縁部はわずかに反って立つ。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
16	土師器 環 1/3	13.4 - 4.3	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は内湾して立つ。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが丁寧に施されている。	雲母を含む	良好	褐色	
17	土師器 環 1/4	13.8 - 6.1	底部は半底で、体部は内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は反り立つ。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・内面はヨコナゲ、内面はナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	口縁部内外黒色
18	土師器 高鉢、山 脚部一部欠	20.0 16.0 20.4	杯部は内湾した後、縁を経て口縁部は大きく反って固く、脚部は杯部に向かって緩やかに附きながら立たせ、頸部で大きく奥く頸部は反る。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部・頸部はヨコナゲ杯部内面は細いミガキ、脚部内面は簡単なナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	杯部内面黒色処理 外表面赤彩
19	土製土 文部のみ	長さ123cm、幅66cm、	頂りの後比較的丁寧にナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
20	土製土 土製形	長さ102cm、幅61cm、孔徑21cm、	重さ280.0g。ナゲによって整えられている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
21	土製土 1/4欠	長さ101cm、幅58cm、孔徑1.6cm、	重さ257.0g。ナゲによって整えられている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
22	土製土 足跡、之形	長さ31cm、幅29cm、孔徑0.7cm、	重さ22.9g。丁寧なナゲが施されている。	雲母を含む	良好	褐色	
23	土製土 土師、完形	長さ131cm、幅77cm、孔徑4.6cm、	重さ385.8g。ナゲによって整えられている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
24	土製土 完形	長さ13.5cm、幅13.3cm、厚さ4.8cm、	重さ213.0g。3面にわたって施されている。				
25	土師器 甕 胴1/2口破片	φ21.8 9.6 32.8	底部は半底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁は1く、の字状を呈す。胴部中～下位はミガキ、上位はへら削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ、内面はへらナゲが施されている。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	

表77 S I -24遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕 口一筋上1/2	14.8 - -	胴部はかなり丸みを帯び、口縁は大きく外反する。外面胴上位は朝毛目が明瞭に残り、中位はへら削りの後ナゲが施されている。口縁部外面はヨコナゲ、内面は朝毛目、胴部内面はへらナゲ。	砂粒・長石雲母を含む	良好	褐色	
2	土師器 環 口縁破片	60.0 - -	口縁部は内傾する。口縁部には2ヶ所の施成部穿孔が観察される。外面はへら削りの後ナゲ、口縁部はヨコナゲ、内面はナゲが施されている。	砂粒を含む	良好	明褐色	

表78 S I - 26遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上 部 器 口縁部 口縁部	(90)0 -	大きく外反する広口で折り返す有段口縁。口唇部外縁は面取りされている。内外面とも縦毛の後丁寧なミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
2	上 部 器 口一側上1/3	(19)0 -	胴部の張りは弱い。口縁は大きく開く。外面はへう割りの後ナゲ口縁部はココナテ、内面はへうナゲが観察される。	雲母・石灰を含む	良好	褐色	
3	十 部 器 底	24.0 8.5 26.1	口は底部態に成る早口で、胴部はあまりふくらみを持たずに内湾しながら立ち上がる。口縁部は大きく外反する。外面はへう割りの後ナゲ、口縁部はココナテ、内面は丁寧なナゲが見られる。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	十 部 器 底	14.5 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内湾する。外面にはへう割り痕も残すが全面にミガキが丁寧に施されている。	細かい	良好	暗褐色	黒色処理
5	土 部 器 底	(12)0 3.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内湾する。器面は全体的に磨滅している。外面はへう割りの後丁寧なナゲ。口縁部、内面はミガキがなされている。	細かい	良好	明褐色	
6	十 部 器 底	(13)6 6.0 3.3	底部は平底で、体部は斜め内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。器面は磨滅している。ロクロ形状。裏面は回転へう切り磨滅。	砂粒を含む	良好	暗褐色	
7	十 部 器 底	(14)0 6.0 3.5	底部は平底で、体部はやや内湾しながら立ち上がりそのまま縁に至る。器面は磨滅しているがロクロ痕が見られる。底面は回転へう切り磨滅。	砂粒を含む	良好	暗褐色	
8	十 部 器 底	長さ3.5cm、幅3.4cm、孔径0.6cm、高さ32.6g。丁寧なナゲが施されている。		雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
9	十 部 器 底	長さ3.0cm、幅3.0cm、孔径0.6cm、高さ29.6g。丁寧なナゲが施され、孔の周囲は面取りされている。		雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
10	十 部 器 底	長さ3.4cm、幅3.3cm、孔径0.6cm、高さ33.1g。丁寧なナゲが施されている。		雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
11	底 部 器 底	長さ12.7cm、幅6.1cm、厚さ2.0cm、高さ51.9g。裏面は袋状を呈す。					磨滅しい

表79 S I - 29遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上 部 器 口一側1/2欠	21.4 (8.4) 31.5	底部は平底でやや突き出る。体部は球形を呈し、口縁部は内湾しながら立ち上がった後、外反し口唇部で更に大きく開く。胴下半は縦ミガキ、上半はへう割りの後ナゲ、口縁部はココナテ、内面はへうナゲが施され、輪郭み仮が残る。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
2	十 部 器 小形器 口一側欠	13.3 6.0 17.7	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。外面はへう割りの後ナゲ、口縁部はココナテ、内面はへうによるナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
3	上 部 器 小形器 口一側上1/3	16.0 -	体部は球形に近く、口縁は大きく外反する。外面はへう割りの後ナゲ、口縁部はココナテで胴部には縦ミガキが見られる。内面はへうによるナゲ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	上 部 器 小形器 胴中一底部	7.6 -	底部は平底で突き出る。体部は球形に近い。外面はへう割りの後ナゲで底部の周囲には縦ミガキが残る。内面はへうナゲ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	十 部 器 底	8.1 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。外面はへう割りの後、丁寧なナゲ。内面はへうナゲ、器面は全体的に磨滅している。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
6	土 部 器 口縁	15.1 -	口縁は外反し、口唇部で更に大きく開く。外面はへう割りで、口縁部はココナテ、内面はナゲが施されている。	雲母・石灰・砂粒を含む	良好	赤褐色	
7	上 部 器 底	11.7 4.6 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、縁を有した後口縁部は内湾する。外面はへう割りの後ナゲで、口縁部・内面は非常に丁寧にナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
8	十 部 器 底	15.6 4.6 5.0	底部は丸底に近い平底で、体部は斜め内湾しながら立ち上がり、縁を有した後、口縁部は大きく反って開く。底面は赤黒色で、外面はへう割りの後ナゲ、口縁部・内面は丁寧なミガキが見られる。	雲母・石灰・砂粒を含む	良好	明褐色	口縁部内外面赤黒
9	十 部 器 底	(15)6 (5)8 5.4	底部は丸底に近い平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、縁を有した後、口縁部は反りながら立ち上がる。外面はへう割りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが観察される。	石灰・砂粒を含む	良好	明褐色	

表80 S I -29遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・型形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
10	土師器 1/2	(13.6) - 4.8	底部は平底に近い丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、腰を持った後口縁部は反って立つ。外面はへう刷りの後ナデで、口縁部・内面は磨かれてはいるがミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
11	土師器 1/3	(13.8) - 4.8	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、肩の境を持った後、口縁部は大きく開いて立つ。器形はかなり粗らわっている。外面はへう刷り状が残るがミガキ、口縁・内面はミガキ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	内面・口縁部赤彩
12	土師器 1/2	13.4 - 5.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、腰を持った後口縁部はふくらむがほぼ直立する。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部内面は磨いてはいるがミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
13	土師器 1/2	13.5 - 5.6	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内湾する。器面はほとんど磨滅している。外面はへう刷り後ナデ、口縁部内面は磨いてはいるがミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
14	土師器 1/4	13.6 - 7.5	底部は平底に近い丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内湾する。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部はミガキ、内面はナデが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
15	土師器 1/4	(17.8) - 5.4	底部は平底に近い丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、腰を持った後口縁部は大きく開く。器面の厚減が激しいが外面はへう刷り、口縁部と内面はミガキ。	砂粒を含む	良好	赤褐色	
16	土師器 口・体破片	(15.6) - -	体部は内湾し、腰を越えて口縁部は外反する。ほとんど磨滅しているが全面にミガキがなされている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	赤彩
17	土師器 1/2	14.7 5.7 10.9	底部は平底でわずかに木炭灰が残る。体部は内湾しながら立ち上がり内面に腰を持ち、口縁部で外反する。器形は歪む。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部は磨滅しナデ、口縁部ココナデ、内面はへうナデ。底部周囲には指痕が残る。	雲母・石英砂粒を含む	良好	赤褐色	
18	土師器 1/3	(13.8) 6.9 7.4	底部は平底で、木炭灰。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。器形はかなり歪む。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部ココナデ、内面はへうナデ。底部周囲には指痕が残る。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
19	土師器 口縁欠	- (7.1) -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、腰を持った後口縁部は反る。外面はへう刷りの後ナデ、内面はへうナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
20	土師器 1/3	(11.1) 7.2 5.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。器形は歪み、また磨滅している。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部ココナデ、内面はへうナデ。輪積み痕を明確に残す。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
21	土師器 順把手一つ	-	へう刷りの後ナデにナテられている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	内外面赤彩
22	土師器 順把手一つ	-	指によって丁寧にナテられている。	砂粒を含む	良好	灰色	
23	土師器 33x14.5x8.5	長さ28cm、幅33cm、口径0.8cm。孔の周りは面取りされている。		砂粒を含む	良好	明褐色	
24	土師器 33x14.5x8.5	長さ28cm、幅33cm、口径0.8cm。孔は一度穿たれた後、上下からもう一度開けられている。		石英・砂粒を含む	良好	明褐色	
25	土師器 33x14.5x8.5	長さ35cm、幅31cm、口径0.8cm。孔の周りは面取りされているが、かなり歪みがある。		砂粒を含む	良好	明褐色	
26	土師器 33x14.5x8.5	長さ26cm、幅32cm、口径0.7cm。孔の周りは面取りされている。		雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
27	土師器 33x14.5x8.5	長さ32cm、幅32cm、口径0.6cm。嵌合痕が残る。		雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
28	土師器 33x14.5x8.5	長さ29cm、幅25cm、口径0.8cm。かなり歪んでいる。			良好	明褐色	
29	土師器 33x14.5x8.5	長さ32cm、幅27cm、口径0.8cm。1下からつぶされた器形を見す。		雲母を含む	良好	明褐色	
30	土師器 33x14.5x8.5	一部が非常に良く使い込まれている。被熱痕あり。					

表81 S I -30遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・模形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 胴部1/3のみ	- -	胴部上位で大きく張り、下位は窄まる。外面はへう刷りの後ナデ、口縁部はココナデ、内面はへうによるナデ。	砂粒を多く含む 雲母・石英を含む	良好	明褐色	

表82 S I-30遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形 の特徴	胎土	焼成	色調	備考
2	土 師 器 小形壺 口→胴1/4	(13.0) - -	胴部は縦やかに内湾し、口縁部で外反する。器面はかなり産成が激しいが、外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデがなされている。	砂粒を多く含む	良好	褐色	
3	土 師 器 鉢 口→胴下片	(17.0) - -	体部は内湾しながら立ち上がり、弱い稜を経て口縁部は外反する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。器面は磨かれている。	砂粒を多く含む 雲母を含む	良好	赤褐色	
4	土 師 器 小形壺 胴下→底面	- 6.0 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。かなり器面は荒れている。外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
5	土 師 器 小形壺 胴1/4破断片	- 6.0 -	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。胴部1/4に最大径を持つ。外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデ。	砂粒を含む	良好	赤褐色	
7	土 師 器 杯 完形	12.0 - 4.9	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を有した後口縁部は外反する。外面はヘラ削り面を残すミガキ、口縁部・内面はミガキが観察される。	雲母・石英を少量含む	良好	明褐色	
8	土 師 器 杯 一部欠	15.0 - 6.0	底部は丸底に近しい平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。器面は荒れている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はミガキ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
9	土 師 器 杯 完形	13.5 - 5.5	底部は丸底で、体部は縦やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は稜を持たずに内傾する。器面はほぼ磨かれている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。	砂粒を多く含む	良好	褐色	
10	土 師 器 杯 口縁1/3	(14.0) - -	口縁は稜を有した後大きく外反する。器面はかなり荒れている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキ。	雲母を多く含む 砂粒を含む	良好	赤褐色	
11	土 師 器 杯 1/4	(16.0) - 1/4	底部は丸底で、体部は縦やかに内湾しながら立ち上がり、弱い稜を持った後、口縁部は外反する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はほとんど磨かれているがミガキ。	石英・砂粒を含む	良好	赤褐色	
12	土 師 器 杯 1/4	(16.0) - 1/4	底部は丸底で、体部は縦やかに内湾しながら立ち上がり、弱い稜を有した後、口縁部が大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが見られる。	石英・砂粒を少量含む	良好	褐色	
13	土 師 器 杯 1/4	(16.0) - 1/4	底部は丸底で、体部は縦やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は直線的に開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが観察されている。	石英・砂粒を含む	良好	褐色	12と同 一物体の
14	土 師 器 杯 1/4	(15.0) - 1/4	底部は平底で、木裏面が観察される。体部は内湾しながら立ち上がり、稜を有した後口縁部で外反する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	口縁部内面赤帯
15	土 師 器 杯 1/3	(13.0) - 1/3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を持った後口縁部は内傾する。外面は削り面を残すミガキ、口縁部・内面はミガキが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	
16	土 製 品 器状土師 完形	長さ26cm、幅20cm、口径8cm、高さ12.5g。	丁字にナデがなされている。	細かい	良好	褐色	
17	土 製 品 器状土師 完形	長さ33cm、幅26cm、口径7.0cm、高さ19.8g。	孔の周りは面取りされている。		良好	明褐色	
18	土 製 品 器状土師 完形	長さ31cm、幅27cm、口径7.0cm、高さ22.7g。	丁字にナデがなされている。		良好	褐色	
19	土 師 器 瓶 部欠	29.2 (8.3) 30.3	孔は底部全体に及ぶ孔で、体部はあまりふくらみを持たずに立ち上がり、口縁部で大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデで、輪積み面を残す。口縁部はヨコナデ、内面はミガキ。	石英・雲母砂粒を含む	良好	褐色	

表83 S I-35遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・整形 の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土 師 器 口1/2胴1/4欠	21.4 8.0 31.2	底部は平底で、胴部は球形を呈す。口縁は「コ」の字状で、口縁部は大きく開く。胴部の内縁は明瞭。外面はヘラ削りの後丁字ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	石英・砂粒を多量に含む	良好	明褐色	
2	土 師 器 壺 口胴一部欠	18.9 7.6 29.5	底部は平でやや1/4平底で、胴部は球形を呈す。口縁は「コ」の字状で大きく外反し流線が1巻ある。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが明瞭。輪積み面が観察される。	雲母・砂粒を多量に含む	良好	明褐色	
3	土 師 器 口一版上	(19.0) - -	胴部は球形を呈し、口縁は「コ」の字状となり大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデで、胴部の内縁は明瞭である。	石英・雲母・砂粒を多量に含む	良好	明褐色	

表84 S I -35遺物観察表(2)

番号	器形 通称	口径 高さ (cm)	底・頸部の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	十 加 瓶 壺 一形欠	15.8 7.0 19.6	頸部は上位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状を呈し、大きく外反する。器面はかなり摩耗している。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母・石英 砂粒を含む	良好	明褐色	
5	十 加 瓶 壺 一部1/2	(67.1) 12.2 18.5	頸部は縁彩を呈し、後を持った後口縁部は外反する。器面はかなり磨り減っているが、外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが明瞭に残る。	雲母・砂粒 を含む	良好	赤褐色	
6	土 加 瓶 壺	15.0 (5.9) 14.8	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく開く。最大径を口縁部を持つ。器面は荒れている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	赤褐色	
7	上 加 瓶 壺 一部欠	12.4 3.8 11.7	頸部は縁彩を呈し、胴部中に最大径を持つ。口縁部は外反する器面はかなり荒れている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
8	上 加 瓶 壺 口縁1/3欠	28.9 7.1 26.7	口は底部全体に及ぶ平孔で、体部は大きく立ち上がる。口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが明瞭に観察される。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
9	土 加 瓶 壺 口縁1/3欠	(26.8) 6.4 27.4	口は底部全体に及ぶ平孔で、体部はあまりふくらみを持たずに立ち上がり口縁部で外反する。外面はへう割りの後ナデ、内面はヘラナデが輪積み痕が明瞭に観察される。	雲母をわずかに、砂粒 を含む	良好	明褐色	
10	十 加 瓶 壺 口唇1/3底欠	91.2 -	口縁部は大きく外反し、口縁部は下方に出る。外面はへう割りの後ナデ、内面はヘラによるナデで、輪積み痕が明瞭に残る。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	明褐色	
11	十 加 瓶 高杯 ほぼ完形	15.5 9.2 9.5	体部は縦やかに内湾した後、後を持って口縁部は外反する。頸部は大きく開いて立つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はヘラナデが観察される。	雲母・石英 砂粒を含む	良好	褐色	杯部全周赤彩
12	土 加 瓶 壺 完形	12.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、わずかな後を持った後口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は非常に丁寧なナデが施されている。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
13	土 加 瓶 壺 体部1/3欠	11.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、鋭い稜を経て口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧なナデがなされている。器面は摩滅している。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
14	上 加 瓶 壺 ほぼ完形	12.5 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は器面が剥れており単位不明だがミガキ。	雲母・砂粒 を含む	良好	明褐色	
15	土 加 瓶 壺 完形	13.4 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は器面の摩滅が激しいがミガキが見られる。	雲母・石英 を少量、砂粒 を含む	良好	褐色	
16	十 加 瓶 壺 口縁一部欠	13.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持った後口縁部は大きく開いて立つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキ。器面の荒れが激しく器位は不明。	雲母・石英 を含む	良好	明褐色	
17	十 加 瓶 壺 口縁一部欠	12.8 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持った後口縁部はほぼ直立する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面は丁寧なミガキが観察される。	雲母・砂粒 を含む	良好	明褐色	
18	上 加 瓶 壺 完形	14.2 -	底部は丸底で、体部は縦やかに内湾し、後を経て口縁部は大きく開く。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・石英 砂粒を含む	良好	明褐色	
19	上 加 瓶 壺 ほぼ完形	11.2 -	底部は丸底で、体部は内湾し後を持った後、口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキがなされている。	石英を含む	良好	褐色	
20	土 加 瓶 壺 ほぼ完形	14.1 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する器面は摩滅している。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は部分別にミガキ痕が残る。	砂粒を含む	良好	明褐色	
21	十 加 瓶 壺 ほぼ完形	14.9 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持った後、口縁部は大きく開いて立つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	砂粒を含む	良好	褐色	
22	土 加 瓶 壺 一部欠	14.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり後を経て口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒 を含む	良好	明褐色	
23	上 加 瓶 壺 一部欠	12.9 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持った後口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面は単位不明だがミガキ。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
24	土 加 瓶 壺 一部欠	16.0 -	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、鋭い稜を持った後口縁部は外反する。器面の摩滅は激しい。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが残る。	雲母・砂粒 を含む	良好	赤褐色	

表85 S1-35遺物観察表(3)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高さ (cm)	成 型 形 の 特 徴	胎 土	構成	色 調	備 考
25	土 師 器 杯 3/4	14.2 - 5.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を有した後口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
26	土 師 器 杯 口縁2/3欠	(14.0) - 4.9	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、弱い後を有した後口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
27	土 師 器 杯 1/2	(12.6) - 3.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を有した後口縁部は外反して立つ。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
28	土 師 器 杯 体部2/3欠	(13.5) - 4.4 3.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い後を有した後口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はかなり器面が剥離しているがミガキがわずかに残る。	石英・砂粒を含む	良好	褐色	
29	土 師 器 杯 一部欠	14.8 - 5.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を有して口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	褐色	
30	土 師 器 杯 体部一部欠	13.8 - 4.8	底部は丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、後を有した後口縁部は直立する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが明瞭に観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	黒色処理
31	土 師 器 杯 口縁1/2欠	(14.5) - 4.7	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持たずに口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	赤影 意匠彫刻 1/
32	土 師 器 杯 3/4	13.0 - 5.5	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。外面は捲れているがへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
33	土 師 器 杯 2/3	13.5 - 4.7	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、後を持たずに口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面は摩滅しているがミガキが残る。	砂粒を含む	良好	明褐色	
34	土 師 器 杯 1/2	(13.0) - 5.2	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。器面はかなり摩滅している。外面はへう割りの後ナデ、口縁部、内面はミガキ。輪轆み面が明瞭に残る。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
35	土 師 器 杯 1/2	(13.0) - 6.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、弱い後を有した後口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
36	土 師 器 杯 1/3	(12.4) 6.4 4.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で内傾する。外面下半は削りの後ナデ、外面上半、内面はミガキ。	砂粒を含む	良好	褐色	体部上下内外面 赤影
37	土 師 器 杯 1/4	(11.6) - 6.3	弱い後を経て口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面は丁寧なナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
38	土 師 器 外 体部3/4欠	(19.2) - 5.3	底部は丸底で、体部内湾しながら立ち上がり、弱い後を有した後口縁部はほぼ直立する。器面はほとんど捲れている。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はミガキ。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
39	土 師 器 杯 底部欠1/3	(12.9) - 8.2	体部は内湾しながら立ち上がり、弱い後を経て口縁部は内傾する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデが施されている。	砂粒を含む	良好	褐色	
40	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.8cm、幅2.3cm、孔径1.1cm、重さ38.7g。かなり潰れた形を成す。		砂粒を含む	良好	明褐色	
41	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.8cm、幅3.1cm、孔径0.7cm、重さ35.7g。窪みが見られる。		細かい	良好	褐色	
42	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.3cm、幅2.8cm、孔径1.4cm、重さ30.0g。孔は数枚に貫って穿孔されている。赤んだ形。		砂粒を含む	良好	褐色	
43	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.3cm、幅2.8cm、孔径1.2cm、重さ26.4g。孔の周りは面取りされている。赤みに窪みが見られる。		砂粒を含む	良好	明褐色	
44	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.1cm、幅3.1cm、孔径0.7cm、重さ29.7g。		細かい	良好	明褐色	
45	土 製 品 母土上、赤影	長さ3.1cm、幅2.7cm、孔径0.9cm、重さ23.3g。孔の周りは面取りされている。		雲母を含む	良好	褐色	
46	土 製 品 母土上、赤影	長さ2.9cm、幅3.0cm、孔径0.7cm、重さ22.9g。		雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
47	土 製 品 母土上、赤影	長さ2.9cm、幅3.0cm、孔径0.8cm、重さ22.3g。		砂粒を含む	良好	明褐色	

表86 S I -35遺物観察表(4)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・板形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
48	土製品 母口縁、先形	長さ3.4cm、幅2.9cm、口径1.8cm、重さ23.0g。大きく歪んだ形を呈し孔も数箇所に於いて穿孔されている。					
49	土製品 母口縁、先形	長さ3.1cm、幅2.8cm、口径0.6cm、重さ20.8g。					
50	白製品 裝飾品	正方形を呈し、一方所に穿孔がなされている。3面に磨状の溝が施されている。					軽石

表87 S I -36遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・盤形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	須臾器 口縁1/4のみ	(33.9) -	内湾して端部に平る。端部は内面に凹線を施している。口縁を整形。	砂粒を含む	良好	灰色	

表88 S I -37遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・盤形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土製器 鉢 一部欠	21.0 6.8 9.8	底部は上げ巻で、木葉状が残る。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部で内縁を有して大きく開く。全面にミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土製器 鉢 一部欠	13.1 8.0	底部は丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内面に縁を有して外反する。外側はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ内面には丁寧なミガキが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
3	土製器 鉢 底部欠1/4	(13.1) -	口縁部は内傾する。全面にミガキが観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	赤影
4	支 下部のみ	残存長100cm、最大径91cm。	へう割りの後、ナデによって整えられている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土製品 母口縁、先形	長さ3.0cm、幅2.7cm、口径0.8cm、重さ23.7g。大きく歪んだ形を成す。		砂粒を含む	良好	明褐色	
6	土製品 母口縁、先形	長さ2.9cm、幅3.2cm、口径0.7cm、重さ23.9g。		砂粒を含む	良好	褐色	
7	手捏土器 1/3	(5.6) (4.8) (5.0)	底部は平底で、胴部は口縁部下に兼人様を持つ。外面は刷毛目、口縁部・内面には指ナデ痕が見られる。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	

表89 S I -38遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 底径 高 (cm)	成・盤形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土製器 小形器 口縁1/2欠	14.4 6.0 12.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、斜い内縁を持った後口縁部は外反する。外側はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面にはナデが施されている。	砂粒を含む	良好	明褐色	
2	土製器 小形器 体部3/4欠	(16.2) 7.4 9.8	底部は平底で、突出している。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部で大きく開く。器形は潰れた形を成す。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。底部は木葉状。	砂粒を含む	良好	褐色	
3	土製器 小形器 体部1/4	(12.8) 6.0 -	体部は内湾し、口縁部は直りして口唇部で外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面にはナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
4	土製器 小形器 体部3/4	12.8 -	体部は内湾し、斜い内縁を持った後口縁部で外反する。器面はかなり荒れているが、外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面ナデが観察されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土製器 鉢 口縁1/3欠	13.2 7.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、縁を持って口縁部は直りする。外面はへう割りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	中褐色	
6	土製器 鉢 1/3	(13.6) 6.0	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、斜い内縁を持った後口縁部は外反する。外面はへう割りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はミガキが観察される。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	褐色	

表90 S I -38遺物観察表(2)

番号	器形 通存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 杯 1/3	(13.6) - 5.9	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は稜を持った後傾みを持ったまま口唇部で大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	明褐色	
8	土師器 杯 ほぼ完形	11.5 - 3.6	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を持った後傾みは外反する。器形に歪みが見られる。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	褐色	
9	土師器 杯 口縁1/3欠	14.4 3.6 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を持った後傾みは外反する。器形に歪みが見られる。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面にはミガキが施されている。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	褐色	口縁部・内面赤彩
10	土師器 杯 口縁1/4欠	12.0 - 4.8	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、稜を持った後傾みは内傾する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	

表91 S I -42遺物観察表

番号	器形 通存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 小形壺 体部2/4欠	13.5 7.5 19.7	底部は突出する。胴部は球形をなす。口縁部は「コ」の字状を呈す。器面はかなり完成している。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデ。底部周囲には指ナデが施されている。	雲母・砂粒を多く含む	良好	明褐色	
2	土師器 小形壺 口縁1/4欠	12.0 6.0 14.9	底部は平底で、胴部は球形を呈す。口縁部は大きく開く。器面の完成はかなり悪い。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが見られる。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
3	土師器 高杯 脚部1/4欠	13.7 - -	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は内傾を有して外反する。脚部は柱状に立った後傾部で開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデが施されている。	砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
4	土師器 壺 胴1/4-一部	(23.2) 8.0 36.4	底部はやや平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。胴部中央に最大径を持つ。口縁は「コ」の字状を呈し、口唇部は大きく開いて開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ナデ。	砂粒を多く含む 雲母を含む	良好	明褐色	

表92 S I -45遺物観察表

番号	器形 通存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺 一部欠	18.0 7.6 27.6	底部は平底で、胴部は球形を呈し中央で大きく開く。口縁部は湾曲しながら立ち上がり、口唇部は大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	
2	土師器 壺 口縁欠	- 8.5	底部は平底で、胴部は球形を呈す。外面はヘラ削りの後ナデ、内面はヘラナデで、ヘラ削り痕が残る。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	
3	土師器 小形壺 1/4欠	17.0 7.0 15.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は大きく外反する。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	砂粒を含む	良好	褐色	
4	土師器 杯	(11.8) 1/3 4.3	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がる。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部・内面にはミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
5	土師器 壺 形1/2欠	長さ3.7cm、幅3.2cm、口径0.8cm、重さ48.1g	孔の周囲は面取りされ丁寧にナデが施されている。	砂粒を含む	良好	褐色	

表93 S I -47遺物観察表(1)

番号	器形 通存度	口徑 底径 高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 壺 口-胴中1/2	(25.2) -	胴部の拓りは器口、口縁部は大きく開く。外面中央からヘラ削り仕上げはヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土師器 壺 口縁部片	(22.4) -	胴部はあまり内湾せずに口縁に至り、口縁部は大きく開く。外面は削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが見られる。	雲母・石英・砂粒を含む	良好	褐色	

表94 S I -47遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	十加器 小形壺 口縁1/4欠	(13.1) 7.0 12.4	底部は平底で、体部は球形を呈し、口縁部で外反する。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部はココナゲ、内面はナゲが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
4	十加器 高台付環 体部1/4欠	15.5 6.3 6.0	高台部は「ハ」の字状で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部が丸く、内面には細かいミガキが施されている。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	褐色	
5	土加器 鉢 体部1/4	(13.9) —	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で丸く、口縁部で、内面には細かいミガキがなされている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	内面黒色焼埋
6	支下 部欠	長き12.5cm、最大径6.1cm、ヘラ削りの後ナゲがなされている。		雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
7	土製 品 環状土鏡、完形	長き2.9cm、幅2.9cm、孔径0.9cm、重き23.8g。ナゲによって磨かれている。		雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
8	既一部欠	長き7.4cm、幅4.3cm、厚さ1.0cm、重き56.7g。4面に渡って使込まれている。					

表95 S I -53遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	十加器 壺 口一筋1/4	(14.0) —	口縁部は大きく開き、口縁部で折り返される。折り返した部分には雲母粒が見られる。外面はヘラ削りの後「字」的なナゲ。内面はヘラによるナゲが明確に残る。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
2	十加器 杯 2/3	13.0 —	底部は丸底で、体部は微やかに内湾しながら立ち上がり、縁を付いた後内湾する。器底はかなり厚肉している。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部・内面はナゲ調整される。	雲母を含む	良好	褐色	
3	土加器 埴 1/2	15.2 3.0 3.6	底部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、明瞭な内縁を有して口縁部は内湾して立つ。外面はヘラ削りの後丁寧なナゲ、内面は丁寧なナゲがなされている。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	赤彩
4	土加器 杯 1/2	13.3 — 3.6	底部は丸底で、体部は内湾し、縁を付いた後口縁部はほぼ直立する。外面はヘラ削りの後ナゲ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
5	土製 品 環状土鏡、完形	長き2.7cm、幅2.5cm、孔径0.8cm、重き13.8g。		雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	

表96 S I -59遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	—	底部は外反し内湾する。縦方向の外面帯内部に細かな花頭による刻銘文様を充填している。	砂粒多い	良好	褐色	
2	壺 胴上下	—	球形を呈し、外面には付加条第1條の縄文が施される。	砂粒多い	良好	褐色	
3	土製 品 土鏡、完形	長き8.6cm、幅4.9cm、孔径1.5cm、重き130.0g。粘降形。外面はヘラ削り。		砂粒多い	良好	褐色	

その他の遺物では上玉（球状土鍾・管状土鍾）が特徴的である。管状土鍾は、最大長が10cmを越すような大形のものが主体で、通常の小形の管状土鍾は検出されていない。伴出時期は古墳時代前期より10世紀代にまで出土しており、時期の限定はできない。蓋ヶ桶に面する立地条件より、漁具としての土鍾が出土する点は通有的ことであろう。ただし、土鍾の形状による時期別の分類は行っていない。

灰石はS I -22・29・47で出土しているが、金属器はS I -26で鉄斧が1点出土したのみである。

軽石裂石製品を出土したのはS I -23・35で、後者には穿孔が行われる。

本地域に於て、5世紀後半より6世紀前半に多く見られる滑石製模造品の製作については、本遺跡からの検出はなかった。

第3節 土坑

第1項 遺構

本遺構に於て検出された土坑は22基である。詳細については表97の土坑一覧表にまとめている。

検出された土坑の分布は、いくつかのまとまりをもっている。SK-7・10~14はV-15グリッドを中心とする台地の南西側、SK-5・6・9はN-25グリッドを中心とする台地のほぼ中央部分、SK-1~4は台地中央やや東寄りのSI-7周辺、SK-15~22は台地の東側端部にそれぞれ集中を見せている。

土坑の形状別の分布で見れば、方形のプランを呈するSK-9を除くSK-10~14が、台地の南西側に集中している。その他の区域は円形若しくは楕円形の土坑となっており、方形プランと円形若しくは楕円形の土坑が、それぞれ分布域を異にする特異な在り方を示している。

方形の土坑はSK-9~14の6基が検出されている。この内、規模ではSK-9が最大で長軸方向が2.40mとなるが、その他は1.17~1.38m前後でほぼ同規模である。主軸方向でもSK-10がやや西に振れるが、その他は北東から南西方向に主軸を持つ点でほぼ一致している。掘り込みはいずれも浅く皿状を呈するもので、表土直下より掘り込まれたとしても、本来の掘り込みもさほどの深さはなかったものと考えられる。また、SK-12~14はSI-37と重複関係にあり土坑の方が新しい。尚方形の土坑で遺物を出土した遺構はなく、覆土の状況より比較的新しい時期の遺構の可能性が高い。

円形若しくは楕円形の土坑はSK-1~8・15~22の16基が検出されている。形状規模とも一定ではなくさまざまである。掘り込みはSK-18で最大の57cmを測るが、その他は浅い皿状を呈するものが多い。円形の土坑で遺物を出土したSK-15では5世紀末より6世紀前半の遺物が出土しており、該期の遺構と考えられるが、プランの北西側コーナー部分のみの確認にとどまっているSI-73の貯蔵穴の可能性もある。その他で時期決定が行えた土坑はない。

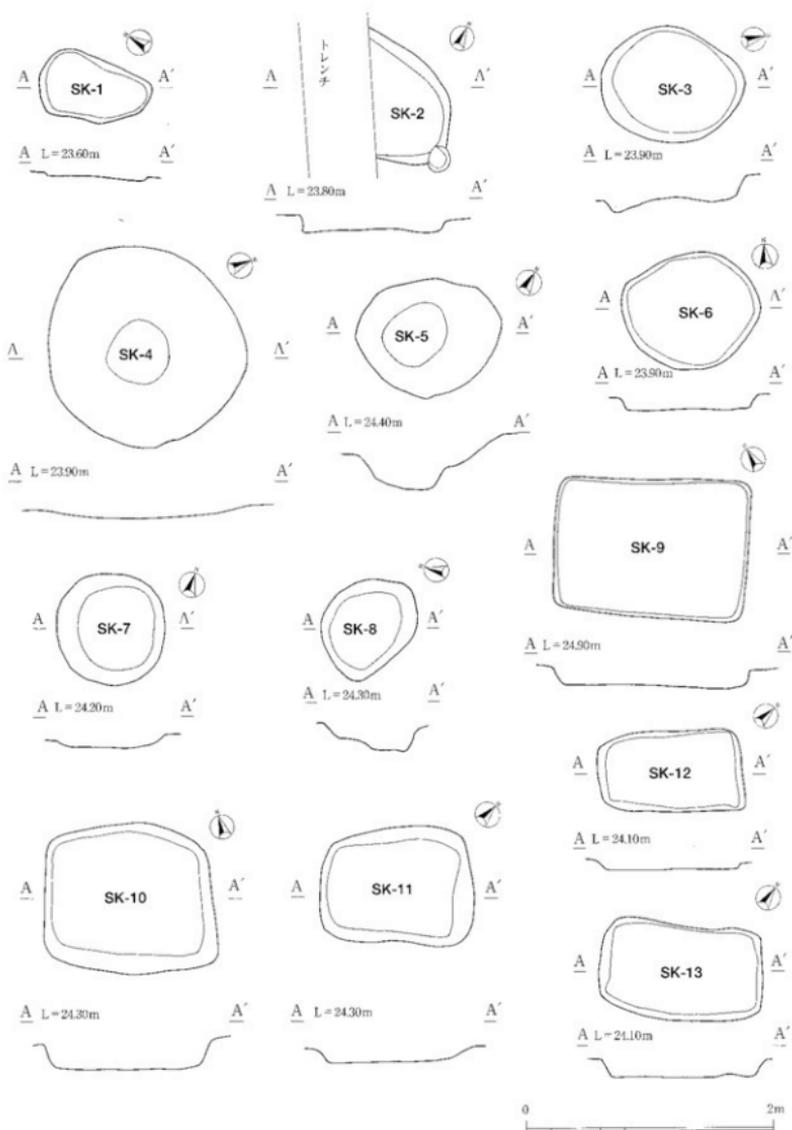
第2項 出土遺物

遺物の出土があったのはSK-15・18の2基であるが、SK-18では土師器の細片が僅かに出土したのみで、時期決定には至っていない。

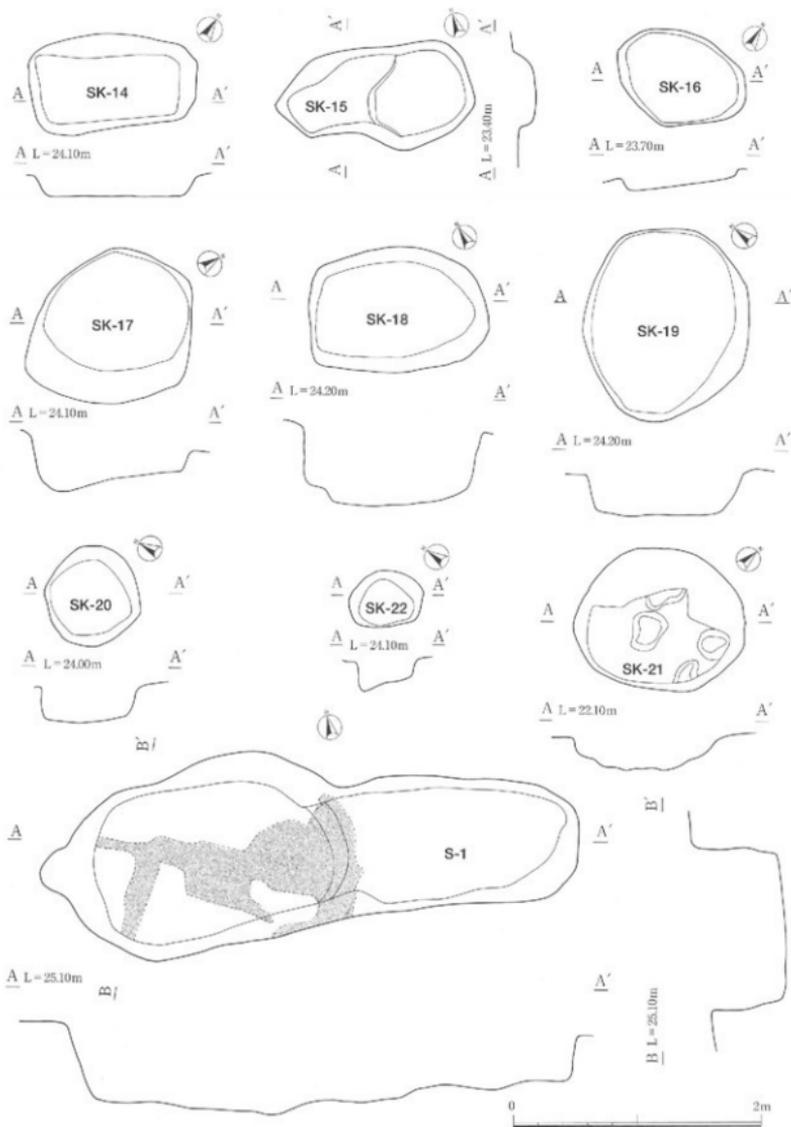
検出された遺物は甕1点、瓶1点、坏2点である。SK-15-1は球形の胴部で口縁が緩やかに外反して開くもので、5世紀末より6世紀初頭の遺物と考えられる。2は分類上坏にしたが球形の土器である。3は胴部最大径が下半にくる甕である。4の坏は口縁が僅かに外反して開くもので、体部には稜を持たない。

第4節 炭窯

検出された炭窯はS-1の1基のみである。G-14グリッドに於て確認された。素掘りの土坑内部で簡易的に炭を焼いたものであろう。長楕円形の土坑を縦に連結させ、西側の土坑を燃焼部として利用している。内部からは大量の焼土及び炭が出土しているものの、遺物はなく、時期は決定できていない。覆土の状況より新しい遺構の可能性が考えられる。



第69図 SK-1~13



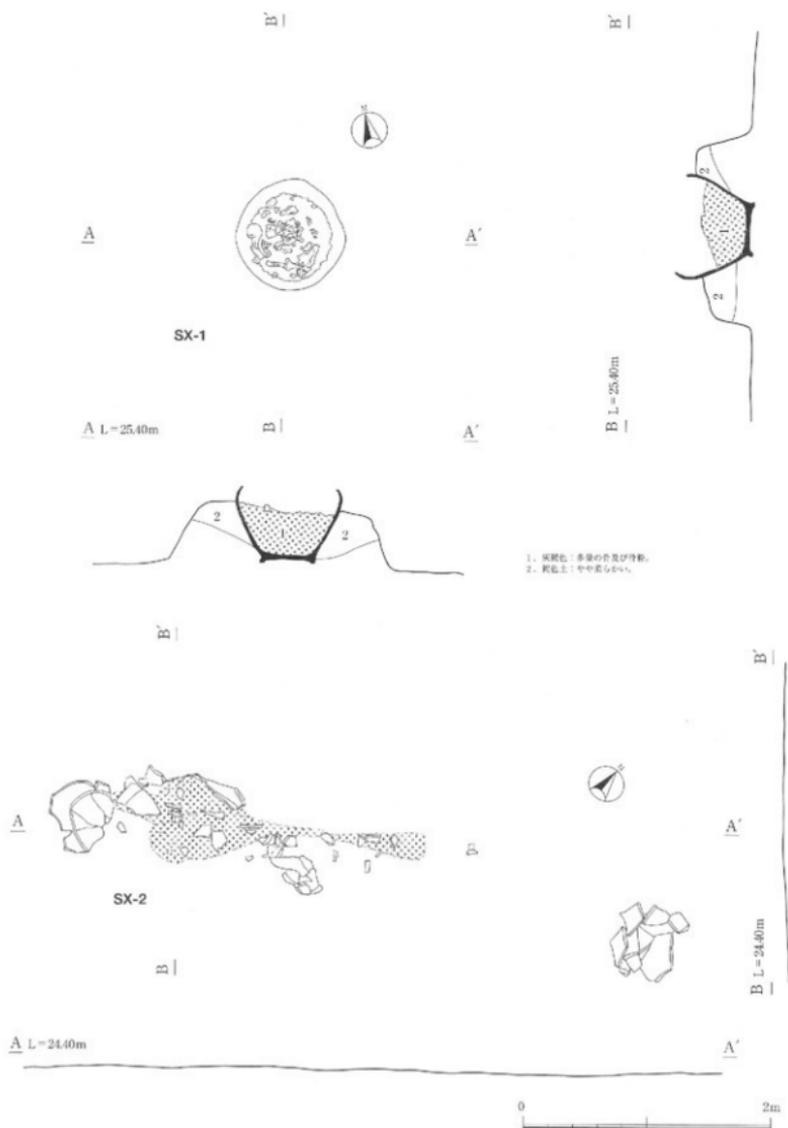
第70図 SK-14~22・S-1

表97 土坑一覧表

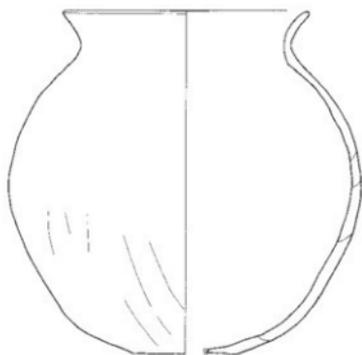
番号	グリッド	長軸方位	平面形	規模 (m) 長軸 × 短軸	深さ (m)	備 考
1	T-31	N-32°-W	楕円形	0.91×0.57	0.08	
2	R-33	—	円形?	—	—	半分がカクラン
3	R-34	N-23°-W	楕円形	1.17×0.93	0.05	SI-4と重複
4	P-33	—	円形	1.57×1.56	0.09	
5	N-25	N-57°-E	楕円形	1.18×0.98	0.44	SI-14と重複
6	P-25	N-84°-W	楕円形	1.11×0.95	0.10	SI-16と重複
7	V-15	—	円形	0.90×0.89	0.28	SI-35と重複、袋状土坑
8	2F-13	—	円形	0.90×0.69	0.47	SI-42と重複
9	N-23	N-60°-W	長方形	2.40×1.67	0.15	
10	V-13	N-75°-W	長方形	1.38×1.23	0.17	
11	V-13	N-48°-E	長方形	1.27×0.94	0.10	
12	V-15	N-43°-E	長方形	1.17×0.65	0.05	
13	V-15	N-53°-E	長方形	1.32×0.78	0.13	
14	V-15	N-56°-E	長方形	1.38×0.77	0.17	
15	V-43	N-78°-W	不整形円形	3.17×1.72	0.27	
16	V-42	N-90°-W	楕円形	1.02×0.78	0.23	
17	R-43	N-30°-E	楕円形	1.27×1.27	0.36	
18	R-43	N-58°-W	楕円形	1.45×1.00	0.57	
19	R-43	N-62°-E	楕円形	1.57×1.35	0.30	
20	R-41	—	円形	0.81×0.71	0.31	
21	V-44	N-31°-E	楕円形	1.39×1.14	0.33	
22	R-43	—	楕円形	0.59×0.45	0.22	

表98 溝一覧表

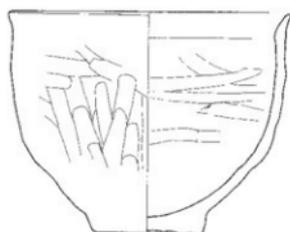
番号	グリッド		走行方向	長さ (m)	断面形	深さ (m)	備 考
	起点	終点					
1	V-43	V-44	NE→SW	4.0	皿状	0.20	SI-74と重複
2	2H-12	2I-11	NE→SW	2.5	皿状	0.20	SI-50・61と重複



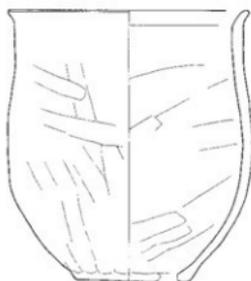
第71図 SX-1・2



SK15-1



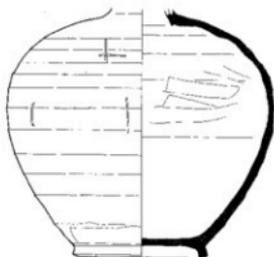
SK15-2



SK15-3



SK15-4



SX1-1



SX2-1



SX1-2



SX2-2



第72図 SK-15・SX-1・2出土遺物

表99 SK-15遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・形 状の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕 口底一部欠	60.0 8.0 27.9	底部は平底で薄く、体部は球形を呈し、口縁部で大きく外反する外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はナデがなされている。全体の器面は磨滅している。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土師器 甕 1/4	65.3 9.5 17.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がりゆるみを持ったまま口縁部は外反する。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	灰石・砂粒を含む	良好	赤褐色	
3	土師器 甕 部欠	19.4 9.0 22.1	口は底部全体に見が甲孔で、体部は内湾しながら立ち上がり、縁を持たずに口縁部は外へ開く。外面はヘラ削りの後丁寧ナ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデの後まばらなミガキ。	灰石・砂粒を含む	良好	赤褐色	
4	土師器 甕 完形	15.0 — 6.8	底部は丸底で、体部内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、内面はミガキが施される。	雲母・長石・砂粒を含む	良好	赤褐色	

表100 SX-1 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・形 状の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甕(残存器) 口縁欠	— 10.8 —	高台部は「ハ」の字状に付き、体部は内湾しながら立ち上がり、胴部上位に最大縁を持つ。ロクロ整形。	雲母を含む	良好	灰色	
2	須恵器 甕 口底付部 1/4	45.2 9.0 4.1	高台部は「ハ」の字状に付き、体部は反りながら立ち上がり縁をもって口縁部は外反する。ロクロ整形	雲母・砂粒を含む	良好	灰色	

表101 SX-2 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・形 状の特 徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 甕 胴下1/2口	43.8 — —	底部は平底で、体部は直線的に開いて立ち、上位で内湾して口縁部は外反する。外面は平行タキで、胴部下位にはヘラ削りが施されている。内面はヘラコで、輪郭み痕が明瞭に残る。	雲母・砂粒を含む	良好	淡灰色	
2	須恵器 甕 口~胴上1/3	62.6 — —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反し組み上げられている。外面は平行タキ。	雲母・砂粒を含む	やや良好	灰白色	

第5節 溝

本遺跡に於て検出された溝は2条である。遺構個別の平面図・断面図については紙面の都合上、第43図(付図2)の全体図中に掲載した図をもって代表させた。

SD-1は調査区の東側端部に於て検出されている。SI-74と重複するもので、新旧関係は不明である。長さ4mにわたり確認されている。深さは20cmで断面形は皿状である。

SD-2は調査区域の南西側端部に於て検出されている。SI-50・61と重複し、新旧関係は不明である。長さは僅か2.5m、深さは20cmで断面形は皿状である。

溝からの遺物はいずれも検出されておらず、時期不明である。

第6節 墓跡

墓跡はSX-1・2の2基が検出されている。

SX-1 はSI-24の北東側コーナー付近に於て住居跡の覆土中より検出されている。蔵骨器の底部は住居床面より3cmほど浮いている。遺構の確認段階では住居覆土中に墓跡が存在することに気がつかず、掘り進める段階でその存在に気づき、土層の断面視察を行ったが、墓跡の掘り込みを確認するには至っていない。おそらく、蔵骨器を埋納する最小限の穴を掘って直に埋め戻したものと考えられる。

長頸瓶の口頸部を打ち欠いて蔵骨器として利用しており、内部には焼土及び骨が大量に納められていた。また、蓋に用いられたと考えられる高台杯皿の破損した資料が内部より出土している。

遺物は蔵骨器に用いられた長頸瓶と、蓋に用いられていたものと考えられる台付皿及び骨である。

長頸瓶は須恵器で釉薬はかかっている。胎土中には細かな金雲母が混入しており、灰軸の黒柱90号窯等で生産された同形器種を模倣した在地産（三ヶ野窯カ）の可能性が考えられる。胴部は緩やかに内湾し肩は余り張らない。高台は「ハ」の字に開き安定感がある。外面はロクロ極痕で下端はヘラケズリが施される。外面胴部の肩部にヘラによる「十」の記号が刻まれている。内面はロクロ極痕の他にヘラナデが見られる。

蓋に用いられている高台付須恵器皿は小形の盤のような形状で、長頸瓶同様胎土中に金雲母が混入している。高台は大きく「ハ」の字に開く。

骨は国立歴史民俗博物館教授西本豊弘氏に鑑定を依頼した。その結果、火葬された成人人骨であるものの、熱による変形が激しく性別・詳細な年齢については不明であるとの御教授を得ている。

出土遺物より判断して、本遺構は9世紀後半以降の所産と考えられる。

SX-2 はSI-30の北東側コーナー付近に於いて住居跡の覆土中から検出されている。SX-1同様住居跡調査中に確認されたものである。須恵器の甕2点が破砕され、骨と灰が同時に出土している。後世の攪乱若しくは遺構の表土除去作業時に破砕された可能性もあるが、本来甕1の中に骨が埋納され、2の甕により蓋がされていたものと考えられる。

甕1は須恵器で外面は平行叩きによって整形され、胴部下半はヘラケズリが行われる。底部は大きな平底を呈し、頸部で「く」の字に外反して開く。口縁部は欠損している。

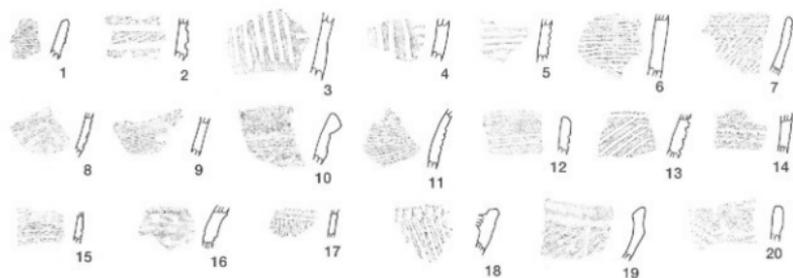
甕2は頸部の括れを持たない須恵器の甕である。胴部は平行叩きが施される。口縁部は直角に折り返し、口唇部は揃み上げられる。底部を欠損する為に瓶の可能性もあるが、蔵骨器の蓋としての利用を考えて甕の可能性が高いものと判断した。

出土した遺物より本遺構は9世紀後半以降の所産と考えられる。

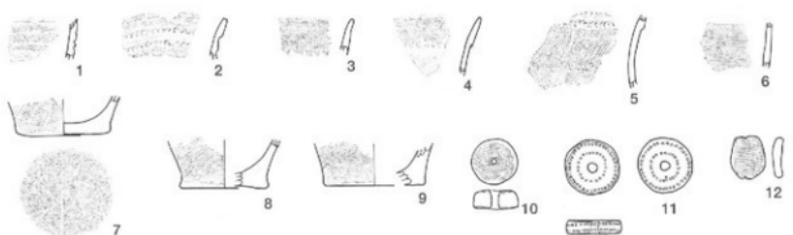
骨はSX-1同様国立歴史民俗博物館教授西本豊弘氏に鑑定を依頼した。その結果、やはり火葬された成人人骨であるものの、熱による変形が激しく性別・詳細な年齢については不明であるとの御教授を得た。

第7節 遺構外出土遺物

本節では遺構外から出土した遺物及び、遺構内出土遺物でも遺構に伴わない流れ込みの遺物について掲載し説明を行うものである。时期的には縄文時代と弥生時代に2分される。



第73図 遺構外出土縄文時代遺物



第74図 遺構外出土弥生時代遺物

縄文時代

1～5は早期の資料である。1は口唇直下に細沈線による格子文様が描かれるもので、沈線文系土器でも三戸式に比定されるものであろう。2～5は太い沈線が描かれるもので田戸下層式に比定される。

6～17は前期の資料である。6は繊維が混入され、単節縄文が施文される。また7は縄文を地文とし沈線による肋骨文様が描かれる。6・7は黒浜式に比定されるが、7はやや新しくなるものであろう。8・9は集合沈線により肋骨文が描かれるものの繊維を混入しない。諸磯a式に比定される。10・11は半載竹管による平行沈線と「C」の字の爪形文が施文されるもので諸磯b式に比定される。12・13は浮島式土器であろう。詳細な分類は不明である。14・15は変形爪形文が施文される資料で、浮島Ib又はII式に比定されるものである。16は半載竹管による刺突が施され、浮島III式に比定されるものであろう。17は沈線による区画された内部にアナダラ属の貝殻の腹縁を連続して刺突するもので、前期最終末興津式に比定される。

18～20は中期後半から末の資料である。18は口縁内側に太い隆帯が一条廻り、口唇部には太い沈線が施文される曾利II式に比定されるものであろう。19は口縁部無文帯の直下に微隆帯が廻る資料で加曾利E4式に比定される。20は細片で単節縄文が施文される加曾利E式の資料であろうか。

弥生時代

1は中期の資料と考えられる。地文に細縄文を施文し太い沈線による区画が見られる。型式は不明。

2～9は後期の資料である。2～4は口縁の折り返し部分に刺突列が廻るものである。5は付加条第1種

表102 遺構外出土縄文時代遺物観察表

番号	部形	成・造形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	口縁直下に細沈線によって格子文様が描かれる。	細砂粒微塵	良好	褐色	ⅡJ
2	深鉢胴部	太い沈線による腰帯の間に斜沈線による筋みを施す。	細砂粒微塵	良好	褐色	ⅡD下層
3	深鉢胴部	縦方向の太い集合沈線が描かれる。	細砂粒微塵	良好	褐色	ⅡD
4	深鉢胴部	縦方向の太い集合沈線が描かれる。	細砂粒微塵	良好	褐色	ⅡD
5	深鉢胴部	横方向の太い集合沈線が描かれる。	細砂粒微塵	良好	暗褐色	ⅡD
6	深鉢胴部	無筋R	繊維混入	良好	暗褐色	ⅡD中
7	深鉢口縁	地文り段多糸L R、平行沈線による筋骨文施文。	繊維混入	良好	暗褐色	ⅡD
8	深鉢胴部	3本1單位の集合沈線による筋骨文施文。	砂粒多い	良好	暗褐色	ⅡD中
9	深鉢胴部	2本1單位の集合沈線による筋骨文。四角刺突。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
10	深鉢口縁	外突する口縁で、半截竹管による平行沈線及びまばらなC爪。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
11	深鉢胴部	半截竹管による平行沈線及びC爪。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
12	深鉢口縁	平行沈線。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
13	深鉢口縁	平行沈線。C爪。	砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中
14	深鉢胴部	変形爪形。	砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中1 hor II
15	深鉢胴部	変形爪形。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中1 hor II
16	深鉢胴部	半截竹管の刺突。	砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中
17	深鉢胴部	アナダラ属貝殻破片の連続刺突。	砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中
18	深鉢口縁	口縁部は折り返し内面に凸帯を有す。外面には口唇に及ぶ太い沈線が施文。	砂普通	良好	褐色	ⅡD中
19	深鉢口縁	口縁部は太い無筋帯。胴部帯による区画以下は単筋L L。	砂粒多い	良好	暗褐色	加曾利E 4
20	深鉢口縁	小形。口縁部にまで単筋L L施文。	砂粒多い	良好	褐色	加曾利E 4

表103 遺構外出土弥生時代遺物観察表

番号	部形	成・造形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	邊	やや太い沈線。地文にはR Lの細縄文。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
2	壺口縁	口唇部削み。2段の折り返しで刺突列が施される。胴部はL R。	砂普通	良好	暗褐色	ⅡD中
3	壺口縁	折り返し口縁。折り返し部には刺突が施される。単筋L L。	砂粒多い	良好	暗褐色	ⅡD中
4	壺口縁	折り返し口縁。折り返し部に刺突。口縁は単筋L L。	砂粒多い	良好	暗褐色	ⅡD中
5	壺胴部	付加条第1種。刺突列。	砂粒普通	良好	暗褐色	ⅡD中
6	壺胴部	平行沈線による文様が描かれる。	砂普通	良好	褐色	ⅡD中
7	壺底部	平底。木葉形。付加条第1種縄文施文。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
8	壺底部	平底。胴部は変る。半筋L Lの細縄文。	砂粒多い	良好	褐色	ⅡD中
9	壺底部	平底。胴部はやや変る。付加条第1種。	細砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中
10	紡錘車	やや内縁の円板。全面に単筋L Rの細縄文が施文される。	砂粒多い	良好	暗褐色	ⅡD中
11	紡錘車	やや扁平な円板。上下両面及び側面に2列の刺突列が施される。	砂粒多い	良好	淡褐色	ⅡD中
12	土器片	楕円形に變形した器の浅い胴部破片の両面に刺突を施す。細かな筋文が施文されている。	細砂粒多い	良好	褐色	型式不明

縄文が施文されるものである。2～5は上稲吉式に比定されるものであろう。6は平行沈線による文様が描かれるもので、2～5よりもやや後出の資料であろう。7～9は底部の資料である。7には木葉痕が、また9には付加条第1種の縄が胴部下端に施文されている。上稲吉式に比定されるものであろう。

10・11は土製品の紡錘車である。10には細かな縄文が施文される。11には側面及び上下両面に2列の刺突列が施される。

12は土器片再利用の土鎮である。細かな筋文が施文されている。型式は不明であるが弥生期の資料と考えた。

第2章 小 結

検出された遺構・遺物から見た遺跡の概観

本遺跡で検出された遺構は住居跡79軒、土坑22基、溝2条、墓跡2基、炭窯1基であった。

集落が構成される時期は4世紀代で僅かに住居跡が1軒確認されている。そして、5世紀中葉より徐々に増加が認められ、古墳時代後期5世紀後半より6世紀前半段階で最大になる。その後6世紀後半より徐々に減少し、7世紀後半には集落はとどえ、9世紀後半代に蔵骨器を埋納する墓跡が2基検出される。さらに10世紀代になって再び住居跡が1軒のみであるが忽然と現れている。

遺構外からの出土遺物をみれば、縄文時代早期段階から人類の足跡を確認できる。続く弥生時代に於ても遺物の出土が僅かながらあったが遺構はやはり検出されていない。

本遺跡の主な集落は古墳時代後期の前半期に営まれたことになるが、本遺跡に於て最も注目される問題点としては、遺跡の立地が上げられる。あたかも弥生時代の高地性集落を思わせるような縄せ尾根上に展開する集落の状況は、所謂農耕等の生産遺跡とは異なり、該期に於ける本地域の軍事的な要衝としての性格を感じさせている。出土遺物の組み合わせより判断して、特に軍事的な面を強く感じさせる資料は出土していない。また、球状土錘等の出土量も秋平遺跡の状況と際違った違いは認められないが、幅10m前後の細い尾根の上に夥しい住居跡が集中している様は特異な状況と言える。

霞ヶ浦を船で湖東側より西北西に進路を取り、浮島・西の州崎を過ぎ稲荷ノ鼻の先端をかすめ、堂崎鼻を左に見ながら信太渡から内浦へ進み、さらに小野川を遡れば信太郎御推定地の下君山台に至る。西の洲崎を回った船が、内浦に向かって進み来る状況をいち早く確認できる場所で、最も標高の高い地点が本遺跡に当たっている。今回の一連の調査に於て調査を行った秋平遺跡では、船が堂崎鼻を迂回した時点で初めて接近を確認できることになり、見張りとしては最遠の地とは言えない。一方で、本遺跡の集落の灯りが、夜間霞ヶ浦を西に進み信太郎に向かう船の日印になったとも考えられる。

霞ヶ浦周辺に於ける交通手段として古来船は最も有効であった。信太郎の悲哀とも言える霞ヶ浦の南西地域から内浦までを一帯にできる本遺跡が、軍事的にも重要な位置にあったことは想像に難くない。現在の鳩崎小学校横で発見された水神堂古墳の被葬者も時期的に見ても本遺跡の集落と同時期であり、本地域の警備を司っていた集団の長の墓とも考えられる。

古墳時代後期の一時期に突然にこの地点が軍事的に見ても重要な性格を帯びたにもかかわらず、古墳時代後期後半には集落は忽然と姿を消し、その役割を終えることになる。この点については、今後政治的な背景も踏まえた上での検討が必要になる。

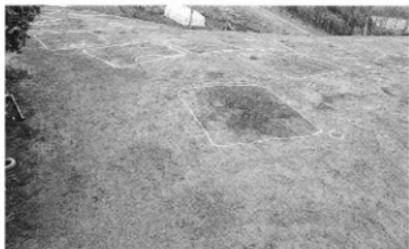
8世紀頃の状況を伝える「常陸国風土記」の信太郎の条では、霞ヶ浦に於ける漁業活動を裏づける記事が見られるが、本遺跡の性格としては漁業を中心とする生業ではなく別の視点からの検討が必要であろう。9世紀代に至り、火葬した人骨を納めた蔵骨器を有する墓跡2基の検出も、霞ヶ浦を一望できる高台という立地から来る特殊性を示している。



1. 調査区全景

池平遺跡

図
版
21



1. 遺構確認状況（中央部）



2. 同（S I - 3 付近）



3. 同（中央部）



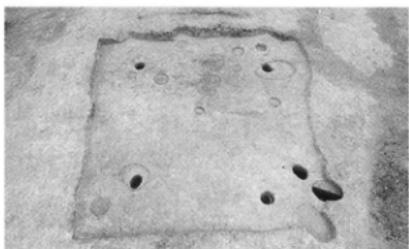
4. 同（S I - 1 付近）



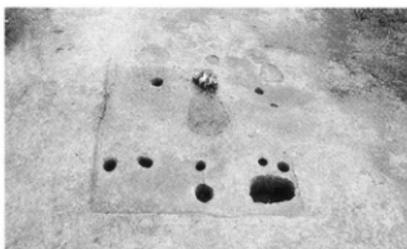
5. 同（拡張区）



6. 標準堆積土層観察坑



7. S I - 1



8. S I - 2



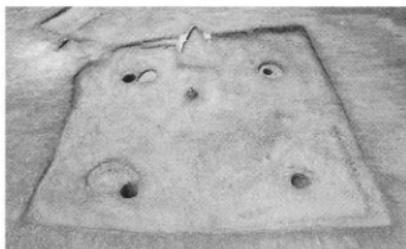
1. S1-3



2. S1-5・6



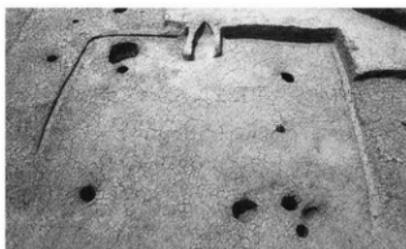
3. S1-7付近



4. S1-8



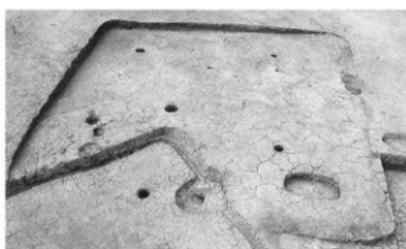
5. S1-9・10



6. S1-12

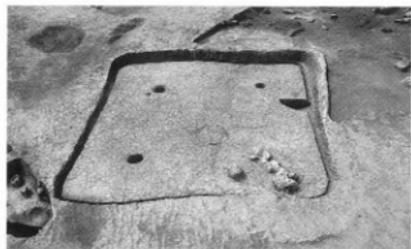


7. 同 カマド



8. S1-13

池平遺跡



1. S I-14



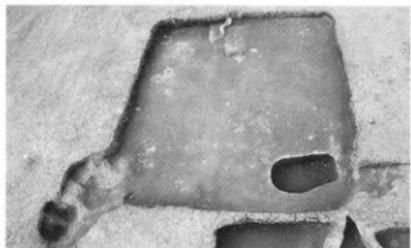
2. S I-15



3. S I-16



4. 同 カマド



5. S I-17



6. S I-17・18



7. S I-18カマド



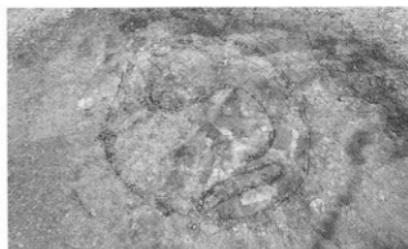
8. S I-19



1. S I-19カマド



2. S I-21



3. 同 炉



4. S I-22



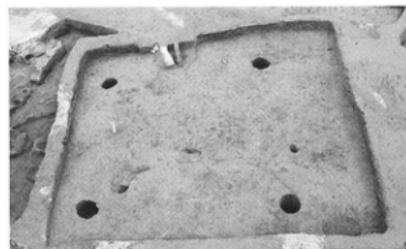
5. S I-23



6. 同 遺物出土状況



7. S I-24



8. S I-25

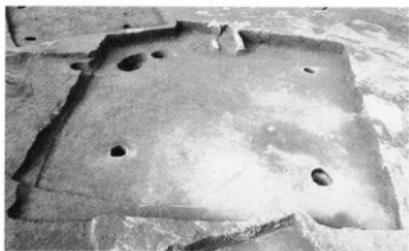
池平遺跡



1. SI-26



2. SI-27



3. SI-30



4. 同 遺物出土状況



5. SI-33



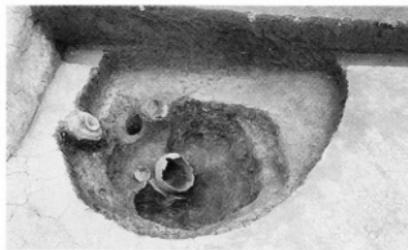
6. SI-34



7. SI-35



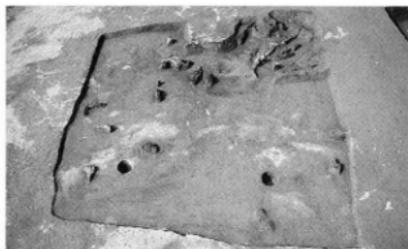
8. 同 カマド



1. S I-35貯蔵穴



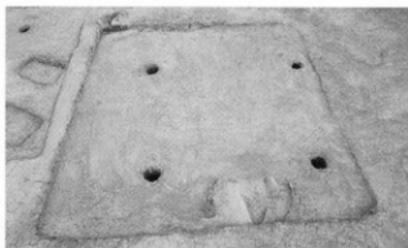
2. S I-35遺物出土状況



3. S I-36



4. S I-37



5. S I-38



6. S I-41・42



7. S I-47



8. S I-49・50・54・58

池平遺跡



1. S I-55



2. S I-62



3. S I-66



4. S I-67・68



5. S I-69・72



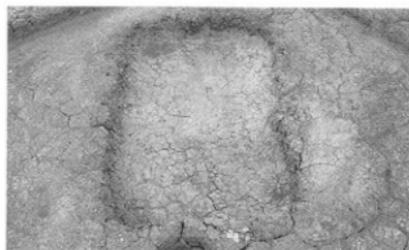
6. S I-70



7. S I-74・78・SD-1



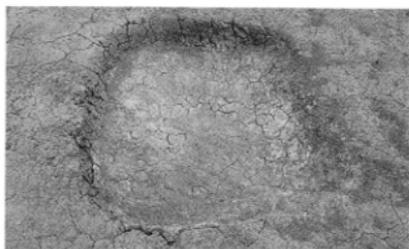
8. S I-76



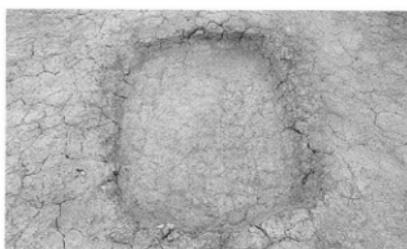
1. SK-3



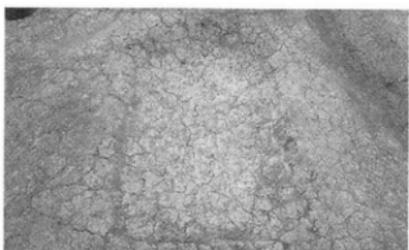
2. SK-9



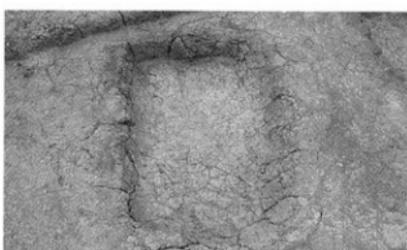
3. SK-10



4. SK-11



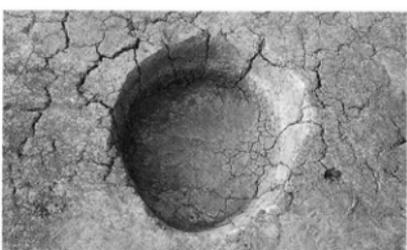
5. SK-12



6. SK-14

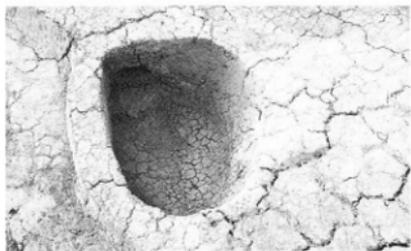


7. SK-15

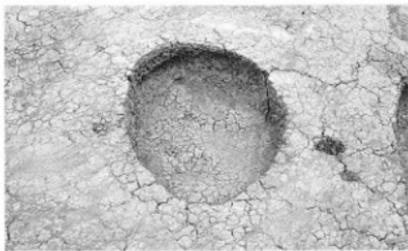


8. SK-17

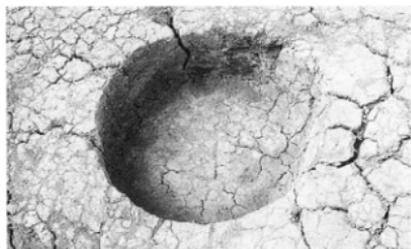
池平遺跡



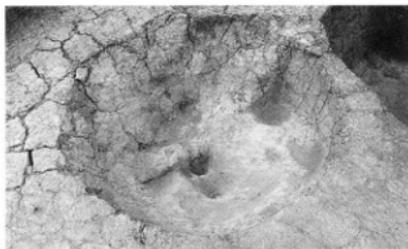
1. SK-18



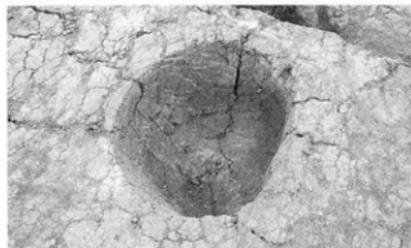
2. SK-19



3. SK-20



4. SK-21



5. SK-22



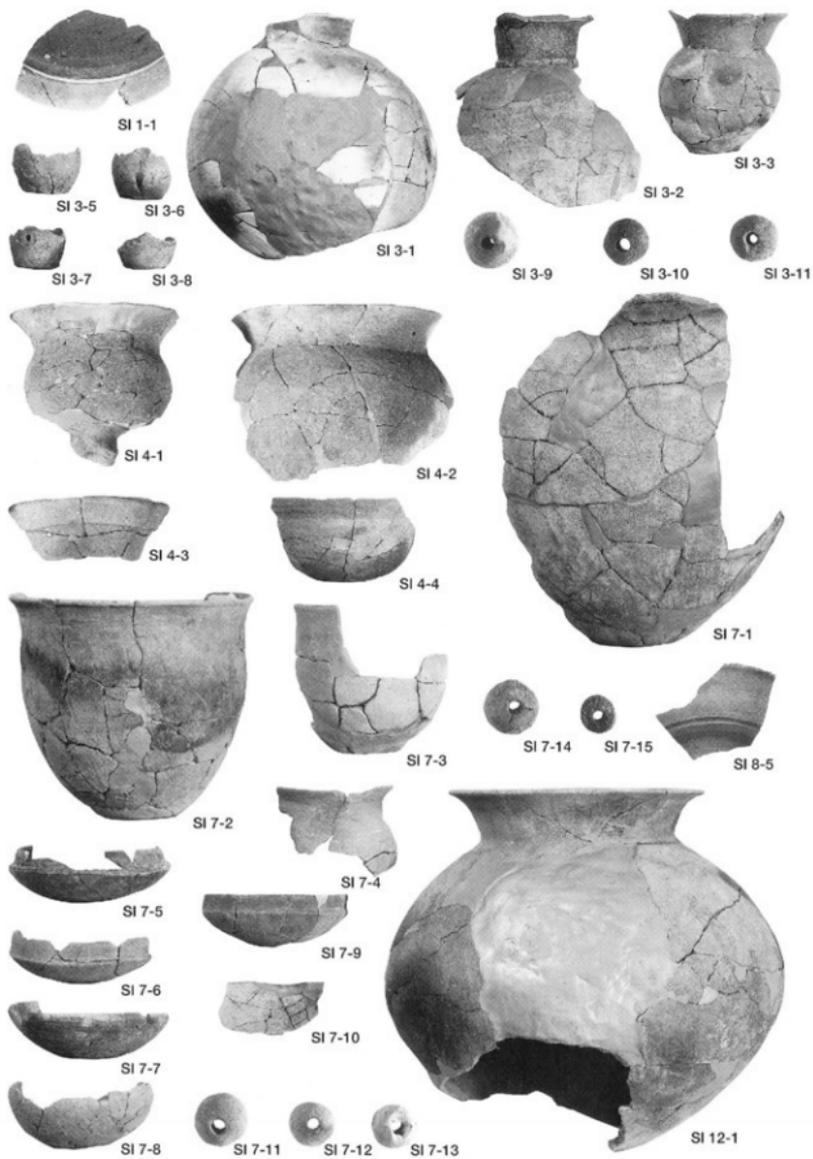
6. S-1



7. SX-1



8. SX-3



池平遺跡

図版
31



SI 12-2



SI 12-3



SI 12-4



SI 12-5



SI 12-7



SI 12-8



SI 12-9



SI 12-10



SI 12-11



SI 13-2



SI 13-7



SI 13-9



SI 13-12



SI 13-14



SI 13-4



SI 13-8



SI 13-10



SI 13-11



SI 13-16



SI 13-17



SI 14-1



SI 14-2



SI 14-3



SI 14-4



SI 14-5



SI 14-6



SI 14-7



SI 14-8



SI 15-5



SI 15-11



SI 15-8



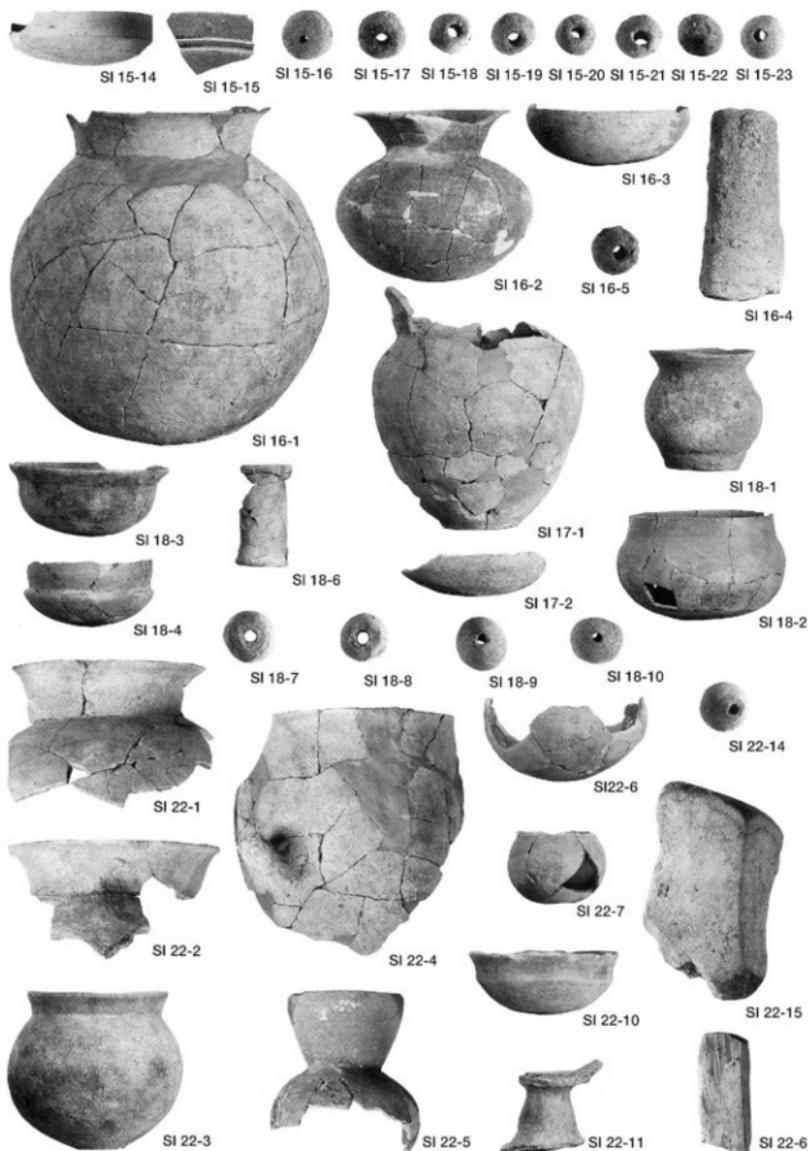
SI 15-12



SI 15-9

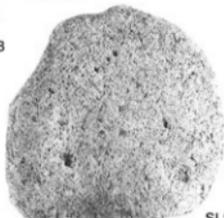


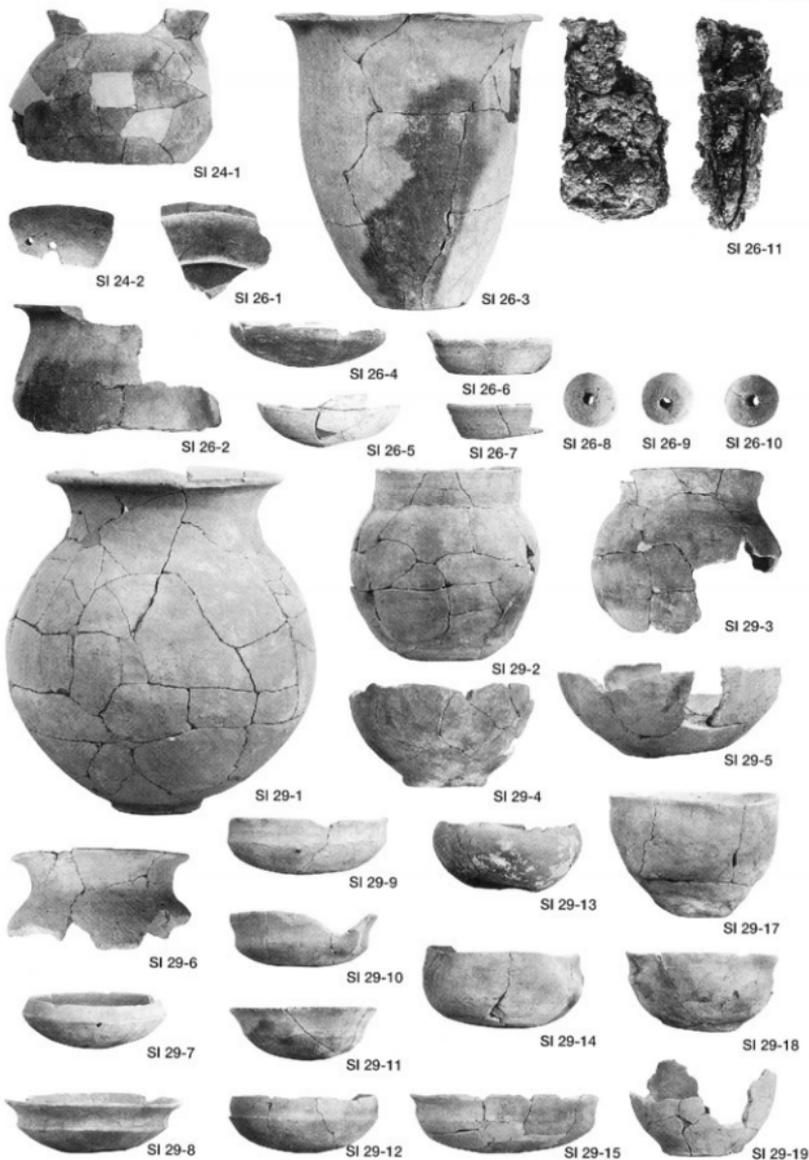
SI 15-13



池平遺跡

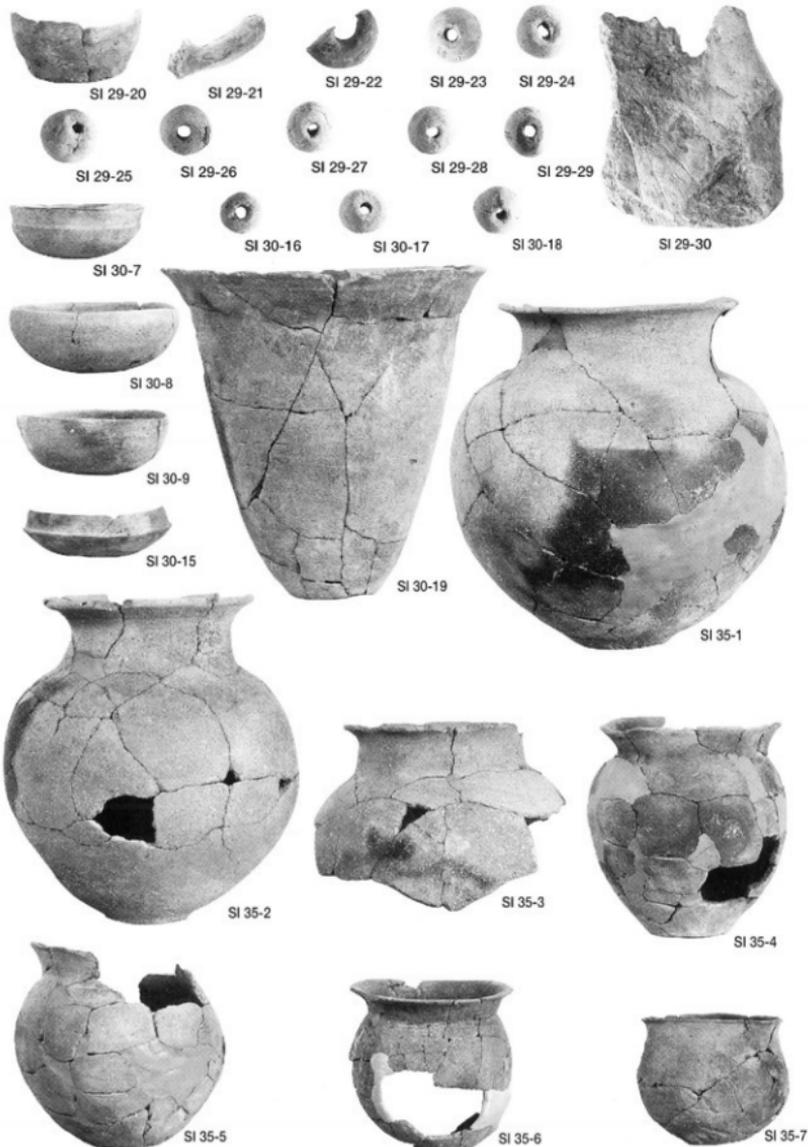
版
33





池平遺跡

図版
35





SI 35-8



SI 35-12



SI 35-14



SI 35-13



SI 35-15



SI 35-16



SI 35-17



SI 35-18



SI 35-19



SI 35-9



SI 35-20



SI 35-21



SI 35-22



SI 35-23



SI 35-24



SI 35-25



SI 35-26



SI 35-27



SI 35-28



SI 35-29



SI 35-30



SI 35-31



SI 35-32



SI 35-33



SI 35-34



SI 35-35



SI 35-36



SI 35-11



SI 35-40



SI 35-41



SI 35-42



SI 35-43



SI 35-44



SI 35-45



SI 35-46



SI 35-47



SI 35-48



SI 35-49



SI 35-50

池平遺跡

図版
37



SI 36-3



SI 37-2



SI 37-4



SI 38-1



SI 37-1



SI 37-5



SI 37-6



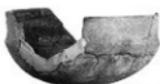
SI 37-7



SI 38-2



SI 38-4



SI 38-5



SI 38-6



SI 38-7



SI 38-8



SI 38-9



SI 38-10



SI 42-1



SI 42-2



SI 45-1



SI 42-3



SI 45-2



SI 42-4



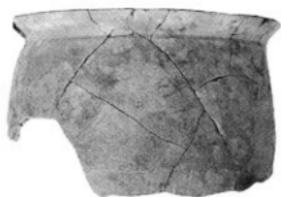
SI 45-3



SI 45-4



SI 45-5



SI 47-1



SI 47-3



SI 47-6



SI 47-7



SI 53-2



SI 53-3



SI 47-4



SI 47-8



SI 53-4



SI 59-1



SI 59-2



SI 59-3



SK 15-1



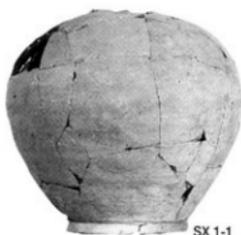
SK 15-3



SK 15-2



SK 15-4



SX 1-1



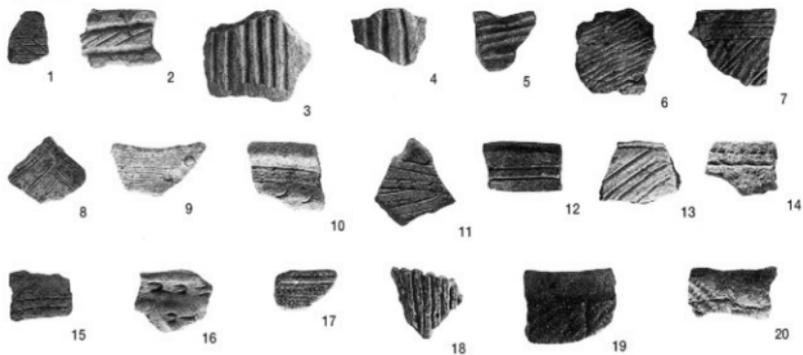
SX 2-1



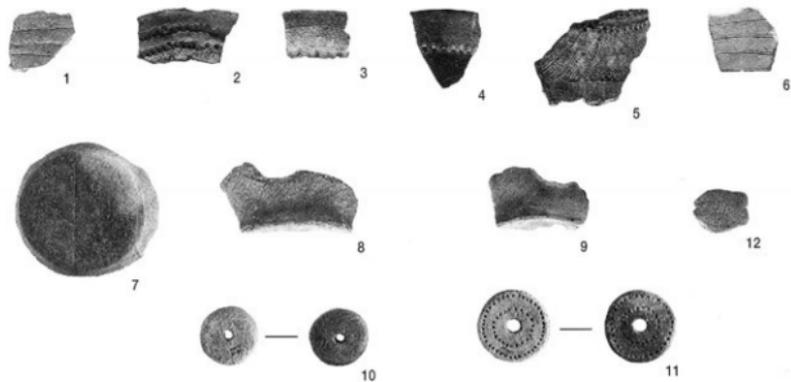
SX 2-2

池平遺跡

図版
39



1. 遺構外出土縄文時代遺物



2. 遺構外出土弥生時代遺物

Ⅳ 中 佐 倉 貝 塚

第1章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

本遺跡の調査範囲は、標高24～26mの樹枝状台地が西側に向けて緩やかに張り出す部分にあたり、頂上部分より緩やかに西側に向かって傾斜する。遺跡は、遺構が東側の道路脇に設定したトレンチによって、更に東側に広がることが確認されていることより、本来の範囲は東及び南北方向に大きく広がりを見せるものと判断された。周辺（同一台地上）の踏査では、小規模ながら複数の地点に於てハマグリを主体とする貝の散布が確認されている。

遺跡発見の契機になった貝屑の確認をもって、遺跡名が中佐倉貝塚と呼称されているもので、調査の結果でも、縄文時代前期の貝屑を有する住居跡・土坑が確認されている。また、その他に古墳時代、奈良・平安時代の住居跡も確認されており、遺跡が縄文時代前期より平安時代にわたる複合遺跡であることが確認されている。

第2節 住居跡

第1項 遺構の概略

検出された住居跡は29軒である。この内21軒について時期決定が行えており、その内訳は縄文時代前期中葉から後半の黒浜期2軒、前期後半の浮島式期11軒、古墳時代中期1軒、古墳時代後期2軒、奈良・平安時代5軒、時期不明8軒であった。

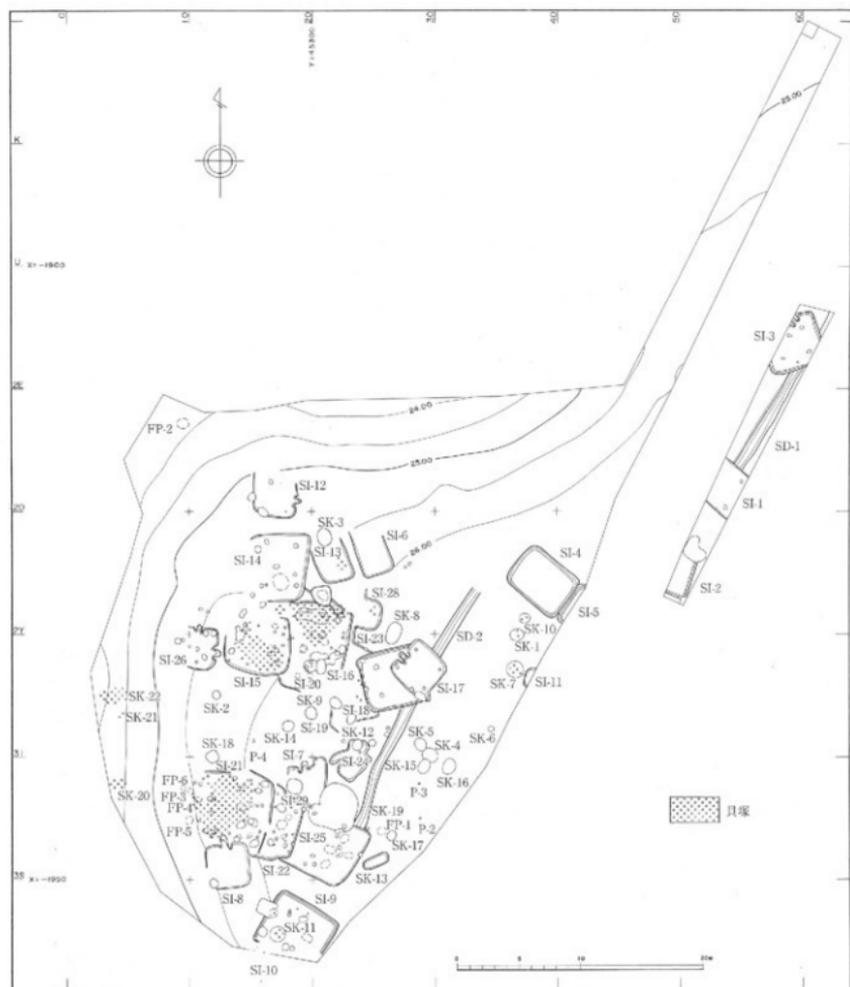
縄文時代

縄文時代の住居跡は前期後半から末にかけての黒浜式2軒、浮島式の10軒が確認されている。いずれも前期後半の遺構で特に浮島式を主体とする時期である。集落の分布は、台地の中心で遺構が疎になる傾向が見られ、東側のトレンチ調査区域に於ては縄文時代の遺構は確認されていない。このことから、該期の遺構分布は東側に向かって更に延びる可能性は少ない、若しくは台地縁辺に沿って分布する可能性が考えられる。

これら住居跡の内S I-15・20・21で覆土中に大量の貝の炭変が確認されている。

黒浜式期の住居跡はS I-9・25の2軒で、いずれも諸磯a式期に接近した時期が考えられる。検出されたのは調査区の南側で、2軒接近している。形状はいずれも方形で、S I-9では塹溝が廻り、炉は住居跡中央の東壁より設置される。また、北西よりの床面には少量ながら貝の集積が3カ所に見られた。

浮島式期の住居跡はS I-6・11・13・14・15・16・18・20・21・22である。住居跡は西に向かって張り出す台地の縁辺に2カ所で集中を見せる。ただし、1軒S I-11が台地の基部側に位置し、現遺によって東側を切られている。本期の住居跡は、黒浜期同様方形のプランを主体にしている。S I-6・13は小形で柱穴・炉は持たない。S I-13では北側の床面の一部に貝の集積が見られた。遺物が出土していないことより時期の確定ができなかったS I-4・5・28等も同様で、おそらく本時期の遺構と考えられる。大形の住居跡ではS I-14・15・21が明瞭である。重複によって全体を確認できた住居跡はないが、平面形状はやはり方形のプランである。柱穴の配列は方形を意識するもので、床面にはいずれにも複数の炉が確認されている。



第75図 中佐倉貝塚全体図

覆土中に貝層が確認されたS I - 15・16・21ではハマグリを主体とする貝が大量に投棄されていた。これらの貝については、全ての貝について採取を行ったものの、分類・整理作業に制約があった為に、中心部を1m方眼の形状にサンプリングを行い、水洗い分類を実施した。この結果、獣骨・魚骨の資料は僅かに1点のみが確認されたにとどまっており、他の遺跡の浮島期の貝塚の傾向と一致した結果が出ている。分析の結果については小林園子氏より、その概要を頂いている。更なる詳細な分析については、現在同氏によって進められている。

古墳時代

中期の住居跡S I - 27は調査区域の中央部分で検出されている。S I - 17・S D - 2に切られるが、方形を呈し、壁溝が全周していたものと考えられる。柱穴は対角線上に4本確認されるものの、今は確認されていない。おそらくS I - 27に切られたものであろう。

後期の集落は、2軒のみであるが調査区域北東側の東側のトレンチ調査区域に於て確認されている。分布状況から古墳時代の集落の中心は東側に広がっているものと考えられる。いずれも6世紀の所産である。

状況がつかめるS I - 3は方形のプランで、主軸は西方向に20°程振れる。北壁の中央にはカマドが付され、柱穴はカマド全面も含め5本確認されているが、未確認のものを含め6本が予想される。壁溝はカマド部分を除き全周するものであろう。

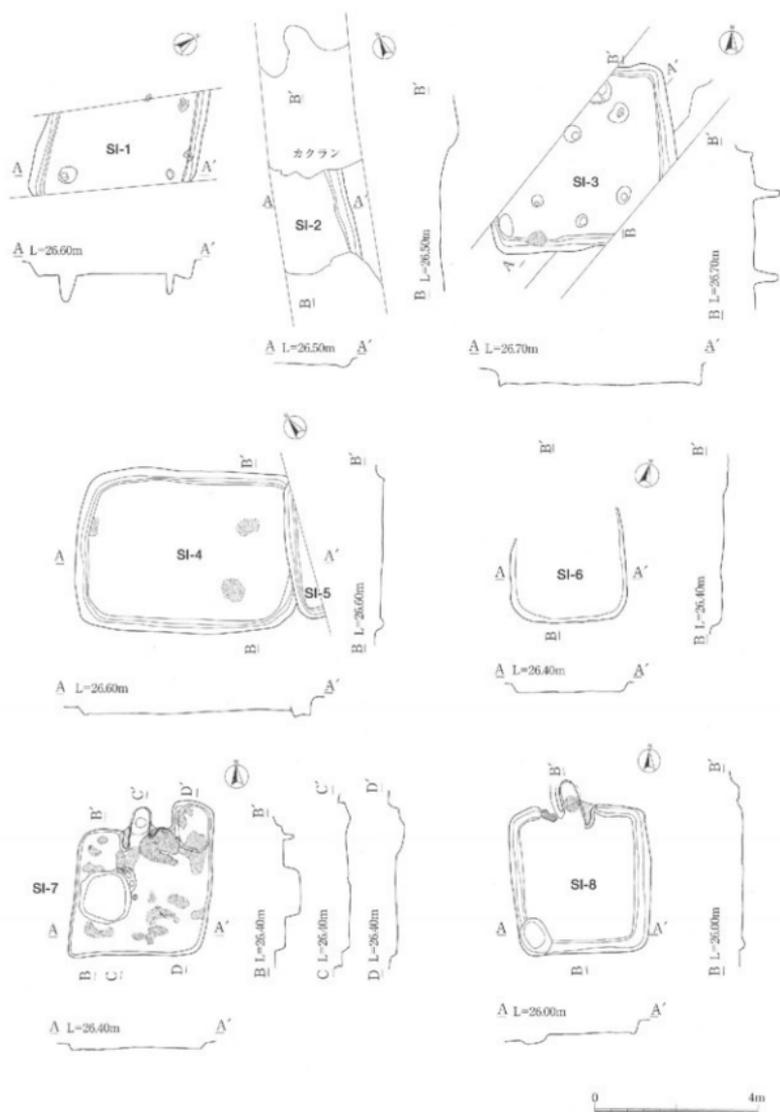
奈良・平安時代

8世紀後半の住居跡はS I - 17の1軒である。調査区域の中央やや東寄りに位置する。S I - 27を切り、S D - 2に切られている。プランは方形で北西壁の中央部分にカマドが付せられている。床面は良く踏み固められコーナーよりに4本の柱穴が配される。南西コーナー付近に不明土坑が位置するが断面関係は不明である。カマドの袖は山砂と粘質土によって構築されている。

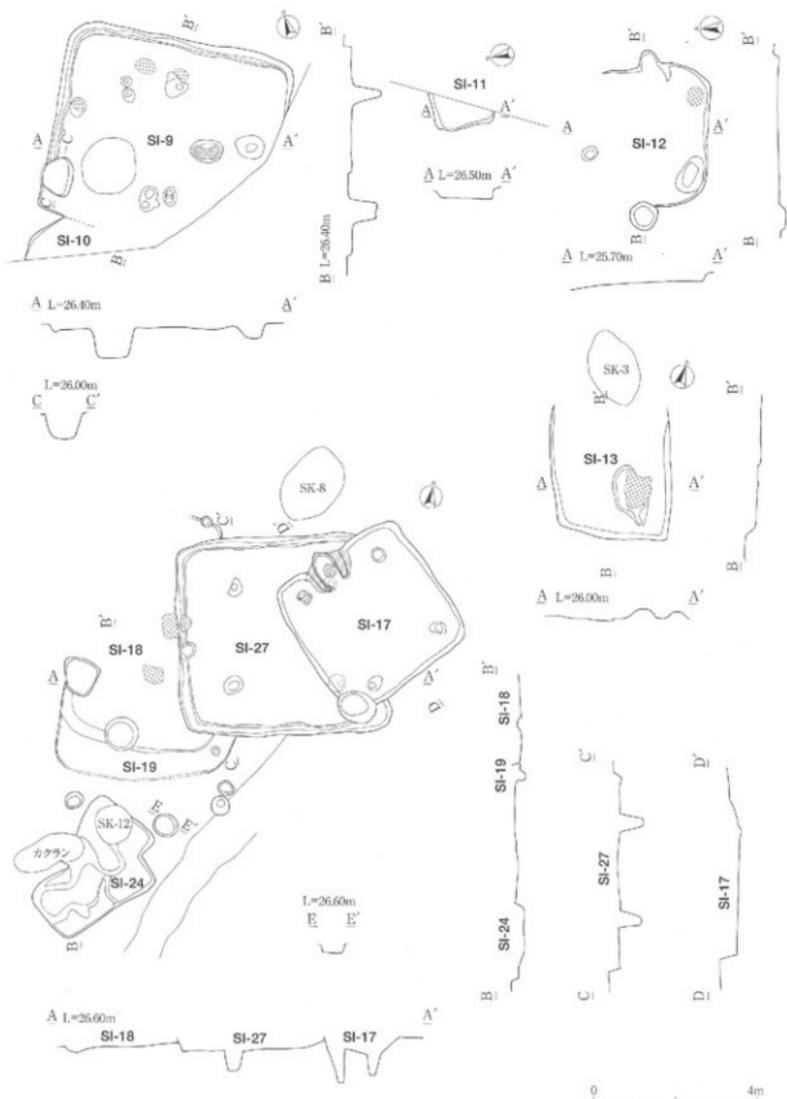
10世紀以降の住居跡はS I - 7・8・12・26の4軒が検出されている。分布状況は3軒が台地の縁辺部の緩傾斜面に位置するものであった。カマドはS I - 7・8で北側壁の中央に、S I - 12で東側、S I - 26では北と東の双方に確認されている。平面形状は斜面側を削り取られている為に明瞭ではないが概方形を呈するものであろう。明瞭な柱穴が確認できた住居跡はない。

本期の住居跡は今回の調査の秋平遺跡に於て6軒、池平遺跡で1軒が確認されており、3遺跡合わせて11軒と資料の比較的少ない時期の資料としてはまとまったものとなっている。この中でも本遺跡の密度は最も高く、調査区域の東側域に集落が広がるものか否かについては、確認できていないが、該期のまとまった集落の構成状況は出土遺物からもやや特異な状況が見られる。掘立柱建物はまったく確認されていないが、近隣に信太郎岡に関連する施設の存在を想定する必要がある。

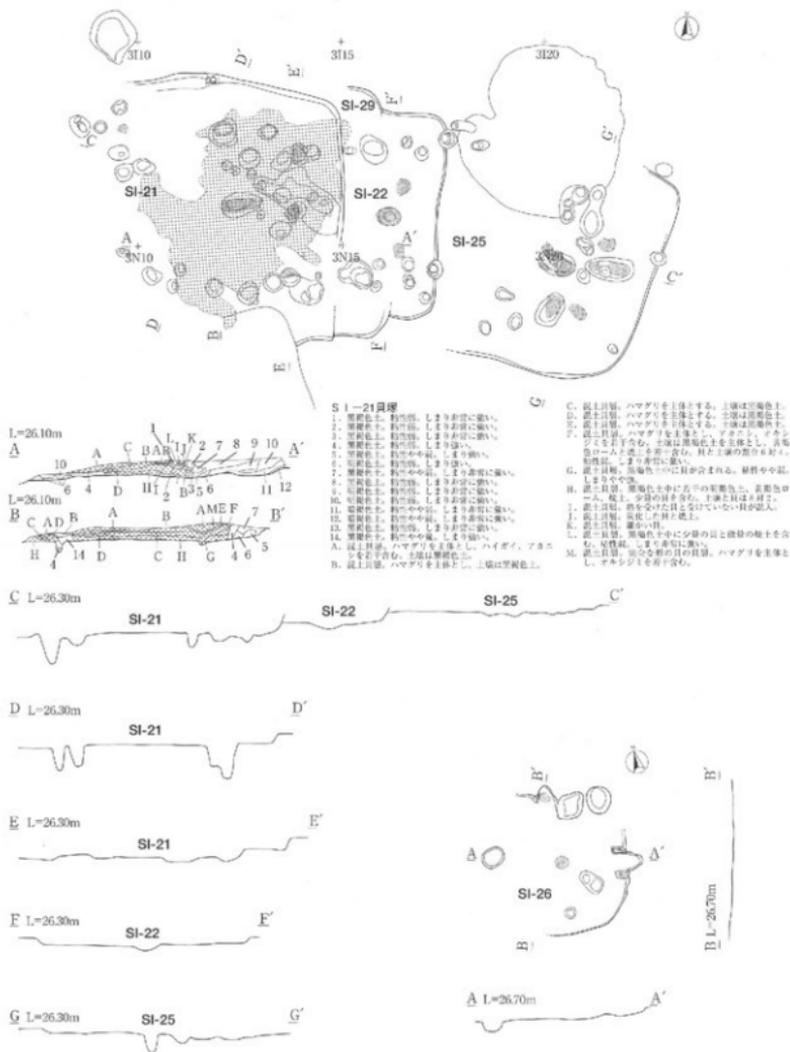
住居跡の詳細な所属時期については出土遺物より判断されるが、本遺跡出土遺物は、従来の編年観では若干のずれが生じているように思える。次項の遺物でその概略について触れたい。



第76図 SI-1~8



第77図 SI-9~13・17~19・24・27



第79図 S I - 21・22・25・26・29

表104 住居跡一覧表

SI	グリッド	平面形	規模 (m) 長軸 × 短軸	か	カマド	ピット 数	壁溝	備 考
1	2J-55	方形?	3.95×(2.10)		1	2	半周	
2	2T-50	方形?	(2.80)×(1.95)				一部	
3	X-59	方形?	(4.75)×4.30		1	5	半周	SD-1と重複
4	2T-35	長方形	4.07×5.40				全周	SD-5と重複
5	2V-40	方形?	(3.43)×0.50				一部	SD-4と重複
6	2Q-24	方形?	2.85×(2.73)				無	
7	3I-18	方形	3.85×3.15		1	4	無	主軸方位N-9°-E
8	3P-11	方形	3.66×3.45		1	1	全周	主軸方位N-13°-W
9	3T-16	方形?	5.64×4.83	2		8	半周	SI-10・SK-11と重複、貝塚
10	3X-15	不明	(1.20)×(0.95)				無	SI-9と重複
11	3A-37	方形?	(1.42)×(0.90)				無	
12	2L-15	方形?	3.54×(3.05)	2	1	2	無	主軸方位N-90°-E、貝塚
13	2Q-20	長方形	(3.30)×2.95			1	無	SK-3と重複、貝塚
14	2P-15	方形?	(5.63)×(4.60)	2		8	無	SI-15・16と重複
15	2V-13	方形?	5.50×4.80	2		13	無	埋藏。SI-20と重複、貝塚
16	2U-19	方形?	(6.20)×(4.24)	3		17	無	SI-15・20・23・28と重複、貝塚
17	3D-25	方形?	3.70×3.69		1	5	無	主軸方位N-22°-W
18	2Z-21	長方形	(6.80)×4.37			4	無	SI-19・27と重複、貝塚
19	3F-20	不明	—			4	無	SI-18・24と重複
20	2Y-18	不明	(5.00)×(4.50)	1		11	無	SI-15・16・23と重複
21	3I-10	方形?	(6.00)×(5.80)	4		23	無	SI-8・29と重複、貝塚
22	2K-17	方形?	5.04×(1.10)	1		7	無	SI-29と重複
23	2X-24	不明	(3.60)×(0.44)				無	SI-16・28と重複
24	3G-23	不整形	(3.35)×(2.40)				無	SI-12と重複
25	3M-20	方形?	5.50×5.00	4		14	無	SI-22と重複
26	2X-10	方形?	(3.65)×(3.43)		2	5	無	主軸方位N-20°-E (N-103°-E)
27	2Z-25	方形	5.15×4.80			5	半周	SI-17・18と重複
28	2W-26	方形?	(2.28)×2.65				無	SI-16・23と重複
29	2K-16	方形?	6.10×1.47			5	無	SI-22と重複

第2項 住居跡出土遺物の概略

本遺跡出土遺物は土器・石器が98箱、洗浄済貝類52箱の他に、未洗浄の貝（土裏袋）800袋が出土している。貝類については洗浄を行った52箱の内32箱を分析に依頼している。ここでは、住居跡出土土器・石器について概略を述べる。

住居跡出土遺物については、実測可能遺物すべてについて実測・掲載を行っている。また、各遺物は観察表105～133に観察結果をまとめている。

縄文時代

黒浜式期の住居跡はS I - 9・25の2軒である。

S I - 9では僅かに貝の堆積が見られたが、いずれも遺物の出土層位を把握できる程のものではない。土器は13点が出土しているが、このうち1点には繊維が混入されない。1は型式不明の底部片であるが、底部の網代痕が見られ、時期的に縄文時代後期または弥生時代の遺物と判断される。混入資料と判断した。その他は沈線や爪形を多用して肋骨文を描くものが多く黒浜式でも未段階と考えられる。5・8は繊維が混入されない諸磯a式に、また10は繊維を混入されないもので、平行沈線が描かれる浮島1式の可能性がある。また、同住居跡からは軽石製石製品1点が出土している。真水に於ける浮沈実験でも浮くことが確認されており、形状より浮子の可能性が高い。平面形状は米田分類のAタイプ3類のものを、つまみ部分を中心に対称にした鯨形を呈する。括れ部には顕著な糸ズレ等は確認できない。

S I - 25も同様の状況で、繊維を混入する遺物と混入しない遺物が併存している。したがって、木住居跡は黒浜式期の最終末期から諸磯a式段階の遺構と判断される。これらの住居跡には、浮島I式期の細片が含まれている。また、石器では砂岩製磨製石斧の刃部側破損資料が1点出土している。

浮島式期の住居跡は10軒が検出されており、なかでも浮島1式の資料は極めて良好である。

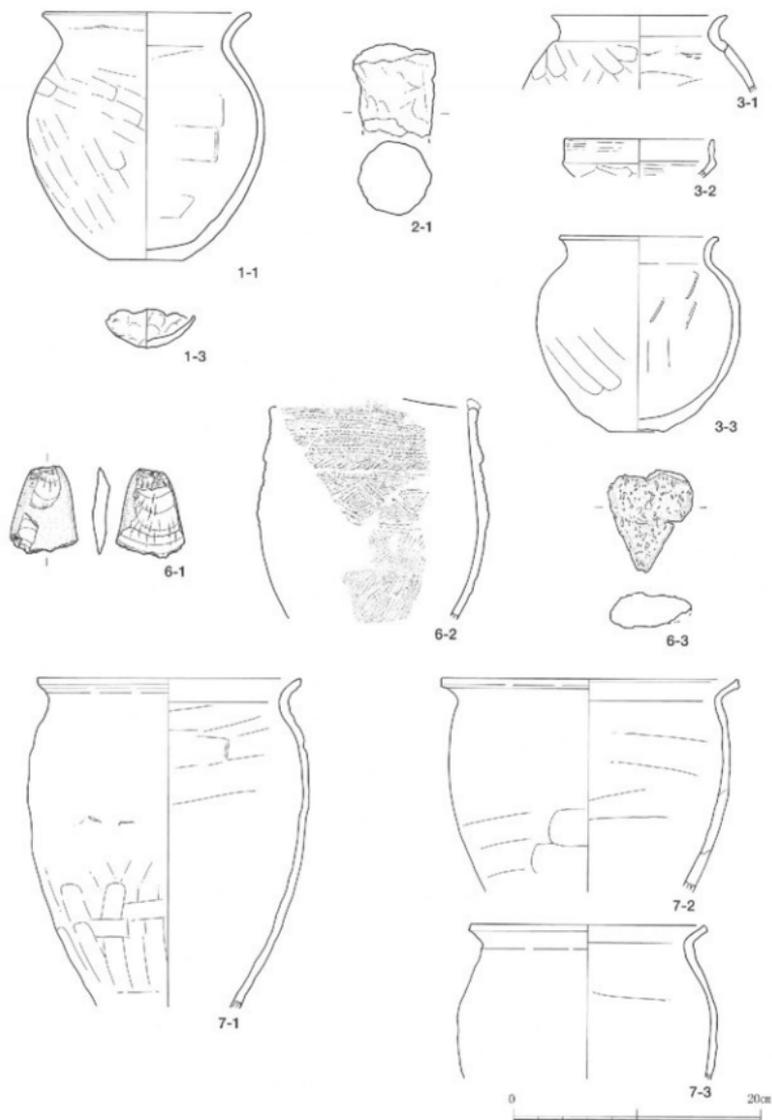
S I - 6の1は地文に捻糸を有する樽形の形状となる深鉢形土器である。I線部の文様帯は横位に施された爪形文によって4段に区画される。中段には太い隆帯が1条爪形に挟まれるように廻り、最下段の区画内には平行沈線による菱形文が描かれる。その他の遺物では石器で榎1点・軽石製石製品1点がある。

S I - 13の1は諸磯b式土器で2の浮島II式土器が併存している。

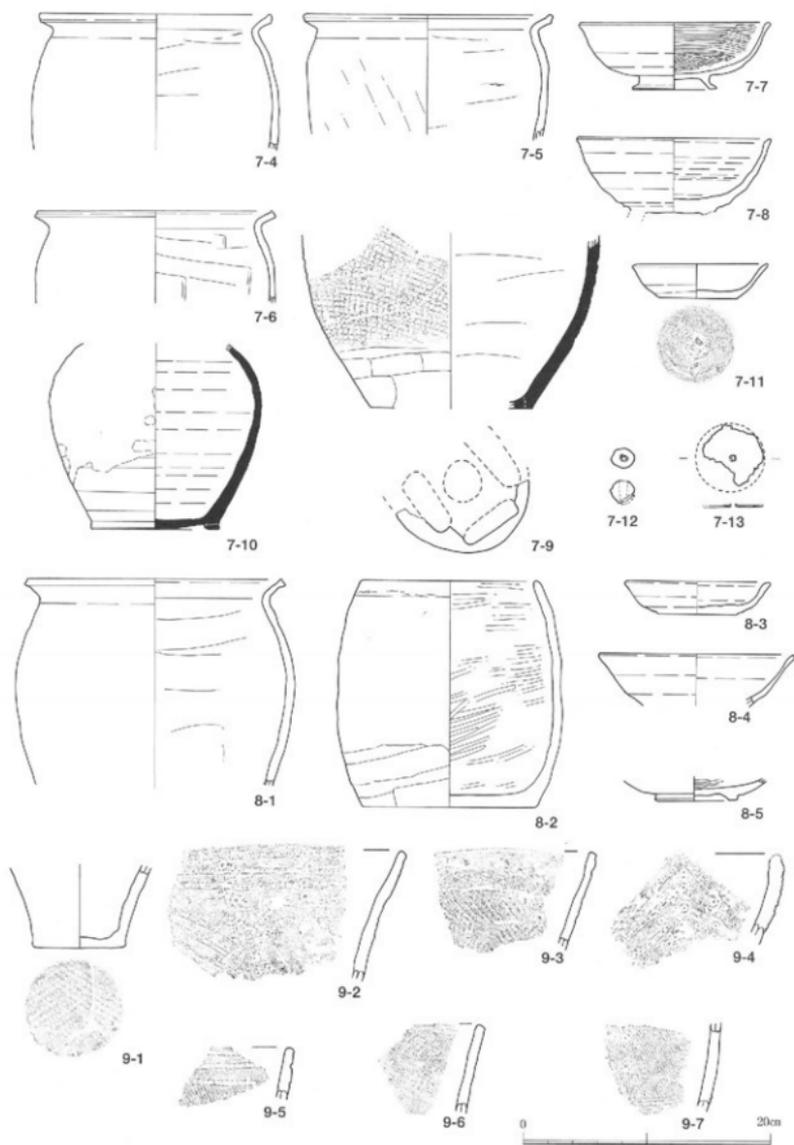
S I - 14では地文に捻糸を有する浮島I式土器が見られるが、I線部文様帯に弧状の平行沈線文を描くものが多い。また、アナダラ族の貝殻を支点を転換しながら施文する波状貝殻文がI線部直下まで施文される14が併存している。

S I - 15は覆土中に貝殻が堆積し、遺物の取り上げが部分的ながら層位別に行っている。大形破片である14・15は下層からの出土で、幅広い変形爪形文による文様が描かれ、地文に単節LRとS字の結節縄文が施文されている。浮島I b式に比定される。一方で、同住居跡の覆土中には諸磯b式土器が含まれている。

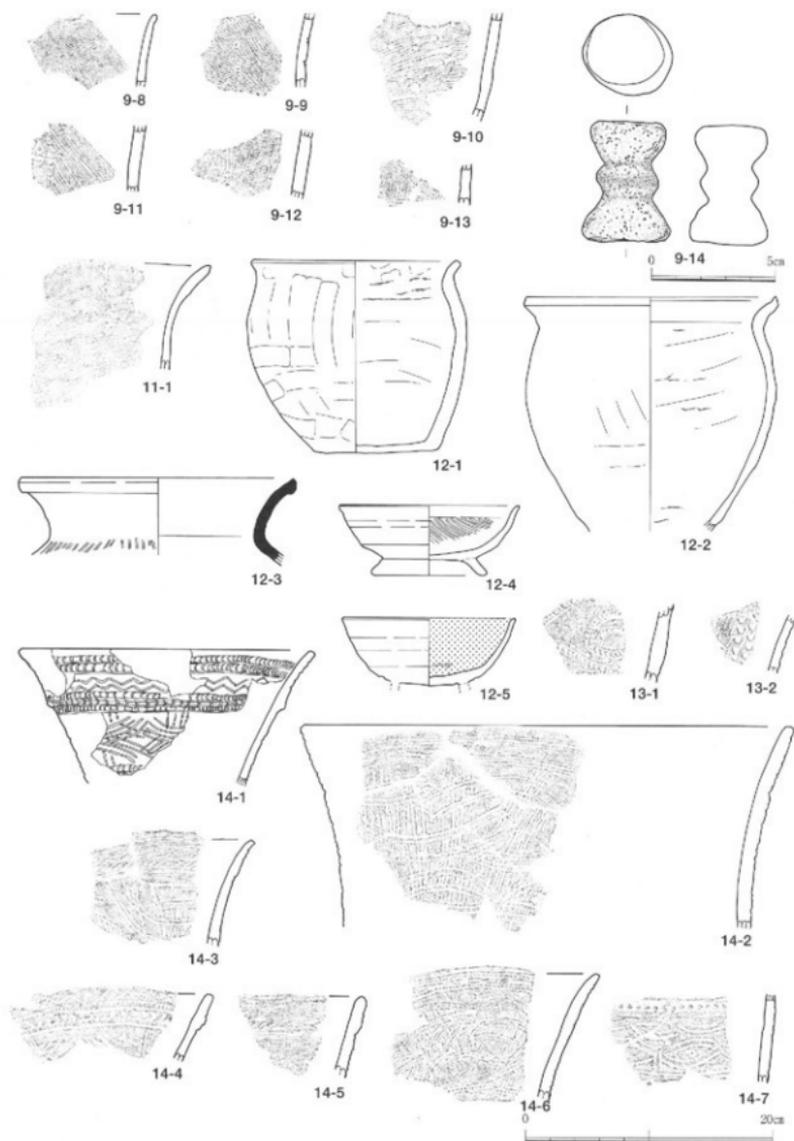
S I - 16もS I - 15同様貝殻が堆積していたものである。1は上層から出土した諸磯b式土器である。2は地文に捻糸とS字結節文が施文され、変形爪形文で区画されたI線部文様帯には、刺突列と斜行する太い沈線で肋骨文様が構成されている。3は覆土中と下層の遺物が接合した資料である。平線の口縁で地文には捻糸が施文され、I線部文様帯には平行沈線によるレンズ状の文様が描かれる。4では筒歯状の工具による集合沈線と刺突列で肋骨文を意識する文様構成を行っている。地文はやはり捻糸である。5では平行沈線によるレンズ状の区画帯の中に円管状の刺突を施すもので、諸磯a式土器に見られる構成に類似する。やはり



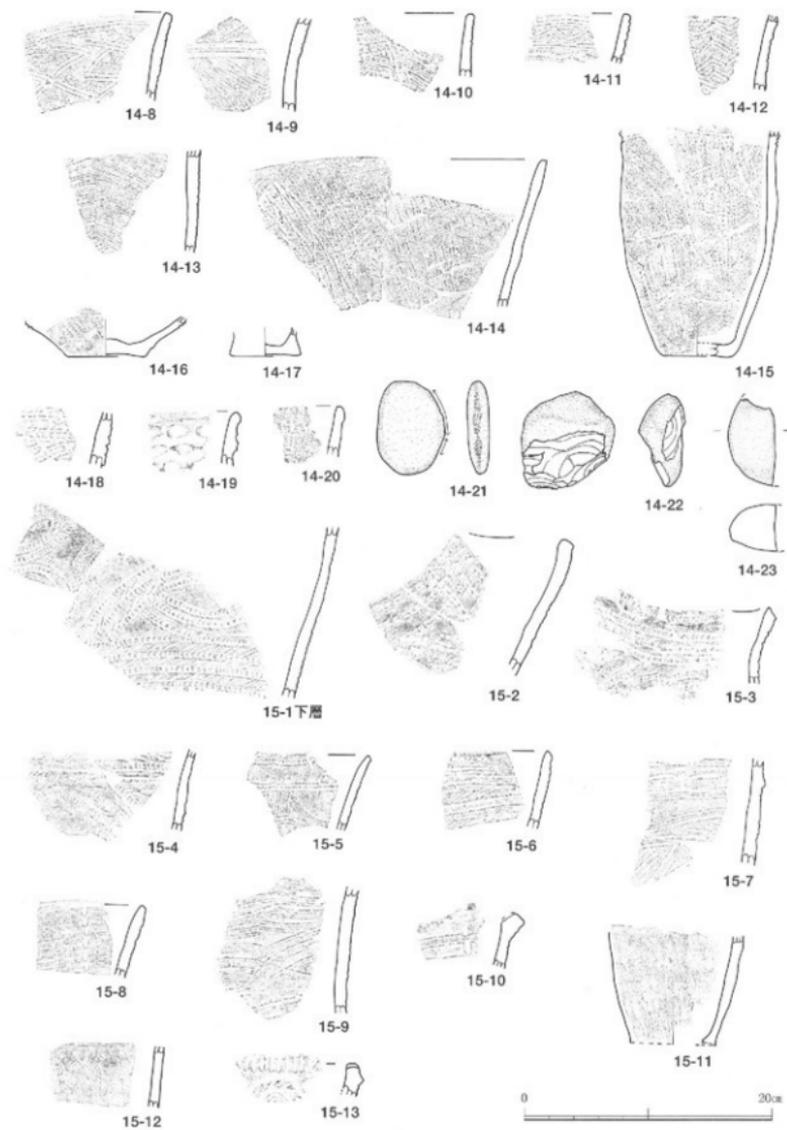
第80図 S1-1・2・3・6・7出土遺物



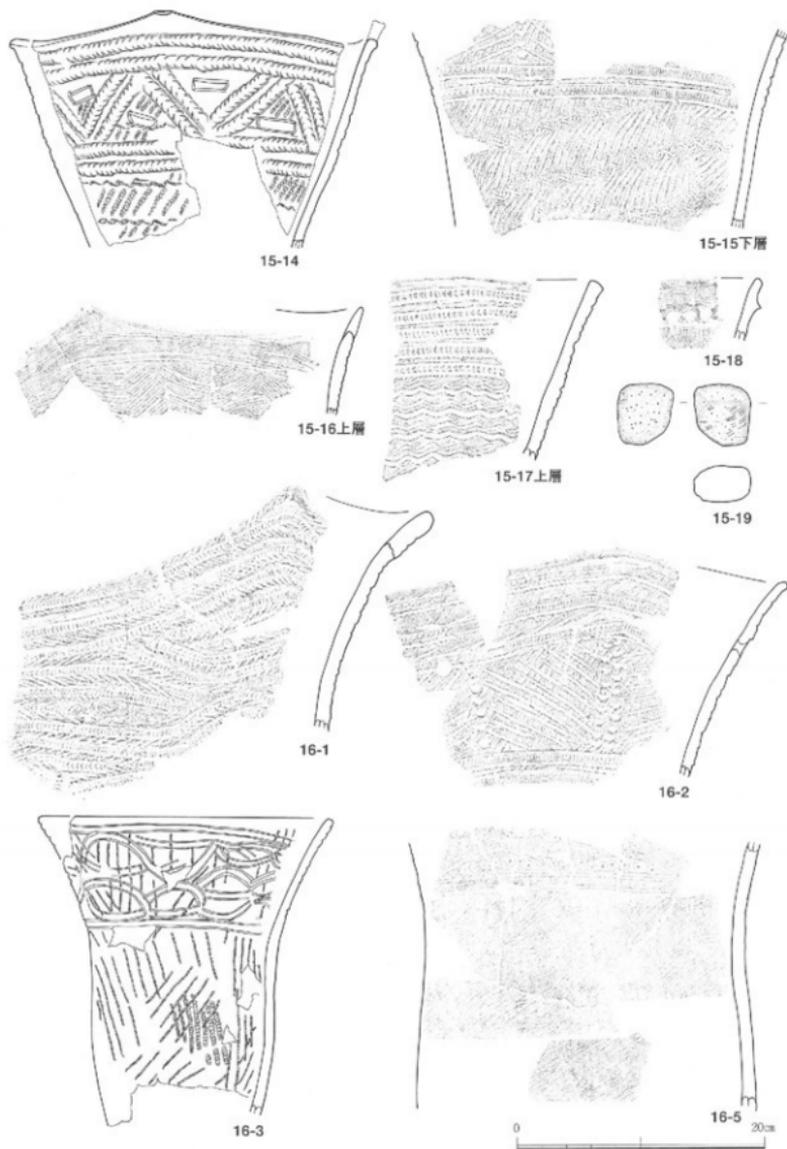
第81圖 SI-7・8・9出土遺物



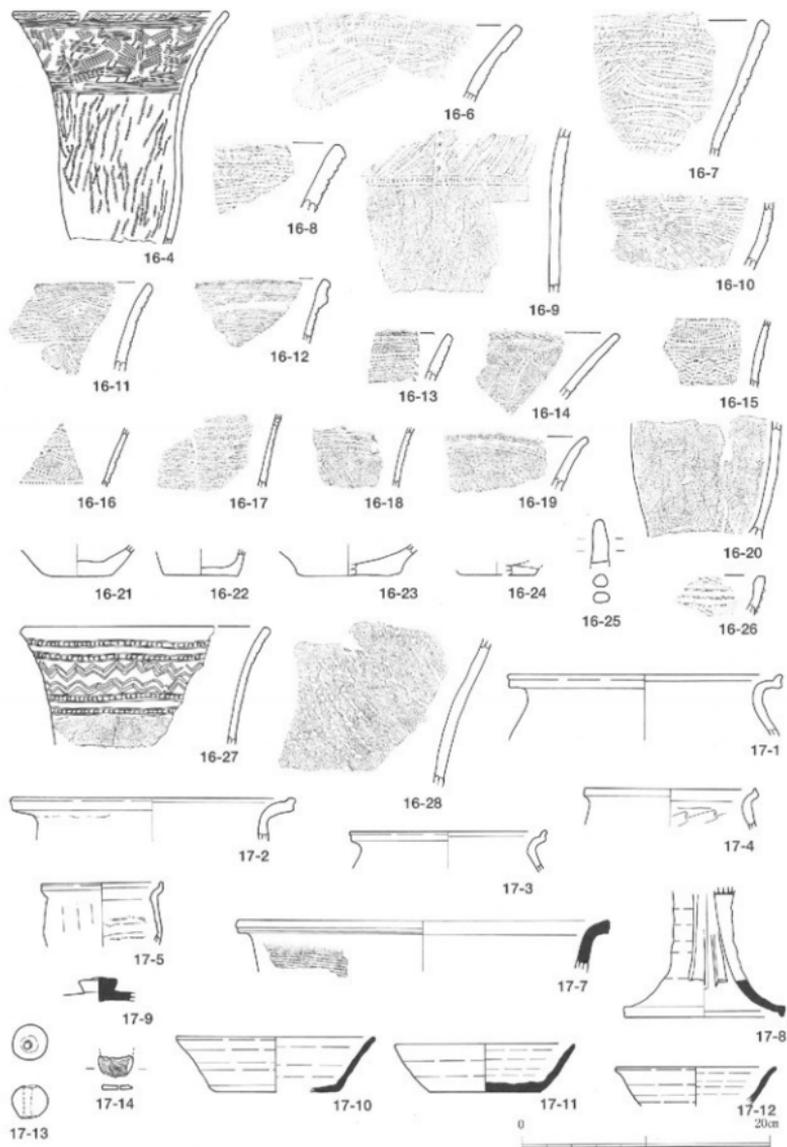
第82圖 S1-9・11・12・13・14出土遺物



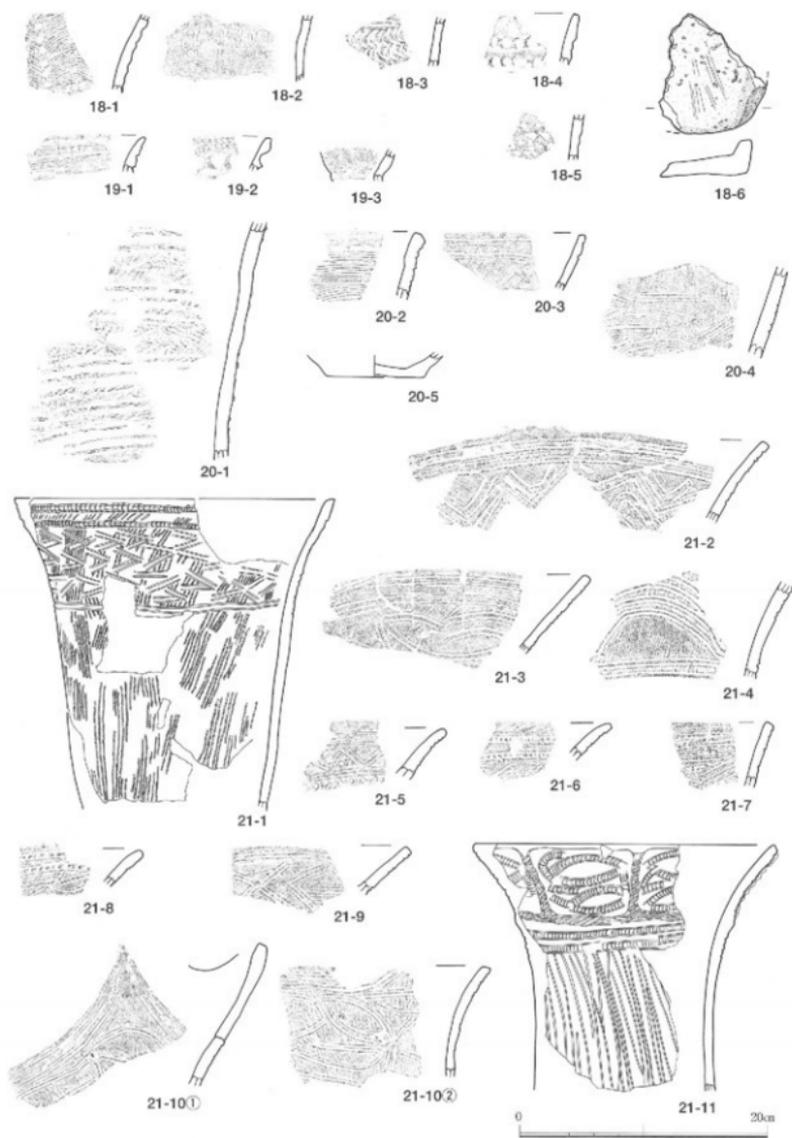
第83図 S1-14・15出土遺物



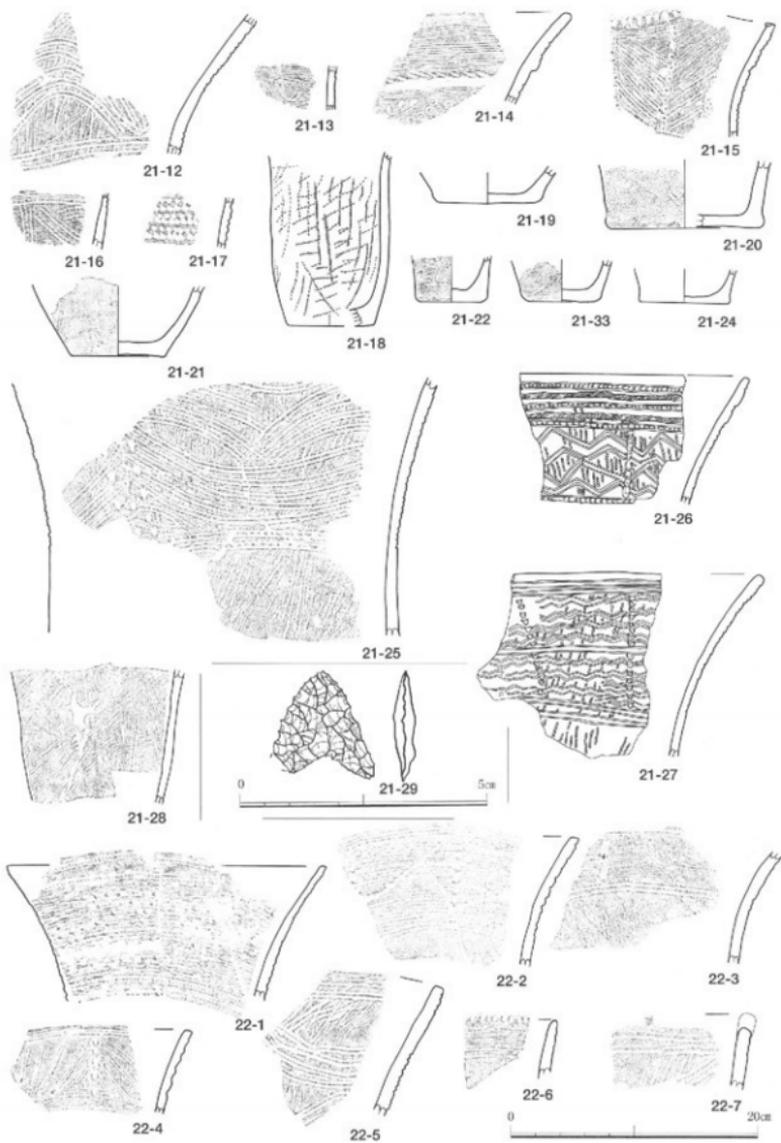
第84図 S I-15・16出土遺物



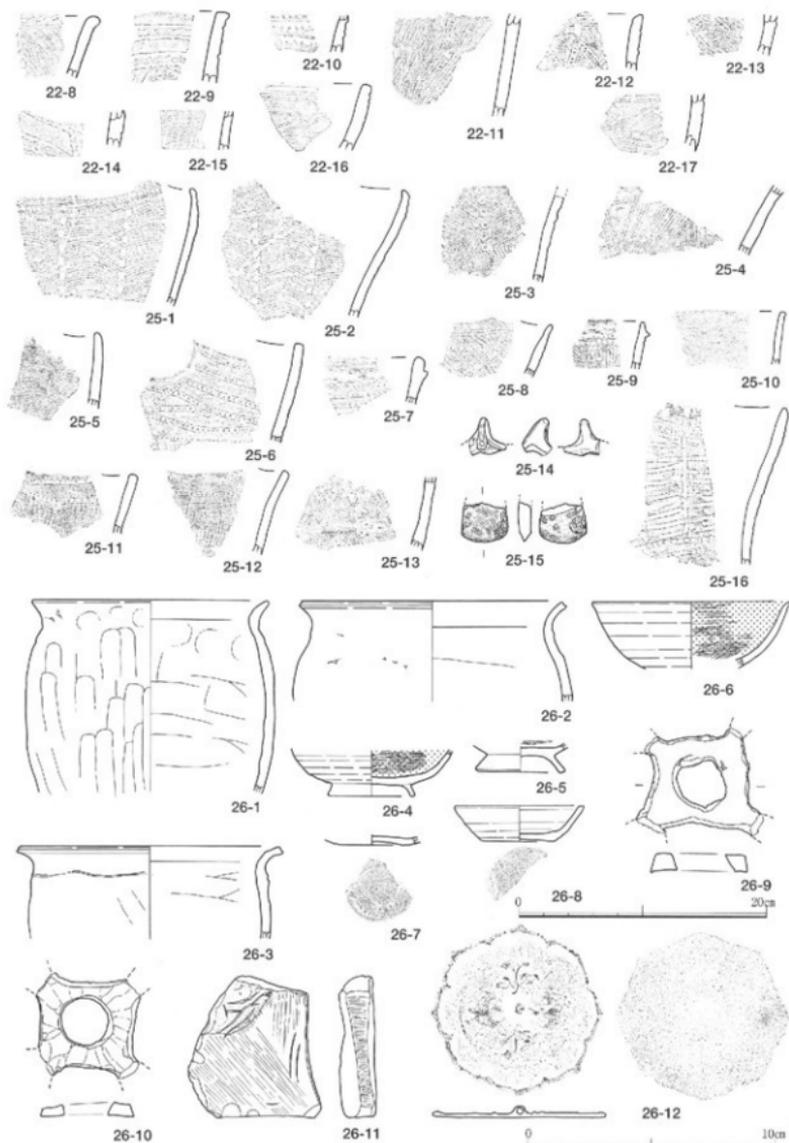
第85图 S I - 16 · 17出土遺物



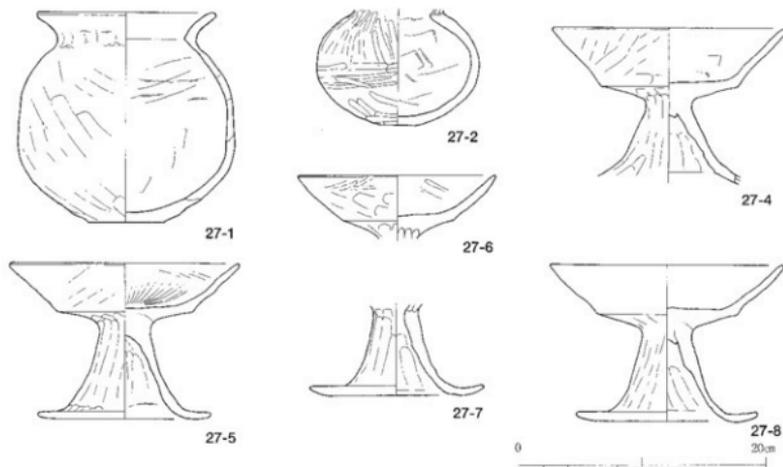
第86圖 S I - 18・19・20・21出土遺物



第87图 S1-21·22出土遗物



第88圖 S1-22・25・26出土遺物



第89図 S I-27出土遺物

地文は燃糸である。9では沈線及びC爪の刺突による肋骨文を描くものであるが、地文には支点転換の貝殻腹線文と燃糸文の双方が施文されている。貝殻腹線のみ地文となるものは27・28がある。26は浮線文を描く諸磯b式土器である。やはり1同様に覆土上層からの出土である。

S I-18では浮島I式の肋骨文を描くもの1、浮島II式の変形爪形文3等の細片に刺突文、三角形連続文等の浮島III式が出土している。本遺跡の浮島期の住居では最も新しい段階の遺構と考えられるものの、遺物量は極めて少ない。その他の遺物として、石器に安山岩製の石皿がある。大半が欠損するものであるが、機能部分は平坦で前方が「コ」の字形に開口している。周縁部分は「く」の字に折れる。

S I-19では黒浜式と浮島III式の細片が出土しているほか、ミニチュア土器の破片1点がある。

S I-20では浮島I式土器2～4に浮線文の諸磯b式土器1が供伴している。

S I-21はS I-15・16同様に覆土に貝層を有するものである。1は口縁部の文様帯に平行沈線による矢羽状の文様が描かれるもので、地文は燃糸である。2～11は同様の平行沈線による弧状や鋸歯状の文様が描かれるもので、やはり地文は燃糸である。11は変形爪形文によって画される口縁部文様帯が、更に太い刻み目を有する隆帯によって区画され、更に縦方向にも同様の隆帯による区画がなされる。区画の内部には変形爪形によるレンズ状の文様が描かれる。地文には平行沈線による条線が施文されている。14では円筒状の刺突が施される。25は中層からの出土であるが、平行沈線による弧状の文様と竹管の縦方向の刺突によって、肋骨文的な文様構成をなしている。26では鋸歯状の、また27では波状の平行沈線文に縦方向の竹管による刺突列が施され肋骨文的な文様構成をなしている。その他の遺物では、石器でチャート製の石皿1点が出土している。

S I-22では地文に燃糸を有し、平行沈線と刺突列による肋骨文を意識する文様構成が多い。1は地文は判然としませんが、横位の平行沈線が短くとぎれて施文される。

古墳時代

前期末から中期の遺構であるS I-27からは、甕1点、埴1点、高坏5点が出土している。甕は胴部の最大径を下半に有するもので、口縁は「く」の字に外反する。外面の整形はヘラケズリの後にヘラナデが行われている。埴は口縁部が欠損しているが底部は平底である。外面には磨きが施されている。高坏は胴部の端部がやや反る特徴を有するもので、赤彩は認められない。

後期の住居跡ではS I-1・3で僅かながら遺物が出土している。

S I-1では甕1点と手懸土器1点が出土している。1の甕は口縁が緩やかに外反し胴部最大径が中位に来るものである。3の手懸土器は小形の皿形を呈するものである。7世紀代の遺物であろう。

S I-3では甕2点、坏1点が出土している。甕は口縁部が短く強く外反し、口縁直下に稜を有する。坏は体部に稜を有し、口縁部は短く直立する。6世紀後半代の遺物と考えられる。

奈良・平安時代

8世紀代の資料を出した住居跡はS I-17の1軒である。掲載遺物は土師器では甕5点、須恵器では甕1点、高坏1点、坏3点、蓋1点、球状土鍾1点、滑石製有孔円板1点である。土師器の甕は所謂常総甕である。1～4の比較的大形から中形の甕が通常の形状であるが、本住居跡からは5の小形の常総甕1点が出土している。また、須恵器では脚部に透かしを有するものや胴部に叩きを有する甕、口径に対して底径が広く器高がやや低い坏、蓋等の比較的良好なセットが出土している。遺物の特徴から本住居跡が8世紀後半の所産であると判断した。

9世紀後半以降

第1項の遺構の概要でも述べたが、本期の遺構は4軒が確認されており、比較的良好な遺物が検出されている。

S I-7では土師器甕6点、坏3点、須恵器瓶1点、灰釉陶器瓶1点、鉄製紡錘車1点、球状土鍾1点が出土している。住居跡の年代観は10の灰釉陶器の瓶によって判断すれば黒笹14～90号窯に比定されるものであろう。県内の施釉陶器についての分析では、黒笹14～90号窯の遺物が10世紀以降と判断される遺構からの出土があるという。また、11の土師器坏は10世紀第1四半期以降とされる。従って、本住居跡の所属年代は10世紀第1四半期以降の所産と考えられる。

S I-8では土師器甕1点、坏3点、高台付坏1点が出土している。2の坏（分類上坏としている。）は、広い底部に胴部は緩やかに内湾しそのまま口縁部に至る。頸部の括れ及び外反は見られない。外面はヘラケズリされ、内面は細かに磨かれる。内面は黒色処理されたように黒色を呈し、表面がまだらに剥落している。同様の遺物については報告例に乏しく、管見に触れるものでは茨城県美浦村興津遺跡群原畑遺跡第4号住居跡出土遺物がある。同遺物では片口の注口部が付されるもので、10世紀前半の年代観が与えられている。一方、本遺跡出土の2は口縁部の2分の1程を欠損しており片口が付されていたか否かについての確認はできていない。3の小形坏と4の坏の組み合わせより、本住居跡の所属年代も10世紀前後が想定できる。

S I-12では土師器甕2点、坏2点、須恵器甕1点が出土している。須恵器の甕ではやや古い様相も見れるが4・5の坏の形状より10世紀前半期が想定できる。

S I-26では土師器甕3点、坏4点、須恵器瓶2点、坏1点、低石1点、鏡1点が出土している。

表105 S I - 1 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	上部器 一部欠	164 7.8 20.3	底部は平底で、体部内湾しながら立ち上がり、口縁部は大きく外反する。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデが観察される。	雲母を少量含む	良好	明褐色	
3	手取土器 一部欠	7.1 3.2	底部は九底で、体部は人さす間く。重みがかかりある。指環痕が明瞭に残る。	雲母、長石砂粒を含む	良好	明褐色	

表106 S I - 2 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 一部	長さ7.6cm、最大径6.7cm、	刷りの後ナデがなされている。	雲母を少量含む	良好	明褐色	

表107 S I - 3 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 口縁1/3	14.0 -	体部は大きく開き、後を有した後口縁部は大きく反る。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	長石・雲母砂粒を含む	良好	暗褐色	
2	土器 口縁1/4	11.8 -	口縁部は明瞭な稜を持った後、直する。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部・内面はミガキが施されている。	雲母を含む	良好	明褐色	
3	土器 小形 胴1/2口部	12.8 4.4 17.0	底部は上坪面で、体部は内湾しながら立ち上がり、胴1位に最大径を持つ。口縁部は大きく開き、口縁部で反る。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	

表108 S I - 6 遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	硯	扁平な河原石の両端より打撃を加えている。				粘灰岩
2	細線口縁	小波状口縁で小突起が付される。地文は滑糸。口縁部文様帯は手載竹管によるC系と菱形文を施し、胴下半部は滑糸施す。	雲母少量混入	良好	褐色	浮島Ⅰ
3	軽石製石製品	不整形である。全面に研削された痕跡が見られる。				軽石

表109 S I - 7 遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	口徑 底高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器 口縁1/3 一部	21.2 -	体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、上半に最大径を有す。口縁部は外反する。外面胴部下半ヘラ刷り、上半ヘラ刷りの後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ヘラナデ。	雲母・砂粒混入 (c. 3cm)	良好	明褐色	
2	上部器 口縁1/4	29.0 -	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反し口唇部は積み上げられている。外面上部はヘラ刷りの後ナデ、下部はヘラ刷り、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
3	土器 口縁1/3	18.8 -	体部は内湾し、口縁部は大きく開き、口唇部は前へ積み上がる。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
4	土器 口縁1/3	19.4 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は大きく「く」の字状に外反し、口唇部は積み上げられている。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	雲母を含む	良好	褐色	
5	土器 口縁1/3	30.0 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の字状に外反して口唇部は積み上げられる。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。	雲母を含む	良好	明褐色	
6	土器 口縁1/3	19.0 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は積み上げられている。外面はヘラ刷りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	

表110 S I - 7 遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・製形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	土師器 高台付環 体部1/3欠	15.2 6.8 5.5	高台部は「ハ」の字状につき、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外反する。ロクロだが内面は細かきギキが密に施されている。	雲母を多く含む	良好	褐色	
8	土師器 高台付環 台欠、体片	15.0 -	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外へ開く。ロクロ裏が明瞭に残る。	雲母・砂粒を含む	良好	赤褐色	
9	灰土器 底一割中1/3	13.1 -	外面は椅子目のタタキが施され、下部はヘラ削りがなされている内面はヘラナデ。孔はヘラによる切り込みが行われ、縦紋孔となる。	細かい	やや不良	褐色	
10	灰土器 底一割2/3	10.4 -	高台は平底で、「ハ」の字状につき、体部は緩やかに内湾し口縁部上に細大湾を帯つ。施は器部下段にまでかかる。器部下段にはヘラ当て痕・ヘラタズリが観察される。	細かい	良好	灰色	
11	須恵器 ほぼ完成	19.6 6.2 2.7	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。ロクロ製形で、底部は回転ヘラ切り施し。	雲母・砂粒を少量含む	良好	灰色	
12	土製品 上玉、元形	長さ19cm、厚さ1.9cm、孔径0.7cm、重さ3.8g。歪みが大きい。					
13	鉄製品 紡錘車、1/2	長さ4.5cm、厚さ0.2、孔径0.4cm、重さ8.4g。孔は方形。					

表111 S I - 8 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・製形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 口一割中1/3	20.4 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は「く」の状に大きく外反し、口縁部は織入し上げられている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデが明瞭に観察される。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	
2	土師器 環 体部2/3欠	14.0 14.0 18.4	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がりそのまま口縁に歪む。外面下部はヘラ削りで、中底は後にナデがなされている。口縁部外面はヨコナデ、内面はギキが施されている。	雲母・砂粒を含む	良好	褐色	内面一口縁部付着、外面まばらに黒行状。
3	土師器 環 体部1/3欠	11.6 6.2 2.7	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。ロクロで底部は回転ヘラ切り。	雲母・砂粒を含む	良好	明褐色	
4	土師器 環 体部1/3	15.6 -	体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で弱く開く。ロクロ製形。	雲母・砂粒を少量含む	良好	褐色	
5	須恵器 高台付環 体部欠	6.6 -	高台部は短く「ハ」の字状につき体部は緩やかに内湾する。ロクロ器面はかなり推れている。また高台部の切りつけは縁。	雲母を少量含む	やや不良	明褐色	

表112 S I - 9 遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	成・製形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	平底。胴部は開いて立つ。縄文底。	砂粒多い	良好	灰褐色	取土不明
2	深鉢口縁	平縁。C爪・平行沈線で肋骨文模出。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭析
3	深鉢口縁	0段多糸E L・附加糸第1横縄文施文。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭
4	深鉢口縁	放射状口縁。C爪・円管刺突。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭
5	深鉢口縁	平縁。C爪・準第R L縄文施文。	織物なし	良好	暗褐色	鉄酸ア
6	深鉢口縁	平縁。無文	織物混入	良好	暗褐色	黒炭
7	深鉢胴部	円管刺突・平行沈線で肋骨文模出。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭析
8	深鉢胴部	放射状口縁。準第R L縄文施文。	織物なし	良好	暗褐色	鉄酸
9	深鉢胴部	放射状口縁・円管刺突。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭
10	深鉢胴部	平行沈線。	織物なし	良好	暗褐色	浮輪ア
11	深鉢胴部	円管刺突・平行沈線で肋骨文模出。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭析
12	深鉢胴部	円管刺突・平行沈線で肋骨文模出。	織物混入	良好	暗褐色	黒炭析

表113 S I-9 遺物観察表 (2)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
13	深鉢胴部	地文に加部の横。平行沈線による併存子文。	繊維混入	良好	暗褐色	浮島I a
14	浮子a	円柱状を呈し、2条の溝により縞形に括れる。				軽石

表114 S I-11 遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口一側	口唇部に細かな網目を有す。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I a

表115 S I-12 遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 甕	167 — —	底部は平底。体部は横やかに内消し。口縁部で外反する。大きな帯みが見られる。外面はヘラ削りの後ナデ。口縁部は指によるナデ。内面はヘラナデ。輪積み痕が残る。	雲母・石英砂粒、炭 (c. 5 mm) を含む	良好	褐色	内面煤付着
2	土師器 口一側中片	202 — —	体部は内消しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反した後、口唇部は編み上げられている。外面はヘラ削りの後ナデ。口縁部はヨコナデ。内面はヘラによるナデがなされている。	長石・砂粒を含む	やや良好	褐色	
3	須恵器 口縁破片	220 — —	口縁は大きく開きながら立ち上がり、口唇部で上下に鋭く尖る。体部外面は平行タタキ。内面はナデ。	砂粒を含む	良好	灰色	
4	土師器 高台付片 1/2	144 96 58	高台部は「ハ」の字状に立ち、体部は内消しながら立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は指によるナデ。口唇部は指によるナデ。口唇部は指によるナデ。口唇部は指によるナデ。	雲母を含む	良好	褐色	
5	土師器 高台付片 胴体一部	138 — —	体部は緩やかに内消しながら立ち上がり、口縁部でわずかに開く口唇部で外反する。口唇部は指によるナデ。口唇部は指によるナデ。	雲母・砂粒を含む	良好	暗褐色	内面黒色処理

表116 S I-13 遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	D爪による渦巻文。	砂多い	良好	暗褐色	浮島b a
2	深鉢胴部	D爪。	砂多い	良好	暗褐色	浮島II a

表117 S I-14 遺物観察表 (1)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口一側	C爪、弧状平行沈線。地文は雲系a。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
2	深鉢口一側	弧状平行沈線。地文は雲系a。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
3	深鉢口縁	平縁。平行沈線による流状・弧状文抽出。地文雲系。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
4	深鉢口縁	平縁。平行沈線による流状・弧状文抽出。地文雲系。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
5	深鉢口縁	平縁。平行沈線。駒み目を有する際帯。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
6	深鉢口縁	C爪、平行沈線による弧状文抽出。地文雲系。	砂粒含む	良好	褐色	浮島I
7	深鉢胴部	平行沈線によるメダナ状文様。変形D爪。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
8	深鉢口縁	平縁。平行沈線による格子文様。地文流状貝殻文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
9	深鉢胴部	平行沈線。地文半節橋文R.L.抽出。	砂粒多い	良好	褐色	浮島a
10	深鉢口縁	平行沈線・変形D爪により肋骨文抽出。地文流状貝殻文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
11	深鉢口縁	半肋骨による平行沈線・刺突。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
12	深鉢胴部	半肋骨雲系抽出文様。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I

表118 S I - 14遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徵	胎土	焼成	色調	備考
13	深鉢胴部	平行沈線による肋骨文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I a
14	深鉢口縁	口縁は大きく開く平縁。波状貝殻文が前面に施文。	砂少ない	良好	淡褐色	浮島I
15	深鉢胴一帯	胴上下は平行沈線による文様帯。胴部地文は波状貝殻文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
16	浅鉢底部	平底。胴部は大きく開く。平行沈線施文。	砂量多、微塵	良好	淡褐色	浮島I a
17	ひょう底部	平底。内面には指による整形痕が残る。無文。	細砂粒多い	良好	褐色	浮島I a
18	深鉢胴部	C爪。	砂粒多い	良好	褐色	浮島b 古
19	深鉢口縁	棒状ノミによる刺突文。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島b
20	深鉢口縁	口縁部のみ耳。波状貝殻文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島II
21	磨石	扁平な河原石を利用するもので、側縁を僅かに磨いている。				ハンレイ雲
22	磨石	片割からの打撃により胴部に刃部を作り出す。				凝灰岩
23	磨石	破損しているが、全面に研磨されている。				砂岩

表119 S I - 15遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徵	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	C爪による濃巻状の文様構成。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島b
2	深鉢口縁	波状口縁の波部部。C爪系整形構成少。	微塵混入	良好	暗褐色	黒浜
3	深鉢口縁	波状口縁。C爪による変形文様構成。	砂粒含む	良好	褐色	黒浜b a
4	深鉢胴部	変形爪形と爪形による副巻文構成。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I b
5	深鉢口縁	波状口縁。C爪・平行沈線。地文擦余。	砂粒混入	良好	暗褐色	浮島I b
6	深鉢口縁	平縁。平行沈線。地文擦余。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I b
7	深鉢胴部	陰帯。平行沈線。	砂粒混入	良好	褐色	浮島I b
8	深鉢口縁	肋骨文を念珠した平行沈線と刺突文。地文波状貝殻文。	砂粒混入	良好	暗褐色	浮島I b
9	深鉢胴部	平行沈線。肋骨文。地文はない。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I b
10	深鉢口縁	小波状口縁の波部部で突起が付される。平行沈線及び刺突文。	砂粒混入	良好	褐色	浮島I b a
11	深鉢胴部下	地文の熱帯が僅かに観察される。	砂粒混入	良好	褐色	浮島I b
12	深鉢胴部	平行沈線が僅かに観察できる。地文は波状貝殻文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I b
13	深鉢把子	潰れた扇状の把子で、上端には刻み目が施される。浮原。	砂粒多い	良好	暗褐色	黒浜b
14	深鉢上半部	4単位波状。変形爪形による区画及び副巻状文様が描かれ、三角形の区画内に平行波沈線が光澤される。地文及び胴下半には単線LRとS平輪跡が施文される。	砂粒普通	良好	淡褐色	浮島I b
15	深鉢胴部	12線部は欠損しているが文様構成は14と同様。変形爪形の帯はやや密に施文される。	砂粒普通	良好	淡褐色	浮島I b
16	深鉢口縁	4単位波状。波部部は三角形に尖る。平行沈線を3条施文。以下は帯状の平行沈線が施文される。地文はない。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I b
17	深鉢口縁	平縁。口縁に沿ってC爪列5条。平行沈線による波状文様が5段以上施文される。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I b a
18	深鉢口縁	平縁。口縁は折り返し口縁で、折り返し部分に刺突列が施される。地文は口縁部で縦方向の熱帯、胴部は縦方向の熱帯。	粗砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I b a
19	軽石製石質品	全体に研磨されるが下部はほぼ平削である。				軽石

表120 S I - 16遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徵	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	大波状口縁。波部部は三角形に尖る。C爪による副巻びした渦巻文が施文される。地文はない。	砂粒含むが 少ない。	良好	暗褐色	黒浜b 古
2	深鉢口縁	大波状口縁。変形爪形・爪形の刺突・平行沈線による肋骨文が描かれる。地文にはS字結節・熱帯が施文されている。	砂粒多い。	良好	灰褐色	浮島I

表121 S I-16遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	深鉢口一 下半	口縁は大きく外反して深く平縁。上半の文様帯には平行沈線によるメダナ状の文様構成。地文には黒糸が施される。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1a
4	深鉢口一 下半	平縁口縁。口唇部には刻み目を有する。上半は4本1單位の集合沈線の黒糸文による胎文が施される。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	褐色	浮島1a
5	深鉢胴部	上半には平直行書による胎文文を並列した文様構成が行われ、弧状の区画帯内部には内帯の刺刺が施される。下半は黒糸。	砂粒多い	良好	淡紫褐色	浮島1
6	深鉢口縁	平行沈線・C系により胎文が描かれる。	砂粒多い	良好	赤褐色	浮島1
7	深鉢口縁	円筒状、変形丸形・平行沈線。地文なし。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1b
8	深鉢口縁	平縁。平行沈線及び変形丸形胎文が施される。	砂粒多い	良好	褐色	浮島1b
9	深鉢胴部	文様帯には平行沈線及びC系による胎文、胴部は黒糸と貝殻散粒の刺刺が行われる。	砂粒多い	良好	褐色	浮島1
10	浅鉢口縁	内湾する口縁部には平行沈線。地文には黒糸が施文。	砂粒普通	良好	暗褐色	浮島1
11	深鉢口縁	平縁。平行沈線による胎文が施される。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1
12	深鉢口縁	平縁。口縁直下隆帯。平縁胎文による平行沈線。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島1
13	深鉢口縁	平縁。C系と変形丸形胎文。	砂粒普通	良好	暗褐色	浮島1b
14	深鉢口縁	平縁。5本1單位集合沈線帯胎文が施文、地文は黒糸。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1
15	深鉢上半	平行沈線による胎文胎文、C系。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島1
16	深鉢胴部	C系による格子目状の文様構成。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1
17	深鉢胴部	変形丸形による順列の多段胎文。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1b
18	深鉢胴部	平行沈線が横位・斜位に施文。地文はない。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1
19	深鉢口縁	丸みを帯びる平縁。口唇直下に原帯に直。地文は黒糸か。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島1
20	深鉢下半	黒糸の痕跡が僅かに残る。	砂粒多い	良好	褐色	浮島1
21	浅鉢胴部	平縁。胴部は全く平。外側はていねいに内か。無文。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島
22	深鉢底部	平気外面はていねいに磨かれる。	砂粒多い	良好	褐色	浮島
23	浅鉢底部	底部は平気。内帯に磨かれている。無文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島
24	深鉢底部	小形の深鉢底部。ていねいに磨かれる。無文。	砂粒少ない	良好	褐色	浮島
25	深鉢口製品	輪状を呈し、基部側はやや離れた扁平。先端部は丸みを帯びる。	砂粒多い	良好	褐色	不明
26	深鉢胴部	細片。平縁。地文に及ぶ胎文胎文。	砂粒多い	良好	明るい褐色	浮島b
27	深鉢上半部	口縁は平縁。上下各2本の爪形列により区画された内部に、平行沈線による胎文胎文が施される。胴下半には黒糸胎文が施される。	砂粒やや多い。	良好	暗褐色	浮島1
28	深鉢胴部	流状胎文が全面に施される。	砂粒多い	良好	褐色	浮島1

表122 S I-17遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土師器 丸 口縁破片	21.8 --	口縁は「く」の字状に大きく外反し、口唇部の積み上げは顕著である。外面はナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	
2	土師器 丸 口縁破片	22.8 --	口縁は「く」の字状に大きく外反し、口縁部は積み上げている。内外面ともヨコナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	
3	土師器 丸 口縁破片	15.7 --	口縁は「く」の字状に外反し、口縁部は明確に積み上げられている。内外面ともヨコナデ。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	
4	土師器 小形丸 口縁1/2	12.5 --	口縁は「く」の字状に外反し、口唇部は鋭く積み上げられている。口縁部は内外面ともヨコナデ。内面はヘラナデ。	砂粒を多く含む 雲母を含む	良好	赤褐色	
5	土師器 小形丸 口一割中1/3	9.8 --	体部は横やかに内湾し、口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は積み上げられている。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ。内面はヘラによるナデで、輪痕も顕著である。	雲母・砂粒を多く含む	良好	褐色	

表123 S I-17遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	口徑高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7	須恵器 口縁破片	29.8 -	口縁は大きく外反し、薄減しているが口器部は上段に突る。外面は平行タタキ。	砂粒を少量含む	良好	灰色	
8	須恵器 高坏 胴2/3	- 12.6 -	胴部は反りながら開き、端部で直立する。方形の通かしが3か所に施されている。	砂粒を含む	やや 良好	灰白色	
9	須恵器 つまみ	- -	つまみは扁平で、中央がやや高くなっている。	芯母を多量に含む	良好	灰色	
10	須恵器 坏 口~底破片	16.0 10.0 4.5	底縁は平直で、体部は反りながら立ち上がり、そのまま口縁に至る。ロクロ整形。	砂粒を少量含む	良好	灰色	
11	須恵器 坏 底1/2、体片	14.5 9.0 3.9	底縁は平直で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で弱く反る。外面は推れているが、内面はロクロが明確に見られる。	雲母・砂粒を少量含む	良好	灰色	
12	須恵器 坏 体部破片	12.8 -	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で反る。ロクロ痕が明確に観察される。	砂粒を含む	良好	灰色	
13	土器 深鉢 口縁部	長さ2.9cm、幅2.8cm、口径0.7cm、重さ20.1g。		細かい	良好	褐色	
14	土器 深鉢 口縁部	長さ1.7cm、幅2.8cm、口径0.4cm、重さ2.9g。表裏とも研削されている。孔は一方より穿孔されている。					

表124 S I-18遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	4本1単位で弧状の集合沈線と円筒の刺突により動書文を掻く。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
2	深鉢胴部	波状貝殻文を施文。	微量繊維	良好	暗褐色	浮島I
3	深鉢胴部	幅広い変形爪形文を施文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島II
4	深鉢口縁	輪帯状の上に円形の刺突列を施す。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島III
5	深鉢胴部	三角状波文施文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島III
6	石皿	欠損資料である。機軸部はほぼ平坦で周縁は明瞭に立ち上がるが、前面部はコ字に開口している。全面に研削整形されている。				発色の強い安山質質の石材である。

表125 S I-19遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	C爪・円筒刺突で動書文様出。	繊維混入	良好	暗褐色	深淵a
2	深鉢口縁	口縁には貝殻沈線による刻み。口縁部は円形の刺突列が施る。	砂粒多い	良好	明褐色	浮島III
3	深鉢胴部	無文。	砂粒多い	良好	暗褐色	型式不明

表126 S I-20遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	多段の浮線。地文には僅かに器部の刺突列が施される。	砂粒多い	良好	淡褐色	深淵b
2	深鉢口縁	平縁。平行沈線。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
3	深鉢口縁	平縁。C爪。地文無。内面は磨きされる。	粗砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
4	深鉢胴部	平行沈線。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
5	浅鉢胴部	無文。内外両面にいないに磨かれる。	砂粒多い	良好	淡褐色	不明

表127 S I—21遺物観察表

番号	器形 透存度	成・装形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	大きく開く平縁。胴上半部の文様帯には横位のC爪形文。その後、欠羽状の平行沈線が短くとされて施される。胴下半部の素文部分との境には平行沈線が横位に廻る。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
2	深鉢口縁	大きく開く平縁。小突起が付される。口縁直下に2本の爪形文を配した後、扇状の区画内部にU字状の平行沈線を充填している。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
3	深鉢口縁	平縁。平行沈線により木の葉状入り縞み文を意図した文様を描いている。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
4	深鉢胴部	平行沈線による弧状を描く。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
5	深鉢口縁	平縁。胴上に爪形文。平行沈線により扇状文が描かれる。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
6	深鉢口縁	平縁。口縁部に斜方向の刻みが施される。平行沈線・爪形文が描かれる。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
7	深鉢口縁	平縁。平行沈線により扇状文が描かれる。地文には具数僅様の連続突起が施される。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
8	深鉢口縁	平縁。C爪・平行沈線が描かれる。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
9	浅鉢口縁	平縁。平行沈線による斜格子・菱形の文様を描かれる。地文は燃赤。	砂粒普通	良好	淡褐色	浮島I
10	深鉢口縁	浅鉢口縁。波状帯は鋭く三角形に突る。平行沈線による木の葉状入り縞み文を意図した扇状帯が描かれる。地文は燃赤。	細砂粒多い	良好	褐色	浮島I
11	深鉢口縁 胴下半	平縁。胴上半部には深い波帯により縦の区画が行われ、内部に菱形爪形による指門形の文様が充填される。胴下半の素文部分との境には変形爪形影が2条廻る。胴下半の地文は平行沈線。	砂粒多い	良好	黒褐色	浮島I
12	深鉢胴部	平行沈線による弧状を描く。地文は燃赤。4と同一。	細砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
13	深鉢胴部	爪形文により木の葉状入り縞み文が描かれる。区画内には細かな燃赤文が充填されている。	細砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
14	深鉢口縁	大きく開く平縁。平行沈線・刻みを持つ降帯・円筒の刺突が施される。	細砂粒多い	良好	赤褐色	浮島I
15	深鉢口縁	大波状口縁。口唇部には刻み目が施される。平行沈線及び円筒刺突により肋骨文が描かれる。地文はない。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
16	深鉢胴部	C爪・有段平行沈線。地文は燃赤。	細砂粒多い	良好	淡褐色	浮島I
17	深鉢胴部	二角連続文。	細砂粒多い	良好	黄褐色	浮島II又はIII
18	深鉢胴部	C爪により胴下半の素文部分と区画している。地文は燃赤で、方向を変えて施し、一部格子目状となる。	粗砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
19	深鉢底部	平底。無文。	細砂粒多い	良好	暗褐色	浮島
20	深鉢底部	平底。草節Rし。S字結節。	細砂粒多い	良好	褐色	銘陵b
21	深鉢底部	平底。無文。	細砂粒多い	良好	暗褐色	浮島
22	口縁底部	底部平底。胴部は直立する。	細砂粒多い	良好	暗褐色	不明
23	深鉢底部	平底。燃赤施文。	細砂粒多い	良好	暗褐色	浮島
24	深鉢底部	平底。無文。	粗砂粒多い	良好	暗褐色	浮島
25	深鉢胴部	C爪列により区画された上半には、平行沈線による弧状の文様が描かれる。地文は燃赤。	細砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
26	深鉢口縁	平縁。口縁直下にはC爪列と刻みを持つ降帯が交互に配され、直下は平行沈線による扇状文が幅の広い区画内部に充填される。地文は燃赤。	砂粒普通	良好	褐色	浮島I
27	深鉢口縁	平縁。平行沈線によって横位の直線によって2段に区画され、それぞれ内部には扇状文様を3列充填させている。地文は燃赤。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
28	深鉢胴下半	全面に燃赤が施される。	砂粒普通	良好	褐色	浮島I
29	凹蓋三角縁	縁線はやや丸みを帯び、決りは深い。				チャート

表128 S1-22遺物観察表

番号	器形 通称	成・整形の特徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	深鉢口縁	大きく開く平縁。胴上半部の文様帯には横位のC爪形文を施した後、横位の平行沈線が施くされて施文される。地文不明。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
2	深鉢口縁	大きく開く平縁。胴上半部文様帯には横位と縦向位の平行沈線、及び刺突列による助骨文が施かれ、地文は黒糸。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
3	深鉢口縁	文様帯は6本1層位の集合沈線及び刺突により助骨文を築く。胴部との境にはC爪形が廻り、胴部はR1の半筋縄文が施文される。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島II
4	深鉢口縁	大きく開く平縁。C爪・平行沈線・刺突列により助骨文を築く。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島II
5	深鉢口縁	大きく開く平縁。平行沈線により弧状の文様が施かれる。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	褐色	浮島I
6	深鉢口縁	口縁は直立する平縁。口縁内側には筋み目が施される。平行沈線により助骨文が築かれる。地文はない。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
7	深鉢口縁	平縁で小突起が付される。平行沈線により助骨文が施文される。地文は黒糸。	砂粒多い	良好	黄褐色	浮島I
8	深鉢口縁	平縁。平行沈線・刺突列により助骨文が築かれる。地文には黒糸が施文される。	細砂粒多い	良好	赤褐色	浮島I
9	深鉢口縁	波状口縁。変形爪形文。	砂粒普通	良好	褐色	浮島II
10	深鉢口縁	平縁。変形爪形文。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島II又はIII
11	深鉢胴部	黒糸。	砂粒多い	良好	淡褐色	浮島II
12	深鉢胴部	C爪形彫造文。	砂粒普通	良好	淡褐色	浮島II
13	深鉢胴部	半筋R・S半筋助文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島II
14	深鉢胴部	変形爪形。	細砂粒多い	良好	褐色	浮島II
15	深鉢胴部	波状口縁文。	細砂粒多い	良好	淡褐色	浮島II
16	深鉢口縁	平縁。平行沈線による楕円形の文様を築く。地文はない。	細砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
17	深鉢口縁	平縁。平行沈線による楕円形の文様を築く。地文はない。16と同一。	細砂粒多い	良好	淡褐色	浮島II

表129 S1-25遺物観察表(1)

番号	器形 通称	成・整形の特徴	胎土	焼成	色澤	備考
1	深鉢口縁	波状口縁。口縁に沿って2重のC爪形列。4本1単位とする集合沈線及び四筋刺突列によって助骨文を築く。地文はない。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
2	深鉢口縁	1と同一個体。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島I
3	深鉢胴部	平行沈線・四筋刺突列で助骨文を築く。胴部下半との境には爪形が廻り、以下は黒筋R1が施文される。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島II
4	深鉢胴部	平行沈線による助骨文が築かれる。地文はない。	微量黒粒	良好	暗褐色	浮島II
5	深鉢口縁	波状口縁。口縁部には筋み目が施される。集合沈線と四筋刺突列により助骨文が築かれる。	砂粒普通	良好	灰白色	浮島II
6	深鉢口縁	口縁は大波状で突起が付される。口縁部には複数のC爪形が築かれ、地文には黒糸が施文される。	微量黒粒混入	良好	淡褐色	黒浜
7	深鉢口縁	波状口縁。口唇直下には隆帯が1条廻る。隆帯に沿ってC爪の列が施文。	微量黒粒混入	良好	褐色	黒浜
8	深鉢口縁	波状口縁。平行沈線・C爪によって助骨文を築く。地文半筋R1。	微量黒粒	良好	褐色	黒浜
9	深鉢口縁	波状口縁。口唇直下に隆帯1条。以下にC爪列2条。以下は半筋R1。	微量黒粒混入	良好	褐色	黒浜
10	深鉢口縁	平縁。口唇は丸く直下にC爪列3条。以下は半筋R1の細縄文。	黒粒なし	良好	黒褐色	浮島II
11	深鉢口縁	波状口縁。口唇直下にC列2列。地文は半筋R1。	微量黒粒	良好	黒褐色	黒浜
12	深鉢口縁	波状口縁。口唇に沿ってC爪列3条。地文には黒糸が施文される。	微量黒粒	良好	黒褐色	黒浜
13	深鉢胴部	胴部は大きく張る。平行沈線による縦向文が2列。地文には黒糸が施文される。	微量黒粒混入	良好	褐色	黒浜
14	深鉢把手	断面把手であらう。断面の表現は行われていないが口の部分に刺突が施されている。	砂粒少ない 黒粒なし	良好	褐色	浮島II

表130 S I-25遺物観察表(2)

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15	削製石片	刃部破片。中形で扁平であるが明瞭な定角ではない。				砂岩
16	深鉢口縁	波状口縁口縁に沿って3列のC系列刻字に平行沈線で助背文を講く。胴部の素文部分との間に、C系列2条。以下は第14L。	砂多い 質量繊細	良好	褐色	経緯a

表131 S I-26遺物観察表

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 丸 口一側1/4	18.8 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデだが、胴部は指頭痕が明瞭に残る。内面はヘラナデ。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	褐色	
2	土器器 丸 口一側七片	21.0 -	体部は緩やかに内湾し、口縁部は大きく外反する。口縁部には弱い凹線が施される。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラによるナデ。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
3	土器器 丸 口一側上片	20.6 -	体部は内湾し、口縁部は「く」の字状に大きく開く。口唇部には凹線が施される。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面にはヘラナデが施されている。	雲母・石英 砂粒を含む	良好	褐色	
4	土器器 高台付 杯一部	6.8 -	高台部は「ハ」の字状につき、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。ロクロだが内面は丁寧なミガキが施されている。	雲母・砂粒 を多く含む	良好	褐色	内面黒色処理
5	土器器 高台付 杯一部	6.6 -	高台部は「ハ」の字状にしっかりとつく。ロクロだが内面には滑らか丁寧なミガキが施されている。	雲母・砂粒 を多く含む	良好	褐色	
6	土器器 杯 底部欠	15.8 -	体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。ロクロだが内面には非常に細かいミガキが施されている。	雲母を少量 砂粒を含む	良好	褐色	内面黒色処理
7	土器器 杯 底部のみ	5.0 -	底部は平底。ロクロ製形で底部は回転糸切り。	雲母・石英 を含む	良好	褐色	
8	須恵器 杯 1/3	10.3 3.6 2.9	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。ロクロで、底部は回転糸切り。	砂粒を含む	良好	灰色	
9	須恵器 碗 底部のみ	- -	孔は5。丁寧にヘラナデがなされている。	雲母・石英 砂粒を含む	やや 不良	褐色	酸化
10	須恵器 碗 底部のみ	- -	孔は5。底面外面、側面は丁寧にヘラナデがなされ、内面には指ナデ製が明瞭に残る。	雲母・砂粒 を含む	やや 不良	褐色	酸化
11	砥石	長さ11.6cm、幅10.7cm、厚さ3.0cm、重さ377.3g。	3面に渡って磨かれている。1面には溝が数条入れられる。				砂岩
12	銅鏡 双鳥八 鏡 鏡面欠	直径70cm、縁高2.0cm、皿高4.3cm、重さ291g。	八枚鏡。欠損はないが鏡背面はかなり摩耗しており明瞭ではない。しかし鈕を中心に「対の羽を広げた鳥と花を見る事ができる。またその周囲には直径47cmの基準線が高る。鏡面に文様は見られない。やや背周りに反っているか。				

表132 S I-27遺物観察表(1)

番号	器形 遺存度	口径 径高 (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	土器器 丸 一部欠	14.0 6.0 17.1	底部は平底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。胴部下位に悪大径を持つ。口縁部は大きく開く。外面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はヨコナデ、内面はヘラナデ。丁寧な作り。	雲母・砂粒 を含む	良好	褐色	
2	土器器 杯 口縁欠	3.0 -	底部は平底で、体部は球形を呈す。内外面ともヘラによるナデだが、外面はミガキ。	細かい	良好	赤褐色	
4	土器器 高台 杯1/2 脚部欠	18.6 -	脚部は反りながら大きく曲って立つ。杯部は大きく開いて縁を有した後、外反しながら立ち上がりそのままだけに出る。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ。杯部内面は丁寧なナデ。脚部内面は簡単なナデ、素部はヨコナデ。	細かい。	良好	明褐色	
5	土器器 高台 杯一部	18.3 14.0 12.7	脚部は反りながら曲って立ち、脚部はやや反り内湾になる。杯部は大きく開いて縁を有した後、外反しながら立ち上がりそのままだけに出る。外面はヘラ削りの後丁寧なナデ、杯部内面はミガキ。脚部内面は上部は指ナデ、底部はヨコナデが施されている。	石英・砂粒 を含む	良好	褐色	

表133 S I - 27遺物観察表(2)

番号	器形 遺存状況	口径 器高 (cm)	成 形 の 特 徴	胎土	焼成	色調	備考
6	土器 高杯 杯部のみ	15.6 —	杯部は反りながら曲ぎ、後を折った後内湾して立ち上がりそのまま口縁に至る。外面は稜までがヘラ削りの幾丁拳なナデ、口縁部までと内面はヘラ削りの幾ミダギ。	石英・砂粒を含む	良好	赤褐色	
7	土器 高杯 脚部のみ	— 14.0	大きく開いて立ち、裾部で反る。外面はヘラ削りの幾丁拳なナデ、脚部はナデ、内面は指ナデ痕が明確に残り、裾部はヨコナデ。	砂粒を含む	良好	明褐色	
8	土器 高杯 杯、脚1/4	18.8 14.8 17.7	脚部は大きく開いて立ち、裾部で反る。杯部は開いて後を折った後内湾して立ち上がり、口唇部は鋭く外反する。外面はヘラ削りの幾丁拳なナデ、内面はミダギに近いナデ、脚部内面は指ナデ痕が明確に観察される。	石英を含む	良好	明褐色	

鏡は住居跡北側壁面に設置されるカマドの、西側の床面より出土したものである。直径7cm、紐は楕円紐である。門圍の界圍が廻り内区には、紐の上下に外向きの瓊花、左右に鳳または鶯鶯か雀と思われる一対の鳥形が羽を広げて内側を向きあっており、外区は無文である。

文様の表出が不明瞭な為に瓊花及鳥八枚鏡とした。鏡の製作年代については平安時代後期のと考えられるものである。これは、野台遺跡23号住居跡出土瓊花及鳥八枚鏡同様に平安後期の出土遺物として、遺物編年における年代決定の示標となる重要な遺物と考えられる。

その他の遺物では、内面が黒色処理される高台付杯及び3の小形の皿形の杯が出土しており、遺構は11世紀前半の資料と考えられるものである。

本遺跡出土の和鏡は経線式の單面で、野台遺跡23号住居跡出土同様に11世紀代の遺物と考えられる。一方でS I - 7出土遺物の組み合わせには、黒笹90号窯の遺物にS I - 26同様の小形の皿形を呈する杯7が伴出しており、黒笹90号窯の下限を10世紀前半まで下げたとしても、やはり半世紀以上の年代差がある。灰釉陶器類の伝世を含めた上で、該期の遺物編年については更なる検討が必要に思える。

第3節 土坑

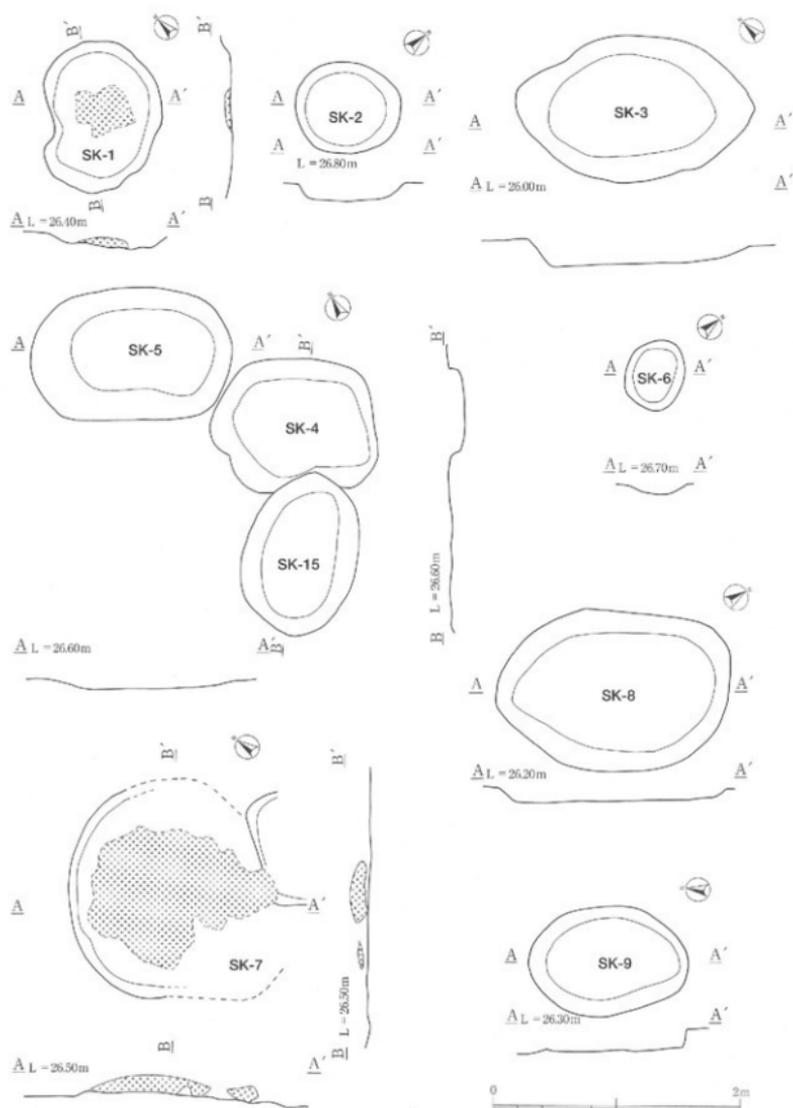
第1項 遺構の概略

検出された土坑は22基を数える。その分布状況は、斜面部に位置するSK-20~22を除き、集落の希薄な部分を埋めるように配置されるもので、縄文期の土坑を想定するならば、東側部分の状況がつかめていないものの集落によって囲まれるように配置されるようにも見える。

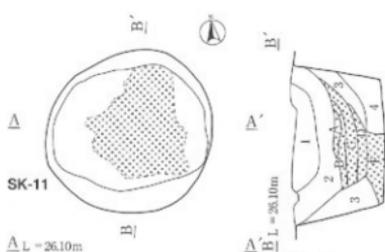
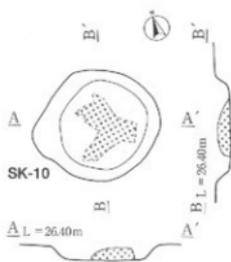
土坑の形状は平面的には円形・楕円形・不整形円形で、断面形状では浅い皿状を呈するものが多い。鍋底状を呈するものではSK-11・12・19の3基がある。

重複関係を見れば、SK-11がSK-9と重複しているが、ほぼ同様の遺物が出土しており、新旧関係は不明である。土坑間の重複ではSK-4とSK-15があるが、やはり新旧関係は不明である。

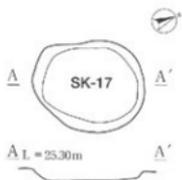
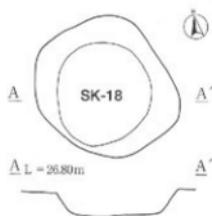
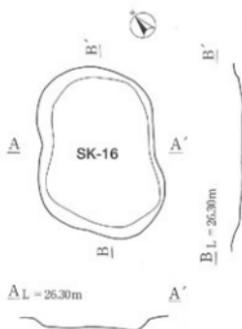
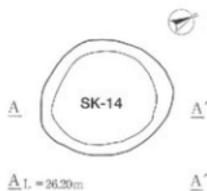
これらの土坑の内SK-1・7・10・11・19~22の8基に於て覆土中に貝の堆積が確認されている。また、SK-13では焼土が確認されている。この他に、小ピットの中に焼土が堆積する遺構としてFP-1~6があるが、これらとは規格的に異なる為に別項で取り扱っている。



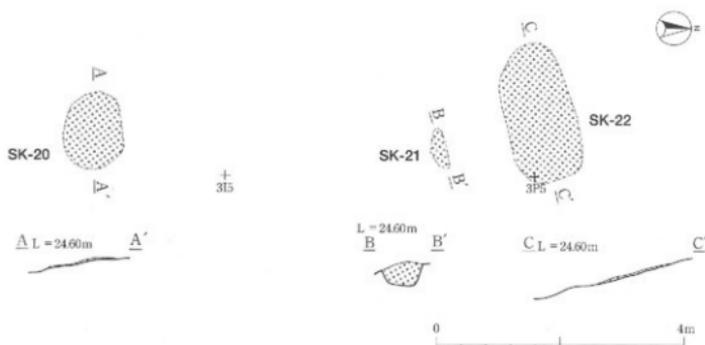
第90圖 SK-1~9・15



- SK-11
1. 輝褐色土、早稲藁、しまりや中強い。
 2. 輝褐色土、早稲藁、しまりや中強い。
 3. 輝褐色土、早稲藁の中強、しまりや中強い。
 4. 輝褐色土、早稲藁の中強、しまりや中強い。
- A. 黄土層、ハマグリを主体とし、シオフキを多く含む。土層は緩斜の土アモシを若干含む。
- B. 黄土層、ハマグリを主体とし、アモシを若干含む。
- C. 黄土層、ハマグリを主体、アモシを若干含む。土層は緩斜の土アモシを若干含む。
- D. 黄土層、輝褐色土の中、少量のハマグリと黒褐色ロームを若干含む。
- E. 黄土層、輝褐色土の中少量の黒褐色ロームと黒炭を含む。



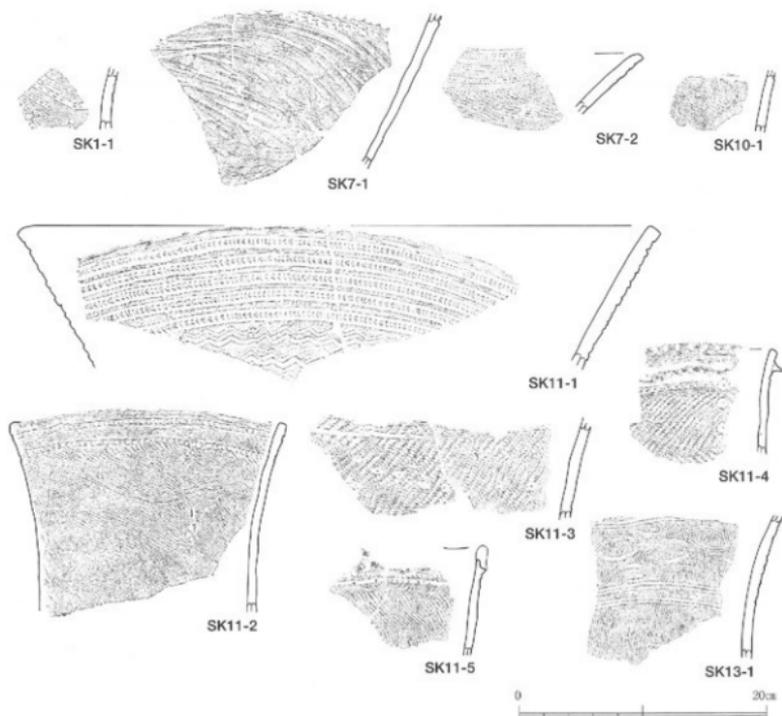
第91図 SK-10~14・16~19



第92図 SK-20・21・22

表134 土坑一覧表

番号	グリッド	長軸方位	平面形	規模 (m) 長軸 × 短軸	深さ (m)	備考
1	2X-36	N-38°-E	楕円形	1.20×0.93	0.10	貝塚
2	3D-11	-	円形	0.86×0.75	0.15	
3	2O-20	N-39°-W	楕円形	1.95×1.19	0.06	
4	3H-29	N-64°-W	楕円形	1.34×1.02	0.24	SK-15と重複
5	3G-28	N-63°-W	楕円形	1.64×1.09	0.09	
6	3F-34	-	円形	0.58×0.46	0.09	
7	2Z-36	-	楕円形?	1.80×1.75	0.05	貝塚
8	2X-26	N-28°-E	楕円形	1.88×1.30	0.12	
9	3D-19	N-6°-W	楕円形	1.30×0.89	0.13	SI-20と重複
10	2W-36	-	円形	1.05×0.90	0.11	貝塚
11	3V-18	-	円形	1.35×1.34	0.65	貝塚
12	3I-23	-	円形	0.94×0.93	0.55	SI-24と重複
13	3P-24	N-68°-E	不整楕円形	2.50×0.81	0.27	焼土あり
14	3F-17	N-24°-E	楕円形	1.09×0.94	0.15	
15	3I-30	N-17°-E	楕円形	1.40×1.00	0.07	
16	3I-29	N-32°-E	楕円形	1.35×0.09	0.08	SK-4重複
17	3O-26	N-17°-E	楕円形	0.90×0.74	0.06	
18	3H-11	-	円形	1.17×1.15	0.22	
19	3N-24	N-42°-W	楕円形	0.40×0.27	0.25	貝塚
20	3C-3	N-89°-W	楕円形	1.27×0.95	0.03	貝塚
21	3E-4	N-73°-E	楕円形	0.57×0.23	0.41	貝塚
22	3J-4	N-77°-E	楕円形	2.30×1.12	0.03	貝塚



第93図 SK-1・7・10・11・13出土遺物

第2項 土坑出土遺物の概略

土坑より検出された遺物は、すべてが縄文土器・貝であり、遺構は縄文期の遺構と判断される。中でも、時期判断が行える資料を出したSK-1・7・10・11・13の5基について掲載している。

SK-1では1点の土器片が出土している。遺物は微量に繊維を混入するもので黒浜期の後半の遺物と判断される。住居跡出土遺物ではSI-9と25に類似する。

SK-7では深鉢胴部下半の大形破片1が出土している。器面には三角連続文が施文され、浮島Ⅲ式に比定される。木遺跡における浮島Ⅲ式の遺構ではSI-18・19の2基がある。2の諸磯a式土器は混入遺物と考えられる。

SK-10の1では貝殻腹線による刺突が施されており、浮島式と判断される。細片の為不明瞭である。

SK-11では5点の土器片が出土している。貝層中からの出土である。1は、浮島Ⅰa又はⅠbであろう。2は諸磯a式、その他は黒浜式期であろう。2～5には地文に縄文が施文されている。

SK-13では浮島Ⅰb式土器の破片が出土している。燃糸を地文にし、平行沈線によるレンズ状の文様を構成させるもので、同様の遺物がSI-16で出土している。

表135 SK-1遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	C爪、円筒胴突、版置織様。	細長織様	良好	暗褐色	黒沢

表136 SK-7遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴下半	三角迷紋文。	砂粒多い	良好	褐色	浮島Ⅱ
2	深鉢口縁	波状口縁。C爪3条。	砂粒多い	良好	暗褐色	黒磯a

表137 SK-10遺物観察表

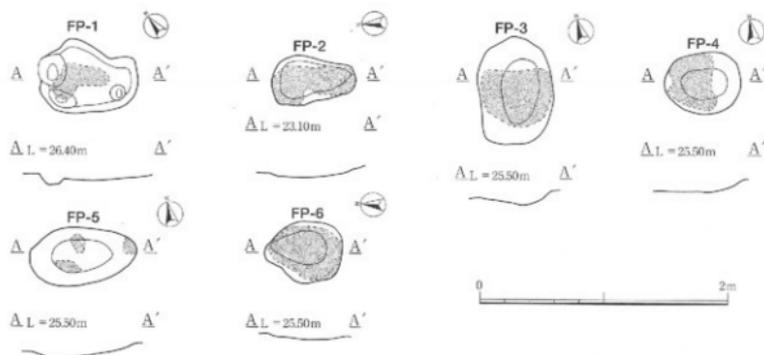
番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	平行沈線・貝紋復様胴突。	砂粒多い	良好	暗褐色	浮島Ⅰa

表138 SK-11遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢口縁	平縁。口縁に沿って5条の爪形列を配し、以下は側面状の平行沈線が連続して施文される。	砂粒普通	良好	褐色	黒磯a
2	深鉢口縁	平縁。口縁に沿って2条の爪形列。以下は単節R1を施文。一部方向を歪ませて施文し羽状となる。	砂粒普通	良好	黒褐色	黒磯a
3	深鉢胴部	平行沈線。円筒胴突。地文は単節L R。	織様混入	良好	暗褐色	黒沢
4	深鉢口縁	平縁。口縁に沿って隆帯が廻りC爪形列が施文される。胴部には円筒が縦方向に連続して施文される。地文は単節L R。	織様混入	良好	暗褐色	黒沢
5	深鉢口縁	平縁。胴部を意図した突起が付される。口縁に沿って隆帯が1条廻りこれに沿って爪形が2条施文される。地文は単節L1。	織様混入	良好	暗褐色	黒沢

表139 SK-13遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部	胴上半には平行沈線による区画内に横四角の支線が充填される。地文は単節a。	砂粒普通	良好	暗褐色	浮島1 b



第94図 FP-1～6

第4節 炉穴

検出された炉穴は6基で、FP-1は台地の中央部に位置するが、その他の調査区の北西側に位置するFP-2と南西側に位置するFP-3～6は、いずれも西側の傾斜地に於て確認されている。住居跡の存跡の可能性は斜面部の山側に壁の立ち上がりが確認できる点より、否定できる。また、所謂条痕文系の土器としては遺構外より縄々島台式土器が、SI-8・19の覆土中及び、30-26グリッドで検出されており、早期末葉の遺構である可能性が高い。

形状は不整楕円形を呈するものが主体で、浅い皿状の掘り込みを有し、覆土中に焼土が堆積している。FP-2～5では少量ながら炭化物を混入しているが、その他には見られない。また火床面の熱による硬質化は認められない。

前項でも述べたが、SK-13は出土遺物に浮島I式土器が出土していることにより、炉穴からは除外しているものの、本節で取り扱った遺構が早期末葉の遺構であるか否かについては不明瞭と言わざるを得ない。

表140 炉穴一覧表

番号	グリッド	平面形	断面形	規模 (m) 長軸 × 短軸	深さ (m)	備 考
1	30-25	不整楕円形	皿状	0.79×0.59	0.10	小ビット3基、焼土は中央に少量。
2	2G-H-9	不整楕円形	皿状	0.68×0.40	0.05	焼土は全体に分布。
3	3K-L-11	不整楕円形	皿状	0.85×0.58	0.08	焼土は中央部分に厚く堆積。
4	3L-11	楕円形	皿状	0.60×0.49	0.07	焼土は西側に遍在する。
5	3N-10-11	楕円形	皿状	0.87×0.47	0.08	焼土は僅かで分散している。
6	3K-10	不整楕円形	皿状	0.63×0.49	0.04	焼土は全体で出土している。

第5節 溝

検出された溝は2条である。いずれも浅い皿状の断面形状で、北東方向から南西方向への走行であり、西側の谷に平行している。SD-1では北東側では調査区域の外まで延びており南西側では確認面では継続を確認できていない。また、SD-2は北東側端部で傾斜地になり消滅している。更に南西側も徐々に浅くなり、SI-25の南側では確認できなかった。断面の形状はいずれも皿状で、SD-1はSI-1・3、SD-2はSI-17・25・27とそれぞれ重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

覆土は暗褐色と褐色の粒子を混入する褐色土を基調にするもので、上層で暗く下層でやや明るい。覆土は粘性に乏しいものややしまりがある。

遺物は覆土中より土師器・縄文土器の細片が出土しているものの、時期を決定付ける資料は出土していない。従って、本遺構はいずれも時期不明である。

表141 溝一覧表

番号	グリッド		走行方向	長さ (m)	断面形	深さ (m)	備 考
	起 点	終 点					
1	2D-58	2J-54	NE→SW	14.8	皿 状	0.20	SI-1・3と重複
2	2T-34	3R-22	NE→SW	24.8	皿 状	0.20	SI-17・25・27と重複

第6節 遺構外出土遺物

本節では遺構外から出土した遺物及び、遺構内出土遺物でも遺構に伴わない流れ込みの遺物について掲載し説明を行うものである。时期的には縄文時代と古墳時代・平安時代の3時期が見られる。

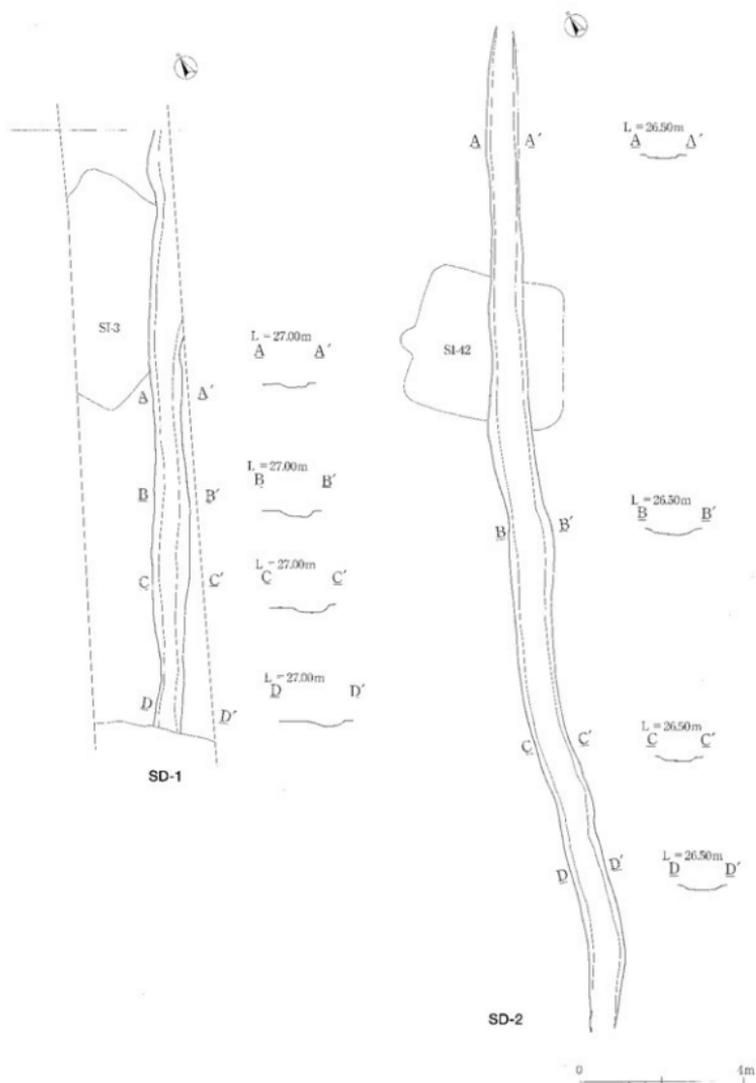
縄文時代

縄文時代の所産と考えられる遺物は土器35点、土製品1点、石器11点である。

土器

1は胴部の細片であるが太い沈線によって区画された内部に、細かな沈線による斜格子文様が充填されるもので早期沈線文系の三戸式に比定される。

2～24は田戸層式土器である。本遺構に於ては田戸下層式土器は2P-41やSI-14の覆土等で検出されており、遺跡の北側斜面部に集中する傾向が見られる。2～12は口縁部の破片で、L1唇部が外割きされ端部が鋭く尖るものが多い。口唇部に刻みを有するもの3・4、L1縁直下の文様は綾杉状の文様構成を行うもの3～7と、縦方向の沈線を施文するもの8～12の双方が見られる。また13～15ではC字の爪形が施文される。18～24は尖底部の破片である。18～23では先端がやや鋭く尖るもので、24では先端部分が僅かながら平坦になっている。また18～20・23・24では端部付近まで沈線による施文が行われ、21・22では無文部になっている。



第95圖 SD-1・2

25～28はアナダラ族の貝殻による条痕文を施文する縄ヶ島土器である。25は口縁部の破片で口唇部には刻みが、また口縁部には微隆帯上に円管の刺突が施される。26～28は口縁直下の隆帯状の段の部分の破片である。段には刻み目状の刺突が施される。また26では沈線の連結部分に円管の刺突が施される。27では25同様の微隆帯による斜方向の文様が描かれ、微隆帯上には円管の刺突が施される。条痕は浅くやや細かく、25を除く内面にも観察される。

30・31は前期黒浜式土器である。胎土中には繊維が混入され、いずれも地文には縄文が施文されるものであるが、30では単節、31では付加条となっている。

29・33は前期浮島Ⅰ式土器である。地文に捺糸が施文され、29では平行沈線による横位の文様が描かれ、33は折り返し口縁で刻み目を有する。

32は地文は見られず浮線と平行沈線による米字模様の幾何学文が施文される。浮島Ⅰ式であろうか。

34は不明棒状の土製品である。先端部は欠損している。全面細かにヘラナデされる。胎土中に砂を多く含む暗褐色を呈することにより、浮島式の所産と判断した。

35は結束羽状縄文及びS字状の結節縄文を横位に施文するもので、中期初頭の遺物と考えられる。

36は棒状の口縁直下に太い沈線による区画帯が設けられるもので、中期加曾利E式に比定される。

石器

本遺跡より出土した石器は極めて少量で、僅かな剥片類を除き大半については図示している。種類には石鏃・楔・磨製石斧・石皿・磨り石・抉状耳飾がある。

石鏃は3点出土している。1・3は側縁が丸みを帯び、2は側縁が外反する三角鏃である。石材はいずれもチャートで、1には表皮が残る。

楔4は自然の円礫の両端に打撃を加えて刃部を作り出している。

磨製石斧5・6は小形の石斧で5は砂岩、6は緑色岩である。いずれも明瞭な定角式磨製石斧とは言えないが断面形はやや偏平な楕円形を呈する。

7は沿石裂の抉状耳飾である。孔は中央に穿たれ切り目の幅はさほど広くはない。断面形はやや蒲鉾形を呈し上面が丸く下側縁は平坦である。側面の研磨は良好である。形状より黒浜期の遺物と考えられる。

8・11は石皿である。いずれも破片で8では両面を使用している。材質はいずれも多孔質安山岩である。

9・10は磨石である。9では両面に凹みが穿たれており凹石としての利用も行われている。材質はいずれも安山岩である。

古代

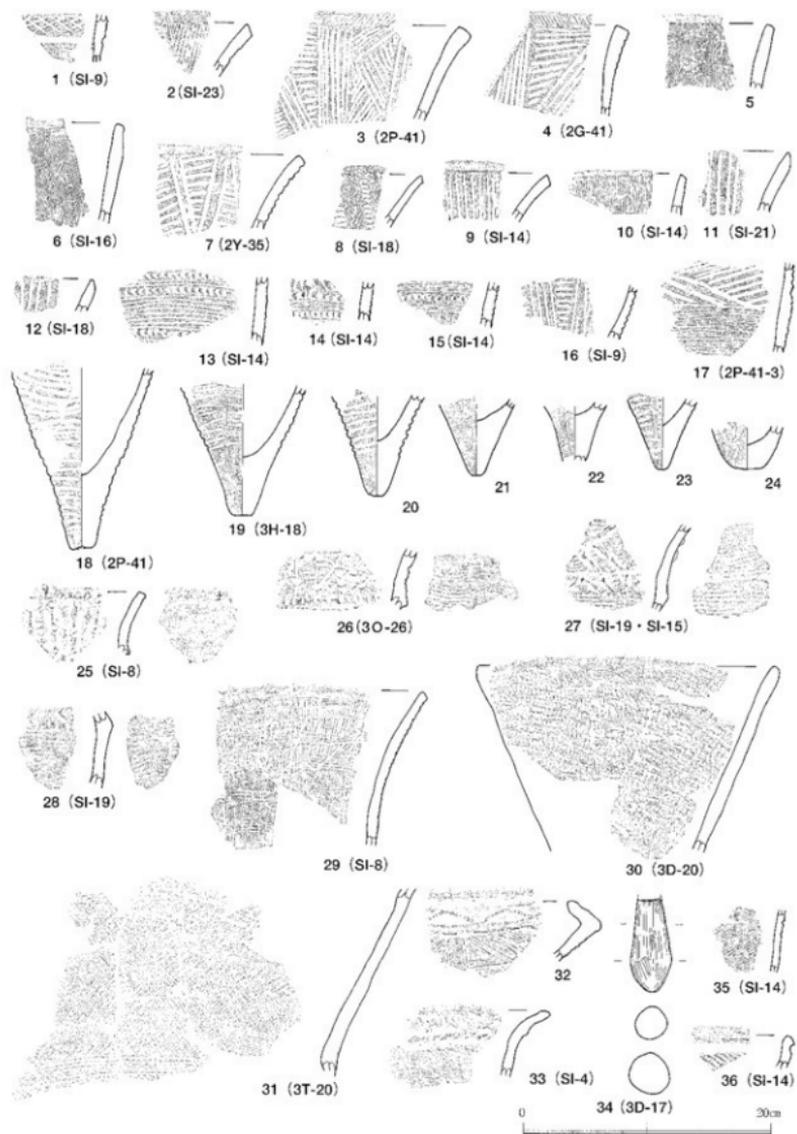
1は須恵器の壺の口縁部破片である。薄くシャープな稜を有す。描文文様は観察されないが、甕の可能性がある。5世紀末より6世紀初頭の遺物であろう。

2は須恵器の長頸壺である。内外共にロクロ整形である。9世紀後半の遺物であろうか。

3は須恵器の高坏脚部の破片である。ヘラにより刻まれる透かしが2カ所に残る。8世紀後半の遺物と考えられる。

4は手捏土器である。小形で底部は丸底を呈する。平底を呈し木葉痕を施すものに比べ後出と考えられるもので、8世紀代の遺物の可能性がある。

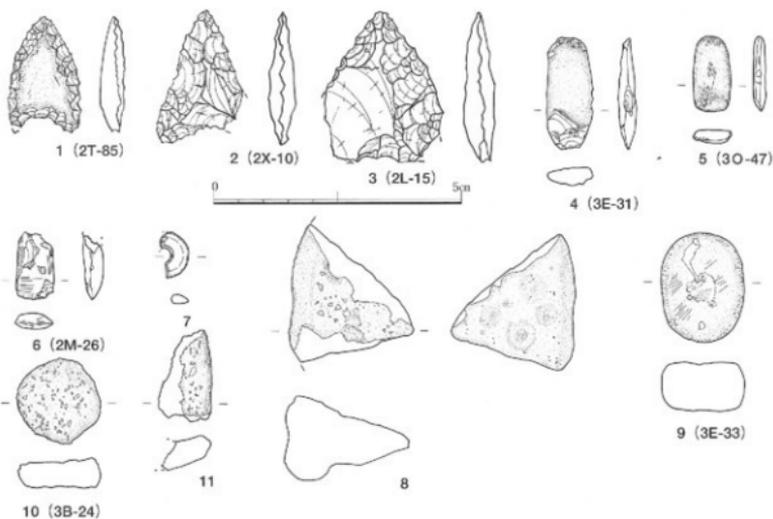
5～9は土甕である。5は大形の管状土甕で、その他は球状の土甕である。



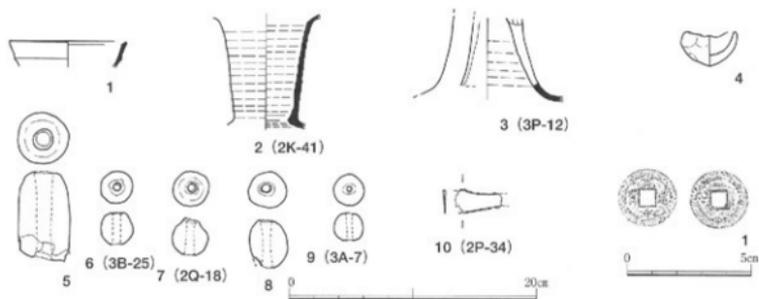
第96図 遺構外出土縄文時代遺物 (1)

表142 遺構外出土縄文土器観察表

番号	器形 遺存度 番号	注記	成・形状の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢胴部 SI-97		太い沈線の区間内を格子目の沈線を突現。	砂粒普通	良好	淡褐色	三芦
2	深鉢口縁 SI-237		外側りの口縁。細い沈線による縞状文様施文。	砂粒普通	良好	赤褐色	川戸下層
3	深鉢口縁 2P-41		平縁。口唇部削み目。太い沈線により縞状文様の施文。	砂粒多い	良好	黄褐色	田戸下層
4	深鉢口縁 2G-41		平縁。口唇部削み目。太い沈線により縞状文様の施文。	砂粒普通	良好	黄褐色	川戸下層
5	深鉢口縁 SI-167		平縁。細い沈線により縞状文様の施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	田戸下層
6	深鉢口縁 SI-167		平縁。細い沈線により縞状文様の施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	田戸下層
7	深鉢口縁 2Y-33		平縁。細い沈線により縞状文様の施文。	砂粒普通	良好	赤褐色	川戸下層
8	深鉢口縁 SI-187		平縁。口唇外削ぎ。細い沈線により縦方向の集合沈線と。横方向の筋み。	砂粒普通	良好	褐色	川戸下層
9	深鉢口縁 SI-147		平縁。口唇外削ぎ。やや太い沈線により縦方向の施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	川戸下層
10	深鉢口縁 SI-147		平縁。口唇外削ぎ。やや細い沈線により縦方向の施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	田戸下層
11	深鉢口縁 SI-217		口唇外削ぎ。やや太い沈線により縦方向の施文。	砂粒普通	良好	褐色	川戸下層
12	深鉢口縁 SI-187		口唇外削ぎ。やや太い沈線により縦方向の施文。	砂粒普通	良好	褐色	田戸下層
13	深鉢胴部 SI-147		細い沈線とC爪の刺突列施文。	砂粒多い	良好	淡褐色	田戸下層
14	深鉢胴部 SI-147		細い沈線とC爪の刺突列施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	川戸下層
15	深鉢胴部 SI-147		細い沈線とC爪の刺突列施文。	砂粒普通	良好	淡褐色	田戸下層
16	深鉢胴部 SI-97		やや細い沈線と横方向の縞沈線の光塊。	砂粒普通	良好	淡褐色	川戸下層
17	深鉢胴部 2P-41		太い沈線による縞状文と横筋のやや細い沈線が施文される。	砂粒多い	良好	淡褐色	田戸下層
18	深鉢尖底 2P-41		太い沈線により渦巻状の文様構成。	砂粒多い	良好	褐色	川戸下層
19	深鉢尖底 3H-18		太い沈線施文。	砂粒普通	良好	褐色	田戸下層
20	深鉢尖底 2P-41		太い沈線施文。	砂粒多い	良好	褐色	川戸下層
21	深鉢尖底 2W-13		無文。	砂粒多い	良好	褐色	川戸下層
22	深鉢尖底 3D-14		無文。	砂粒多い	良好	褐色	田戸下層
23	深鉢尖底 3T-21		太い沈線施文。	砂粒多い	良好	褐色	川戸下層
24	深鉢尖底 2K-37		僅かに先端部分は平縁状を呈する。無文。	砂粒普通	良好	褐色	田戸下層
25	深鉢口縁 SI-87		小突起あり。口唇部削み目。隆帯状に口唇の刺突。	微量繊維	良好	褐色	藪ヶ島台
26	深鉢胴部 3O-36		段あり。隆帯状に削み目。格子状の沈線交点に内管の刺突。内面糸痕。	微量繊維	良好	褐色	藪ヶ島台
27	深鉢胴部 SI-197		段あり。隆帯状に削み目。内外面糸痕。	微量繊維	良好	褐色	藪ヶ島台
28	深鉢胴部 SI-197		段あり。隆帯状に削み目。内外面糸痕。	微量繊維	良好	褐色	藪ヶ島台
29	深鉢口縁 SI-87		平縁。3本1平位の平行沈線を施文。地文は熱系。	粗砂粒多い	良好	淡褐色	洋島Ⅰ
30	浅鉢上半 3D-20		平縁。全面に単線Rしが施文される。	繊維混入	良好	暗褐色	黒浜
31	深鉢胴部上 3T-20		彫らも明部。C爪形による要形文が描かれる。地文は附加染。	繊維混入	良好	淡褐色	黒浜
32	浅鉢口縁 SI-277		くの字に折れる平縁口縁。口縁部には浮線。胴部には集合沈線による幾何学文様が施文される。地文はない。	砂粒多い	良好	明褐色	結城b
33	深鉢口縁 SI-47		折り返し口縁。口縁及び折り返し部分には刺突が通る。胴部は熱系文施文。	砂粒多い	良好	暗褐色	洋島Ⅰ
34	棒状土製品 3D-17		紡錘形に近い棒状で断面は四角を呈す。一端は徐々に細くなり丸く処理される。一方は欠損している。全面ヘラナデにより丁寧に整形される。	砂粒多い	良好	暗褐色	焼成。胎土により表面の遺物と判別される。
35	深鉢胴部 SI-147		単線RとRしの結実型縞文及びS字結節が横列に施文。内面の一部にアナタラ風の只条痕が判別される。	粗砂粒混入	良好	褐色	下野b
36	深鉢口縁 SI-147		太い沈線による区画帯の内部に単線Rしが施文される。	砂粒普通	良好	暗褐色	加賀川Ⅱa



第97図 遺構外出土縄文時代遺物(2)



第98図 遺構外出土古代・歴史時代遺物

第99図 遺構外出土近世遺物

10は刀子の破片である。片方に関が見られるが遺存が悪く明瞭ではない。

近世

本遺跡に於て確認された近世の遺物は1の寛永通宝1点である。本遺物の「通」の右横に直径1mm未満の小孔が穿たれており、佩用されたものと考えられる。

表143 遺構外出土石器観察表

番号	器形 遺存度	検出グ リッド	成・整形の特徴	材質
1	円蓋三角鏃	2T-35	側縁は丸みを帯び、基部の扱りはやや浅い。	チャート
2	凹蓋三角鏃	2X-10	側縁は外反する。基部の扱りはやや浅い。	チャート
3	円蓋三角鏃	2L-15	側縁は丸みを帯びる。基部は僅かに扱られる。複製品の可能性がある。	チャート
4	鏃	3F-31	扁平な川原石の両端に打撃を加え、刃部を設けている。	頁岩
5	磨製石斧	3O-47	明瞭な定角式ではないが両面は長方形に近い楕円形を呈する。やや片刃状である。	砂岩
6	磨製石斧	2M-26	小形の孔楕状石斧である。基部を欠損する。刃部には使用痕が明瞭で表面磨対象。	輝緑石
7	狭状片鏃	A区	両面はやや扁平で、切目の幅は広い。孔は中心より僅かに上方にずれる。磨製良好。	燧石
8	石皿	沢株	破損資料。機能部は薄く減り周縁は高い。背面には孔が4孔穿たれている。	多孔質安山岩
9	凹石・磨石	3F-33	両面は全面磨り減っている。上下両面に僅かながら孔が穿たれている。	安山岩
10	磨石	3O-27	全面に研磨されるが不明瞭。	安山岩
11	石皿	ST-90	全面に良く整形されている。機能部は緩やかに屈伏に彎む。周縁は明瞭。	多孔質安山岩

表144 遺構外出土古代・歴史時代遺物観察表

番号	器形 遺存度	口徑 底径 高さ (cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 壺 口縁破片	- - -	縁を持った後口縁部は開く。ロクロ整形。	細かい	良好	灰色	
2	須恵器 長頸倉 須恵L2	- - -	直立気味に立ち上がった後、口縁部で開く。ロクロ痕が明瞭に残る。	砂粒含む	良好	灰色	
3	須恵器 高坏 脚一部分のみ	- - -	透かしが2か所残る。	砂粒含む	良好	灰色	
4	手捏ね 空形	39 - 28	逆三角形を呈す。作りは拙で、指痕が残る。	石英・雲母を含む	良好	褐色	
5	土製品 上縁一部欠	長さ73cm、幅12cm、孔径17cm、重さ1268g。		雲母・砂粒を少量含む	良好	暗褐色	
6	土製品 球形上縁空形	長さ26cm、幅26cm、孔径0.7cm、重さ173g。		細かい	良好	褐色	
7	土製品 球形上縁空形	長さ31cm、幅29cm、孔径0.9cm、重さ226g。		雲母を少量含む	良好	褐色	
8	土製品 球形上縁空形	長さ39cm、幅29cm、孔径1.0cm、重さ339g。		雲母・砂粒を少量含む	良好	暗褐色	
9	土製品 球形上縁空形	長さ22cm、幅23cm、孔径0.5cm、重さ123g。		細かい	良好	明褐色	
10	鉄製品 刀子一部分のみ	長さ18cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm、重さ4.5g。両部分の断片。					

表145 遺構外出土近世遺物観察表

番号	器形 遺存度	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	寛永通宝	「通」の石版、周縁部分に直径1mm未満の貫通した孔が穿たれている。風雨されたものであろうか				

第2章 科学分析

—中佐倉貝塚出土の貝類について—

小林 園子

中佐倉貝塚から出土した貝類のうち、主に2X-20 (SI-16)、2Z-16 (SI-15)、3L-14 (SI-21)、SK-7、SK-11のサンプル、合計コンテナ32箱について貝類の同定を行った。どのサンプルについても圧倒的にハマグリの出土が多く保存も良好であった。その他の種については、オキシジミガイ、シオフキガイ、アサリ、アカニシ、カガミガイ、マガキ、イタボガキなどが多く出土しているが、その割合については遺構やサンプルによって異なる傾向がある。

分類したサンプル中には獣骨類はなく、サカナの耳骨1点が3L-14で確認されたのみである。

また、ハマグリの中に貝刃3点が出土しているが、それを含めて詳細については別の機会に報告したい。

以下に、種名一覧を掲載する。

中佐倉貝塚貝類種名表

マキガイ綱 (腹足類)

イボキサゴまたはキサゴ
スガイ
ヒロクチカノコガイ
カワニナ
ムカデガイ科の一種 (ヘビガイ類)
ウミナ
イボウミナ
カワアイガイ
フトヘナタリガイ
ツメタガイ
アカニシ
イボニシまたはレイシガイ
アラムシロガイ
キセルガイ科の一種

ニマイガイ綱 (二枚貝類)

アカガイまたはサトウガイ
ハイガイ
サルボウガイ
マガキ
イタボガキ
ヤマトシジミ
ハマグリ
カガミガイ
オキシジミガイ
アサリ
シオフキガイ
ムラサキガイ
マテガイ

Gastropoda

Umbonium (Suchium) moniferum or *Umbonium (Suchium) costatum*
Lunella coronata coreensis
Dostia violacea
Semisulcospira libertina libertina
Vermetidae gen. indet
Batillaria multiformis
Batillaria zonalis
Cerithiopsis djađariensis
Cerithidea rhizophorum rhizophorum
Glossaulax didyma
Rapana venosa venosa
Reishia clavigera or *Reishia bronni*
Reticunassa festiva
Clausilidae gen. indet

Bivalvia

Scapharca broughtoni or *Scapharca satowi*
Tagliarica granosa
Scapharca kagoshimensis
Crassostrea gigas
Ostrea denselamellosa denselamellosa
Corbicula japonica
Meretrix lusoria
Phacosoma japonicum
Cyclina sinensis
Ruditapes philippinarum
Maetra veneriformis
Soletellina diphos
Solen strictus

種名・配列は 波部 忠重 監修『学研生物図鑑 貝・・・改訂版』1990 学研出版社 による

第3章 小 結

本遺跡に於て検出された各時代に於ける遺構・遺物についての年代観は、第1章中に於て述べ、その概要について明らかにした。しかしながら、本報告では遺跡の貝塚という性格を十分に報告する事はできていない。科学分析については現在実施中であり、結果は紙面をあらためて明らかにする予定である。

本章に於ては縄文時代浮島式土器の良好な資料が得られているので、若干の分類を行いまとめとした。

「肋骨文に用いられる文様要素から見た浮島Ⅰ式～Ⅱ式土器の編年試論」

1 はじめに

浮島式土器の名称は1951年に坂輝弥によって発表されている¹⁰⁾。つづいて、西村正衛によって実施された浮島貝ヶ窪貝塚の発掘調査等に代表される、利根川下流域における一連の調査報告によって明らかにされたものである¹¹⁾。その後、井上義安¹²⁾・川崎純徳¹³⁾・和田哲¹⁴⁾・寺門義範¹⁵⁾等によって諸磯式土器との編年対比の論争が行われてきた。筆者も昭和63年に千葉県四街道市吉岡遺跡群軽沢遺跡・金住院遺跡に於て、浮島Ⅰ式土器の良好な資料を調査し報告したおり、諸磯a式土器に浮島Ⅰ式土器が併伴していることを確認し、井上義安の両型式が併行関係にあるとする考えを追認していた¹⁶⁾。

また、平成4年松田光太郎は「古代」93号に発表した「浮島式土器の成立について」で、地文・文様要素・文様構成の細かな細分を行い、浮島Ⅰa式をⅠa式古段階(2期)、Ⅰa式中段階(3期)、Ⅰa式新1段階(4期)、Ⅰa式新2段階(5期)、浮島Ⅰb式を6期と7期の2期に細分している。和田編年の浮島Ⅰ式をa・bに分け、浮島Ⅰa式が諸磯a式に併行し、浮島式のⅠb式は諸磯b式に併行するとする説を基本的に踏襲しながらも、浮島Ⅰa式の末段階(5期)で諸磯b式との併行が開始されるとしている¹⁷⁾。

平成9年度の茨城県教育財団「研究ノート」七号では、浮島Ⅰa式を古段階と新段階の二期に分類している。基本的には松田分類の基準に従い第4期以前を古段階に、5期を新段階に分類したものである。これによれば、浮島Ⅰ式は3期に細分され、さらに浮島Ⅱ式は2期に分類されることになっている。具体的には浮島式の最も古い段階とされる八幡脇遺跡出土遺物と、続く外山遺跡14号住居跡出土遺物をもって、Ⅰa期の古段階と新段階に分けている¹⁸⁾。

本遺跡において検出された浮島式土器の文様要素の中には、従来分類の基準にそぐわない遺物が見られる。さらに、筆者が吉岡遺跡群の中で浮島Ⅰ式として報告した遺物についても、再度検討を加え、先学の編年とも対比しながら本遺跡出土遺物が示す情報について若干の分析・分類を行うものである。

尚、本稿は近年の編年で最も妥当と判断された松田光太郎編年¹⁹⁾に基づいて稿を進める。

2 貝層に伴って検出された浮島式土器

浮島式土器を出土した遺構は住居跡13軒(SI-6・9・11・13・14・15・16・18・19・20・21・22・25)、土坑4基(SK-7・10・11・13)である。これらの内、明瞭に貝層を伴っているものは前述したとおり、SI-15・16・21、SK-11であった(SI-9・13・18は貝層は一部分のみ)。貝層を有する遺構の調査は、覆土を上層より10cm単位で上層・中層・下層・最下層の順に50cm方眼で掘り下げ、純貝層・混貝土層を含めすべてを採集し、基本的に分層調査を実施している。

SI-15

上層より出土したものは16・17、下層出土は1・15である。

施文される地文では5・6・11・16・18の5点がまばらな燃糸である。8・12では波状貝殻文が、14・15では単節縄文LRとS字状結節が施文されている。

文様を構成する要素を見れば、平行沈線に挟まれる壘帯が見られるもの7（隆帯上の刻みはない）、平行沈線のみのも6・7・9・12・16、C字の爪形文によるもの1・3である。変形爪形文が施文されるものでは4・14・15があり、爪形の幅は12mmで広い。刺突文では8・10・15・18に見られ8・10・15では縦方向に、18では横方向の施文になっているが、輪積部分に加えられるもので所謂凹凸文であろうか。

文様は複数の要素が組み合わさって構成されている。弧状の文様が描かれるもの1・3・4・5・7・9・16、肋骨文が描かれるもの8・10・15、鋸歯状の文様が構成されるもの14、C字爪形文と波状平行沈線文が施文されるもの17が見られる。

特徴的な資料としては、14・15がある。これらは別個体であるが、14は4単位波状の口縁で胴部以下を欠損している。地文に単節LR、S字状結節文を有し、口縁部文様帯には変形爪形文による三角形の区画帯が描かれる。又、区画帯の内部には平行沈線の端部を沈線で結んだ長方形の模様で充填されている。15は地文に同様の単節LR、S字結節を有し口縁部文様帯には変形爪形文により区画された内部に、平行沈線によって肋骨文様が描かれ、D字爪形状の刺突列が縦方向に施文される。

従来の編年から考えれば、この文様構成にはいくつかの問題を有している。①変形爪形文と肋骨文の複合であること、②地文が単節縄文であること、及び③変形爪形文の幅が12mm前後と広い点である。尚、SI-16に於ても同様の遺物が出土している。(SI-16-2は15と同一個体の可能性がある。)一方、8では波状貝殻文の地文を有し、肋骨文が描かれている。

これらのことを総合的に判断すれば浮島I b段階に幅広の変形爪形文と肋骨文が共存し、高且地文に単節縄文を施文するという諸磯b式との折衷様式と判断される。また、肋骨文が浮島I b期以降（幅広の変形爪形文の出現段階）までも継続されることになる。

供伴する諸磯式土器では1・13が出土している。1はC字の爪形文による弧状若しくは渦巻状の文様を描くものである。13は口縁部の細片であるが、口唇部に刻み目を有し、直下には浮線による文様が描かれる。いずれも諸磯b式土器である。

分層調査を行ったが、層位的に遺物の差異は顕著ではなく、2等の古い資料を除いても、本住居跡における貝層の廃棄（堆積）は、下層より出土した1より諸磯b式に併行する浮島式I b式期（6期）に行われたものと判断される。

SI-16

上層からの出土は8で、下層からの出土遺物では4がある。

地文は燃糸を施文するものでは3・4・5・10・11・14・15・16・19・20、RL単節縄文を施文するもの26、波状貝殻文27・28、無文7・18・21・23・24、波状貝殻文と燃糸の両方が施文されるもの9がある。

文様の要素では4で4本1単位とする櫛歯状工具による集合沈線、5では円管による刺突文が見られる。その他はSI-15と同様である。

肋骨文を描くものは2・4・6・9で、C字爪形文による区画帯の内部に描かれる2・6・9と平行沈線による区画帯の内部に描かれる4がある。レンズ状の文様では平行沈線によって区画された内部に描かれる

3・5があり、5にはレンズ状の区画内に円管による刺突が充填される。C字爪形文による区画の内部に弧状の文様を描く7、2条のC字爪形文の区画内部に併行沈線による鋸歯状文様を描く27、区画の爪形文が併行沈線に置き変わる11及び14、区画の内部にC字爪形文による菱形の連続模様を施文するもの15・16などがある。

諸磯式土器では1と26の諸磯b式2点が検出されている。一方で5は諸磯a式である。

本住居跡出土資料を従来の編年から見れば、①肋骨文を描く資料に波状貝殻文が施文されること、②諸磯b式土器の大形破片が混在していること、③下層出土の4では櫛歯状工具による肋骨文を描くもので、浮島I a式の可能性が高いこと、④2は層位が明瞭でない為覆土中の出土としたが、SI-15-15と同一個体の可能性があること、等の問題点が上げられる。

これをSI-15と比較すれば、変形爪形文の量が少ないことと、諸磯a段階の資料が混在している点が上げられる。さらに、古式な様相をとどめている4が下層から出土している点を総合すれば、本住居への貝の投棄は諸磯a式に併行する浮島I a式の新1段階(4期)で開始され、諸磯b式に平行する浮島I b式(6期)で終了したと考えられる。

SI-21

層位が確認できている資料は上層では2・17・19、中層では25・26、下層では1・3・11・14・15・16・21である。地文は摺糸を施文するもの1・2・3・4・5・6・8・9・10・12・13・16・23・25・27・28、貝殻腹縁連続刺突7、平行沈線11、単節縄文20、無文15・19・21である。SI-15・16と比較し摺糸の比率が高い。

文様要素では降帯上に刻みを有するものが11・14・26で見られる。また16では有節平行沈線が用いられる。肋骨文を描くものは11・15・16・25・26・27、弧状の文様を描くものは3・4・10・12・25がある。平行沈線又は爪形文により区画された内部に波状若しくは鋸歯状の平行沈線を充填し、縦方向の列点刺突によって肋骨文を構成させるもの26・27がある。

器形では平縁の11縁が多いが10では鋭く尖る4単位であろうか波状11縁となる。

本住居跡出土遺物の組み合わせにもいくつかの従来の編年に比較して問題点がある。①従来の浮島I式の範疇では見られない資料として、刻み目を持つ降帯により縦方向の区画を行い、区画帯内部にはC字爪形文によるレンズ状の文様を充填させ、胴部のみ地文には平行沈線が用いられる11がある。平行沈線による地文は5期以降に見られるものであるが、多段矢羽根状文様を有する1との併存関係が見られる。②鋸歯状文に縦方向のD字刺突列を施し、肋骨文を構成する26・27の併存等の点である。③諸磯b式の混在は見られないが若干の浮島II式以降の資料が混入している。

本住居跡の覆土に混入した浮島II式以降の細片16・17は後の混入と判断される。また黒浜段階より継続される肋骨文15等の併存関係より、本住居跡の貝層は浮島I a式中段階(3期)に開始され、4期以降まで継続された可能性がある。

3 縦方向の文様要素から見た肋骨文の分類

本遺跡出土遺物に見られる肋骨文は、縦区画を行う文様要素から8種類に分ることができる。

A類 櫛歯状の工具によって弧状の集合沈線を描き、棒状の工具の先端部による円形の刺突列(断面は逆円錐形)を縦方向に加え肋骨文を構成するもの。(上弧肋骨文)

SI-25-1・2、SI-18-1

- B類** 横位の平行沈線と、これに対して直角方向の平行沈線を垂下させ肋骨文を構成させるもの。
SI-25-16 (横線肋骨文)
- C類** 斜行する平行沈線と、平行沈線による縦方向の区画線を描き、区画線上に円管による刺突列を加え肋骨文を構成するもの。(斜線肋骨文)
SI-9-2・7・11・12、SI-25-3
- D類** 集合沈線による山形若しくは欠羽根状の文様を描き、縦方向に棒状工具による長楕円形の刺突列(断面形は逆円錐形)を加えるもの。(多段欠羽根状文に縦区画の列点が附加)
SI-16-4
- E類** 平行沈線や爪形文により横位の区画帯を設け、その内部に平行沈線による鋸歯状や弧状の文様を描くもので、更に、半截した棒状工具の端部を斜め方向から突き刺し、端部に粘土のめくり上がりが見られるD字状の刺突列を、縦方向に1列若しくは2列施文し、肋骨文を構成するもの。(横線文・多段波状文に縦区画の刺突列附加)
SI-13-2、SI-15-15、SI-16-2、SI-21-25・26・27、SI-22-2・3・4・8
- F類** 斜行する平行沈線に縦方向のC字爪形文を垂下させ、肋骨文を構成するもの。(斜線肋骨文)
SI-16-6・9
- G類** 刻み目を有する降帯によって縦方向の区画帯を有するもので、区画内に充填される爪形によるレンズ状文様で肋骨文を構成させている。(木葉肋骨文に近い)
SI-21-11
- H類** 平行沈線に対して直角方向に楕円形の刺突列(断面円錐形)を施文し肋骨文を構成するもの。(横線文に縦区画の刺突列附加)
SI-15-8・10

A・B類は、SI-25において横線を混入する土器群との供伴関係が認められており、黒浜式から続く諸磯a式の文様要素に見られるものである。(～4期)

C類は諸磯a式の波頂部より垂下する円管の刺突列に見られる文様要素に共通し、A・B類と同様諸磯a式に併行するものと考えられる。(～4期)

D類はSI-16-4の1点で、同住居跡の下層より出土している。手法的に集合沈線は諸磯a式からの系譜と考える事ができるものであるが、棒状工具による刺突という点から見ればE類にも類似する。層位よりE類に先行するもので、諸磯b式併行段階までは継続しないものと考えられる。(～4期)

E類はSI-21で諸磯a式と供伴関係があり、さらにSI-15・16では諸磯b式との供伴関係が確認されているものである。出土頻度はSI-21で最も多く、SI-15・16では減少傾向にある(～5期)

F類はSI-16-9で波状貝殻文の地文が見られる。浮島Ib式段階の可能性が考えられる。(5期～)

G類はSI-21から出土したものである。地文に平行沈線を配し、爪形文に併走する刻み目を有する降帯をもって長方形の区画帯を作るものである。SI-21ではE類との供伴関係が認められる。(5期～)

H類はSI-15からの出土である。E類同様諸磯b式との供伴が認められる。(5期～)

4 まとめ

貝塚中出土遺物の分析の結果、諸磯a式及び浮島I a式の文様の特徴とされる肋骨文は、諸磯b式期においてはその姿を消すものの、併行する浮島I b式段階では継続的に用いられた状況が窺える。従って、浮島I a式の特徴とされる肋骨文は浮島I a式のみの特徴とはなり得ず、浮島式の中の肋骨文の変遷を再検討する必要性が生じたと言える。

本遺跡出土遺物の分析より、浮島式と諸磯式の編年対比については、諸磯a式の特徴とされる、肋骨文と口縁直下に付される刻みを有する隆帯が、浮島I b式段階（5期）以降まで継続する事に混迷の原因があることが予想される。この事は、浮島式土器がその初期段階においては諸磯a式の影響下若しくは、同系統を源にしたものが、浮島I b式段階より徐々に諸磯文化とは異なった独自の文様構成を展開していくことを示すもので、浮島式の諸磯式との明瞭な分化は諸磯b式併行の浮島I b式段階であったと想定できる。

さらに、過去において筆者が行った吉岡遺跡群の調査報告時点において、浮島式土器と諸磯式土器の併行関係について導いた結論は、諸磯a式土器の特徴が浮島式の土器にどのように取り込まれ、継続・展開していったかが判断できなかった為の誤認であった。軽沢遺跡10号住居跡出土の1・3の遺物に見られる、肋骨文様を構成する刺突は、斜め上方及び下方からの刺突で、本遺跡出土のE類に相当している。これは、4期・5期に併行する事になる。さらに、同住居跡4・5・6の口縁直下の刻み目を有する土器群は、諸磯a式に見られるものでありながら諸磯b式占段階まで継続するもので、浮島I b式土器の範疇で捉えなければならないと考える¹⁸⁾。

近年発表された研究ノート七号では浮島I a式の細分基準を肋骨文（縦区画の円形刺突列）の存否をもって浮島I a式の占段階に含め、縦区画の消滅したものを同新段階に組み入れている。これについては、本遺跡の資料を持って判断すれば分類の基準は誤りと言わざるを得ない¹⁹⁾。

さらに、浮島I a式の新段階に含められる外山14号住居跡出土遺物はレンズ状の文様構成を行うものであるが、本遺跡出土SI-16-3と口縁部に刻み目を有するか否かの違いはあるものの、文様の構成等でほぼ一致する資料である。同住居跡では浮島I b式に併行する諸磯b式古式段階資料の伴出が確認されている。従って、外山遺跡出土遺物は5期に含まれるものであり、八幡脇類（3期）に続く遺物としては中間を埋める4期の資料が欠落している。本遺跡出土のSI-21出土資料がこれを埋めるものと考えられる。

浮島式土器の編年は、変形爪形文と地文の燃糸文や波状貝殻文・三角連続文等を代表とする特徴的な文様要素によって組み立てられているが、地文の種類を含めその組み合わせは複雑である。より明確な層位的な調査事例の増加と共に、文様要素の更なる分析が、明瞭な編年の確立につながるものとする。本遺跡に於ける浮島式土器には、地文に燃糸文を多用する土器に幅広い変形爪形文が見られたり、肋骨文を構成する遺物の地文に波状貝殻文が施文されていたりしている。本論では、この肋骨文に視点を置いて従来の編年について検討を加えてみた。今後の該期の研究に新たな展開を示唆する格好の資料であると思う。

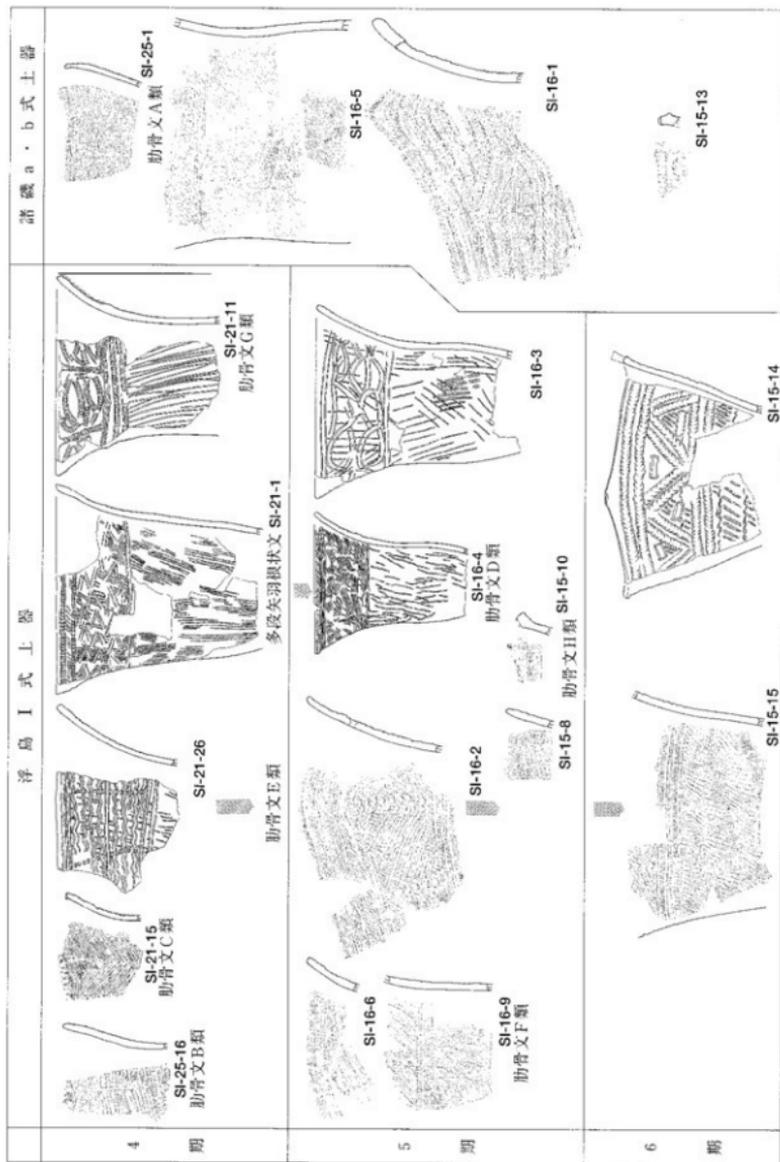
(註)

- (1) 江坂輝弥 「縄文文化について」『歴史評論』32 1951
- (2) 西村正徳 「千葉県市川市四分東練兵場」『塚』『学術研究』10 早稲田大学教育学部 1961
「茨城県稲敷郡浮島」『ヶ窪貝塚』『学術研究』15 早稲田大学教育学部 1966
「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚」『学術研究』16 早稲田大学教育学部 1967
- (3) 井上義安 「浮島I式土器の編年に関する問題」『古代文化』22-4 1970

- 〔那珂湊市富士ノ上遺跡〕〔那珂川の先史遺跡〕 2 1968
- (4) 川崎純徳 『茨城県八幡舘遺跡調査報告』 1967
- (5) 和田 哲 『浮島系土器の諸問題』〔古和田台遺跡〕 1973
- (6) 寺門義寛 『茨城県所作貝塚発掘調査報告書』 茨ヶ浦文化研究会 1975
- (7) 大賀 健 『古岡遺跡群』山武考古学研究所 1986
- (8) 松田光太郎 『浮島式土器の研究史-その1』『週報』8 早稲田大学大学院文研考古談話会 1990
『浮島式土器の研究史-その2』『週報』10 早稲田大学大学院文研考古談話会 1992
『浮島式土器の成立について』-東関東における縄文時代前期後半の上器文様の伝統-
『古代』93号 早稲田大学考古学会 1992
『浮島式土器の研究』『古代探義』IV 早稲田大学考古学会 1995
- (9) 縄文時代研究班 『茨城県内における浮島式土器の検討①』『研究ノート』6号茨城県教育財団 1997
縄文時代研究班 『茨城県内における浮島式土器の検討②』『研究ノート』7号茨城県教育財団 1997
- 08 松田光太郎 註⑧と同
- 09 ここでは縦方向の刺突列による区画についても同系統として肋骨文の中にも含めている。
- 09 松田光太郎は肋骨文の分類を葉脈文・斜線肋骨文・米字文・木葉動骨文・上弧肋骨文・下弧肋骨文・横線肋骨文・菱形肋骨文・三角肋骨文・流水動骨文・流水文・横線肋骨文・連結木葉文・分離木葉文等に分類しているが、波状文に附加される縦区画の刺突列については肋骨文の範疇では捉えていない。また、肋骨文の消長については、2期（浮島Ⅰa式の古い段階）より木葉動骨文が見られ、流水動骨文は7期（浮島Ⅰb段階）まで残るとしている。
- 09 松田は軒沢10号住居跡を5期に分類している。
- 09 前述のとおり円形刺突には棒状・円管・C字・D字等が見られ、変形爪形文との相伴が確認されている。また、松田は縦区画の刺突列を交互波状文、多段波状文とし、2期（諸磯a式古段階）から7期（諸磯b式中1段階）までの広い時間で捉えている。これは肋骨文の消長の期間と一致している。

表146 浮島式・諸磯式対比表（松田編年1992）

1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	6 期	7 期
黒浜式 新段階	浮島Ⅰa式 古段階	浮島Ⅰa式 中段階	浮島Ⅰa式 新1段階	浮島Ⅰa式 新2段階	浮島Ⅰb式	
黒浜式 新段階	諸磯a式 古段階	諸磯a式 中段階	諸磯a式 新段階	諸磯b式 古1段階	諸磯b式 古2段階	諸磯b式 中1段階



第100図 助骨文から見た浮島式と諸磯式の対比



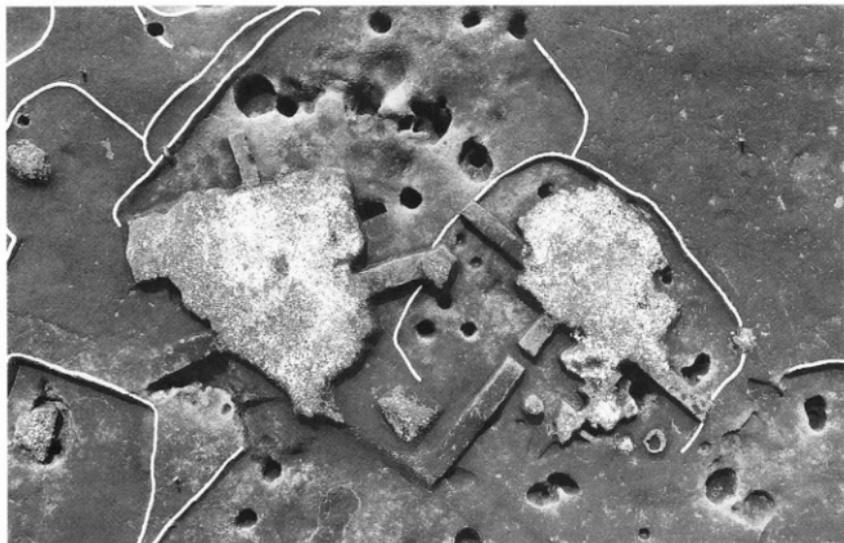
1. 調査区全景（東に霞ヶ浦を含む）



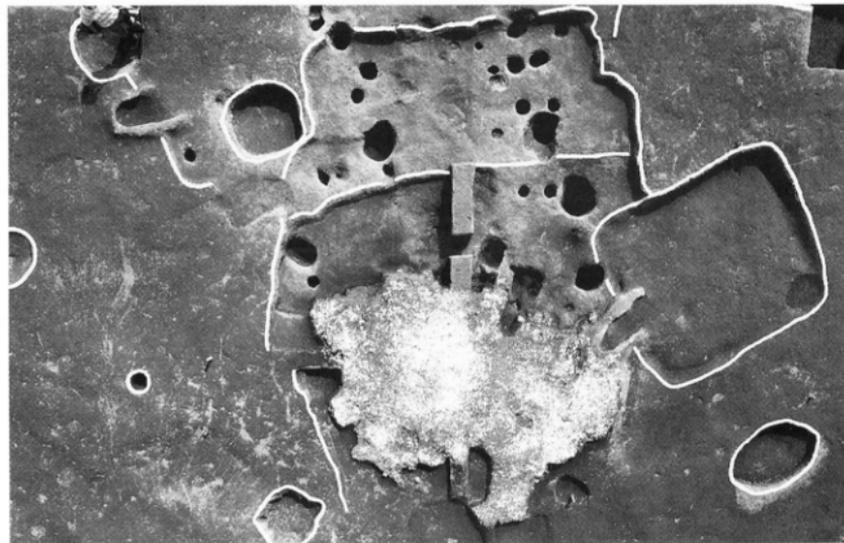
2. 調査区全景

中佐倉貝塚

図
版
41



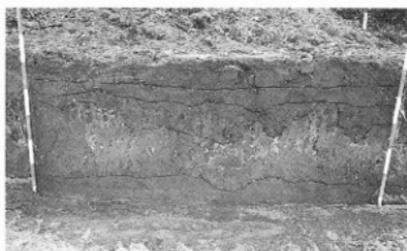
1. S I-15・16貝塚



2. S I-21貝塚



1. 標準堆積土層



2. 同



3. 遺構確認状況 (SD-2 付近)



4. 同 (SK-10 付近)



5. 同 (SD-2 付近)



6. 同 (SD-1 付近)



7. SD-1 付近



8. 3 P-13 グリッド遺物出土状況

中佐倉貝塚

図版
43



1. SI-1



2. 同遺物出土状況



3. SI-2



4. SI-3



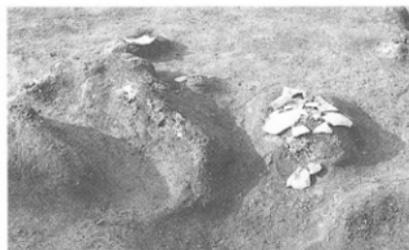
5. SI-4・5



6. SI-7



7. 同 カマド遺物出土状況



8. 同 遺物出土状況



1. SI-8



2. 同 カマド遺物出土状況



3. 同 貯蔵穴



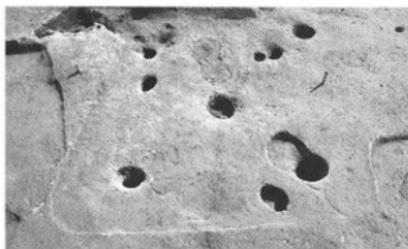
4. SI-9 遺物出土状況



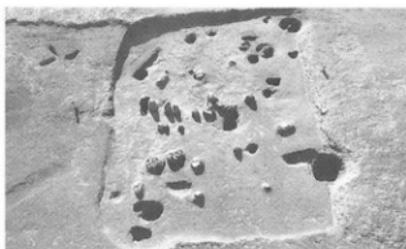
5. SI-12遺物出土状況



6. 同 カマド遺物出土状況



7. SI-14



8. 同 遺物出土状況

中佐倉貝塚



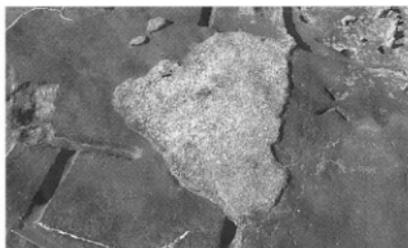
1. S I -14炉



2. 同 遺物出土状況



3. S I -15



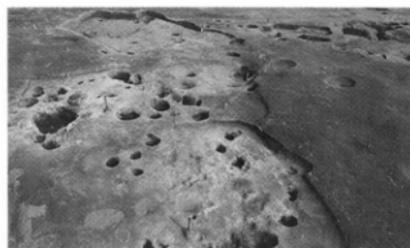
4. 同 貝塚調査前



5. 同 調査状況



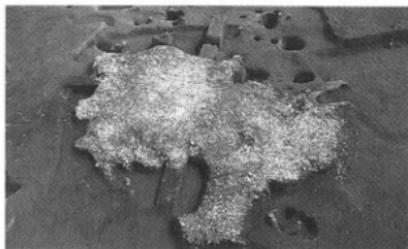
6. 同 セクション



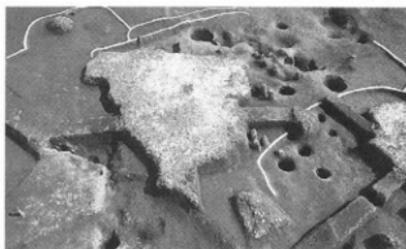
7. S I -16



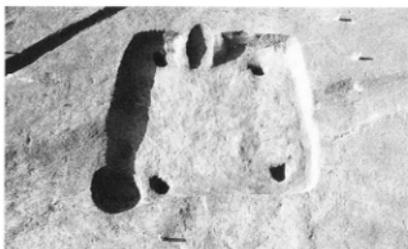
8. 同 貝塚調査前



1. S I-16貝塚



2. 同



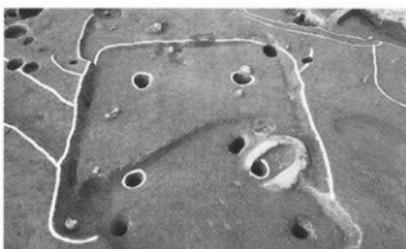
3. S I-17



4. 同 カマド遺物出土状況



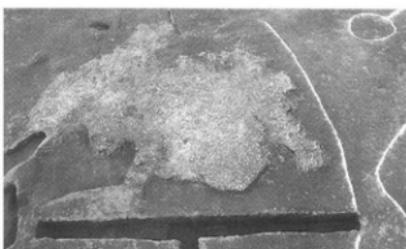
5. 同 貯蔵穴



6. S I-18・19・27



7. S I-21



8. 同 貝塚調査前

中佐倉貝塚



1. S I-21貝塚



2. 同 貝塚セクション



3. 同



4. 同 遺物出土状況



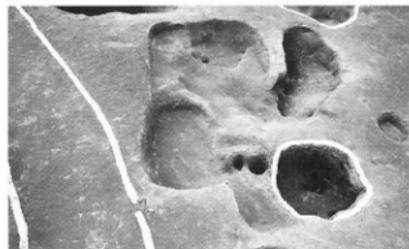
5. 同



6. 同



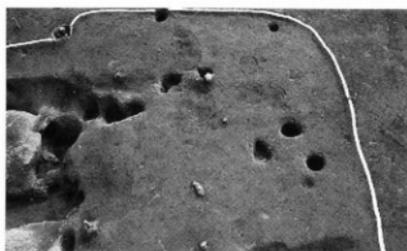
7. S I-22・29



8. S I-24



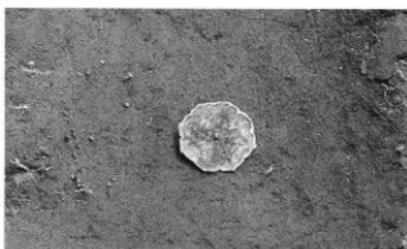
1. S I-25



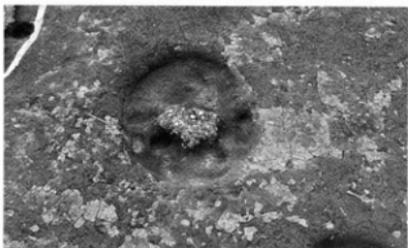
2. 同 遺物出土状況



3. S I-26東カマド



4. 同 和鏡出土状況



5. SK-1 遺物出土状況



6. SK-4・5・15



7. SK-5



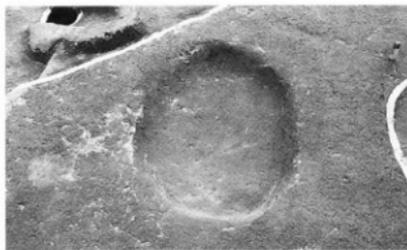
8. SK-6

中佐倉貝塚

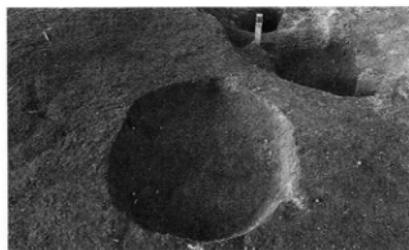
図
版
49



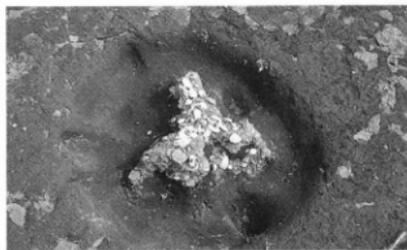
1. SK-7 遺物出土状況



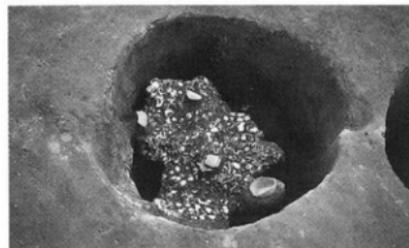
2. SK-8



3. SK-9



4. SK-10 遺物出土状況



5. SK-11 遺物出土状況



6. P-1



7. SD-1



8. SD-2



SI 1-1



SI 1-3



SI 3-1



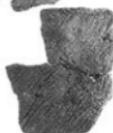
SI 3-3



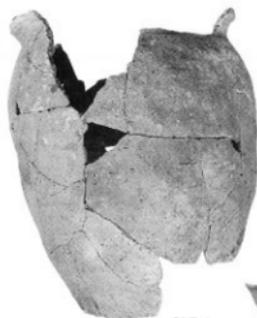
SI 6-1



SI 6-3



SI 6-2



SI 7-1



SI 7-2



SI 7-3



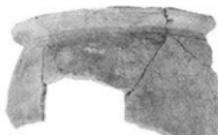
SI 7-7



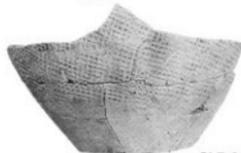
SI 7-11



SI 7-10



SI 7-4



SI 7-9



SI 7-13



SI 8-1



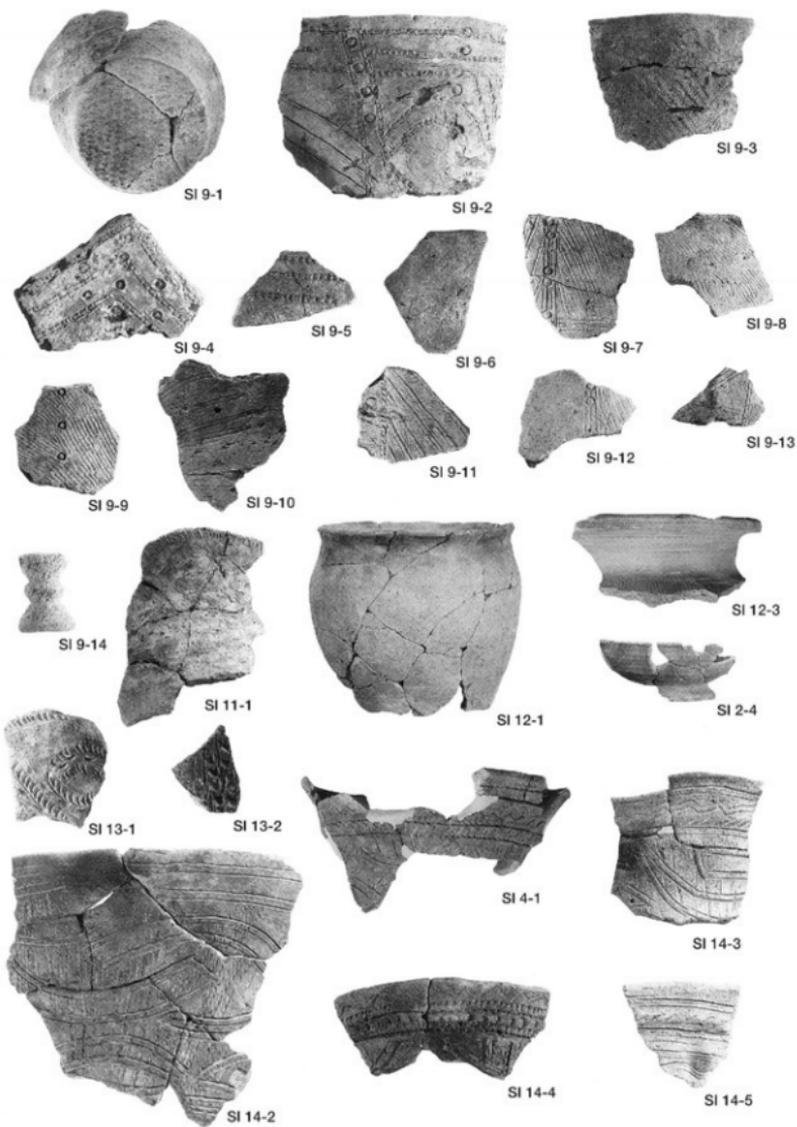
SI 8-2



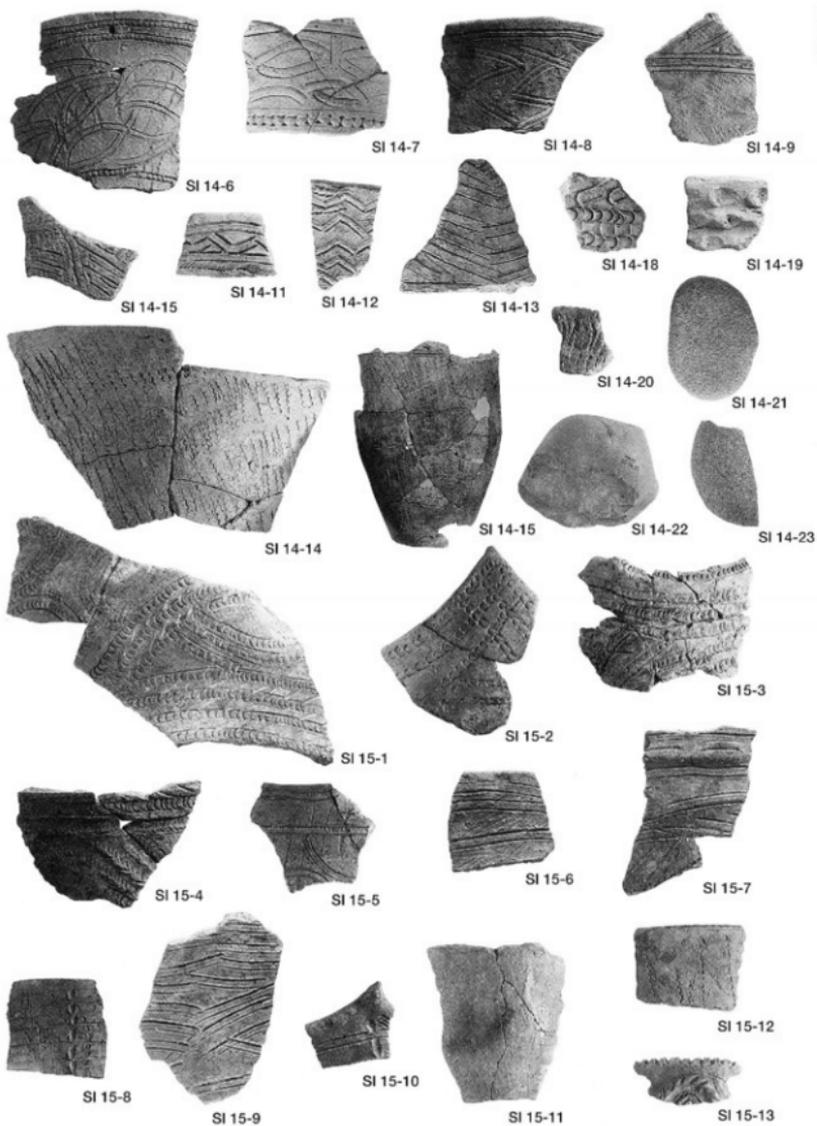
SI 8-3

中佐倉貝塚

図版
51



SI-9・11~14出土遺物



SI 14・15出土遺物

中佐倉貝塚

図
版
53



SI 15-14



SI 15-15



SI 15-17



SI 15-16



SI 15-18



SI 15-19



SI 16-1



SI 16-2



SI 16-3



SI 16-4



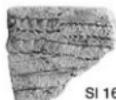
SI 16-5



SI 16-6



SI 16-7



SI 16-8



SI 16-12

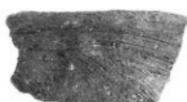


SI 16-13

SI 15・16出土遺物



SI 16-9



SI 16-10



SI 16-11



SI 16-14



SI 16-15



SI 16-16



SI 16-17



SI 16-18



SI 16-19



SI 16-20



SI 16-27



SI 16-28



SI 17-8



SI 17-13



SI 17-14



SI 16-25



SI 16-26



SI 18-1



SI 18-2



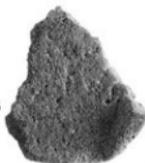
SI 18-3



SI 18-4



SI 18-5



SI 18-6



SI 19-1



SI 19-2



SI 20-1



SI 20-2



SI 20-3



SI 20-4



SI 21-1

中佐倉貝塚



SI 21-2



SI 21-3



SI 21-4



SI 21-5



SI 21-6



SI 21-7



SI 21-8



SI 21-11



SI 21-9



SI 21-10①



SI 21-10②



SI 21-13



SI 21-15



SI 21-17



SI 21-12



SI 21-14



SI 21-16



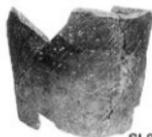
SI 21-18



SI 21-25



SI 21-26

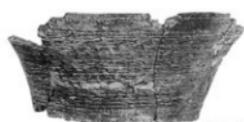


SI 21-28

SI 21-29



SI 21-27



SI 22-1



SI 22-2



SI 22-3



SI 22-4



SI 22-5



SI 22-6



SI 22-7



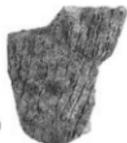
SI 22-8



SI 22-9



SI 22-10



SI 22-11



SI 22-12



SI 22-13



SI 22-14



SI 22-15



SI 22-16



SI 22-17



SI 25-1



SI 25-2



SI 25-3



SI 25-4



SI 25-5



SI 25-6



SI 25-7



SI 25-8



SI 25-9



SI 25-13



SI 25-14



SI 25-10



SI 25-11



SI 25-12



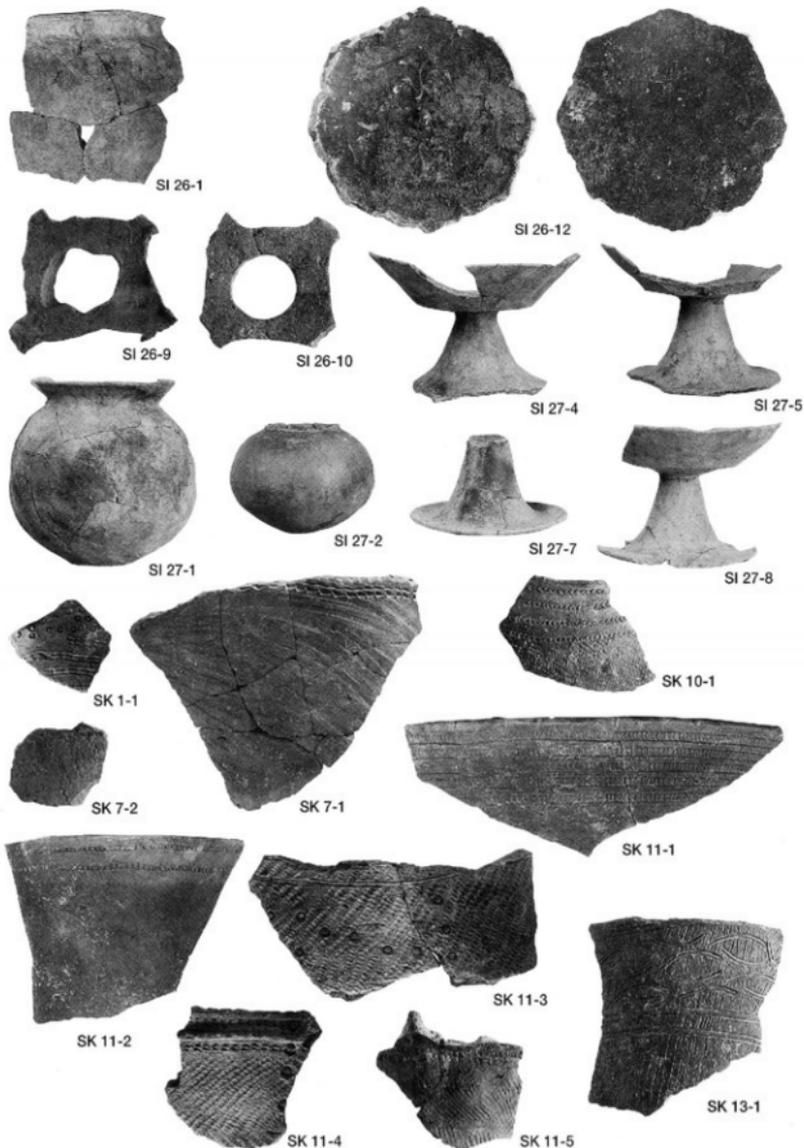
SI 25-15



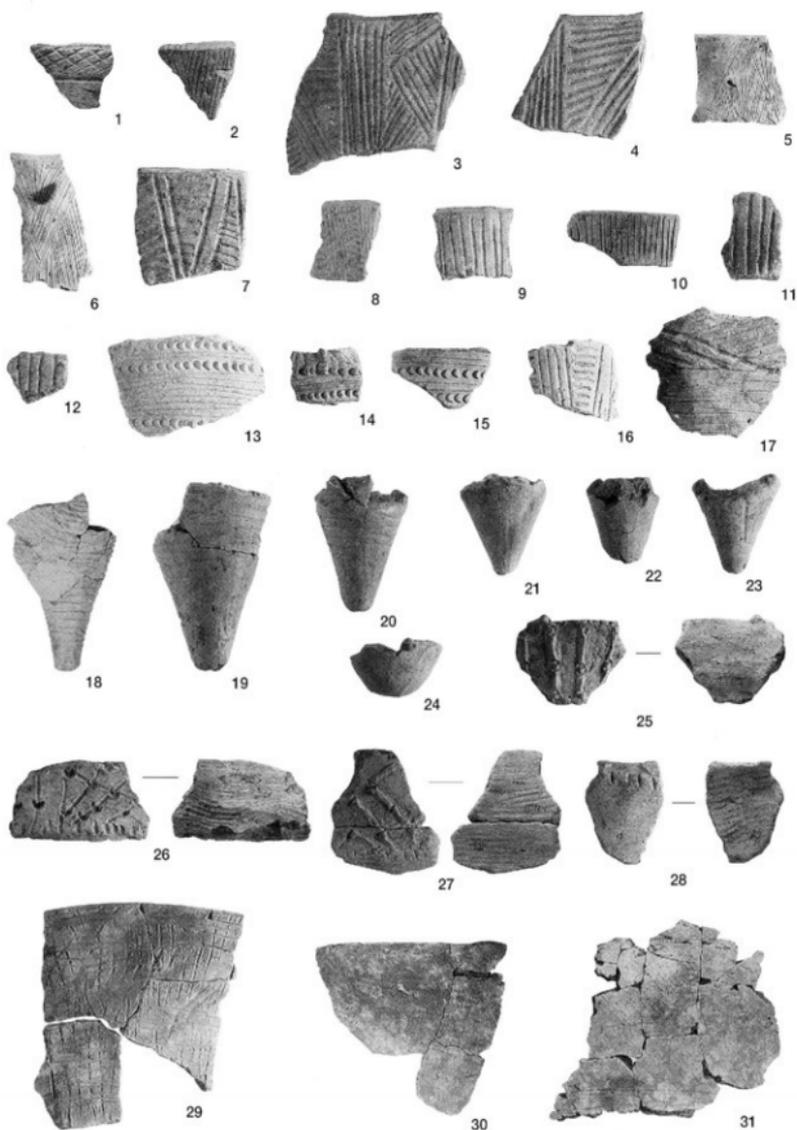
SI 25-16

中佐倉貝塚

図版
57



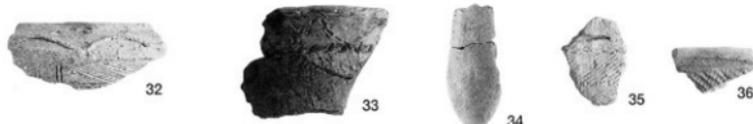
S I - 26 ・ 27、S K - 1 ・ 7 ・ 10 ・ 11 ・ 13出土遺物



遺構外出土遺物(1)

中佐倉貝塚

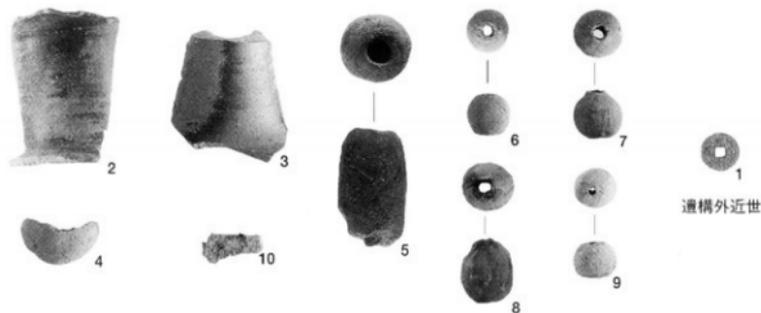
図版
59



遺構外縄文



遺構外石器



遺構外近世

遺構外古代



馬の骨・歯

V ま と め

遺跡内出土古墳時代～平安時代の土器

1 はじめに

秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚の3遺跡の調査に於て得られた遺物は膨大な量であった。これらの遺物については、本来、すべてについて掲載するべきであるが、報告書の紙面の都合もあり、出土した遺物の全量を掲載することは不可能であった。そこで、遺跡の情報を最大限に伝える方法として、出土遺物の模式一覧表を掲載することにした。模式図の製作は以下の方法によった。

- ①まず、検出されたすべての遺物を住居跡・土坑・その他の遺構に分けて水洗い・接合を行った後、各遺跡の遺構毎の出土遺物の概略図（スケッチ）を作成し遺物組成を把握した。
- ②次に、遺物の組み合わせが良好な遺構を選出し、それらの遺構出土遺物について実測図を作成し、本書のⅡ～Ⅳで各遺跡に於ける特徴的な遺物の実測図を通常通り掲載した。
- ③更に、遺物を時期別・器形別・形状（破損の度合い）別に分類し、3遺跡に於ける遺物の分類基準を作成し、その分類基準を基に、実測図を作成できなかった遺構出土の遺物についても分類した。その表記については、しばしば他の報告で見られるようなローマ字や算用数字による表記のみではなく、表147～170分類基準表に従って代表遺物の実測図の8分の1の縮尺をもって模式図化した。（口縁部のみ、胴部上半まで、下半まで、底部のみ等破損状況も加味して記号化している。）
尚、スケッチは大野知子氏によるものを基にして、分類は大賀・大野の両名の合議によった。

2 分類の基準

分類は大きく須恵器と土師器に分け、更に器形別に分類を行っている。尚、灰釉陶器は中佐倉貝塚SI-07より瓶（壺B）が出土しているが、全遺跡でこの1点のみの出土であった為に、須恵器の形状に合わせて分類している。

土師器 壺（表147～151）

土師器の壺はA～Kの11類に分類し、さらに各類毎に細別を行っている。

A類は口縁が「く」の字に外反するもので、胴部の最大径を下半に有するもの、中央部に有するもの、上半部に有するものの3種類に分けた。

B類は口縁が「く」の字に外反した後、口唇部直下で更に外反するものである。A類同様胴部最大径の位置により2種類に分けた。

C類は口縁が「コ」の字に外反するものである。胴部が大きく張り、最大径を中位に有するものと、上半部に有するもの、更に胴部の張りが弱いものの3種類に分けた。

D類は口縁が緩やかなC字に外反するものである。胴部が球形を呈し最大径を中位に有するもの、上位に有するもの、長胴壺となるもの、口唇部が折り返され丘状が施されるものの5種類に分けた。

E類は口縁は緩やかに外反し頸部直下に稜を有するものである。口縁の幅が広く胴部が球形を呈し最大径を中位に持つもの、上位に持つもの、口縁部の幅が狭く胴部が球形を呈するもの、胴部が張らないものの4種類に分けている。

D類は口縁部の幅が狭く、括れが弱いものである。底部の径が狭いものと、広いものの2種類に分けた。

G類は口縁部の幅が広く頸部の括れが弱いもので1種類のみである。

H類は口縁部の幅が広く直立するものである。底径の狭いものと、広いものの2種類に分けた。

I類は口縁部が短く明瞭に「く」の字に外反するもので胴部の最大径は口縁部径とほぼ等しい。口唇部が丸みを帯びるもの、口唇部が面取されるもの、口唇部の端部が積み上げられるもの、つまみ上げられた上に面取されるものの4種類に分けられる。

J類は大形の常総甕で、胴部の最大径を中位に有するものである。口縁部の積み上げが明瞭なものと不明瞭なものの2種類に分けられる。

K類は常総甕で、胴部の最大径を上位に有するものである。大形のもので口唇部が積み上げが明瞭なものと不明瞭なもの、中形のもので口唇部の積み上げが明瞭なものと不明瞭なもの、小形のもの5種類に分けた。

土師器 甌 (表152)

検出された土師器の甌はすべて半孔の甌である。把手の有無によりA・B類の2種類に分類し、更に細別した。

A類は胴部に半角状の把手は付されないものである。胴部の形状が直線的なもの、やや緩やかに膨らむもの、最大径を下半部に有するものの3種類に分けられる。

B類は半角状の把手を有するもので、胴部の最大径を胴中位に有するものと、口縁部に最大径を有するものと双方が見られるが、把手のみの資料が多く、器形のわかる資料が少なく細分は行っていない。

土師器 壺 (表153)

検出された土師器壺は形状よりA・B・C類の3種に分類した。

A類は胴部が球形を呈するもので頸部に沈線による文様やぼたん状の貼り付けが付きされるものである。検出された遺物に口縁部の形状を窺えるものはない。

B類は複合口縁となる資料であるA類の口縁部となる可能性もある。

C類は口縁部が緩やかに外反するもので、口縁部のみに赤彩を施されるものもある。

土師器 埴 (表154)

形状よりA・Bの2種類に分類し、Bは更に2種類に分けた。

A類は大形の埴で胴部が球形で、底部はヘラによる削り出しによって小形の上げ底気味の平底となる。

B類は小形の埴で、口縁が外反し底部は輪台整形の上げ底となるものと、口縁が内湾するもので小形の上げ底となるものの2種類に分けられる。

土師器 甕 (表155)

1種類のみ出土であった。

口縁が大きく外反するもので、胴部最大径を上半部に有し、やや肩寄りに孔が穿たれる。

土師器 高坪 (表156・157)

形状より4種類に分類した。

A類は坪部に稜を有し、長い筒状の脚部を有するものである。

表147 遺物分類表 土師器 甕 (1)

分類	器形の特徴	成・整形の特徴	模 式 図
A 1	口縁は短く明瞭に「<」の字に外反する。 胴部は球形を呈し、最大径は中位に有する。 器厚はやや薄い。 口縁部内面の内縁は明瞭である。	外面 口縁はヨコナテ胴部は刷毛による整形の後胴部中位以下はヘラケズリが行われる。 内面 口縁部は刷毛整形調部はヘラナテ。	
A 2	口縁は短く明瞭に「<」の字に外反する。 胴部は球形を呈し、最大径を下位に有する。 器厚は普通である。 口縁部内面の内縁は明瞭である。	外面 口縁はヨコナテ胴部はヘラケズリの後ナテ。 内面 口縁部はヨコナテ。胴部はヘラナテ。	
A 3	口縁部は幅広く明瞭に「<」の字に外反する。 胴部は球形を呈し、最大径を中位に有する。 器厚は普通。 口縁部内面の内縁は明瞭である。	外面 口縁はヨコナテ胴部はヘラケズリの後ナテ。 内面 口縁部はヨコナテ。胴部はヘラナテ。	
B 1	口縁部は幅広く大きく「<」の字に外反し、口蓋直下でさらに大きく開く。胴部は球形を呈し、最大径を下位に有する。 器厚は普通。 口縁部内面の内縁は明瞭である。 底部がやや上げ底のものが見られる。	外面 ヘラケズリの後ナテ。口縁部ヨコナテ。 内面 口縁部はヨコナテ。胴部ナテ。	
B 2	口縁部は幅広く大きく「<」の字に外反し、口蓋直下でさらに大きく開く。 底部は平底で、胴部は球形を呈し中位で大きく張る。	外面 ヘラケズリの後ナテ。口縁部はヨコナテ。胴部の遺物には胴部に刷毛整形が施されるもの、輪縁の痕を残すものもある。 内面 口縁部はヨコナテ。内面はヘラナテ。	
C 1	口縁部は幅広く、緩やかな「コ」の字に外反する。胴部は球形を呈す。 口縁部に泥輪が覆るもの、底部がやや上げ底になるものなどが見られる。	外面 ヘラケズリの後ナテ。口縁部はヨコナテ。 内面 口縁部はヨコナテ。胴部はヘラナテ。一部の遺物には内面に輪縁を残すものがある。 模式図	

表148 遺物分類表 土師器 甕 (2)

分類	器形の特徴	胎・成形の特徴	模 式 図
C2	口縁部は幅広く、緩やかな「コ」の字に外反する。胴部は球形を呈し、最大径を胴中に有す。底部は平底で円筒状に突出するものもある。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。一部の遺物には内面に輪轆みを残すものがある。	
C3	口縁部は幅広く、緩やかな「コ」の字に外反する。胴部は内湾するが胴部の張りはやや弱い。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
D1	口縁は緩やかに「C」字に外反する。胴部は球形で、胴中に最大径を有す。底部は平底でやや上げ気味になるものが見られる。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
D2	口縁は緩やかに「C」字に外反する。胴部は球形で、胴中に最大径を有す。底部は平底でやや上げ気味になる。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
D3	口縁は緩やかに「C」字に広く外反する。胴部は球形で、胴中に最大径を有す。底部は平底でやや上げ気味になる。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
D4	口縁は緩やかに「C」字に大きく外反する。胴部は長胴化し、胴中に最大径を有す。底部はやや幅の広い平底になる。唇部に沈線が染まるものがある。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
D5	口縁は緩やかに「C」字に大きく外反し、口唇部で折り返される。折り返した部分に凹線が見られる。胴部は余り張らない。	外面 ヘラケズリの後、丁寧なナデ。口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	

表149 遺物分類表 土師器 甕 (3)

分類	器形の特徴	装・成形の特徴	模 式 図		
E 1	口縁は幅広く外反し、胴部直下には横を有す。胴部は球形で縦やかに内湾し、最大径を中位に持つ。底部は平底。	外面 口縁部から胴部にかけてヨコナデ。稜以下の胴部はヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。			
F 2	口縁は幅広く縦やかに外反し、胴部直下には横を有す。胴部の最大径を上位に持つ。底部は平底。	外面 口縁部から胴部にかけてヨコナデ。稜以下の胴部はヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。			
E 3	口縁は幅広く縦やかに外反し、胴部直下には横を有す。胴部は球形。	外面 口縁部から胴部にかけてヨコナデ。稜以下の胴部はヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。			
E 4	口縁は幅広く縦やかに外反し、胴部直下には横を有す。胴部は歪らない。	外面 口縁部から胴部にかけてヨコナデ。稜以下の胴部はヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。			
F 1	口縁は幅広く、胴部の括れは弱い。口縁は胴部の最大径とほぼ同じ。底径が狭いもの。	外面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラケズリの後一部にナデ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。			
F 2	口縁は幅広く、胴部の括れは強い。口縁は胴部の最大径とほぼ同じ。底径は広い。	外面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラケズリの後一部にナデ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。			
G	口縁は幅広く、胴部の括れは強い。口縁は胴部の最大径よりも大きい。	外面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラケズリの後ナデを行うが、全体に磨きを行うものも見られる。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。			
H 1	口縁部は幅広く直立する。胴部は明瞭に括れ。胴部は大きく張る。底径は狭い。	外面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラケズリの後ナデ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。			

表150 遺物分類表 土師器 甕 (4)

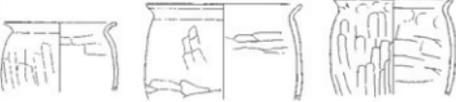
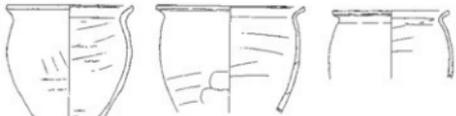
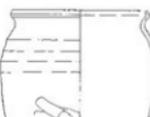
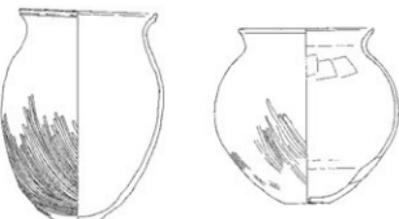
分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
H 2	口縁部は直で、頸部は明瞭に括れ、胴部は大きく張る。底径が広い。	外面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラケズリの後ナデ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
I 1	口縁部は短く、明瞭に「く」の字に外反し、胴部の最大径は口縁部とはほぼ等しい。	外面 口縁はヨコナデ。胴部は上位で縦方向のヘラケズリ、中位は横方向のヘラケズリ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
I 2	口縁部は短く、明瞭に「く」の字に外反し、口縁部は直取りされる。胴部の最大径は口縁部とはほぼ等しい。	外面 口縁はヨコナデ。胴部は上位で縦方向のヘラケズリ、中位は横方向のヘラケズリ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
I 3	口縁部は短く、明瞭に「く」の字に外反し、口縁部は直取りされるもので、肩部はつまみ上げられる。胴部の最大径は口縁部とはほぼ等しい。	外面 口縁はヨコナデ。胴部は上位で縦方向のヘラケズリ、中位は横方向のヘラケズリ。 内面 口縁はヨコナデ。胴部はヘラナデ。	
I 4	口縁部は短く、明瞭に「く」の字に外反し、口縁部は直取りされるもので、肩部はつまみ上げられる。胴部の最大径は口縁部より狭く、口縁部は直取りされるもので、底径が広い。	外面 口縁はヨコナデ。胴部は上位でロクロ轆轤、下部はヘラケズリが施される。 内面 口縁はヨコナデ。胴部は上位でロクロ轆轤。	
J 1	大形の常形甕。口縁部は「く」の字に外反し、口縁部で明瞭につまみ上げられる。胴部の最大径は中位に有し張りが強いものと強いものの反方が見られる。底部は平底。	外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。注重より下端までは滑かれる。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデされ、ヘラ当て痕が見られる。	

表151 遺物分類表 土師器 甕 (5)

分類	器形の特徴	形・成彩の特徴	模 式 図	
J 2	<p>大形の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部でつまみ上げは明瞭ではない。 胴部の張りはやや強く最大径を中位に持つ。 底部は平底。 胎十中に遺母を混入する。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。中位より下端までは磨かれる。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデされ、ヘラ当て痕が残る。</p>		
K 1	<p>大形の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部でつまみ上げは明瞭である。 胴部の張りはやや弱く最大径を上位に持つ。 底部は平底。 胎十中に遺母を混入する。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。中位より下端までは磨かれる。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。底部には木葉痕が見られる。</p>		
K 2	<p>大形の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部でつまみ上げは明瞭ではない。 胴部の張りはやや強く最大径を上位に持つ。 底部は平底。 胎十中に遺母を混入する。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。中位より下端までは磨かれる。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。底部には木葉痕が見られる。</p>		
K 3	<p>中型の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部は明瞭につまみ上げられる。胴部上半に最大径を持つ。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。下位はヘラケズリを行う。部の資料に磨きもある。 内面 口縁ヨコナデ。胴部ナデ。</p>		
K 4	<p>中型の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部でつまみ上げは不明瞭である。胴部上半に最大径を持つ。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は上位でヘラケズリの後ナデ。下位はヘラケズリを行う。 内面 口縁ヨコナデ。胴部ナデ。</p>		
K 5	<p>小型の常総甕。口縁部は「く」の字に外反し、口唇部でつまみ上げは明瞭である。 胴部上半に最大径を持つものと思われる。</p>	<p>外面 口縁部はヨコナデ。胴部は極かにヘラケズリが確認される。 内面 口縁ヨコナデ。胴部ナデ。</p>		

表152 遺物分類表 土師器 甌

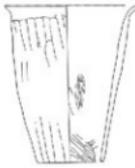
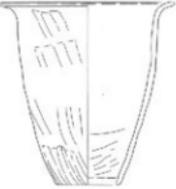
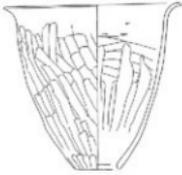
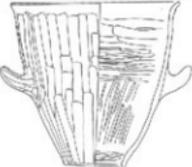
分類	器形の特徴	変・成形の特徴	模 式 図	
A1	口縁部はやや短く縁やかに外反し、胴部系下には縁が隆起。胴部は縦線的に固くもので、孔は単孔で底部全体に及ぶ。	外面 口縁部はココナテ。胴部は縦方向のヘラケズリを行う。 内面 口縁部はココナテ。胴部は磨きが見られる。		
A2	口縁部は縁やかに外反して固く。胴部は縦やかに内湾して固くもので、最大径を口縁部に持つ。孔は単孔で底部全体に及ぶ。	外面 口縁部はココナテ。胴部は縦方向のヘラケズリを行う。 内面 口縁部はココナテ。胴部はヘラナテが行われ、一部資料には磨きも見られる。		
A3	口縁部は外反が弱い。胴部は縦やかに内湾して固くもので、最大径を口縁部に持つ。孔は単孔で底部全体に及ぶ。	外面 口縁部はココナテ。胴部は縦若しくは斜め方向のヘラケズリを行う。 内面 口縁部はココナテ。胴部はヘラナテ。		
B	牛角状の把手を1対付されるものである。口縁部は縁やかに外反するが剛性は弱い。胴部は縦やかに内湾して固くもので、最大径を口縁部に持つものと同中央部に持つもの双方がある。孔は単孔で底部全体に及ぶ。	外面 口縁部はココナテ。胴部は縦方向のヘラケズリを行う。流つてはヘラケズリによりてぬい面に取られている。 内面 口縁部はココナテ。胴部はヘラナテが行われ、下位は磨き。		

表153 遺物分類表 土師器 甕

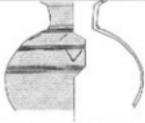
分類	器形の特徴	変・成形の特徴	模 式 図	
A	胴部は短形で胴部に明瞭なない棒をもつ。口縁は縦線できた資料はないが、B系の遺物が本朝の遺物口縁になる可能性もある。胴部上下に沈凹による幾何学的な文様を描くもの、流りけが激されるものもある。	外面 胴部の両面が激しく、粗粒としない。 内面 棒やかなヘラナテの痕跡が見られる。		
B	口縁は外反して薄き、幅広く折り返される。	外面 筒毛管形のみと種かな磨きが見られる。 内面 筒毛管形のみと種かな磨きが見られる。		
C	口縁は縁やかに大きく外反する。胴部は下半に最大径を有す。底部はやや平坦。口縁部の内外に牽帯が施される。	外面 口縁はココナテ。胴部はヘラケズリの後ナテ。 内面 ヘラによるナテ。板板痕が残る。		

表154 遺物分類表 土師器 埴

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
A	大抵の埴で、胴部はやや潰れた球形を呈し、胴部中央若しくは下部に最大径を持つ。口縁は内湾する。 底部はヘラにより削り出す小さな平底が多い。赤彩を施すものが多い。	外面 突きまたは丁寧なナデを施している。 内面 ヘラによるナデを行うもので、輪痕を残す。	
B1	小器で口縁が外反するものである。胴部はほぼ球形で胴中央に最大径を有す。 底部はやや上げ底気味で輪台盤形である。	整成形は器面の割継が激しく不明瞭であるが、外面には僅かにヘラの痕跡が認められ、輪痕が観察される。	
B2	小器で口縁が内湾するものである。 胴部は球形で底部は上げ底になる。胴部の割継は余り明瞭ではない。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 内面 丁寧なナデ。	

表155 遺物分類表 土師器 甗

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
A	口縁は大きく外反して突き、胴部は潰れた球形を呈する。胴中央やや上部に孔が1孔穿たれる。胴部の最大径は上位である。 底部は丸底。 外面全体に赤彩が施される。	外面 丁寧な磨き。 内面 ナデ。	

表156 遺物分類表 土師器 高坏 (1)

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
A	坏部には明瞭な線を有し口縁は外反して突き。脚部は高く、長い筒状を呈し高部で外反して開く。	外面 脚部及び坏部はヘラケズリの後ナデ。口縁部・高部はコナデ。 内面 坏部は磨き、脚部は丁寧なナデ。	
B1	坏部には線を持たないもの。 脚部はやや長く坏部直下より大きく開く。	外面 脚部は縦方向のヘラナデ	
B2	坏部は板状の体部に口縁は外反若しくは直線状に開くもので、体部に線を有す。脚部は板合部より大きくやや長くラップ状に開くもので、高部で裏に外反を強める。	外面 体部はヘラナデ、脚部はヘラケズリの後ヘラナデ。 内面 坏部は磨き。脚部は荒いナデ。	

表157 遺物分類表 土師器 高坏 (2)

分類	器形の特徴	壺・成形の特徴	模 式 図
C	坏部の体部は内湾し、体部に横を有した後、口縁は外反して置く。脛は低く、大きくフツパ状に外反する。胴内面を染み全面赤彩。	外面 坏部はへら開りの低ナデ。口縁はヨコナデ。体部は縦方向のヘラナデ。 内面 坏部は細かな壺。胴部はへら開り。	
D	坏部が鉢形、若しくはむ付の蓋形を有するもので、胴部は底平部が細くやや柱状を呈し蓋部で水平に広く大きく開く。外面が赤彩されるものもある。	外面 体部はヘラズリの後ナデ。一部に壺きが見られる。 口縁部はヨコナデ。 内面 ヘラナデ。	

表158 遺物分類表 土師器 坏 (1)

分類	器形の特徴	壺・成形の特徴	模 式 図
A1	体部に明瞭な横を有するもの。底部は丸底で口縁部は直立する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
A2	体部に明瞭な横を有するもの。底部は丸底で口縁部は外湾する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
A3	体部に明瞭な横を有するもの。底部は丸底で口縁部は内湾する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
A4	体部に明瞭な横を有するもの。底部は丸底で口縁部は内湾する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
A5	体部に明瞭な横を有するもの。底部は丸底で口縁部は外反する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
B1	横は持たない。底部は丸底で体部は前縁的に傾き口縁部に至る。下縁に横を有するものもある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
B2	横は持たない。底部は丸底で体部は内湾し口縁は内転する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
B3	横は持たない。底部は丸底で体部は内湾し口縁は直立する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
B4	横は持たない。底部は丸底で体部は内湾し口縁は外反する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
B5	横は持たない。底部は丸底で体部は内湾し口縁は内湾する。赤彩を施すものがある。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
C	底部は平底で体部は内湾する。	外面 体部ヘラズリ。口縁はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。体部は壺きが多い。	
D1	丸底で深さのある鉢形を呈する。口縁は内湾してそのまま口縁に至る。	外面 ヘラズリの後ナデ。 内面 壺きが多い。	

表159 遺物分類表 土師器 坏 (2)

分類	器形の特徴	壁・成形の特徴	模 式 図
D 2	丸底で深さのある鉢形を呈する。体部は内湾し口縁は直立気味になる。	外面 ヘラケズリの後ナデ。 内面 ヘラナデ	
D 3	底部は丸底で、深さのある鉢形を呈する。体部は内湾し、口縁は外反する。内縁が明瞭である。赤彩を施すものがある。	外面 口縁はココナデ。体部はヘラケズリの後ナデ。一部に磨きが見られる。 内面 体部ヘラナデ。一部に磨きがある。	
D 4	底部は丸底で、深さのある鉢形を呈する。体部は強く内湾し、口縁は大きく外反する。内縁は明瞭でない。内外両赤彩。	外面 口縁ココナデ。体部はヘラケズリの後ナデ。一部に磨きが見られる。 内面 内面は磨き。	
D 5	丸底。深さのある鉢形で、体部に明瞭な縁を有す。		該当する遺物は検出されていない。
D 6	深さのある鉢形で、底形は丸底。体部は緩やかに内湾し、口縁は大きく外反する。	外面 口縁部はココナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。 内面 ナデ。一部に磨きがあり。	
D 7	深さのある鉢形で、底部は丸底を呈する。体部は内湾し、口縁は「く」の字に開く。外面及び口縁内部に赤彩施す。	外面 口縁部はココナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。 内面 丁寧なナデ。	
E 1	平底で深さのある鉢形を呈する。口縁は内転してそのまま口縁に広がる。小形のもので外縁が穿たれるものがある。大形のものも底部が広く、筒状になる。	外面 口縁部はココナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。刷毛による整形を行うものもある。 内面 丁寧なナデ。又は磨きを施すものもある。	
E 2	平底で深さのある鉢形を呈する。体部は内湾し口縁部は僅かに外反する。幾の口縁に近接する器形であるが、本類は口縁に対して器高が高い。	外面 口縁部はナデ。 ヘラケズリの後ナデ。 内面 口縁部ナデ。 胴部はナデ。	
E 3	平底で深さのある鉢形を呈する。体部は強く内湾し、口縁は大きく外反する。内縁を持つ。	外面 口縁部はココナデ。体部はヘラケズリの後ナデ。 内面 ナデ。一部に磨きが見られる。	
E 4	平底で深さのある鉢形を呈する。体部は強く内湾し、口縁は大きく外反する。内縁は不明瞭。		該当する遺物は検出されていない。
E 5	平底で深さのある鉢形を呈する。体部は内湾し、体部に明瞭な縁を有す。口縁は外反して開く。赤彩あり。	外面 口縁ココナデ。体部はヘラケズリの後ナデ。 内面 ナデ。一部磨きあり。	
E 6	平底で深さのある鉢形を呈する。やや上げ底を呈するものもある。体部は内湾し、口縁は大きく外反する。	外面 口縁ココナデ。体部はヘラケズリの後ナデ。一部に磨きあり。 内面 ナデ。一部に磨きあり。	

表160 遺物分類表 土師器 坏(3)

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
E7	平底で深さのある鉢形を呈する。体部は内湾し、口縁は「く」の字に開く。		該当する遺物は出していない。
E8	平底で深さのある鉢形を呈する。底縁は平底でやや凸い。内湾状に突出するものもある。胴部は緩やかに内湾し、口縁は広く外反する。 底部に木葉裏が付きやすいものが多い。手捏土器に立派した形状である。	外面 口縁部はヨコナデ。 胴部は横方向のヘラケズリ。一部ナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。 胴部はヘラナデ。	
F1	ロクロ成形の皿。平底で体部は大きく開き、口縁は外反する。	外面 ロクロ捺痕。 内面 ロクロ捺痕。	
F2	ロクロ成形の皿。平底で体部は内湾し、口縁に至る。	外面 ロクロ捺痕。 内面 ロクロ捺痕。	
G1	ロクロ成形の高台付き坏。高台は足高で「ハ」の字に開く。	外面 ロクロ捺痕。体部下端はヘラ。 内面 ロクロ捺痕。磨きが多い。	
G2	ロクロ成形の高台付き坏。高台は低く「ハ」の字に開く。黒色処理される物がある。	外面 ロクロ捺痕。体部下端はヘラ。 内面 ロクロ捺痕。磨きが多い。	
H	ロクロ成形の高台付き坏。高台は低い。内面は黒色処理される。	外面 ロクロ捺痕。底部は赤切りのまま。 内面 ロクロ捺痕。	

表161 遺物分類表 土師器 手捏土器

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
A	底部は幅の広い平底で体部は狭く立つ。	外面 指捺痕 内面 指捺痕	
B	底部は平底で、体部は内湾して立つ。	外面 指捺痕 内面 指捺痕	
C	底部は丸底で、体部が大きく深く浅い皿状を呈する。	外面 指捺痕 内面 指捺痕	

表162 遺物分類表 須恵器 甕(1)

分類	器形の特徴	整・成形の特徴	模 式 図
A	底部は丸底で緩やかに内湾して立つ。 胴部は上半で縦大椀を看し、口縁は「く」の字に外反して大きく開く。 口縁部は折り返して下方へ突るもので、断面が三角形を呈するものが多い。	外面 口縁部はヨコナデで、一部に刷毛状工具による刷毛状の痕が残る。 胴部以下は平打磨きが施される。 内面 口縁部はヨコナデ。内面は青陶質(同心円)状の磨で丹裏が全面に施される。	

表163 遺物分類表 須恵器 壺(2)

分類	器形の特徴	壁・成形の特徴	模 式 図
B	<p>底部は平底で、胴部は直線的に立ち上がる。 口縁は「く」の字に大きく開き、口唇部はつまみ上げられる。 最大径は口縁部に有すもので、底部の土がなければ縦と識別不能である。</p>	<p>外面 口縁はヨコナデ。胴部は上半から下半にかけて平行開き。下半の底部付近では横方向のヘラズリが施される。 内面 口縁はナデ。胴部はヘラで板が見られ、輪痕の痕が残る。</p>	
C	<p>底部は平底で、胴部は下平で直線的に立ち上がり、胴部で緩やかに内凹して広がる。 胴部は「く」の字に外反して開く。</p>	<p>外面 口縁直下より平行開きが施され、胴下半にまで及ぶ。底部付近の下平では横方向のヘラズリが施される。 内面 ナデ。</p>	

表164 遺物分類表 須恵器 甔

分類	器形の特徴	壁・成形の特徴	模 式 図
A	<p>須恵器類B類に近似する。 胴部はやや内凹する。 底部は中央に円形孔が1孔、胴縁に五稜円形の孔がこれを置き取りむこうに4孔配される。孔はヘラ状工具によって切り取るように穿孔される。</p>	<p>外面 胴部は格子作り。下縁はヘラズリされる。孔はヘラにより切り取りが行われる。 内面 胴部はヘラナデ。底部は物頭痕が残る。</p>	

表165 遺物分類表 須恵器 壺・瓶

分類	器形の特徴	壁・成形の特徴	模 式 図
A	<p>広口の壺若しくは甔と混われる。外反して段を有し、更に大きく開く。</p>	<p>内外共にロクロ成形。</p>	
B	<p>長頸瓶である。底部は平底で安定した低い凸内が付けられる。胴部は緩やかに立ち上がり、胴上半部は最大径を有す。成形でやや瘤が張る。胴部は筒状に長く立ち上がり、口縁で外反して開く。</p>	<p>外面 ロクロ成形。 胴形下部は僅かにヘラケズリが見られる。輪が分かる。 内面 ロクロ成形。 ヘラナデ。</p>	
C	<p>反耳瓶である。 胴部は緩やかに内湾し筒が張る。縁部は板状を呈し穿孔の痕(未貫通)が見られる。縁は胴部より胴中位までかかる。</p>	<p>外面 縁部が厚くかぶり整形は不明瞭でない。 内面 ロクロ裏が明瞭。</p>	
D	<p>半倒立である。底部は大底で胴部は緩やかに内湾し胴上半部に最大径を有す。口縁は段く外反して直立する。胴部に2条の輪痕流状文が施分される。</p>	<p>外面 ロクロ成形。一部ヘラケズリが見られる。 内面 ロクロ整形。</p>	

表166 遺物分類表 須恵器 蓋

分類	器形の特徴	壺・底形の特徴	模 式 図
A1	握みを持たない蓋で、天井は平造りまたはシャープ。	ロクロ整形の後、外面大耳部は幅広く回転ヘラケズリが行われる。	
A2	握みを持たない蓋で、天井は丸く、縁は鋭さを欠く。	ロクロ整形の後、外面大耳部は幅広く回転ヘラケズリが行われる。	
B1	扁平な擬宝珠状の握みを有するもので、肩部に返しを有する。	ロクロ整形で、外面の握み周辺はやや幅広く回転ヘラケズリされる。	
B2	扁平な擬宝珠状の握みを有するもので、肩部に返しを持たないもの。	ロクロ整形で、外面の握み周辺はやや幅広く回転ヘラケズリされる。	該当する遺物は、検出されていない。
C1	明確な擬宝珠状の握みを有するもので、肩部に返しを有するもの。	ロクロ整形で、外面の握み周辺は幅広くヘラケズリされる。	
C2	明確な擬宝珠状の握みを有するもので、肩部に返しを持たないもの。	ロクロ整形で、外面の握み周辺は幅広くヘラケズリされる。	

表167 遺物分類表 須恵器 坏

分類	器形の特徴	壺・底形の特徴	模 式 図
A1	有蓋の坏で、器受部が共にもの。底部は平底に近い丸底。	ロクロ整形で、外面底部は幅広く回転ヘラケズリされる。	
A2	有蓋の坏で、器受部が短いもの。底部は平底である。	ロクロ整形で、外面底部は幅広く回転ヘラケズリされる。	
B1	平底で口径対底径の比が2以上。体部は下端より直線的に開く。	ロクロ整形で、底部は手持ちヘラケズリ。	
B2-a	平底で口径対底径の比が2以上。体部は下端より外反する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
B2-b	平底で口径対底径の比が2以上。体部は下端で僅かに内湾後外反する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
B3	平底で口径対底径の比が2以上。体部は下端より緩く内湾する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
C1	平底で口径対底径の比が2未満。体部は下端より直線的に開く。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
C2-a	平底で口径対底径の比が2未満。体部は下端より外反する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
C2-b	平底で口径対底径の比が2未満。体部は下端で僅かに内湾後外反する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
C3	平底で口径対底径の比が2未満。体部は下端より緩く内湾する。	ロクロ整形で、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。	
D1-a	足高の「ハ」の字高台が付される高台付坏。	ロクロ整形で、高台は回転ヘラケズリ後付される。	
D1-b	足高の「ハ」の字高台を付す小振り高台付坏で、高台基部は広い。	ロクロ整形で、高台は回転ヘラケズリ後付される。	
D2	低い「ハ」の字高台を付す高台付坏。	ロクロ整形で、高台は回転ヘラケズリ後付される。	該当する遺物は、検出されていない。

表168 遺物分類表 須恵器 高坏

分類	器形の特徴	髷・成形の特徴	模 式 図
A	ロクロを使用している。口縁は欠損する。脚は大きく開き、中央付近にへうによる台形の透かしを有する。	外面 ロクロ脚後 内面 ロクロ脚後	
B	ロクロを使用している。口縁は欠損する。脚を大きく開き透かしはない。	外面 ロクロ脚後 内面 ロクロ脚後	
C	ロクロを使用する。無蓋の高坏。外反する口縁で筒筒状文様文。	外面 ロクロ脚後 内面 ロクロ脚後	

表169 遺物分類表 須恵器 器台

分類	器形の特徴	髷・成形の特徴	模 式 図
A	脚部は大きく開き底部に彫刻帯が1枚ある。筒筒状文様が施され、中央にへうによる透かし孔が穿たれる。	外面 ロクロ脚後後脚 筒筒状文、自然軸線 内面 ロクロ・露法による彫刻。	

表170 遺物分類表 須恵器 盤

分類	器形の特徴	髷・成形の特徴	模 式 図
A	体部は板状で口縁部は明瞭に内に折れて立つ。高内は「ハ」の字に開く。	外面 ロクロ脚後 内面 ロクロ脚後	
B	体部がやや内湾するもので、口縁部の折り返しが明瞭でないもの。	外面 ロクロ脚後 内面 ロクロ脚後	

B類は脚部がやや長く接合部分よりラッパ状に大きく開くものである。坏部の形状が稜を持たない塊状を呈するものと、板状の体部を有し口縁部が外反若しくは直線的に開くものの2種類に分けられる。

C類は脚部が短く大きくラッパ状に開くものである。坏部には稜を有する。

D類は坏部が鉢形や甕形の形状を呈するものを本類にまとめた。

土師器 坏 (表158~160)

形状より7種類に分類し、更に各類毎に細かく分類した。尚、鉢形の資料についても坏の中に入れて分類した。

A類は体部に稜を有する所謂須恵器蓋の模倣坏である。口縁部が直立するもの、外傾するもの、内湾するもの、外反するものの5種類に分けられる。

B類は体部に稜を持たないものである。体部が直線的に開き口縁部に至るもの、口縁部が内傾するもの、直立するもの、外反するもの、体部が内湾し口縁部も内湾するものの5種類に分かれる。

C類は1種類のみで、底部が平底で体部が内湾するものである。

D類は丸底で深さのある鉢形の器形である。体部が内湾してそのまま口縁部に至るもの、体部が内湾して口縁は直立気味になるもの、体部は強く内湾して内稜を有し口縁部が外反するもの、体部は強く内湾し口縁部が大きく外反するものの内稜は明瞭でないもの、体部は強く内湾し外面に明瞭な稜を有し口縁部は外反して開

くもの、体部が緩やかに内湾し口縁が大きく外傾するもの、体部は内湾し口縁が「く」の字に開くもの7種類に細分される。

E類は平底で深さのある鉢形を早するものである。口縁が内傾し口唇部に至るもの、体部は内湾し口縁部が大きく外反するもの、口縁部が大きく外傾し内部に残るもの、体部に明瞭な稜を有し口縁が外反して開くもの、やや上げ底を呈し体部は内湾し口縁部が大きく外傾するもの、底部が円板状に突出し口縁は短く外反するもので造りが粗悪で手捏土器の形状に近いもの等8種類に細分した。

F類はロクロ整形の皿状を呈する坏である。体部が外反するものと内湾するものの2種に分けられる。

G類はロクロ整形の高台が付される坏である。高台が高いものと低いものの2種類に分けられる。

H類は高台が付されるロクロ整形の坏で皿状を呈するものである。これも体部が内湾するものと外反するもの、高台の高いものと低いものの4種類に分けられるが、出土遺物の量が少ない為細分はしていない。

土製品 手捏土器 (表161)

形状より3種類に分類した。いずれも坏・壺形を呈するもので、高坏模倣等その他の器種は出土していない。

A類は小形の环形で底部が平底で広い。口縁部は直立する。

B類は胴部が緩やかに内湾するもので、小形の壺形を早するものであろうか。

C類は丸底の塊状を早するものである。

須恵器 甕 (表162・163)

形状より3種類に分類した。

A類は底部が丸底で胴部の最大径が胴上半部に有し、球形を早する。口縁は幅広く、「く」の字に大きく外反する。外面胴部には平行叩きが施される。

B類は底部が平底で、胴部が直線的に立ち上がり、口縁は直角に開き口唇部は痛み上げられる。底部が検出されていない為と甕との識別はできていない。

C類は底部が広い平底で胴部は緩やかに内湾し胴上半の肩部分に最大径を有する。外面には平行叩きが施され、胴部下端はヘラケズリによる調整が顕著である。

須恵器 瓶 (表164)

確認できた形状は1種類のみで、須恵器甕のB類に近似するものである。幅広い底部の中心に円形、これを取り囲む4個の楕円形のヘラによる切り取り孔が穿たれている。胴部には格子目の叩きが施されるものもある。

須恵器 壺・瓶 (表165)

A類は広口の壺若しくは甕であるが、全体を窺える資料は出土していない。

B類は長頸瓶である。高台を有す。胴部は上半に最大径を有し肩が張る。頸部は筒状になり口縁部で開くが、口唇部の形状は確認できていない。痛み上げるように立つものと考えられる。尚、灰陶陶器であるが前述の通り中佐倉SI-07出土の瓶も本類に含めている。

C類は双耳瓶である。胴上半部の破片で、口縁及び胴下半を欠損している。紐耳は板状で肩の部分に2カ所付される。

D類は短頸壺である。底部は丸底で胴部の最大径は胴部上半に有す。胴上半から肩部にかけて2条の櫛描波状が廻る。

須恵器 蓋 (表166)

蓋は摘みを持たないものと、扁平な摘みを有するものと、擬宝珠状のやや高さのある摘みを有するものの3種類に大きく分け、更にそれぞれを細分している。

A類は摘みを持たない蓋である。天井が平坦なものと、丸みを帯びるものの2種類に分類した。

B類は扁平な摘みを有するもので端部に返しを有するものと、返しを持たないものとに分類した。実際には本遺跡群に於ては返しを持たない遺物は出土していない。

C類は擬宝珠状のやや高さのある摘みを有するもので返しを有し小形のもの、返しを持たないやや大振りものの2種類に分けられる。

須恵器 坏 (表167)

有蓋の坏と無蓋の坏に分け、更に無蓋の坏は口径と底径の比率、高台の有無等から4種類に分類し、さらにそれぞれを細分した。

A類は有蓋の坏である。器受部分が長く突出するものと、短いものの2種類に分けられる。

B類は平底の坏で口径と底径の比率が2:1以上のものをまとめた。体部の形状が直線的に開くもの、外反するもの、内湾後外反するもの、内湾するものの4種類に細分される。

C類は平底で口径と底径の比率が2:1未満のものをまとめた。体部の形状が直線的に開くもの、下端より外反するもの、内湾後外反するもの、緩く内湾するものの4種類に分けられる。

D類は高台を有するもので大振りで足高の高台を有するものと、小振りで高台の端部が反るものに分けられる。

須恵器 高坏 (表168)

いずれもロクロ使用の高坏で形状より3種類に分類している。

A類は脚部に一段の透かしを有するものである。上腕部の形状は不明。

B類は透かしを持たないものである。上腕部の形状は不明。

C類は無蓋の高坏である。脚部の形状は不明。

須恵器 器台 (表169)

透かしを有する器台の脚部細片で櫛描波状文様が描かれている。

須恵器 盤 (表170)

2種類に分類している。

A類は板状の体部で、口縁が明瞭に折れて立つものである。

B類は体部が内湾して立ち、口縁の屈曲が明瞭でないものである。

以上の分類の基準に従って、秋平遺跡出土遺物については表171～表184に、池平遺跡については表185～表193に、中佐倉貝塚については表194・195に遺物模式・莖表(実測図と模式図の合成図)を作成・掲載した。

表171 遺物模式一覧 秋平遺跡(1)

遺物番号	出土遺物	備考
SI-2 模式図	 1. 蓋 2. 蓋	
SI-6 模式図	 1. 蓋 2. 埴C2-a 3. 埴B2-a	9世紀前半
SI-7 模式図	 1. 蓋	
SI-8 模式図	 1. 蓋 2. 蓋 3. 蓋B 4. 埴B2-a	8世紀中葉
SI-9 模式図	 1. 蓋 2. 埴D3-a	
SI-11 模式図	 1. 埴K2 2. 蓋 3. 蓋B 4. 蓋	8世紀前半 支那土鉢1
SI-12 模式図	 1. 蓋 2. 蓋 3. 蓋B 4. 蓋A	8世紀後半 土鉢1
SI-13 模式図	 1. 埴F2 2. 埴B	11世紀中葉 土鉢1
SI-14 模式図	 1. 蓋 2. 埴D1-a 3. 埴B1	9世紀前半 土鉢2
SI-15 模式図	 1. 蓋 2. 蓋 3. 埴B2	7世紀後半 土鉢1 球状土鉢1

表172 遺物模式一覽 秋平遺跡(2)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-16	<p>1. 甕J1 2. 甕K1 3. 甕K1</p> <p>4. 坏A3 5. 坏A1 6. 蓋C1 7. 蓋C1 8. 蓋C1</p>	7世紀後半
SI-17 模式図	<p>1. 筥 2. 蓋B 3. 坏B2-a 4. 坏</p>	砥石1 8世紀中葉 土師4 支脚2
SI-18 模式図	<p>1. 筥 2. 坏B2-b</p>	8世紀中葉
SI-19 模式図	<p>1. 筥K3 2. 筥B 4. 坏C2-a</p>	9世紀前葉 鉄線1 土師1
SI-21 実面図	<p>1. 甕B 2. 甕C</p> <p>3. 坏B2-a 4. 坏B3</p>	8世紀中葉
SI-22 模式図	<p>1. 筥 2. 蓋 3. 筥</p> <p>4. 坏B2 5. 甕C 6. 蓋B</p>	支脚1 土師3 球状土師3
SI-23 模式図	<p>1. 筥 2. 筥B 3. 坏C2-b</p>	9世紀中葉 土師1
SI-24 模式図	<p>1. 坏A3</p>	6世紀後半 支脚1

表173 遺物模式一覧 秋平遺跡 (3)

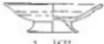
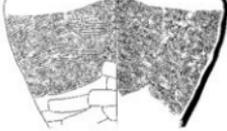
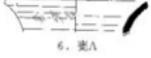
遺構番号	出土遺物			備考
SI-26 横式図				7世紀後半 灰石1
SI-27 平面図				11世紀中葉
SI-28 横式図				
SI-29 横式図	 1. 変K4	 2. 変K4	 3. 変	8世紀後半
	 4. 変C	 5. 変C2	 6. 変	
		 7. 変R2-a		球状土器2
SI-30 平面図	 1. 変K1	 2. 変K1	 3. 変K1	8世紀後半
	 4. 変	 5. 変	 6. 変A	
	 11. 変D1-a	 8. 変A	 9. 変D1-a	
	 12. 変D2-a	 13. 変R2-b	 14. 変R2-a	球状土器1 釘1 刀子1 灰石1
SI-31 横式図	 1. 変K1	 2. 変	 3. 変F1	
	 4. 変A3	 5. 変	 6. 変D2-b	
		 7. 変C2-a		球状土器2 灰石1

表174 遺物模式一覽 秋平遺跡(4)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-32 横式図	<p>1. 环A4 3. 壳 4. 环B4 5. 环B1 6. 壳B 7. 釜B1 8. 釜 9. 手取A 11. 环F2 12. 环C1 环C2a 环C2c 10. 手取A</p>	<p>刀子1 球状土師1</p>
SI-33 実面図	<p>1. 甕D1 2. 壳F1 3. 环B1 4. 环A1 5. 环A3 6. 壳 7. 环A2 8. 甕B 9. 甕B</p>	<p>7世紀前半 球状土師2</p>
SI-34 実面図	<p>1. 壳 2. 环G 3. 甕B1 4. 甕B1 5. 环B2b</p>	<p>8世紀前半 砥石1 支脚1</p>
SI-35 横式図	<p>1. 环B3 2. 环B2</p>	<p>7世紀</p>
SI-37		<p>球状土師1</p>
SI-39 実面図	<p>1. 甕H 2. 壳 3. 环G 4. 环G1 5. 环G2</p>	<p>10世紀中葉</p>
SI-40 実面図	<p>1. 甕J2 2. 甕B1 3. 甕F1 4. 甕B 5. 环A2 6. 环A1 7. 环A3 8. 高环A 9. 高环C 10. 甕B 11. 三足盤</p>	<p>6世紀後半 支脚1 球状土師1 砥石1</p>

表175 遺物模式一覧 秋平遺跡(5)

遺物番号	出土遺物	備考
SI-41	<p>1. 釜 2. 釜 3. 甕D2 4. 坏B2 5. 坏A3 6. 坏A3</p>	6世紀後半 球状土鍾4
SI-47	<p>1. 釜 2. 釜 3. 甕 4. 坏B2</p>	7世紀中葉 砥石1
SI-49	<p>1. 釜 2. 坏B1 3. 坏B3 4. 程A 5. 坏B2a 6. 坏B3 7. 坏B3 8. 坏C2-b</p>	8世紀前半 釘1 土鍾2 球状土鍾1
SI-50	<p>1. 坏D2 2. 坏E8</p>	6世紀前半 土鍾1
SI-52	<p>1. 甕E1 2. 甕D4 4. 甕B 6. 坏A3</p>	6世紀後半
SI-53	<p>1. 甕 2. 甕 3. 坏A2 4. 甕A2</p>	6世紀後半
SI-54	<p>1. 坏B3 2. 坏B3 3. 坏B1 4. 坏B1 5. 坏B1 6. 坏A3 7. 甕B 8. 坏D1-b 9. 坏D1-b 10. 坏D1-b 11. 甕K2 12. 甕A2 13. 坏B3 14. 坏B3 15. 坏B3 16. 坏B3 17. 坏B3 18. 坏B3 19. 坏B3 20. 坏B3</p>	7世紀後半 支脚1 球状土鍾5

表176 遺物模式一覽 秋平遺跡 (6)

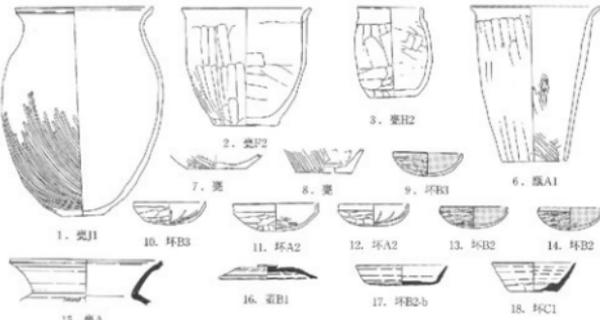
遺構番号	出土遺物	備考
SI-55 横式図	 <p>1. 環 2. 環 3. 環A4</p>	土鍾 2
SI-57 横式図	 <p>1. 環B3 2. 環B4 3. 環A2 4. 環B</p>	7世紀前半 球状土鍾1
SI-60 横式図	 <p>1. 環 2. 環B4 3. 環B2-a</p>	8世紀前半 球状土鍾1 土鍾2
SI-61 横式図	 <p>1. 環B2</p>	7世紀力 球状土鍾 2
SI-62		球状土鍾1
SI-64 横式図	 <p>1. 蓋B</p>	8世紀力 球状土鍾1 支脚1
SI-65 矢形図	 <p>1. 甕J1 2. 甕J2 3. 甕J2 4. 甕 5. 甕 6. 甕A1 7. 甕 8. 甕 9. 環B3 10. 環B3 11. 環A2 12. 環A2 13. 環B2 14. 環B2 15. 甕A 16. 甕B1 17. 環B2-b 18. 環C1</p>	8世紀前半 球状土鍾1 支脚1
SI-67 横式図	 <p>1. 環B2</p>	7世紀力
SI-68 横式図	 <p>1. 環B2-b</p>	8世紀前半
SI-69 横式図	 <p>1. 甕B 2. 甕B 3. 環C1</p>	9世紀

表177 遺物模式一覧 秋平遺跡(7)

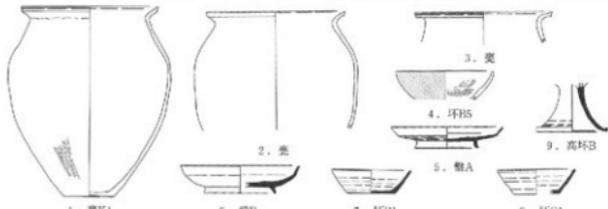
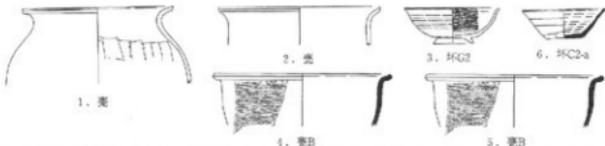
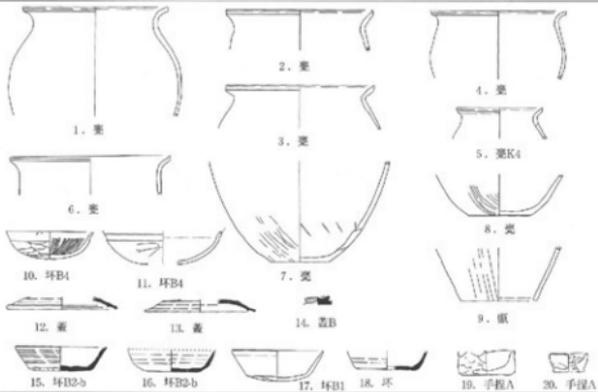
遺構番号	出土遺物	備考
SI-70 実測図	 <p>1. 壺K1 2. 壺B 3. 壺 4. 環B5 5. 環A 6. 環B 7. 環B1 8. 環C1 9. 高環B</p>	8世紀後葉
SI-71 模式図	 <p>1. 壺 2. 環B2 3. 手掘A</p>	7世紀力 球状土鍾3 土鍾2
SI-72 模式図	 <p>1. 壺 2. 壺 3. 環C2 4. 壺B 5. 壺B 6. 環C2-a</p>	10世紀中葉力
SI-73 実測図	 <p>1. 壺 2. 壺 3. 壺 4. 壺 5. 壺K4 6. 壺 7. 壺 8. 壺 9. 環 10. 環B1 11. 環B4 12. 壺 13. 壺 14. 壺B 15. 環B2-b 16. 環B2-b 17. 環B1 18. 環 19. 手掘A 20. 手掘A</p>	7世紀末 ~8世紀初 頃 支脚1 刺口1 土鍾1
SI-74 模式図	 <p>1. 環A3 2. 環B1</p>	7世紀力 土鍾1
SI-75 模式図	 <p>1. 壺 2. 環B2 3. 壺B 4. 環C2-a 5. 環C2-a</p>	11世紀力 釘1 土鈴1 球状土鍾1

表178 遺物模式一覽 秋平遺跡(8)

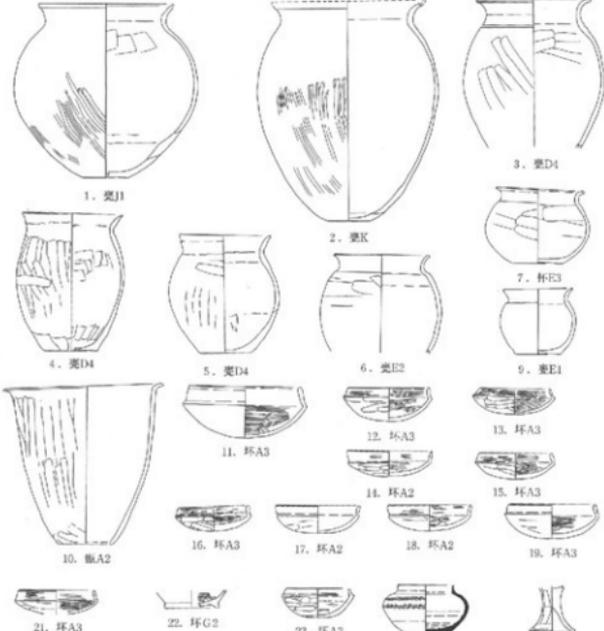
通稱番号	出土遺物	備考
SI-77 模式図	 <p>1. 甕 2. 环B2a</p>	8世紀後半
SI-79 模式図	 <p>1. 环D 2. 环A1 3. 手捏A</p>	6世紀後半 土鍾1
SI-81 模式図	 <p>1. 甕</p>	不明
SI-84 模式図	 <p>1. 环C2a</p>	9世紀
SI-85 実測図	 <p>1. 环 2. 环C2a 3. 环C2a 4. 环C2b</p>	9世紀中葉
SI-86 実測図	 <p>1. 甕J1 2. 甕K 3. 甕D4 4. 甕I4 5. 甕I4 6. 甕E2 7. 甕E3 8. 甕E1 9. 甕E1 10. 甕A2 11. 环A3 12. 环A3 13. 环A3 14. 环A2 15. 环A3 16. 环A3 17. 环A2 18. 环A2 19. 环A3 20. 环A3 21. 环A3 22. 环G2 23. 环A3 24. 甕D 25. 高环</p>	6世紀後半

表179 遺物模式一覧 秋平遺跡(9)

遺構番号	出土遺物				備考	
SI-91					8世紀中葉	
模式図					土師2	
SI-92					7世紀	
模式図					球状土師20 砥石1	
SI-93					10世紀中葉*	
模式図						
SI-95					9世紀前半	
平面図					軽石1	
SI-96						
模式図						
SI-97					球状土師1	
模式図						
SI-98						
模式図						
SI-99						
模式図						

表180 遺物模式一覽 秋平遺跡 (10)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-101 模式図	<p>1. 蓋 2. 灰皿</p>	8世紀中葉
SI-102 実面図	<p>1. 蓋 2. 灰皿 3. 蓋 4. 灰皿 5. 灰皿 6. 灰皿 7. 灰皿 8. 灰皿 9. 灰皿 10. 灰皿 11. 灰皿 12. 灰皿 13. 灰皿 14. 灰皿</p>	6世紀後半 球状土師1
SI-103 模式図	<p>1. 灰皿 2. 灰皿</p>	6世紀
SI-104 模式図	<p>1. 灰皿 2. 蓋</p>	7世紀 球状土師1
SI-107 模式図	<p>1. 灰皿 2. 灰皿 3. 灰皿 4. 灰皿 5. 灰皿 6. 灰皿 7. 灰皿 8. 灰皿 9. 灰皿 10. 手取 11. 灰皿 12. 灰皿 13. 灰皿 14. 灰皿 15. 灰皿 16. 灰皿 17. 灰皿 18. 灰皿 19. 灰皿 20. 灰皿 21. 灰皿 22. 灰皿 23. 灰皿</p>	7世紀後半 支脚1 紡錘車1 球状土師10 砥石1
SI-108 実面図	<p>1. 灰皿 2. 蓋</p>	7世紀前半

表181 遺物模式一覧 秋平遺跡 (11)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-110 模式図	<p>1. 環A1 2. 環A1 3. 環A5 4. 環A2 5. 環B3 6. 高環A 10. 手把C</p>	6世紀後半 紡錘車1 球状土鍾6
SI-111 模式図	<p>1. 環A3 2. 環D</p>	6世紀後半 球状土鍾2
SI-112 実測図	<p>1. 環D4 2. 環F2 3. 環F2 4. 環E4 5. 環A1 6. 環B2 7. 環B3 8. 環A3</p>	7世紀前半 球状土鍾3
SI-115 模式図	<p>1. 環C 2. 環A3 3. 手把A</p>	球状土鍾4
SI-116 模式図	<p>1. 環A3</p>	6世紀 球状土鍾3
SI-117 模式図	<p>1. 環A1 2. 環A3 3. 環A1 4. 環B3</p>	7世紀
SI-118 模式図	<p>1. 環A3 2. 環A1 3. 環A3 4. 環A3</p>	6世紀後半 球状土鍾6 土鍾4
SI-119 実測図	<p>1. 環 2. 環 3. 環</p>	8世紀後半 土鍾1

表182 遺物模式一覽 秋平遺跡 (12)

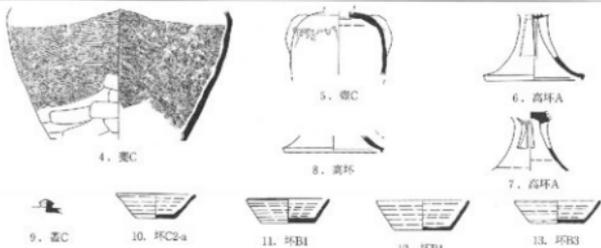
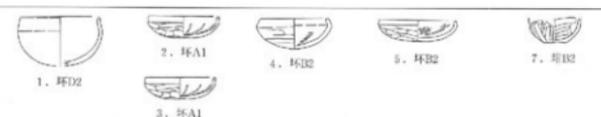
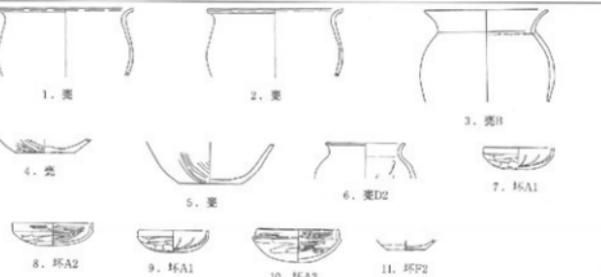
遺構番号	出土遺物					備考
SI-119						8世紀後半
実測図						土鍾 1
SI-120						7世紀 支脚1 紡錘車1 球状土鍾3
模式図						
SI-121						6世紀後半 球状土鍾1
模式図						
SI-122						土鍾 1
SI-123						7世紀 紡錘車1 土鍾1
模式図						
SI-124						7世紀 球状土鍾1
模式図						
SI-125						7世紀力
模式図						
SI-126						7世紀力 刀子1 球状土鍾3
模式図						
SI-127						6世紀後半 瓦石1 球状土鍾2
模式図						

表183 遺物模式一覧 秋平遺跡 (13)

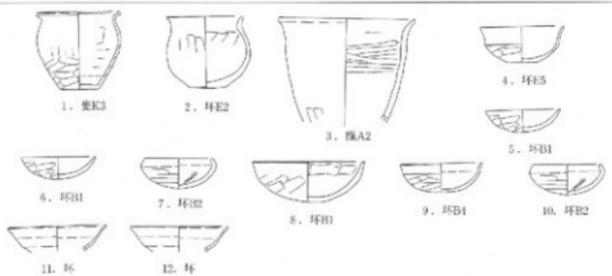
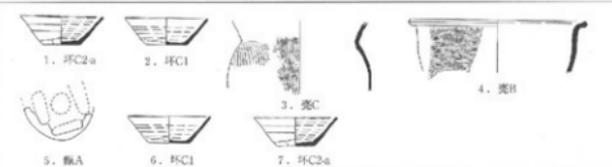
遺構番号	出土遺物	備考
SI-128 模式図	 <p>1. 環A3 2. 壳 10. 環B2</p>	球状土鍾 5
SI-129 模式図	 <p>1. 壳K3 2. 環B2 3. 壳A2 4. 環B5 5. 環B1 6. 環B1 7. 環B2 8. 環B1 9. 環B1 10. 環B2 11. 環 12. 環</p>	
SI-131 模式図	 <p>1. 壳 2. 壳K4 3. 環G 4. 壳B</p>	10世紀 ⁺ 球状土鍾 3
SI-132 実面図	 <p>1. 壳H 2. 壳 3. 環C3 4. 壳C2 5. 環H</p>	9世紀中葉 支脚2 土鍾1 球状土鍾1
SI-133 実面図	 <p>1. 環C2a 2. 環C1 3. 壳C 4. 壳H 5. 壳A 6. 環C1 7. 環C2a</p>	9世紀前葉 球状土鍾1
SI-134		球状土鍾2
SK-4 模式図	 <p>1. 環F2</p>	11世紀 ⁺
SK-5 模式図	 <p>1. 環D2</p>	
SK-21		土鍾1 球状土鍾1
SK-31 模式図	 <p>1. 環F2</p>	11世紀 ⁺

表184 遺物模式一覽 秋平遺跡 (14)

遺物番号	用 土 造 物	備 考
SK-35 模式図	 1. 坏F2	11世紀 ^中
SX-1 模式図	 1. 坏B1	7世紀後半
	 2. 瓶	
	 3. 手控A	球状土鐘1
SX-2 模式図	 1. 坏B2	
	 2. 坏F2	
	 3. 坏D1-a	
	 4. 坏C2 a	鈎1 土鐘1
SX-3 模式図	 1. 坏D1-a	土鐘1
SX-5 模式図	 1. 坏B3	7世紀
	 2. 坏A2	
	 3. 坏D2	
SX-6 模式図	 1. 瓶	8世紀前半
	 2. 瓶B	
	 4. 坏B1	
	 5. 坏	
	 6. 手控A	球状土鐘1
外 先頭図	 1. F1	11世紀 ^中 球状土鐘2

表185 遺物模式一覧 池平遺跡(1)

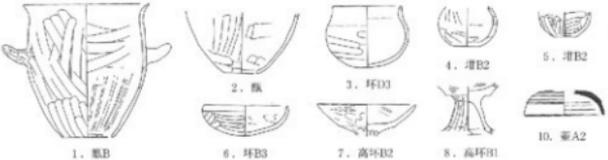
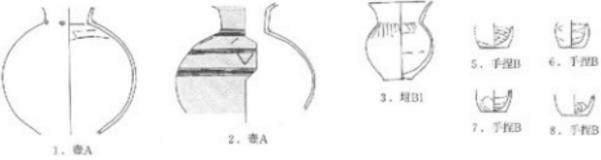
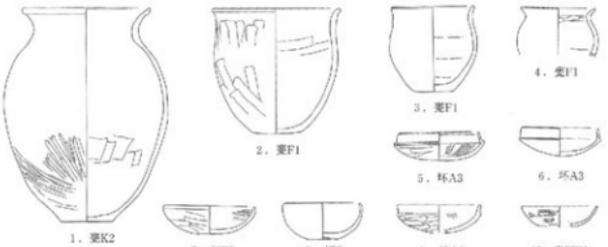
遺構番号	出土遺物	備考
SI-1 模式図	 <p>1. 甕B 2. 瓶 3. 坏D1 4. 埴B2 5. 埴B2 6. 埴B3 7. 高坏B2 8. 高坏B1 10. 甕A2</p>	6世紀後半 球状土師4
SI-2 模式図	 <p>1. 坏C</p>	5世紀前半 球状土師1
SI-3 実測図	 <p>1. 甕A 2. 甕A 3. 埴B1 5. 手埴B 6. 手埴B 7. 手埴B 8. 手埴B</p>	4世紀 球状土師3
SI-4 実測図	 <p>1. 高坏D 2. 甕A2 3. 甕B</p>	5世紀前半 4. 坏E6
SI-7 実測図	 <p>1. 甕K2 2. 甕F1 3. 甕F1 4. 甕F1 5. 坏A3 6. 坏A3 7. 坏B3 8. 坏C 9. 坏A2 10. 高坏B1</p>	7世紀前半
SI-8 模式図	 <p>1. 坏A2 2. 坏A1 3. 坏A3 4. 坏B2 5. 甕A</p>	6世紀後半
SI-9-10 模式図	 <p>2. 坏B3 3. 坏A5</p>	6世紀後半 球状土師1 支脚1

表186 遺物模式一覽 池平遺跡(2)

遺構番号	出土遺物	備考
<p>SI-12</p> <p>実図</p>	<p>1. 甕D1</p> <p>2. 甕D1</p> <p>3. 甕B2</p> <p>4. 甕A2</p> <p>5. 坏D6</p> <p>6. 坏A5</p> <p>7. 坏A5</p> <p>8. 坏A5</p> <p>9. 埴B2</p>	<p>6世紀前半</p> <p>球状土鍾2</p>
<p>SI-13</p> <p>実図</p>	<p>1. 甕</p> <p>2. 甕G</p> <p>3. 甕C1</p> <p>4. 甕B2</p> <p>5. 坏D7</p> <p>6. 瓶</p> <p>7. 埴A</p> <p>8. 坏B1</p> <p>9. 坏D1</p> <p>10. 高坏</p> <p>11. 坏A5</p> <p>12. 坏A3</p> <p>13. 坏B5</p> <p>14. 坏A5</p> <p>15. 坏A1</p>	<p>5世紀後半</p> <p>球状土鍾2</p>
<p>SI-14</p> <p>実図</p>	<p>1. 甕A</p> <p>2. 器台A</p>	<p>6世紀後半</p> <p>球状土鍾6</p>
<p>SI-15</p> <p>実図</p>	<p>1. 甕C3</p> <p>2. 甕G</p> <p>3. 坏B6</p> <p>4. 瓶</p> <p>5. 坏A3</p> <p>6. 坏</p> <p>7. 坏A5</p> <p>8. 坏B4</p> <p>9. 坏B2</p>	<p>5世紀後半</p>

表187 遺物模式一覧 池平遺跡(3)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-15 実測図	<p>10. 坏B2 11. 坏D4 12. 坏B8 13. 高坏B1 14. 盖A1 15. 高坏C</p>	5世紀後半 球状土罐8
SI-16 実測図	<p>1. 壺B1 2. 盖A 3. 坏B2</p>	5世紀後半 支脚1 球状土罐1
SI-17 実測図	<p>1. 壺H1 2. 坏B3 3. 坏A5</p>	6世紀前半
SI-18 実測図	<p>1. 壺C 2. 坏D3 3. 坏D6 4. 坏A4 5. 坏A2</p>	6世紀前半 支脚1 球状土罐3
SI-19 模式図	<p>1. 坏F2 2. 盖F 3. 坏A4</p>	6世紀後半*
SI-20 模式図	<p>1. 盖A2 2. 坏A5</p>	5世紀後半 球状土罐2
SI-21 模式図	<p>1. 壺C1 2. 坏A2 3. 坏B2 4. 坏B2 5. 坏B2 6. 坏B4 7. 坏B4 8. 坏D6</p>	6世紀前半
SI-22 実測図	<p>1. 盖F2 2. 盖B2 3. 壺A2</p>	5世紀後半

表188 遺物模式一覽 池平遺跡(4)

遺構番号	出土遺物	備考
SI-22		5世紀後半 球状土甕1 砥石2
SI-23		6世紀後半 支脚1 土甕2 球状土甕2
SI-24		5世紀後半
SI-25		6世紀前半 球状土甕2
SI-26		7世紀後半 球状土甕3 鉄弁1

表189 遺物模式一覧 池平遺跡 (5)

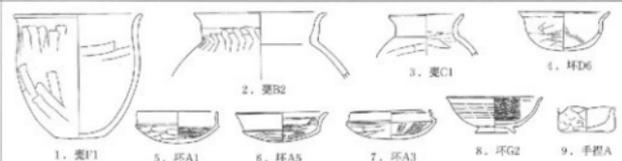
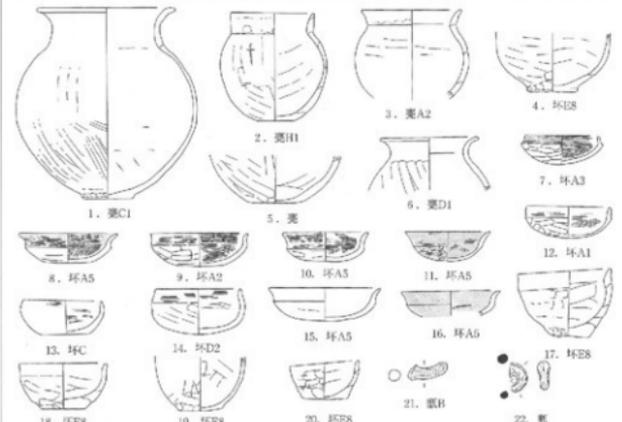
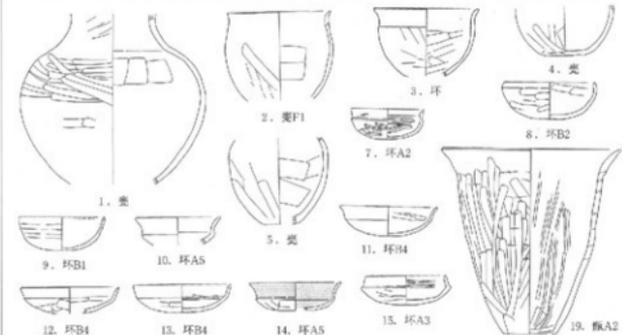
遺物番号	出土遺物	備考
SI-28 模式図	 <p>1. 甕F1 2. 甕B2 3. 甕C1 4. 坏D6 5. 坏A1 6. 坏A5 7. 坏A3 8. 坏G2 9. 手柄A</p>	紡錘車1 球状土錘27
SI-29 実測図	 <p>1. 甕C1 2. 甕H1 3. 甕A2 4. 坏E8 5. 甕 6. 甕D1 7. 坏A3 8. 坏A5 9. 坏A2 10. 坏A5 11. 坏A5 12. 坏A1 13. 坏C 14. 坏D2 15. 坏A5 16. 坏A6 17. 坏E8 18. 坏E8 19. 坏E8 20. 坏E8 21. 甕H 22. 甕</p>	6世紀前半 球状土錘7 礫石1
SI-30 実測図	 <p>1. 甕 2. 甕F1 3. 坏 4. 甕 5. 甕 6. 甕 7. 坏A2 8. 坏B2 9. 坏B1 10. 坏A5 11. 坏H4 12. 坏B4 13. 坏B4 14. 坏A5 15. 坏A3 19. 甕A2</p>	7世紀前半 球状土錘3
SI-31 模式図	 <p>1. 坏A5</p>	6世紀前半 釘1
SI-33 模式図	 <p>1. 坏C 2. 坏A1</p>	6世紀前半

表190 遺物模式一覽 池平遺跡(6)

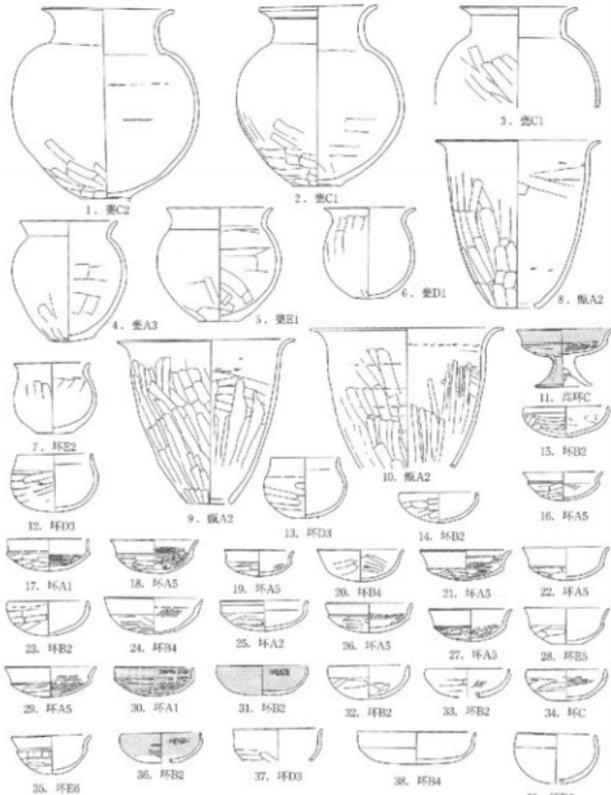
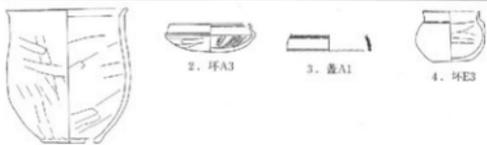
遺物番号	出土遺物	備考
SI-34	 <p>1. 甕A1 2. 環B3 3. 環B2 4. 環B1 5. 手板B 6. 環E1 7. 手板B</p>	球状土罐 2
模式図		6世紀前半
SI-35	 <p>1. 甕C2 2. 甕C1 3. 甕C1 4. 甕A3 5. 甕E1 6. 甕D1 7. 甕E2 8. 甕A2</p> <p>9. 甕A2 10. 甕A2 11. 高環C</p> <p>12. 環D3 13. 環D3 14. 環B2 15. 環B2 16. 環A5</p> <p>17. 環A1 18. 環A5 19. 環A5 20. 環B4 21. 環A3 22. 環A5</p> <p>23. 環B2 24. 環B4 25. 環A2 26. 環A5 27. 環A3 28. 環E3</p> <p>29. 環A5 30. 環A1 31. 環B2 32. 環B2 33. 環B2 34. 環C</p> <p>35. 環E6 36. 環B2 37. 環D3 38. 環B4 39. 環D2</p>	球状土罐10 甕石炭飾品1
実測図		6世紀後半
SI-36	 <p>1. 甕A3 2. 環A3 3. 蓋A1 4. 環E3</p>	球状土罐 4
模式図		

表191 遺物模式一覧 池平遺跡(7)

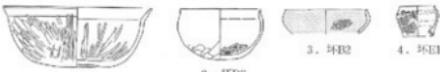
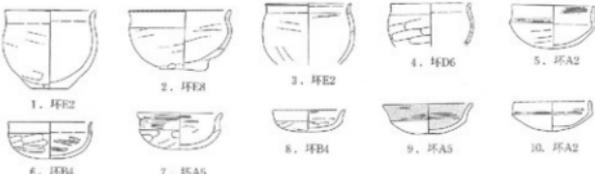
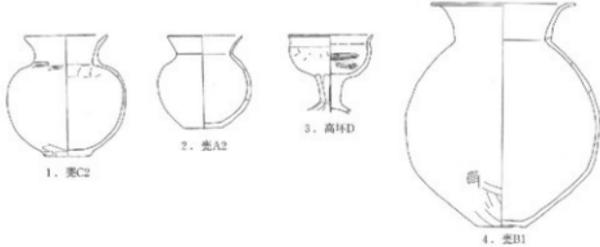
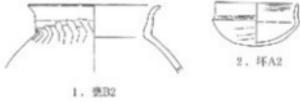
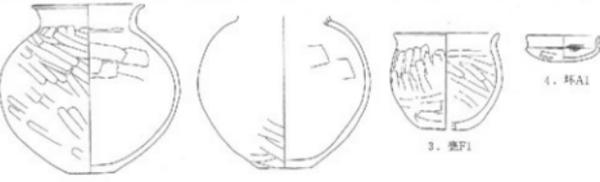
遺物番号	出土遺物	備考
SI-37 実測図	 <p>1. 杯B6 2. 杯D3 3. 杯B2 4. 杯B1</p>	5世紀後半 球状土師2
SI-38 実測図	 <p>1. 杯E2 2. 杯E8 3. 杯E2 4. 杯D6 5. 杯A2 6. 杯B4 7. 杯A5 8. 杯B4 9. 杯A5 10. 杯A2</p>	6世紀後半
SI-39 実測図	 <p>1. 甕 2. 杯B2 3. 杯C 4. 杯B2</p>	
SI-41		球状土師2
SI-42 実測図	 <p>1. 甕C2 2. 甕A2 3. 高杯D 4. 甕B1</p>	5世紀後半
SI-43 模式図	 <p>1. 甕B2 2. 杯A2</p>	6世紀前半
SI-45 実測図	 <p>1. 甕B2 2. 甕 3. 甕F1 4. 杯A1</p>	6世紀前半 球状土師1

表192 遺物模式一覽 池平遺跡(8)

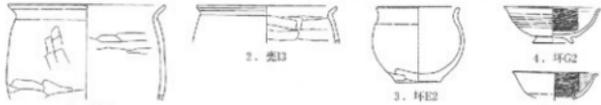
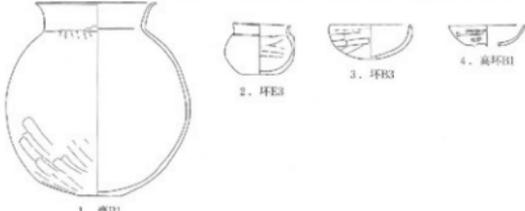
遺構番号	出土遺物	備考
SI-47 実測図	 <p>1. 甕I1 2. 甕I3 3. 坏E2 4. 坏G2 5. 坏G</p>	10世紀後葉 支脚1 球状土錘1 砥石1
SI-48 模式図	 <p>1. 甕I2</p>	
SI-49 模式図	 <p>1. 甕B</p>	4世紀 球状土錘2 砥石3
SI-50 模式図	 <p>1. 甕I1 2. 坏E3 3. 坏H3 4. 高坏H1</p>	6世紀後半
SI-51 模式図	 <p>1. 坏C</p>	5世紀前半
SI-53 実測図	 <p>1. 甕D5 2. 坏A1 3. 坏A4 4. 坏A3</p>	6世紀前半 球状土錘1
SI-54 模式図	 <p>1. 坏D6</p>	6世紀前半
SI-58 模式図	 <p>1. 坏D6</p>	6世紀前半
SI-62 模式図	 <p>坏E3</p>	6世紀後半

表193 遺物模式一覧 池平遺跡 (9)

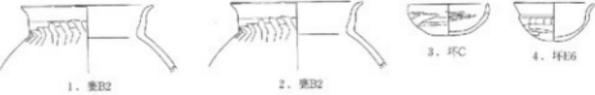
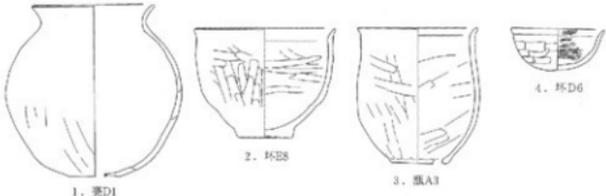
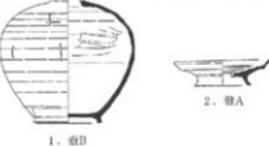
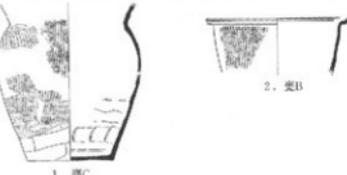
遺構番号	出土遺物	備考
SI-63 模式図	 2. 環B2	7世紀
SI-66 模式図	 1. 環B2 2. 環B2 3. 環C 4. 環E6	6世紀前半
SI-67 模式図	 1. 環D6 2. 高杯C	5世紀後半
SI-69		球状土錘 1
SI-70 模式図	 1. 瓶B	
SI-74	土瓦 1	球状土錘 1
SI-75 模式図	 1. 環D4 2. 高杯C	5世紀後半 支脚 1
SK-15 実測図	 1. 環D1 2. 環E8 3. 瓶A3 4. 環D6	6世紀前半
SX-1 実測図	 1. 壺B 2. 甕A	9世紀中葉
SX-2 実測図	 1. 壺C 2. 甕B	9世紀中葉

表194 遺物模式一覧 中佐倉貝塚(1)

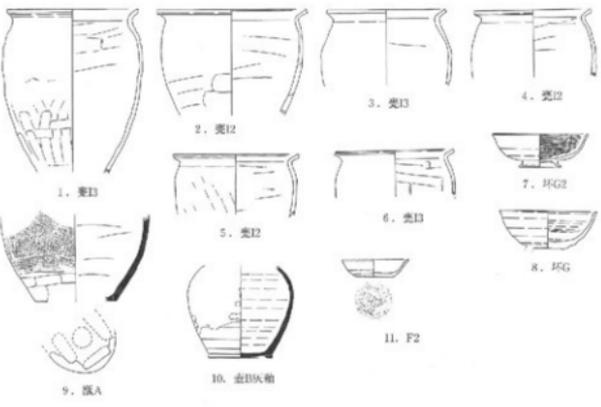
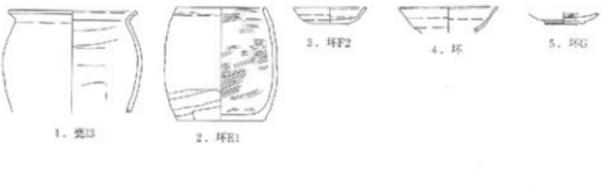
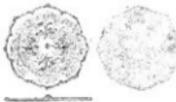
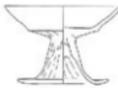
遺構番号	出土遺物	備考
SI-1 実測図	 <p>1. 甕D1 2. 手押C</p>	6世紀
SI-2 実測図	 <p>支脚</p>	
SI-3 実測図	 <p>1. 甕E3 2. 坏A1 3. 甕D2</p>	6世紀後半
SI-7 実測図	 <p>1. 甕E3 2. 甕E2 3. 甕E3 4. 甕E2 5. 甕E2 6. 甕E3 7. 坏G2 8. 坏G 9. 坏A 10. 甕E坏前 11. F2</p>	10世紀前半 紡錘車I 球状土師I
SI-8 実測図	 <p>1. 甕E3 2. 坏E1 3. 坏F2 4. 坏 5. 坏G</p>	10世紀前半

表195 遺物模式一覧 中佐倉貝塚(2)

遺構番号	出土遺物				備考
SI-12			 3. 甕A		10世紀前半 ^a
実測図					
SI-17					8世紀後半
					
実測図					球状土鉢1 有孔円板1
SI-26					11世紀初頭 ^a
					
実測図					鏡1 砥石1
					
SI-27					5世紀前半
					
実測図					
遺構外					
実測図					球状土鉢4 土鉢1 刀子1

3 器形別に見た遺物の時期別分布

遺物の器形別に見た時期区分については表196～198時期別遺物組成表1)～3)にまとめた。時期区分については5世紀以降を20期に細分している。この時期区分については平成4年度茨城県教育財団「研究ノート」2号の櫻村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」と同書の浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器Ⅱ」に従って行っている。

壺

壺類は本遺跡第Ⅰ期の5世紀代前半でA類が現れ、6世紀後半までの継続が見られる。B・C類は5世紀後半より6世紀代に集中している。D・E類ではB・C類に遅れて出現し同類とは明瞭な区分が見える。F類はD・E類に継続する傾向が見られ、G類はB・C類に平行して出現している。H類は若干の時間幅があり、資料的には不明瞭である。

本遺跡出土壺類のひとつの特徴であるJ1～K5は所謂常盤壺である。本類の遺物は6世紀の後半にその出現が確認できる。形状的には大形の資料で口唇部の積み上げが不明瞭なものが古く、7世紀後半段階では積み上げは明瞭なものが主流を占める。8世紀後半以降になると、それまでの大形主体から中形から小形のものが多くなり9世紀の前半段階ではその姿を消し、工類の出現までには空白域が見られる。

須恵器では8世紀段階で遺物が見られるようになる。7世紀以前段階での須恵器壺の資料は本遺跡では一点のみの出土であった。一方で、9世紀前半には土師器の壺が減少するが、対症的に須恵器の壺が8世紀後半より量を増してくる。また須恵器の壺A類は古墳時代後期段階でも初期須恵器の形態を残すものであるが、その時間幅は10世紀後半段階まで継続している。

10世紀後半段階以降では須恵器の壺は減少傾向が見られるようで、これに代わり土師器壺I類の出現が見られる。

瓶

本遺跡における瓶の出現は5世紀後半である。5世紀前半以前では確認されていない。最も古い遺物となったのは牛角状の一对の把手を有するB類であるが、同類は7世紀前半段階まで継続する事が確認されている。把手を持たない土師器の瓶ではA3類の最大径を胴部下半に有するものが最も古く、胴部の張りがなくなり直線的になるA2・A1と新しくなる傾向が見られ、これらは8世紀前葉段階までの継続が確認できる。牛角状の把手を有するB類とA類では6世紀段階で共存が見られる。

8世紀中葉以降では土師器の瓶は確認できていない。資料的には少ないが、8世紀以降では須恵器の瓶がこれに代わっている。

壺・埴・瓶

4世紀末段階で有段口縁の壺が姿を消し、5世紀に後半段階までA類の埴(小形丸底壺)が残っている。6世紀段階ではB2類に替わる。6世紀前半段階に平底で赤彩を施した壺1点が確認されているが系統的には不明で小形壺とするべきであろうか。

須恵器では6世紀前半段階の遺物として壺、同後半段階の短頸壺がある。7世紀段階では確認されていない。8世紀代では後半代と考えられる双耳瓶1点が出土している。更に、10世紀前葉段階の黒苜90号壺産と

判断される灰釉陶器の藪が出土している。

高坏

土師器の高坏は5世紀前半にB2類が見られ、最も新しいものではA類が6世紀後半までにその姿を消している。

須恵器の高坏は6世紀前半に無蓋の高坏C類が破片で確認されている。その後は8世紀後半になって脚部に三角形の透かしを有するA類と透かしを持たないB類が出現している。

蓋・坏・盤

土師器の坏は5世紀前半段階ではC類が見られるが、同類では6世紀後半段階では姿を消している。須恵器模倣の後坏A類は、5世紀後半より8世紀の前葉段階まで存続している。丸底で鉢形を呈するD類ではD1類で5世紀後半段階に初源が見られ、全体には6世紀前半段階までで終了する傾向がある。一方で、平底で鉢形を呈するE類では6世紀後半及び7世紀後半に集中が移っている。

須恵器の坏は6世紀後半にA1類、7世紀にA2類の有蓋坏が出土している。これに対する蓋ではA2類があるが、坏身よりもやや古い形態の坏蓋A1類も検出されている。

8世紀前葉になると土師器の坏はほぼ姿を消して、須恵器坏B類及びD1-b類が代わって現れる。さらに、8世紀後葉から9世紀前葉になるとD1-a類及びC類の坏に代わり、やがて10世紀前葉段階以降では土師器坏のF類へと代わる。須恵器坏B類には蓋B1類、D1-b類には蓋C1類、坏D1-a類及びC類には蓋C2類がそれぞれ組み合わせるものと考えられる。

蓋は8世紀ではA・B類とも集落跡からの出土が確認されているが、池平遺跡SX-1ではA類が長頸瓶を利用した蔵骨器の蓋に使用されており9世紀中葉段階の時間が想定されている。

器台

器台は須恵器の細片が1点出土したのみで、胎土がセピア色を呈する古式な須恵器である。

手捏土器

土製品の手捏土器は4世紀以前段階と、6・7世紀の古墳時代後期の遺構で出土が確認されている。形状的にはB類が最も古く4世紀代に限られ、古墳時代後期ではC類がやや古く、A類がそれに続く傾向が見られる。この傾向については、C類が8世紀段階に多く見られるのに対し、B類が古墳時代の後期に見られる現利根川右岸域の千葉県北部域での状況と逆転する傾向が見られ、再検討の必要が有る。本遺跡における手捏土器の出土状況が明瞭でなく覆土中混入遺物を掲載した為の誤認の可能性が有る。

4 結び

3遺跡で検出された遺物について、紙面の都合もあって変則的な報告を行った。結果としては、本地域における時期別の遺物組成を考える上で、若干の資料提供を行えたものとする。

この中で決定的に不足している事は、須恵器の産地についての特定が行えなかった点にある。須恵器生産の消長を一地域的の状況を互に見ることができたにもかかわらず、消費地と生産地との関係が明瞭にできな

かった点は、筆者の未熟さ以外のなにもでもない。

今後、本書に掲載されたさまざまな好資料が再び検討され、県南地域に於ける該期説明の一助となる事を期待したい。

参考・引用文献

- 江坂輝弥「縄文文化について」『歴史評論』32 1951
- 齊藤忠・佐野大和・亀井正道・三宅敏之・長峯光一・近藤喜博「日光男体山」-山頂遺跡発掘調査報告書 角川書店 1963
- 西村正剛「千葉県市川市岡分練兵場貝塚」『学術研究』10号 早稲田大学教育学部 1961
- 西村正剛「茨城県浮島郡浮島貝塚」『学術研究』15号 早稲田大学教育学部 1966
- 西村正剛「茨城県北相馬郡取手向山貝塚」『学術研究』16号 早稲田大学教育学部 1967
- 川崎純徳「茨城県八幡塩遺跡調査報告」常総台地研究会報告1 1967
- 井上義安「那珂湊市宮上ノ上遺跡」『那珂川の先史遺跡化』2 1968
- 井上義安「浮島1式土器の編年に関する問題」『古代文化』224 古代学協会 1970
- 和田哲「浮島系土器の諸問題」『古和田向遺跡』船橋市教育委員会 1973
- 寺門義範「茨城県所貝塚発掘調査報告-東関東地方における縄文前期浮島式土器群の編年の位置づけ-」『藍ヶ浦文化研究会』1975
- 清藤一朗・古内茂他「飯山溪東遺跡」房総考古資料刊行会 1975
- 米田勝之助「所謂軽石製浮子について」『古代』第64 1978
- 山内清男「日本先史土器の縄紋」『先史考古学会』1979
- 後藤茂樹『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館 1979
- 川崎純徳・鶴志田篤二「遠原貝塚の研究(本編Ⅰ)」『勝田文化研究会』1980
- 中村 浩「和泉陶器窯の研究」柏書房 1981
- 金子浩昌「貝塚出土の動物遺体」-関東地方・縄文時代貝塚の動物相とその考古学的研究-貝塚博物館研究資料 第3集 千葉県加曾貝塚博物館友の会 1982
- 谷藤保彦・関根慎二「群馬県における浮島・興津式土器の研究(前)」『研究紀要』2 群馬県歴史文化財調査事業団 1985
- 谷藤保彦・関根慎二「群馬県における浮島・興津式土器の研究(後)」『研究紀要』3 群馬県歴史文化財調査事業団 1986
- 『日光市史』上巻 日光市 1986
- 保坂三郎『古代畿文化の研究』3 唐・平安・鎌倉・南北朝 雄山閣出版 1986
- 大賀 健「古岡遺跡群」山武考古学研究所 1986
- 『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 1987
- 『明治大学考古学博物館蔵品図録 1 明治大学考古学博物館』1988
- 谷口康浩「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』1-草創期 早期 前期- 小学館 1989
- 瓦次 堅「浮島・興津式土器様式」同上。
- 松田光太郎「浮島式土器の研究史-その1」『溯航』8 早稲田大学大学院文研考古談話会 1990
- 鈴木美治「二の宮貝塚・大日山古墳群・恩川遺跡-一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書-」茨城県教育財団文化財調査報告第65集 1991
- 奈良・平安時代研究班「8世紀末-9世紀前半の器種構成について」『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 1991
- 中・近世研究班「中世の歴史遺構について」同上
- 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)」同上。
- 松田光太郎「浮島式土器の成立について」『古代』第93号 1992
- 松田光太郎「浮島式土器の研究史-その2」『溯航』10 早稲田大学大学院文研考古談話会 1992
- 旧石器時代研究班「茨城のナイフ形石器」『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1992
- 奈良・平安時代研究班「9世紀後半の器種構成とその役割について」同上。
- 櫻村宣行「白石遺跡で検出された遺構について」同上
- 櫻村宣行「茨城県南部における嵐島式土器について」同上
- 浅井哲也「茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)」同上。
- 『風上記』秋本吉郎 校注 岩波書店 1993
- 『江戸崎町史』江戸崎町 1993
- 『古代の土器 2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会 1993
- 旧石器時代研究班「茨城の尖頭器集成」『研究ノート』3号 茨城県教育財団 1993
- 奈良・平安時代研究班「10世紀の器種構成とその役割について」同上
- 吉川明宏「茨城のナイフ形石器」同上。
- 海老澤稔「常陸回信太郎出土土器土器集成から」同上
- 『古代の土器研究』第3回シンポジウム資料 古代の土器研究会 1994
- 『古代の土器 3 都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会 1994
- 鈴木徳雄「諸磯a式の文様帯と施文様」-文化の生成と変容-『縄文時代』第5号 縄文時代文化研究会 1994
- 弥生時代研究班「茨城後期弥生式土器編年の検討(Ⅳ)-上船青式土器について(1)」『研究ノート』4号 茨城県教育財団 1994
- 吹野富美夫「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」同上

- 佐々木義明「美野里町出土の双耳瓶」『茨城県考古学協会誌』6号 茨城県考古学協会 1994
- 小笠原亨「『常陸国風土記』の成立について」『風土記の考古学1 常陸国風土記の巻』茂木雅博編集 1994
- 袁 靖「『常陸国風土記』の自然環境」同上
- 久信田喜「『茨城県考』」同上
- 茂木雅博「浮島の祭祀遺跡」同上
『美濃村史』美濃村 1985
- 弥生時代研究会「茨城後期弥生式土器編年の検討（V）-上船古式土器について(2)」『研究ノート』5号 茨城県教育財団 1995
- 櫻村宣行「和泉式土器編年考-茨城を中心として-」同上
- 縄文時代研究会「茨城県内における浮島式土器の検討(1)」『研究ノート』6号 茨城県教育財団 1996
- 弥生時代研究会「茨城後期弥生式土器編年の検討（VI）-上船古式土器について(3)」同上
- 松田政基・斉藤伸明 他『峯崎遺跡』山武考古学研究所 1996
- 奥富雅之・川村勝「興津地区遺跡群」山武考古学研究所 1996
- 鈴木徳雄「諸磯り式の変化と形式間交渉」-文様変化の継起的累積性と形式間関係の諸相-『縄文時代文化研究会』1996
- 平岡和夫・大貫健「京塚遺跡」山武考古学研究所 1997
- 宇田敦司・松田富美子『南羽鳥遺跡群Ⅱ』財団法人 印旛都市文化財センター 1997

抄 録

フリガナ	アキダイライセキ・イケダイライセキ・ナカザクラカイヅカ
書名	秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚
編著者名	大賀 健 平田満男 小林園子
編集機関	山武考古学研究所 / 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 ☎0476-24-0536
発行機関	佐倉地区遺跡発掘調査会 / 〒300-0504 茨城県稲敷郡江戸崎町甲2148-2 江戸崎町教育委員会
発行年月日	1999年7月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
秋平遺跡 <small>いへひらひらせき 茨城県稲敷郡江戸崎町大字佐倉 字秋平2,122</small>	市町村 遺跡番号 08441 ㊦ 町 56	35° 58' 40"	140° 20' 14"	19920127 19921114	15,950㎡	ゴルフ場建設		
池平遺跡 <small>いけひらひらせき 字池平 1,407-1</small>	同 08441 ㊦ 町 55	35° 59' 10"	140° 20' 17"	19920207 19920922	9,500㎡	ゴルフ場建設		
中佐倉貝塚 <small>なかざくらがひら 字中佐倉 1,779</small>	同 08441 ㊦ 町 58	35° 58' 54"	140° 20' 09"	19920924 19930423	1,600㎡	ゴルフ場建設		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
秋平遺跡	散布地	旧石器時代 弥生時代	竪穴住居跡 1軒	旧石器時代 ナイフ 弥生時代 土器	弥生時代より中世にわたる複合遺跡。古墳時代後期より平安時代の遺跡を中心とする。
	集落	古墳時代 奈良・平安時代 中世 不明 その他	竪穴住居跡 38軒 竪穴住居跡 38軒 竪穴状遺構 2基 竪穴住居跡 44軒 土坑・溝 多数	古墳時代 土師・須恵器、土・石製品 奈良・平安時代 土師・須恵器、土・鉄製品 他	
池平遺跡	集落	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡 47軒 竪穴住居跡 1軒 墓跡 2基 溝 2条 土坑・炭窯 多数	古墳時代 土師・須恵器、土・石製品 奈良・平安時代 土師・須恵器、土・鉄製品、人骨 他	古墳時代前期～後期主体の集落で、後期6世紀を中心に展開。平安期の蔵骨器を有する墓跡2基検出。
		不明			
中佐倉貝塚	貝塚 集落	縄文時代	竪穴住居跡 13軒 土坑 22基	縄文時代 土器、石器、貝、貝刃	貝層中より浮島式の良好な土器資料出土。平安時代末期の住居跡より瓊花双鳥八稜鏡が出土。
		古墳時代 奈良・平安時代 不明	竪穴住居跡 3軒 竪穴住居跡 5軒 溝 2条	古墳～奈良・平安時代 土師・須恵器、土製品、鏡 他	

ザ・インベリアル・ゴルフクラブ建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査報告書

秋 平 遺 跡
池 平 遺 跡
中 佐 倉 貝 塚

印刷 平成11年7月15日

発行 平成11年7月25日

編集 山武考古学研究所

発行 佐倉地区遺跡発掘調査会

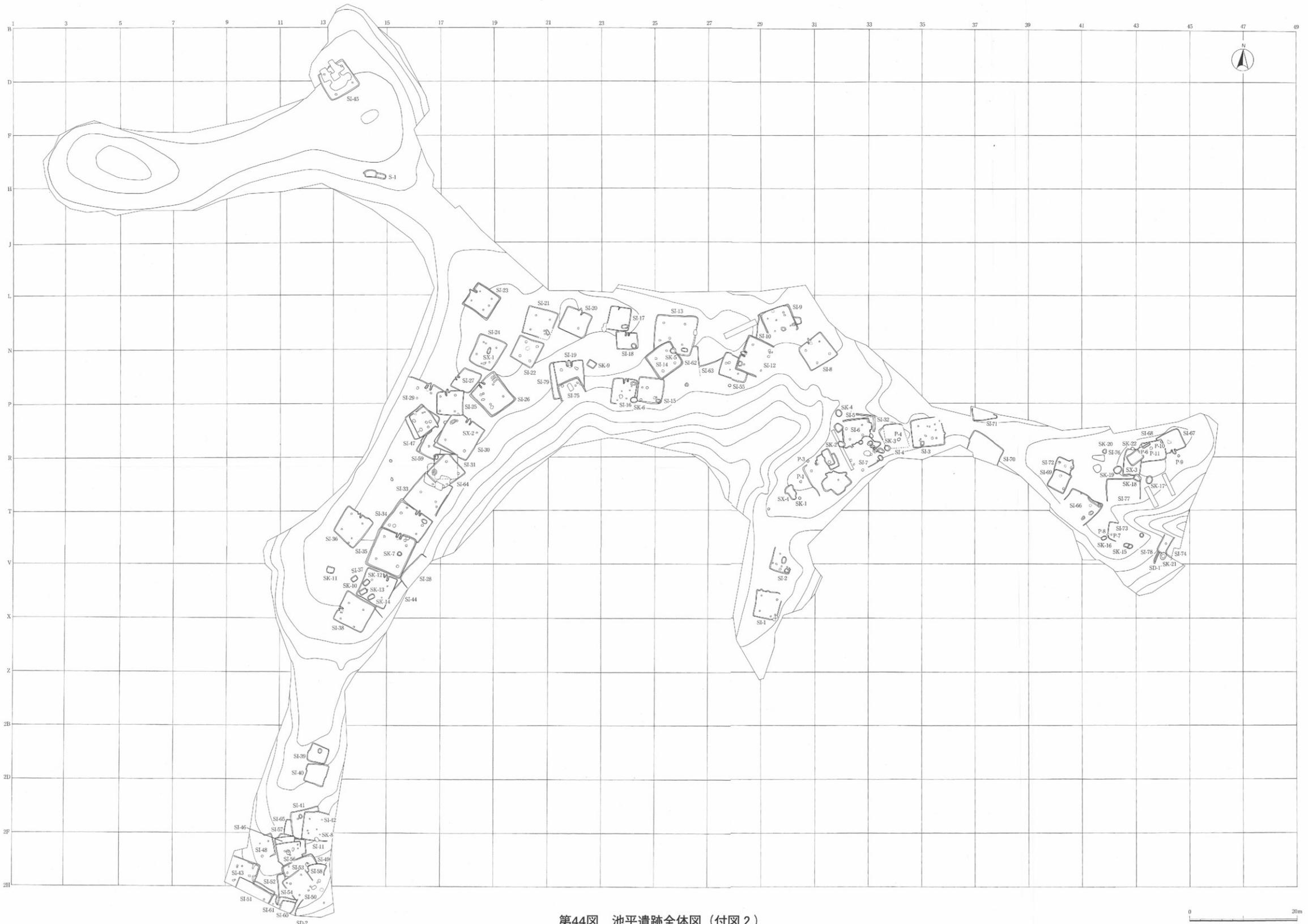
印刷 株式会社 文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12

0476-93-0593



第6図 秋平遺跡全体図 (付図1)



第44図 池平遺跡全体図（付図2）